

京都府遺跡調査報告集

第159冊

植物園北遺跡・下鴨半木町遺跡

2014

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



調査地近景(南東から)



調査地全景(上が北 合成写真)

序

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年4月に設立されて以来、33年間にわたり、府内各地で公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行っています。業務の遂行にあたり、皆様方より賜りましたご理解とご協力に厚く感謝申し上げます。

本書は『京都府遺跡調査報告集』として、平成23・24年度に京都府文化環境部の依頼を受けて実施した植物園北遺跡・下鴨半木町遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書が、地域の埋蔵文化財への理解と関心を深めるうえで、多くの方々にご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された京都府文化環境部をはじめ、京都府教育委員会、京都市文化市民局文化芸術都市推進室、京都府公立大学法人京都府立大学・京都府立医科大学などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成26年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

例 言

1. 本書に収めた報告は下記のとおりである。

植物園北遺跡・下鴨半木町遺跡

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
植物園北遺跡・下鴨半木町遺跡	京都市左京区下鴨半木町	平成23年11月25日～ 平成24年3月5日 平成24年4月6日～ 平成25年3月8日	京都府	中川和哉 高野陽子 黒坪一樹 筒井崇史 牧田梨津子

3. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。

4. 土層断面等の土色や出土遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。

5. 本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課企画調整係が行った。

6. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影と現場写真の一部は、調査課企画調整係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

植物園北遺跡・下鴨半木町遺跡発掘調査報告	1
----------------------	---

挿図目次

第1図	調査地位置図	2
第2図	調査地及び周辺主要遺跡	4
第3図	植物園北遺跡のこれまでの調査地点	6
第4図	調査区(1～9区)配置図及び層位確認地点	8
第5図	各区層位対比図	9
第6図	1～7区遺構平面図	11
第7図	1・2区土層断面図	12
第8図	1区上層・下層遺構平面図	13
第9図	1区土坑S K1026・1082平面・断面図	15
第10図	1区掘立柱建物平面・断面図	16
第11図	1区柱列・柵列平面・断面図	17
第12図	2区遺構平面図・地区割り図	19
第13図	2区竪穴建物S H2005平面・断面図	20
第14図	2区掘立柱建物S B2010・2100・2250平面・断面図	22
第15図	2区掘立柱建物S B2110・2390、柱列S A2395平面・断面図	23
第16図	2区掘立柱建物S B2370、柱列S A2410・2415・2416平面・断面図	25
第17図	2区土坑・柱穴平面・断面図	26
第18図	2区土器棺墓S K2070・2440平面・断面図	27
第19図	2区土坑群平面・断面図	28
第20図	2区溝S D2001～2003平面・断面図	29
第21図	2区土坑S K2011平面・断面図	30
第22図	3～7区地区割り図	31
第23図	3区北壁・西壁、4区西壁・東壁土層断面図	32
第24図	3・4区地区割り図	33
第25図	3区遺構平面図	33
第26図	3区竪穴建物S H3015全体及び施設平面・断面図	34

第27図	3区竪穴建物 S H3016平面・断面図	35
第28図	3区掘立柱建物 S B3005、柱列 S A3010平面・断面図	36
第29図	3区土坑群平面・断面図	37
第30図	3区溝 S D3002・3007 平面・断面図	38
第31図	4区遺構平面図	39
第32図	4区竪穴建物 S H4060平面図、同竈平面・断面図	40
第33図	4区竪穴建物 S H4100 平面・断面図	41
第34図	4区掘立柱建物 S B4030平面・断面図	42
第35図	4区掘立柱建物 S B4010・4090平面・断面図	43
第36図	4区土坑 S K4076・4001平面・断面図	43
第37図	4区溝 S D4027・4045平面・断面図、須恵器出土状況図	44
第38図	5～7区遺構平面図	45
第39図	5区東壁、6区東壁・西壁土層断面図	46
第40図	7区南壁・西壁・東壁土層断面図	47
第41図	5区遺構平面図	48
第42図	5区土坑 S K5109平面・断面図	49
第43図	5区竪穴建物 S H5027平面・断面図	49
第44図	5区掘立柱建物 S B5005・5010平面・断面図	50
第45図	5区掘立柱建物 S B5025・5085・5098平面・断面図	52
第46図	5区三面廂建物 S B5130平面・断面図	53
第47図	5区三面廂建物 S B5130柱列断面図	54
第48図	5区掘立柱建物 S B5140平面・断面図	56
第49図	5区掘立柱建物 S B5145・5190平面・断面図	57
第50図	5区掘立柱建物 S B5180平面・断面図	58
第51図	5区柱列 S A5155・5150、柵列 S A5300平面・断面図	59
第52図	5区土坑群、井戸 S E5070平面・断面図	60
第53図	5区溝 S D5001・5160・5170平面・断面図	61
第54図	5区溝群、土坑 S K5265平面・断面図	62
第55図	5区掘立柱建物 S B5126平面・断面図	63
第56図	5区流路 S R5125平面・断面図	64
第57図	6・7区遺構平面図	65
第58図	6区竪穴建物 S H6088平面・断面図	66
第59図	6区掘立柱建物 S B6060平面・断面図	67
第60図	6区掘立柱建物 S B6080平面・断面図	68
第61図	6区掘立柱建物 S B6087・6120平面・断面図	69

第62图	6区掘立柱建物 S B 6090平面・断面图	70
第63图	6区掘立柱建物 S B 6144・6185平面・断面图	71
第64图	6区掘立柱建物 S B 6145・6146平面・断面图	72
第65图	6区掘立柱建物 S B 6187平面・断面图	73
第66图	6区掘立柱建物 S B 6200平面・断面图	74
第67图	6区柵列 S A 6186、柱列 S A 6199平面・断面图	74
第68图	6区柱列 S A 6270・6271、柵列6272平面・断面图	76
第69图	6区土坑群平面・断面图	77
第70图	7区竖穴建物 S H 7020平面・断面图	78
第71图	7区竖穴建物 S H 7030全体、竈部、土坑平面・断面图	80
第72图	7区掘立柱建物 S B 7150・7160平面・断面图	81
第73图	7区柵列 S A 7170、柱列 S A 7178平面・断面图	82
第74图	7区柱穴 S P 7094、土坑 S K 7029平面・断面图	82
第75图	7区土坑 S K 7177遺物出土状況图(1)	83
第76图	7区土坑 S K 7177遺物出土状況图(2)	84
第77图	8区、8A・8B地点、9区調査区配置图	85
第78图	8区、8A・8B地点遺構平面图	86
第79图	8区西壁・南壁土層断面图	86
第80图	8区遺構平面图	87
第81图	8区集石 S X 8003平面・断面图	88
第82图	8区8A地点平面・土層断面图	89
第83图	8区8B地点平面・土層断面图	90
第84图	9区遺構平面图	91
第85图	9区西壁・南壁・流路 S R 9001断面图	91
第86图	西部A・B地点平面・土層断面图	93
第87图	1区出土土器実测图	96
第88图	2区出土土器実测图(1)	97
第89图	2区出土土器実测图(2)	100
第90图	2区出土土器実测图(3)	101
第91图	3区出土土器実测图(1)	103
第92图	3区出土土器実测图(2)	104
第93图	4区出土土器実测图	106
第94图	5区出土土器実测图(1)	108
第95图	5区出土土器実测图(2)	110
第96图	5区出土土器実测图(3)	111

第97図	6区出土土器実測図(1)	113
第98図	6区出土土器実測図(2)	115
第99図	6区出土土器実測図(3)	116
第100図	7区出土土器実測図(1)	118
第101図	7区出土土器実測図(2)	119
第102図	7区出土土器実測図(3)	121
第103図	7区出土土器実測図(4)	122
第104図	7区出土土器実測図(5)	124
第105図	7区出土土器実測図(6)	125
第106図	8・9区出土土器実測図	125
第107図	鉄器・鉄滓・土製品実測図	128
第108図	石製品実測図	129
第109図	瓦実測図(1)	131
第110図	瓦実測図(2)	132
第111図	瓦実測図(3)	133
第112図	銭貨実測図	134
第113図	遺構変遷図1 古墳・奈良時代	135
第114図	遺構変遷図2 平安時代前期前葉	138
第115図	遺構変遷図3 平安時代前期中葉	139
第116図	遺構変遷図4 平安時代前期後葉	141
第117図	瓦類出土地点	142
第118図	遺構変遷図5 平安時代中期～江戸時代	144
第119図	近世乙井川の流路復元	145
第120図	三面廂建物S B5130の規模と規格	147
第121図	平安京内における三面廂建物の類例	148
第122図	植物園北遺跡遺構位置図	149
付図1	三面廂建物S B5130 3次元測量合成写真	153
付図2	三面廂建物S B5130 3次元レーザー測量図	154

付 表 目 次

付表1	土坑S K7177・5260出土土器組成表	126
付表2	緑釉陶器・灰釉陶器地区別出土状況	127
付表3	掘立柱建物規模一覧表	137

付表4	平安京内における三面廂建物の類例	-----147
付表5	土器一覧表	-----155

図版目次

巻頭図版1	調査地近景(南東から)
巻頭図版2	調査地全景(上が北 合成写真)
図版第1	調査地全景(空中写真 北西から)
図版第2	(1) 調査地遠景(空中写真 北西から) (2) 1・2区全景(空中写真 南から)
図版第3	(1) 2区全景(空中写真 北から) (2) 6・7区全景(空中写真 南から)
図版第4	(1) 3～7区全景(空中写真 上が西) (2) 5～7区全景(空中写真 南西から)
図版第5	(1) 5～7区全景(空中写真 北西から) (2) 5～7区全景(空中写真 西から)
図版第6	(1) 5～7区全景(空中写真 北から) (2) 5・6・8区全景(空中写真 南から)
図版第7	(1) 1区(右上)全景(空中写真 上が西) (2) 2区全景(空中写真 上が北)
図版第8	(1) 1区全景(空中写真 上が西) (2) 1区遺構群(南から)
図版第9	(1) 1区調査前状況(南西から) (2) 1区南側・南壁(北から) (3) 1区南半部遺構群(北から)
図版第10	(1) 1区南部建物跡群(南から) (2) 1区掘立柱建物 S B1050・1070(東から) (3) 1区掘立柱建物 S B1050柱穴 P 3・S B1070柱穴 P 2(東から)
図版第11	(1) 2区全景(空中写真 上が南) (2) 2区遺構群(空中写真 上が南)
図版第12	(1) 2区調査前状況(南西から) (2) 2区南西部砂礫面(北東から) (3) 2区南壁(北から)

- 図版第13 (1) 2区遺構群(西から)
 (2) 2区遺構群(東から)
 (3) 2区東半部遺構群(西から)
- 図版第14 (1) 2区竪穴建物 S H2005(北から)
 (2) 2区竪穴建物 S H2005柱穴 P 1(南から)
 (3) 2区竪穴建物 S H2005柱穴 P 8(南から)
- 図版第15 (1) 2区東半部遺構群(東から)
 (2) 2区掘立柱建物 S B2100・2110(東から)
 (3) 2区掘立柱建物 S B2100柱穴 P 2(北から)
- 図版第16 (1) 2区土坑 S K2070上層(北から)
 (2) 2区土坑 S K2070(南から)
 (3) 2区土坑 S K2157(西から)
- 図版第17 (1) 2区溝 S D2001・2002・2003(北西から)
 (2) 2区溝 S D2001断面(南東から)
 (3) 2区土坑 S K2011(南東から)
- 図版第18 (1) 3区全景(空中写真 上が北)
 (2) 4区全景(空中写真 上が北)
- 図版第19 (1) 3区遺構群(西から)
 (2) 3区溝 S D3007・3002(西から)
 (3) 3区溝 S D3007(南東から)
- 図版第20 (1) 3区掘立柱建物 S B3010(南から)
 (2) 3区竪穴建物 S H3015掘削状況(北西から)
 (3) 3区竪穴建物 S H3015(北西から)
- 図版第21 (1) 3区竪穴建物 S H3015竈(北西から)
 (2) 3区竪穴建物 S H3015竈完掘状況(西から)
 (3) 3区竪穴建物 S H3015柱穴 P 3(南から)
- 図版第22 (1) 3区竪穴建物 S H3015焼土坑 K 1(北西から)
 (2) 3区竪穴建物 S H3016(南から)
 (3) 3区竪穴建物 S H3016下層出土土器141(南から)
- 図版第23 (1) 4区全景(東から)
 (2) 4区掘立柱建物 S B4030・4010・溝 S D4045(北から)
 (3) 4区掘立柱建物 S B4030柱穴 P 5(東から)
- 図版第24 (1) 4区掘立柱建物 S B4010柱穴 P 2(南から)
 (2) 4区竪穴建物 S H4060(南西から)
 (3) 4区竪穴建物 S H4060竈(南西から)

- 図版第25 (1) 4区竪穴建物 S H4100 (南東から)
(2) 4区溝 S D4045・4027(南から)
(3) 4区溝 S D4045出土土器(南東から)
- 図版第26 (1) 4区西部遺構検出状況(東から)
(2) 4区掘立柱建物 S B4090・溝 S D4071(東から)
(3) 4区土坑 S K4001(南から)
- 図版第27 (1) 5・6区(空中写真 上が南)
(2) 5区掘立柱建物 S B5130(空中写真 上が南)
- 図版第28 (1) 5区東半部掘立柱建物 S B5130周辺(南から)
(2) 5区掘立柱建物 S B5130人物配置(南から)
- 図版第29 (1) 5区掘立柱建物 S B5130柱穴 P 1
(2) 5区掘立柱建物 S B5130柱穴 P 10
(3) 5区掘立柱建物 S B5130柱穴 P 11
- 図版第30 (1) 5区掘立柱建物 S B5130柱穴 P 22
(2) 5区掘立柱建物 S B5130柱穴 P 20
(3) 5区掘立柱建物 S B5130柱穴 P 19
- 図版第31 (1) 5区掘立柱建物 S B5140・5145(南から)
(2) 5区掘立柱建物 S B5140・5145(北から)
(3) 5区掘立柱建物 S B5190(南から)
- 図版第32 (1) 5区北東部竪穴建物 S H5027・溝 S D5001など(東から)
(2) 5区竪穴建物 S H5027(西から)
(3) 5区柱穴 S P 5109(南から)
- 図版第33 (1) 5区流路 S R5125(西から)
(2) 5区流路 S R5125(東から)
(3) 5区流路 S R5125東壁土層断面(南西から)
- 図版第34 (1) 6・7区全景(空中写真 北から)
(2) 6・7区(空中写真 上が南)
- 図版第35 (1) 6区竪穴建物 S H6088(北東から)
(2) 6区竪穴建物 S H6088柱穴 P 2(北から)
(3) 6区掘立柱建物 S B6090(南西から)
- 図版第36 (1) 6区掘立柱建物 S B6080(南西から)
(2) 6区掘立柱建物 S B6080柱穴 P 6(西から)
(3) 6区掘立柱建物 S B6145(南から)
- 図版第37 (1) 6区掘立柱建物 S B6146(南から)
(2) 6区掘立柱建物 S B6146柱穴 P 4(北東から)

- (3) 6区掘立柱建物 S B6144(東から)
- 図版第38 (1) 6区掘立柱建物 S B6144柱穴 P 6(南から)
(2) 6区掘立柱建物 S B6144・6185(南から)
(3) 6区土坑 S K6094(南から)
- 図版第39 (1) 6区土坑 S K6245(北から)
(2) 6区土坑 S K6245断面(北から)
(3) 6区掘立柱建物 S B6060(南東から)
- 図版第40 (1) 6区柱列 S A6270・6271・柵列6272(南から)
(2) 6区柱列 S A6270大型柱穴(西から)
- 図版第41 (1) 6区土坑 S K6005(北東から)
(2) 6区西壁断面北端(南東から)
(3) 6区北壁断面西端(南から)
- 図版第42 (1) 7区遺構群(東から)
(2) 7区掘立柱建物 S B7160(北から)
(3) 7区掘立柱建物 S B7160柱穴 P 1(東から)
- 図版第43 (1) 7区掘立柱建物 S B7150(北から)
(2) 7区掘立柱建物 S B7150柱穴 P 4(北から)
(3) 7区土坑 S K7026(北西から)
- 図版第44 (1) 7区竪穴建物 S H7030(北から)
(2) 7区竪穴建物 S H7030竈(西から)
(3) 7区竪穴建物 S H7030 焼土坑 K 1(南から)
- 図版第45 (1) 7区竪穴建物 S H7020(北から)
(2) 7区竪穴建物 S H7020(南西から)
(3) 7区竪穴建物 S H7020出土土器(南西から)
- 図版第46 (1) 7区柱土坑 S K7029(北から)
(2) 7区土坑 S K7029(東から)
(3) 7区柱穴 S P7094(東から)
- 図版第47 (1) 7区土坑 S K7177検出状況(西から)
(2) 7区土坑 S K7177上層(西から)
(3) 7区土坑 S K7177上層(東から)
- 図版第48 (1) 7区土坑 S K7177上層出土土器群(北から)
(2) 7区土坑 S K7177出土土師皿(北西から)
(3) 7区土坑 S K7177上層完掘状況(西から)
- 図版第49 (1) 7区土坑 S K7177北壁断面(南から)
(2) 7区土坑 S K7177下層礫面(北から)

- (3) 7区土坑 S K 7177下層土器出土状況(南から)
- 図版第50 (1) 7区南壁東端断面(北から)
 (2) 7区南壁中間断面(北から)
 (3) 7区西壁断面(北東から)
- 図版第51 (1) 8区全景(空中写真 南から)
 (2) 8区流路跡(空中写真 上が北)
- 図版第52 (1) 8区調査前状況(南東から)
 (2) 8区全景(拡張前 上層)
 (3) 8区流路跡(拡張前 東から)
- 図版第53 (1) 8区流路跡・南壁(北から)
 (2) 8区南壁(拡張前 北から)
 (3) 8区西部流路跡(拡張後 東から)
- 図版第54 (1) 8区西部流路跡検出状況(拡張後 南から)
 (2) 8区流路跡(南から)
 (3) 8区8 B地点(東から)
- 図版第55 (1) 8区8 B地点(南西部拡張 北から)
 (2) 8区8 B地点 北壁(拡張前 西から)
 (3) 8区8 B地点 北壁断面(南から)
- 図版第56 (1) 8区8 A地点(南から)
 (2) 8区8 A地点北壁断面(南から)
 (3) 8区8 A地点石積み(東から)
- 図版第57 (1) 9区遠景(空中写真 南西から)
 (2) 9区全景(空中写真 上が北)
- 図版第58 (1) 9区調査前状況(東から)
 (2) 9区上層(東から)
 (3) 9区下層(西から)
- 図版第59 (1) 9区下層流路 S R 9001(北西から)
 (2) 9区南壁断面(北東から)
 (3) 9区北壁断面(南東から)
- 図版第60 (1) 西部A・B地点(南東から)
 (2) 西部A地点(北から)
 (3) 西部B地点(北東から)
- 図版第61 三面廂建物 S B 5130(上が北 3次元測量合成写真)
- 図版第62 (1) 三面廂建物 S B 5130(南から 3次元測量合成写真)
 (2) 三面廂建物 S B 5130(北から 3次元測量合成写真)

- 図版第63 出土土器 1
- 図版第64 出土土器 2
- 図版第65 出土土器 3
- 図版第66 出土土器 4
- 図版第67 (1)出土土器 5
(2)出土土器 6
- 図版第68 (1)出土土器 7
(2)出土土器 8
- 図版第69 (1)出土土器 9
(2)出土土器10
- 図版第70 (1)出土土器11
(2)出土土器12
- 図版第71 (1)出土土器13
(2)出土土器14
- 図版第72 (1)出土土器15
(2)出土土器16
- 図版第73 (1)出土土器17
(2)出土土器18
- 図版第74 (1)出土土器19
(2)石製品・鉄製品・埴・錢貨

植物園北遺跡・下鴨半木町遺跡

平成23・24年度発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、新総合資料館(仮称)・教養教育共同化施設(仮称)整備事業に先立ち京都府文化環境部の依頼を受け実施した。

調査地は、京都市左京区下鴨半木町にあたり、京都府公立大学法人京都府立大学の構内及び付属農場と同京都府立医科大学グラウンド地内に位置している。隣接地には京都府立植物園があるが、その他周辺地域は住宅地である。

平成23年度は1・2区及び西部A・B地点の合計2,200㎡の発掘調査を実施した。

平成24年度調査では、農場内に3～7区(5,605㎡)を、また大学構内に8・9区(395㎡)を設定し、全体で6,000㎡の調査を実施した。

平成25年度は、整理報告作業を進めるとともに遺構の3次元レーザー測量及び遺構切り取り保存に伴う掘削作業の130㎡を行った。

発掘調査においてはおもに奈良時代から平安時代の竪穴建物や掘立柱建物群を確認した。掘立柱建物の中には三面に廂を持つ大型建物があり、遺構を切り取って保存されることになった。

発掘調査によって出土した遺物は、遺物用整理コンテナで平成23年度は22箱、平成24年度は77箱である。

〔調査体制等〕

平成23年度

現地調査責任者 調査第2課長 水谷壽克

現地調査担当者 調査第2課長補佐兼調査第1係長 小池 寛

同調査員 高野陽子

同調査員 加藤雅士

同調査員 牧田梨津子

調査場所 京都市左京区下鴨半木町

現地調査期間 平成23年11月25日～平成24年3月5日

調査面積 2,200㎡

平成24年度

現地調査責任者 調査第2課長 水谷壽克

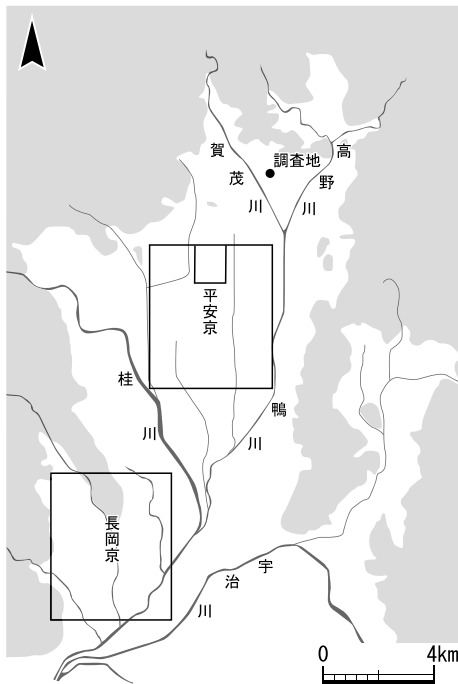
現地調査担当者 調査第2課長補佐兼調査第1係長 小池 寛

同主任調査員 引原茂治
同専門調査員 黒坪一樹
同調査員 高野陽子
同調査員 牧田梨津子

調査場所 京都市左京区下鴨半木町

現地調査期間 平成24年4月6日～平成25年3月8日

調査面積 6,000m²



第1図 調査地位置図

現地調査及び報告書作成にあたり、京都府公立大学法人京都府立大学、京都府公立大学法人京都府立医科大学、京都府立総合資料館、京都市文化市民局文化芸術都市推進室、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、京都府教育庁指導部文化財保護課ならびに網伸也、石田志朗、上杉和央、植村善博、大場修、尾野善祐、川瀬貴也、櫛木謙周、古閑正浩、杉原和雄、高橋潔、高橋照彦、巽淳一郎、土橋誠、中塚良、平尾政幸、松藤和人、南孝雄、向井祐介、森下恵介、森島康雄、山田邦和の各氏(五十音順・敬称略)からご指導、ご協力を頂いた。また、報告書作成にあたっては、平成25年7月31日に植物園北遺跡の遺跡検討会を実施し、その席上、菱田哲郎、家原圭太、山本雅和及び当調査研究センター理事である井上満郎、中尾芳治各氏(敬称略)から多くのご教示を得た。記して感謝します。

なお、調査に係る経費は、全額京都府が負担した。

(中川和哉)

2. 調査地の位置と環境

1) 立地と周辺の遺跡

植物園北遺跡は、断層運動によって形成された京都盆地北部の賀茂川によって形成された扇状地上に位置する。遺跡北側には盆地の北縁をなす古生代二畳紀～中生代ジュラ紀に形成された丹波層群からなる山地があり、その山地を源とする賀茂川の左岸に遺跡は立地する。賀茂川は高野川と合流して鴨川となり、平安京域東部に近接して南流する。

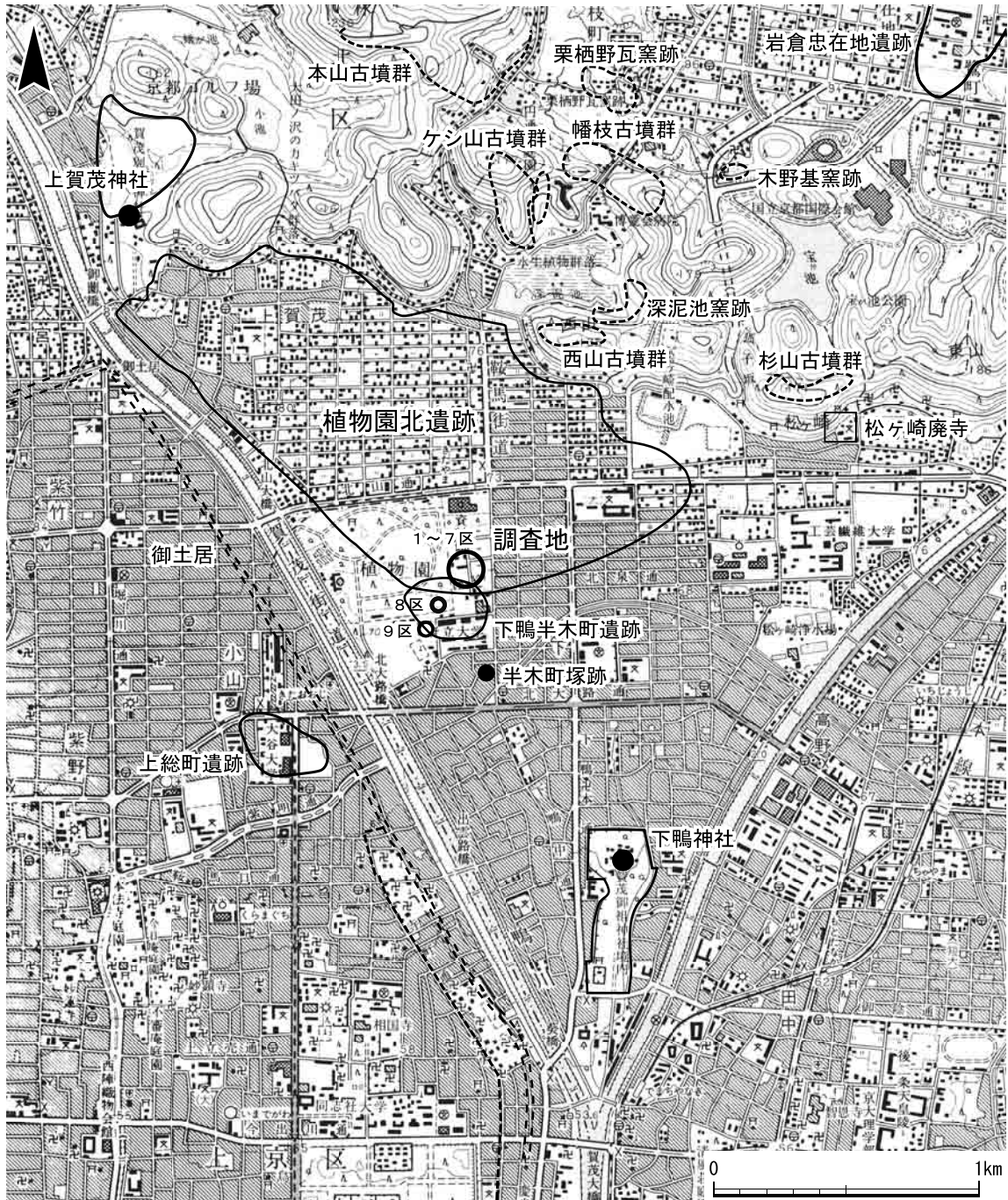
当遺跡は、東西約2km、南北約1.2kmに及ぶ広大な遺跡範囲をもつ縄文時代から近世の複合集落遺跡である。遺跡の発見は、1974年の京都市高速鉄道烏丸線の北進工事に伴う調査による。その後、1978年から4年にわたって実施された公共下水道工事に伴う立会い調査によって、遺跡が現在の京都府立植物園の北側を中心に広がることが確認され、植物園北遺跡と命名された。今回の調査区を含む京都府立大学の校地は、北部の農学部農場を中心に植物園北遺跡の南部域に含まれ、構内を中心に下鴨半木町遺跡の範囲に入る。

周辺の遺跡は、以下のとおりである。

後期旧石器時代には、ナイフ形石器が出土したケシ山遺跡、槍先形尖頭器が出土した上賀茂本山遺跡が植物園北遺跡の北側の丘陵上に位置する。縄文時代の遺跡としては、一乗寺向畑遺跡、修学院遺跡、北白川遺跡群が本遺跡東方の比叡山西南麓の扇状地上に分布し、近畿地方でも縄文時代の遺跡が密に確認される地域のひとつとして知られている。

弥生時代の遺跡には、本遺跡北側の丘陵部を超えた岩倉盆地に、弥生時代後期末から古墳時代初頭の竪穴建物などの遺構群が発見された岩倉忠在地遺跡がある。同じ時期、植物園北遺跡は最も拡大する時期にあたり、当遺跡から岩倉にかけての地域に、古墳時代初頭を前後する時期の集落遺跡が広がることが明らかになっている。古墳時代中期以降には、植物園北遺跡と岩倉盆地に挟まれた東西に広がる丘陵上に多くの古墳が築かれ、中期の円墳2基からなる幡枝古墳群や、ケシ山古墳群、本山古墳群、八幡古墳群、林山古墳群、西山古墳群などの後期群集墳が分布している。

植物園北遺跡の周辺には、北西に上賀茂神社(賀茂別雷神社)、南東に下鴨神社(賀茂御祖神社)があり、古代カモ氏の本拠地とされる地域である。『続日本紀』の文武天皇2(698)年に山背国賀茂祭の記述があり両賀茂神社がすでに成立していたと考えられている。飛鳥時代以降、周辺には生産遺跡が多くみられるようになり、瓦窯、須恵器窯、炭窯が造られる。賀茂川左岸の丘陵には、木野窯(瓦窯)、深泥池東岸窯(須恵器窯)、ケシ山窯(炭窯)などが営まれた。そして対する右岸の丘陵腹や丘陵端にも舟山窯(須恵器窯)や蟹ヶ坂窯(瓦窯)、大深町窯(須恵器窯)が分布する。そのうち木野窯1号窯と深泥池東岸窯で生産された瓦は北白川廃寺に供給され、蟹ヶ坂窯の瓦は出雲寺に供給されたと考えられている。やがて奈良時代になると、この地域での窯跡はいったん見られなくなる。また、7～8世紀の京都盆地北部の様相は、文献資料からもある程度推察できる。それによると、この地にはカモ県主、秦氏、出雲氏、ワニ系の小野氏・栗田氏などの氏族が多く居住していたとある。



第2図 調査地及び周辺主要遺跡(国土地理院 1/25,000 京都東北部)

京都府立大学校地の東に隣接する下鴨中通は平安時代以来、貴船神社や鞍馬寺参詣のための古道とされる鞍馬街道にあたる。平安時代には再び賀茂川上流域に瓦窯が多数造られ、平安京に供給する瓦の生産地として重要な役割を果たすことになる。前期には角社窯・鎮守庵窯・醍醐ノ森窯・上ノ庄田窯・柴本窯、中期には川上窯、後期には南ノ庄田窯・大宮北山ノ窯が造られる。柴本1・2号窯では、西寺や広隆寺と同範の軒瓦が見つかった。

平安時代において上賀茂神社と下鴨神社は、伊勢神宮とならび国家的な祭祀を司る斎王の仕える神聖な神社として、『源氏物語』などの文学作品にも登場する。賀茂斎王(斎院)は葉子の変(810年)の前後に始まり、承久の乱(1221年)の後廃絶される。その間、賀茂斎王が伊勢斎宮より都に

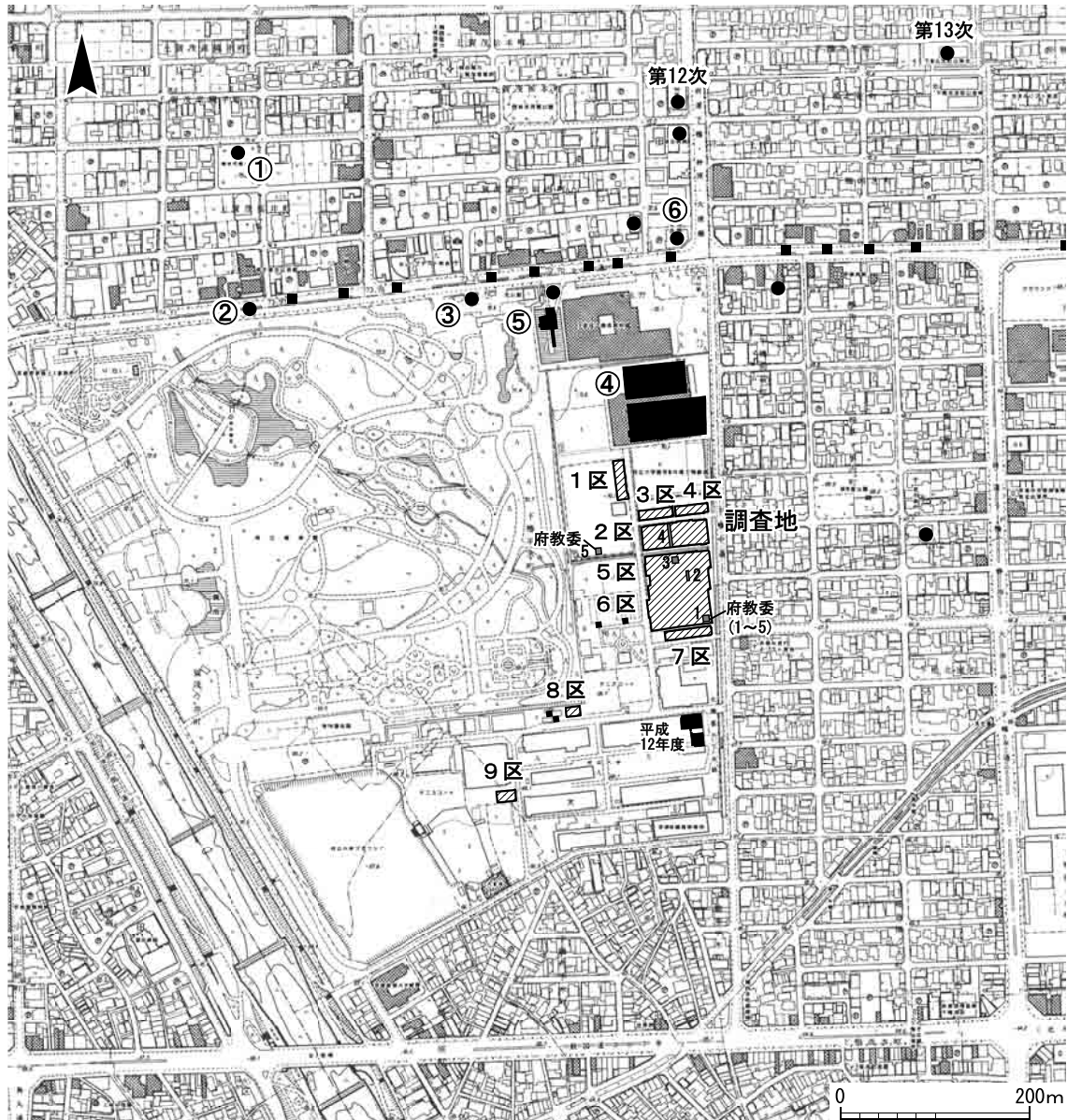
近いため、上位におかれる。また、上賀茂神社には、弘仁11(820)年に嵯峨天皇の勅による創建と伝えられる神宮寺があり、神仏分離令が出るまで存続し、上賀茂神社や下鴨神社の境内の調査では、平安時代にさかのぼる瓦も発見されている。

現在の社家町に相当する地域に遅くとも15世紀中ごろには社家(社司・氏人)と農民が住んでいた上賀茂神社の門前集落が発達したと考えられている。植物園北遺跡のある半木町(ながらぎちょう)は流木(ながれぎ)ともいい、流木は植物園内の半木神社の祭神の一つが、元は上流の上賀茂の地にあったものが洪水の際、流されて本地に至り、祀られたことに由来するとされる。洪水の被害が大きい地域であったが、耕作地化が繰り返し行われたようで、室町期から戦国期の田券類や検地帳などをもとにした地点復元によって、現在の京都市植物園内の半木神社北側は田地として利用されていたことがわかる。明治25(1892)年に作製された陸軍の『京阪地方仮製地図』においても、遺跡周辺が田地として利用されていることが確認できる。^(注1) (牧田梨津子)

2) 既往の調査(第3図)

植物園北遺跡では、過去に40回以上の発掘調査が実施され、古墳時代前期を中心とした北山城最大級の集落遺跡であることが判明している。^(注2) 今回の調査地は、植物園北遺跡の南部にあたり、おもに奈良時代から平安時代の建物を中心とした遺構群を検出した。周辺では、過去の調査において、当該期の遺構が多く検出されている。以下、調査地周辺の既往の調査について述べたい。^(注3)

植物園北遺跡の初期の調査にあたる第2次調査(第3図①)において、遺跡の西部で小規模な調査が実施され、平安時代の土坑群が検出された。本格的な調査としては、京都市高速鉄道烏丸線北進工事に伴い第4次調査(第3図②)^(注4)が実施され、北山通り沿いで9か所以上を調査し、古墳時代前期の竪穴建物のほか、平安時代中期～後期の建物や柱穴が検出された。また、地下鉄烏丸線の北山駅舎建設に伴い実施された第6次調査(第3図③)^(注5)では、古墳時代の溝のほか、平安時代中期の溝、鎌倉時代の土坑、室町時代の溝などが確認された。平成3年に実施された本調査地北側に隣接する京都コンサートホールの建設に伴う第9次調査(第3図④)^(注6)は、周辺部の調査としては最も規模が大きいものであり(調査面積6,641㎡)、この調査では縄文時代の土器棺や古墳時代末から奈良時代にかけての竪穴建物6棟、奈良時代から平安時代の掘立柱建物16棟などが検出された。植物園北遺跡の過去の調査のなかで、奈良時代から平安時代の建物群がはじめてまとまって検出された例であり、今回の調査で検出した建物群と合わせ、同時期の遺構が広範囲におよぶことが判明した。この第9次調査地の西側の地点を対象にした第11次調査(第3図⑤)^(注7)では、平安時代の緑釉陶器や灰釉陶器が出土し、前述した第6次調査の平安時代中期の溝を含めて、西側にも平安時代の遺構や遺物包含層が存在することが確認された。また、第9次調査と北山通りを挟み北側で実施された第18次調査(第3図⑥)^(注8)では、平安時代中期の掘立柱建物1棟や柱穴が検出され、調査地から北側の地域に平安時代の遺構群が大きく広がることが明らかとなっている。一方、本調査地7区の南約80mの地点では、府立大学学舎(1号館)の改築に伴い、下鴨半木町遺跡の調査が行われ(第3図)^(注9)、大半が近現代の建物によって削平を受けていたが、一部平安時代から鎌倉時



第3図 植物園北遺跡のこれまでの調査地点

代の柱穴や土坑が検出され、遺構の一定の広がり^(注10)が確認されている。

今回の調査に先立ち実施された平成22年度の京都府教育委員会による試掘調査では、府立医科大学グラウンドと府立大学農学部農場において5か所の調査が実施された^(注11)(第3図)。農学部農場北部に設定された1～4トレンチは、いずれも本調査の2～6区の地点に相当し、奈良時代から平安時代の柱穴や土坑・溝などが検出され、今回の調査において周辺を拡張して調査を実施した。また、府立医科大学グラウンドの南端の調査(5トレンチ)では、遺構や遺物包含層がみられず、表土下約0.8mで粗砂礫層が検出され、同約1.6mまで堆積していることが確認された。こうした堆積状況から、調査地点の周辺は旧河道及びその氾濫原に相当する部分とされた。以上の京都府教育委員会による試掘調査の調査成果を受け、今回の調査では遺構が確認できた農場東部を中心に発掘調査を実施した。

(高野陽子)

3. 調査内容

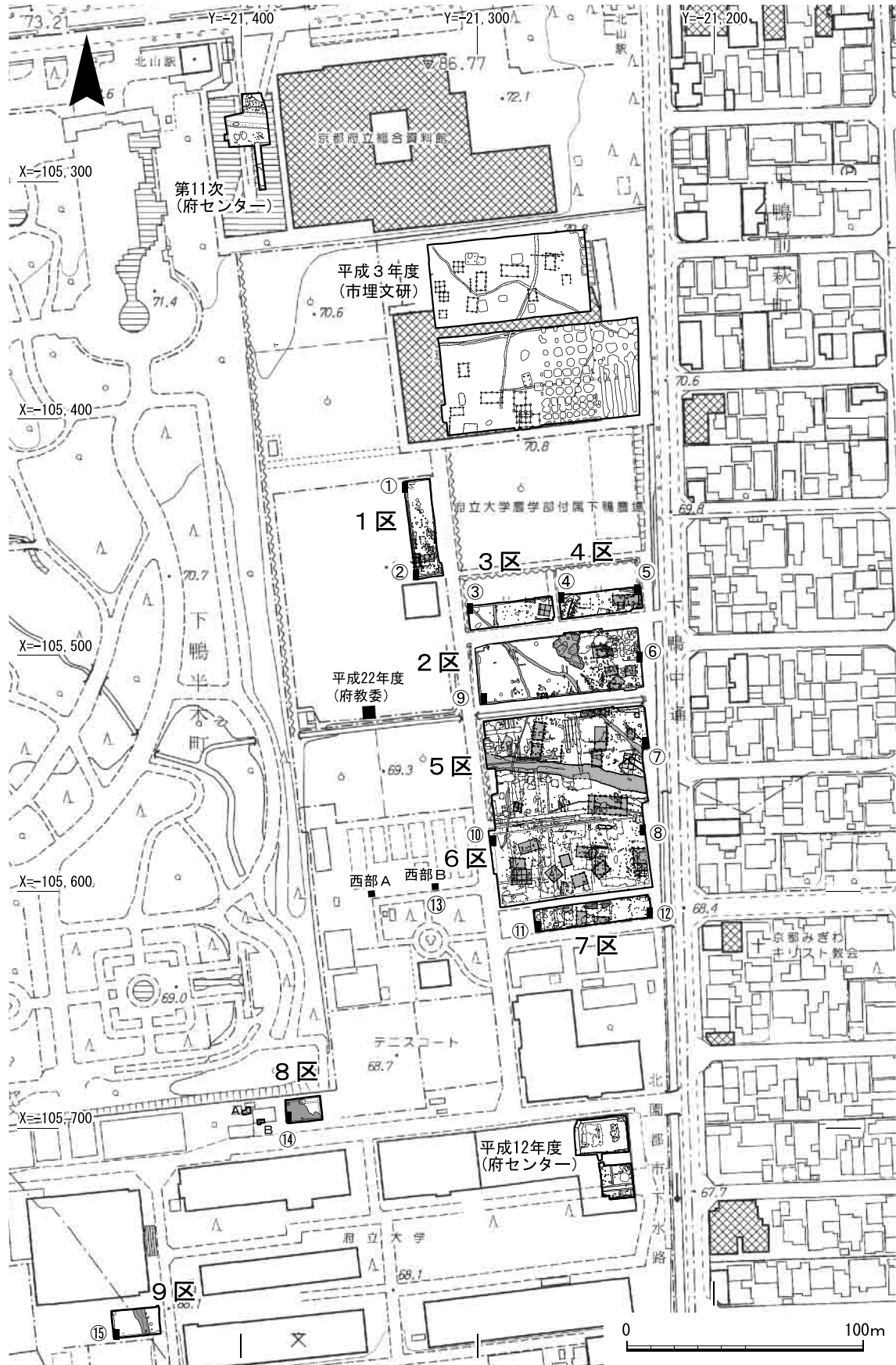
本報告は、平成23年度と平成24年度の2か年の調査内容を報告する。平成23年度の調査は、府立医科大学グラウンドの一部(1区)と府立大学農学部農場北部(2区)を対象とし、平成24年度の調査は、府立大学農学部農場(3～7区)と府立大学構内(8・9区)を対象とした。以下、農学部農場周辺を北部調査地、府立大学構内の調査地を南部調査地とする。

1) 層序概況

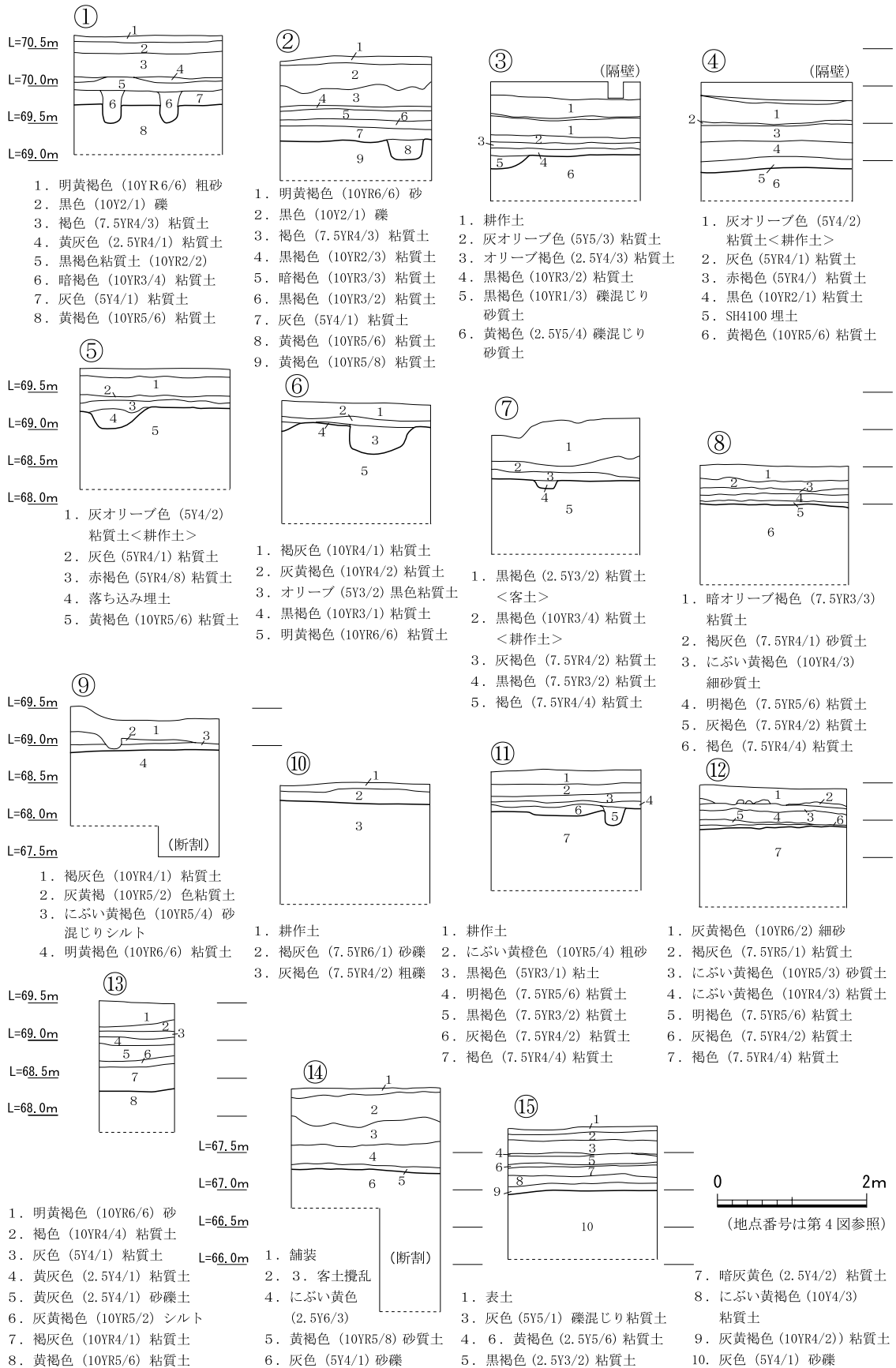
調査地は、府立医科大学グラウンドや府立大学農学部農場を対象とした北部調査地から府立大学構内の南部調査地まで、南北に約400mに広がり、現地形は北から南にかけて緩やかに傾斜する。現地表の標高は、調査地北部の1区北壁では約70.7m(断面①)を測り、農場南部の7区東壁南端で約69.3m(断面⑫)を測る。また、大学構内の調査地では、9区南壁で約68.2m(断面⑮)を測り、調査地の南北で約2m以上の高低差がある。

北部調査地の最北端に位置する1区では、1区北端(断面①)の表土下約1m(標高69.8m)付近で、基盤層とみる黄褐色粘質土層を確認し、1区北部はこの面で古墳時代前期から鎌倉時代までの各期の遺構を検出した。基盤層は、2区東壁中央では標高約69.0m(断面⑥)、6区西壁南部では標高約68.1m(断面⑩)、7区東壁南端では標高約67.9m(断面⑨)で検出し、南へ向かって下がるとともに徐々に低く傾斜する。5・6区の東部(断面⑦・⑫)では、全体に地盤の標高が低く、それぞれ標高約68.2m、68.0mで安定した基盤層を検出した。中世以前の遺物包含層は、地形の起伏にしたがって、各地区で部分的に確認されるが、安定した面的な広がりとして検出することができた地区は1区南部のみで、この地点では2面の遺構面を確認した。2～7区では、近世までの度重なる洪水によって遺構や文化層が大きく流失したとみられ、遺物包含層を安定して確認することはできず、特に西側では基盤層上に拳大の礫を多量に含む薄い砂礫土層が広く覆う状況が確認された。こうした砂礫層が、賀茂川の氾濫に伴うものであるか分析が必要であるが、古代・中世の遺構検出面よりも上層で確認できる細かな碎屑物からなる砂礫層は、5区中央で検出した、調査地を北西から南東に流れる近世の河道(乙井川)の洪水氾濫による堆積物である可能性が高い。

2区及び6区の西壁付近では、重機による基盤層の断ち割りを実施した。2区西壁南部では、標高約67.9mで基盤層とみる明黄褐色粘質土層を確認し(断面⑨)、この層がさらに1.5m以上続くことを確認した。層中には、拳大～人頭大の礫が多量に包含され、流れの早い地点で形成された砂礫土層とみられる。また、6区西部の断ち割りでは、標高約68.3mで基盤層を検出し、検出面より下層で灰褐色粗礫と褐色粗砂が互層状に1.5m以上続くことを確認した(断面⑩)。2・6区ともに層中の礫は砂岩を主体とすることから、現在、遺跡の西方約500mを流れる賀茂川に由来する礫層と推定され、その形成時期には一帯は賀茂川本流の氾濫原であった可能性が高いとされる^(注12)。基盤層の形成時期は、1区で古墳時代前期前葉の遺構が確認されることから、それ以前であることは明らかであるが、平成6年度の第9次調査で縄文時代晩期の遺構が平安時代の遺構と同一面で確認されていることや、今回の調査で包含層中から縄文時代の石鏃が出土していることな



第4図 調査区(1～9区)配置図及び層位確認地点



第5図 各区層位対比図

どから、縄文時代晩期以前に形成されたものと考えられる。北部調査地の基盤層は、上述したように西側には砂礫を多量に含む黄褐色粘質土層が広がるが、南東にむけて緩やかに下がり、6区東部から7区東部にかけて安定した黄褐色粘質土～シルト層を検出した。

一方、農場西部は、府立医科大学グラウンドの調査地点の試掘成果から、旧河道があり包含層や遺構面が流失していると推定された。農場西部は、下水管・高圧電線などの埋め込みや近現代建物によるとみられる攪乱が各所にあり、削平が著しい。こうした地点を避けて2地点でグリッド調査(第3図西部A地点・同B地点)を実施し、標高68.2m付近で基盤とみられる黄褐色粘質土を確認した(断面⑬)。

調査区南部の8区は、府立大学構内5号館の北側に設定した調査区で、現地表面は標高68.3mを測る。基盤となる灰褐色粗礫層は、標高67.4m付近で確認し、その面で中世の流路を検出した。最終的に断ち割り調査を行い、基盤層が2m以上続くことを確認した(断面⑭)。体育館南側に設定した9区は、現標高68.2mを測り、基盤となる黄褐色砂礫混じり粘質土層を約67.2mで検出した。南東部では灰褐色粗礫層が広がり、粗砂のラミナ層を挟みながら、下層に1.5m以上続くことを確認し(断面⑮)、旧河道とその氾濫原が広がることが明らかとなった。(高野陽子)

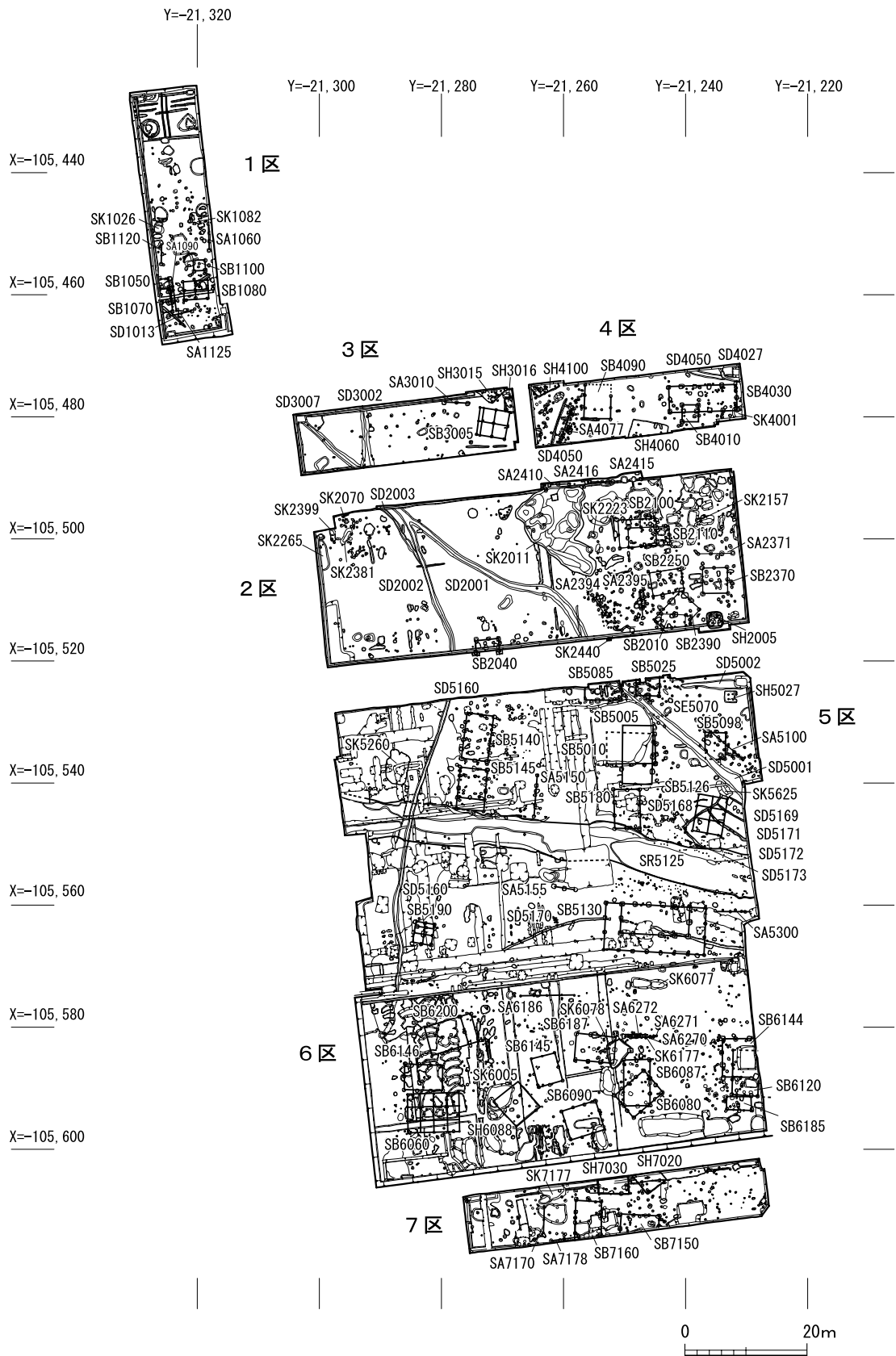
2)平成23年度の調査内容

平成23年度は、調査地北部の府立医科大学グラウンド北東に1区(450㎡)を、また府立大学農学部農場北部に2区(1,745㎡)を設定した。さらに、農場西部でグリッド調査(5㎡)を実施しており、調査面積は合計2,200㎡を測る。

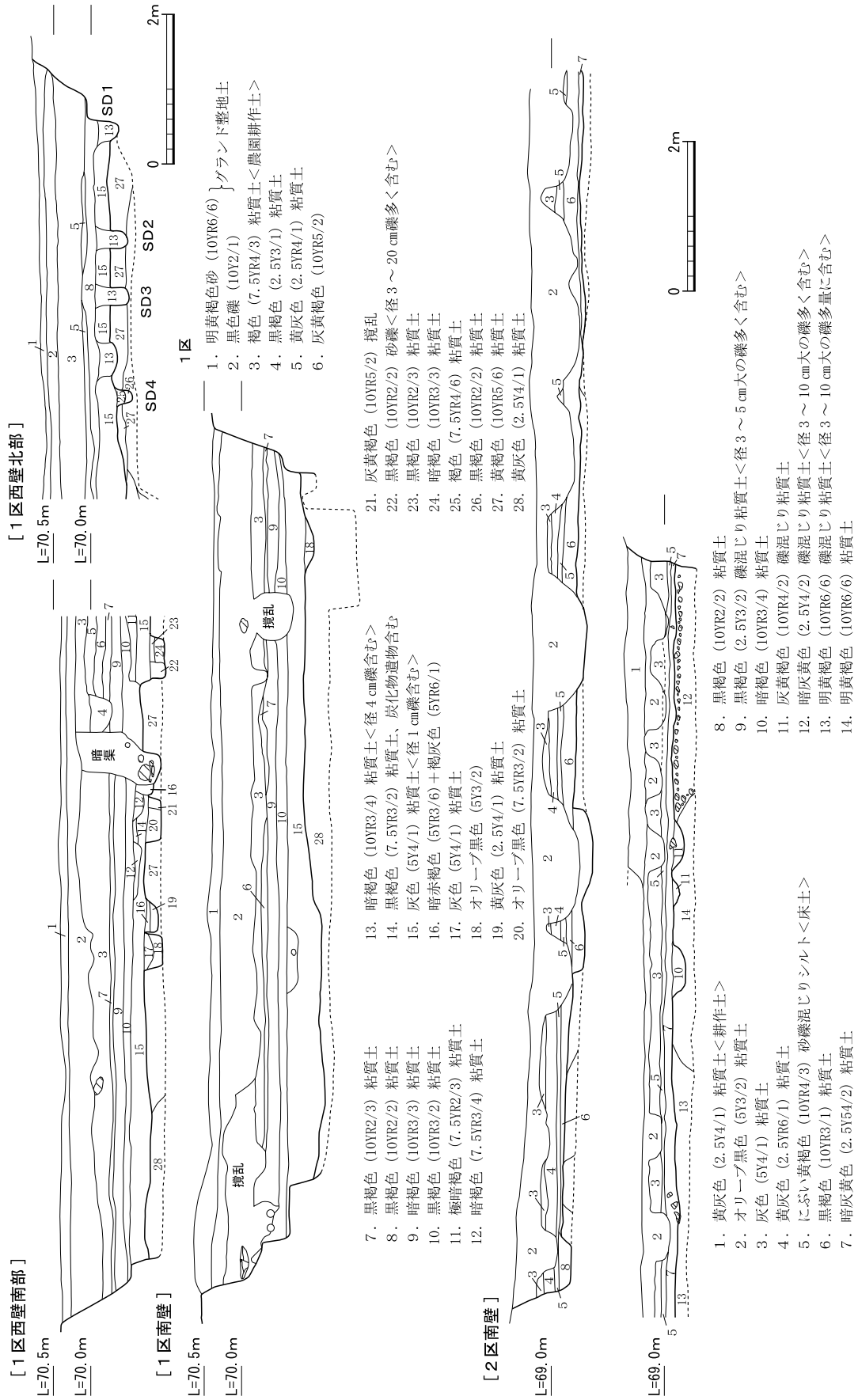
今回、検出した遺構は、縄文時代から近世にいたる各時代の遺構を含むが、遺構の多くは奈良時代から平安時代に属するものである。以下、本文中における平安京期の遺構の年代観は、平安京域の土器検討で示された小森・上村両氏による編年を用い^(注13)、遺構の時期との対応関係は、おおよそ平安時代前期前葉；京都Ⅰ期新(810～840年)、前期中葉；Ⅱ期古(840～870年)(以上、前期前半)、前期後半；Ⅱ期中～Ⅱ期新(870～930年)、中期中葉；Ⅲ期古(930～950年)、中期中葉；Ⅲ期中(950～980年)とする。

(1)基本層序(第7図)

1区は、調査地北西に位置する調査区で、グラウンドとして利用されていた。現地地形は標高70.7～70.8mを測り、グラウンド造成土によって平坦な地形を呈しているが、旧地形は北から南に向けて緩やかに傾斜する。基本層序は、上層から順に、造成土(第7図1区西壁1～2層)、近現代遺物堆積層(同3層)、近世遺物包含層である灰色粘質土層(同15層)、中世後期～近世の堆積層とみられる黒褐色粘質土層(同14層)、平安時代前期後半以降の堆積層と推定される灰色礫混じり粘質土層(同15層)の順に堆積する。北部では、表土下約1.0mの標高69.8m付近で、基盤層と認識する10～30cm大の礫を含む黄褐色礫混じり粘質土層を検出し、この面で各期の遺構を確認した。1区中央から南部にかけては地盤が低く、平安時代前期後半以降の堆積層とみられる第15層を標高約69.5mで約20cmの厚さで検出し、その上面でおもに平安前期後半～近世の遺構(上層)を



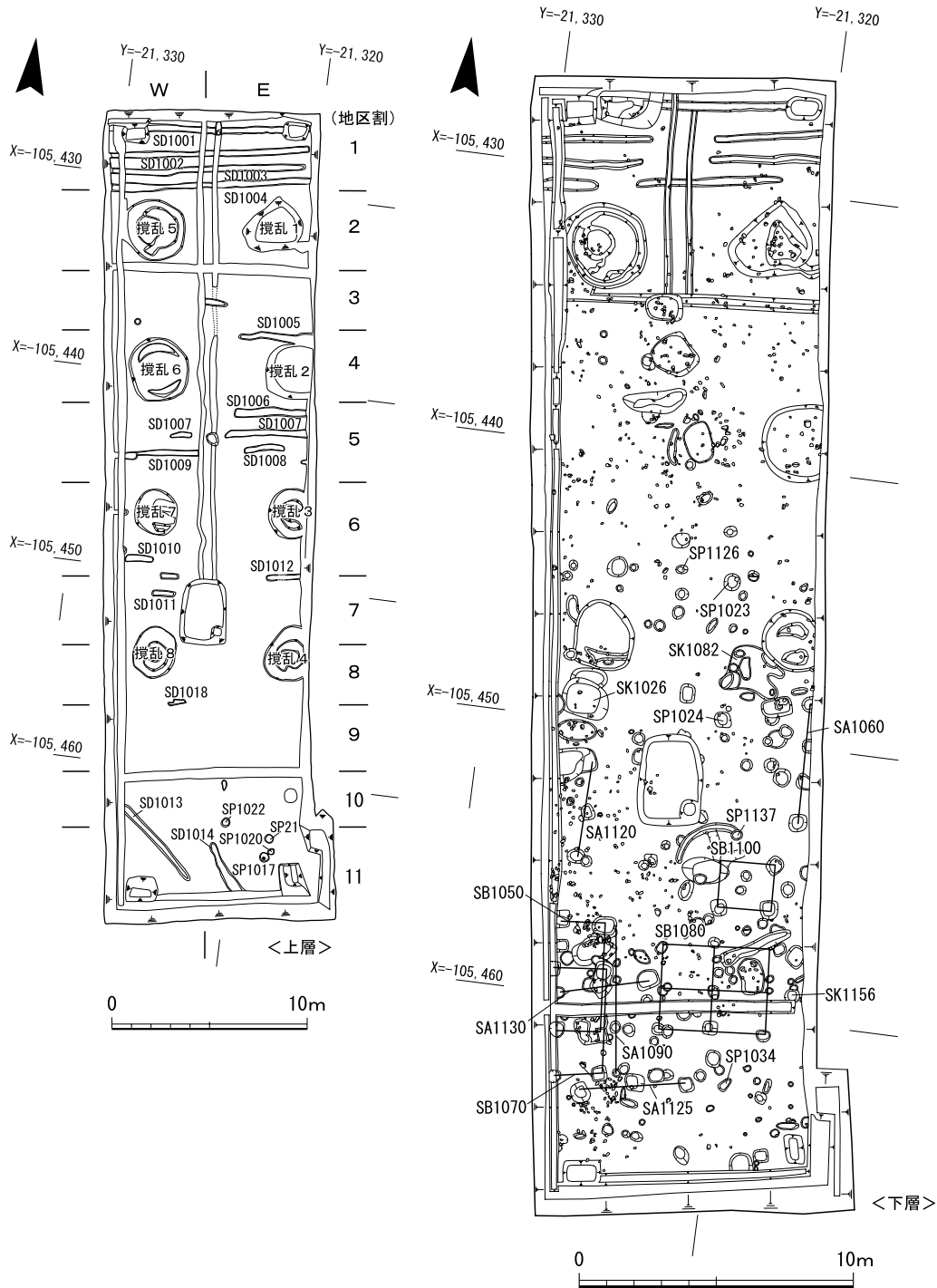
第6図 1～7区遺構平面図



第7図 1・2区土層断面図

確認した。また、第15層を除去した下層の標高69.2~69.3mで奈良時代から平安時代前期前半(下層)を中心とした遺構面を確認している。

2区は、農学部農場の北部に設定した調査区で、調査面積は1,745㎡を測る。調査前の標高は、調査区中央南部で69.5mを測り、基準層序は、南壁では上層から、農場耕作土であるオリーブ黒色粘質土層(第7図2区2層)、近代堆積層とみられる黄灰色粘質土層(同4層)を確認し、鉄分が多く沈着する床土(同5層)を挟み、さらにその下層は中世遺物包含層である暗灰黄色粘質土層(同



第8図 1区上層・下層遺構平面図

7層)を部分的に検出した。また全体に基盤層の標高の低い中央部では、中世～古代の遺物を包含する黒褐色粘質土層(同6層)が部分的にみられる。基盤層とみる黄褐色～暗灰黄色礫混じり粘質土層は、標高68.6～68.8mで確認した。2区東半部は、全体に近現代の大型土坑による攪乱が多数みられ、その多くが深く基盤層に及んでいる。

(2) 1区検出遺構(第8図)

1区では、地盤が低く傾斜する南部で2面の遺構面を確認した。上層にあたる第1遺構面では、平安時代前期後半～近世と推定される溝や柱穴を検出し、下層にあたる第2遺構面で古墳時代前期から平安時代前期前半にかけての建物群や土坑を検出した。第1遺構面を人力掘削によって0.2～0.3m掘り下げ、第2遺構面を検出した。細かな碎屑物からなる洪水性の堆積層を間に挟むことから、第2遺構面の建物群の廃絶は、賀茂川起源の洪水による影響の可能性が高い。1区北半は、遺構群が大きく流失、削平されているとみられる。

おもな検出遺構は、古墳時代前期の柱穴2基と土坑1基、奈良時代末～平安時代前期の掘立柱建物4棟、柱列3条、土坑3基、溝1条、中世～近世以降の柱穴や素掘り溝群などである。

①第2遺構面(下層遺構)

第2遺構面は、第1遺構面の約0.2～0.3m下層において、標高約69.3～69.4mで検出した遺構面であり、1区南半部で確認した。古墳時代前期～平安時代前期前半にかけての遺構を確認した。おもな検出遺構は、古墳時代前期の柱穴2基、土坑1基のほか、平安時代前期前半とみられる掘立柱建物4棟、柱列4基、柵1条のほか、柱穴群や土坑2基を検出した。

a. 古墳時代

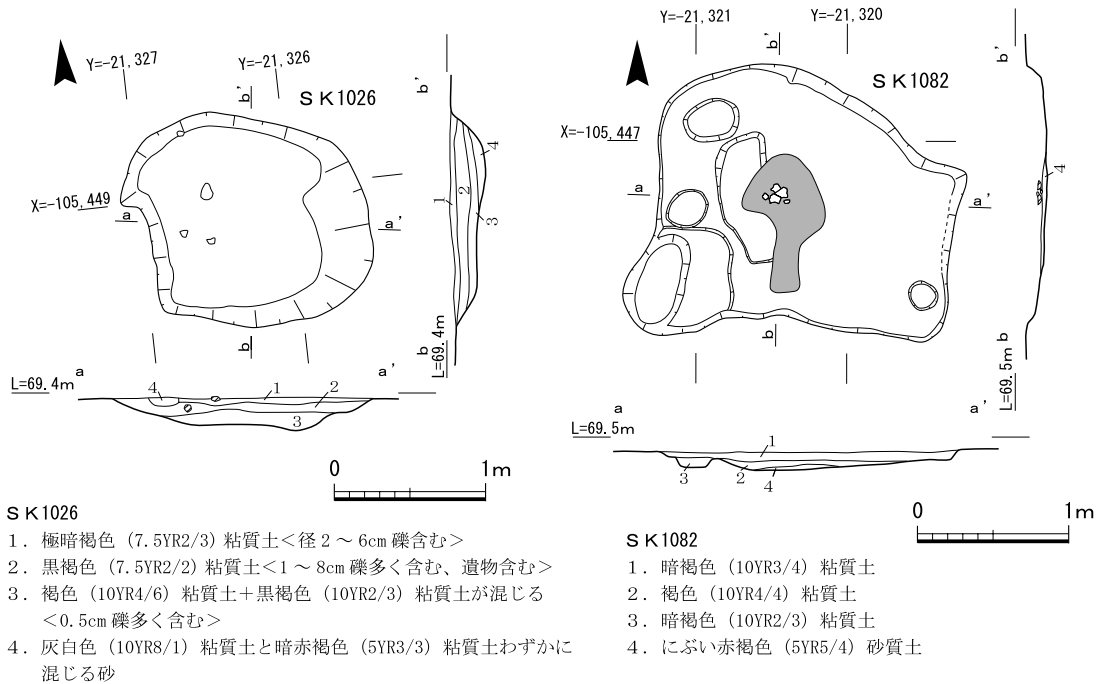
柱穴 S P 1024(第8図) 南部で検出した柱穴で、直径0.4m、深さ0.2mを測る。柱穴埋土から布留式最古段階に属する甕(第87図2)が出土しており、時期は古墳時代前期前葉とみられる。

柱穴 S P 1137(第8図) S B 1100の北側で検出した柱穴である。直径0.4m、深さ0.3mを測る。庄内式甕(第87図3)が出土しており、古墳時代前期前葉の柱穴とみられる。

土坑 S K 1082(第9図) 中央東寄りで検出した不整形の土坑である。南北1.6m、東西2.1m、深さ0.2mの規模をもつ。中央部は、長さ0.8m、幅0.6mの範囲で被熱痕跡がみられることから、竪穴建物の床面の一部の可能性もある。周辺は洪水性の碎屑物の層が広がることから、遺構の多くが流失している可能性が高い。遺物はわずかながら出土した土器(第87図1)から、古墳時代前期と推定される。

b. 奈良～平安時代

掘立柱建物 S B 1050(第10図) 調査区南部の西壁に接して検出した建物である。建物の西側は調査区外に広がり、桁行1間(1.8m)以上、梁行2間(4.0m)の規模をもつ東西棟である。S B 1070と重複し、一部柱穴を削平される。柱間は、桁行6尺(以下、造営尺1尺30.0cmとする)、梁行がやや幅広く、1.9～2.1mを測り、おおよそ7尺をなす。柱穴掘形は、隅丸方形をなし、規模は一辺0.6～0.8m、深さ0.3～0.4mを測る。断面観察により柱痕跡が確認できた柱穴は、直径約0.2mを測る。建物の主軸は北から6°西に振る。平安時代前期前半頃の土器が出土しているが図化



第9図 1区土坑S K 1026・1082平面・断面図

できなかった。

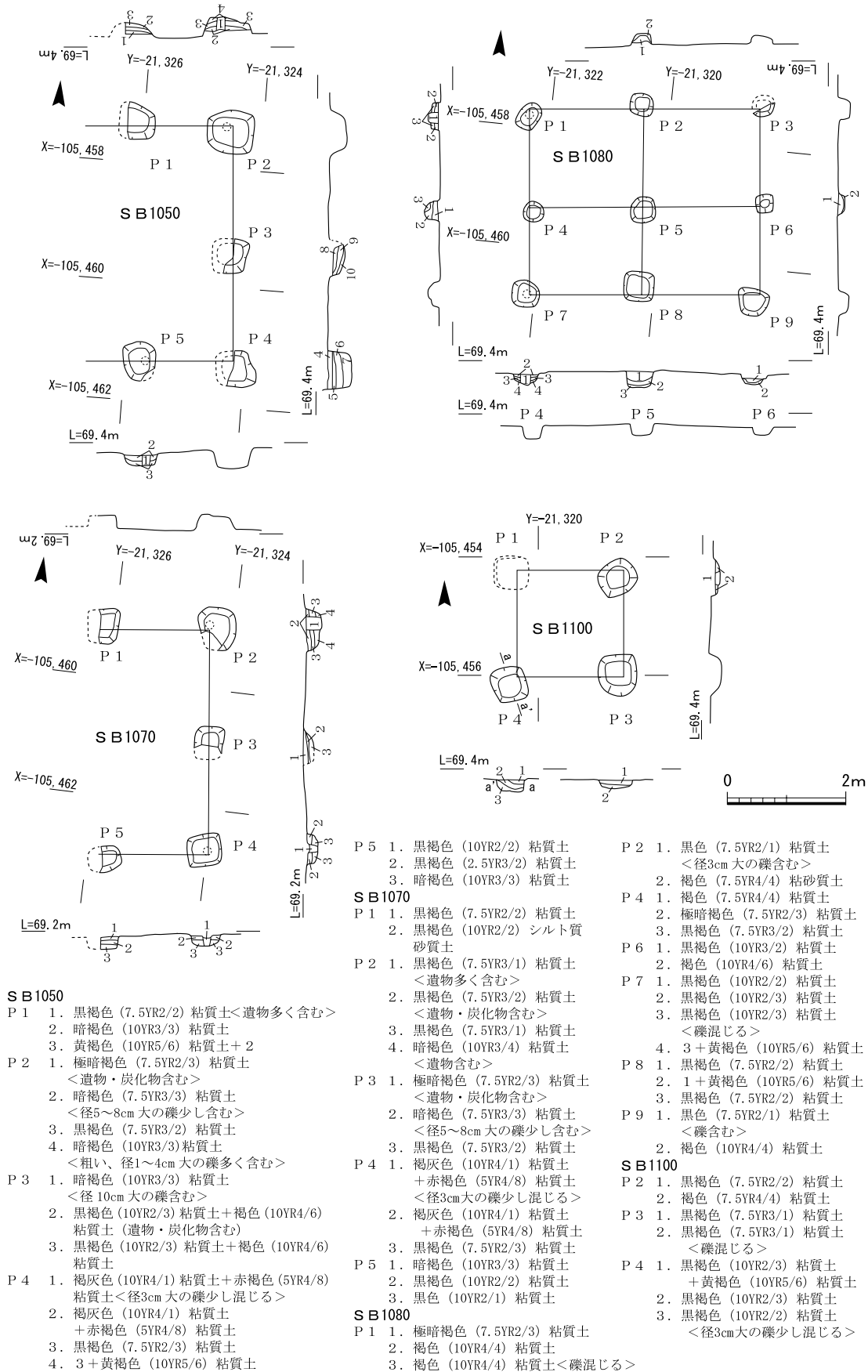
掘立柱建物 S B 1070 (第10図) 掘立柱建物 S B 1050の南で、一部重複して検出した建物である。桁行1間以上(1.8m)、梁行2間(3.7m)の東西棟とみられる。柱間は桁行、梁行とも1.8~1.9mを測り、6尺をなす。柱穴は方形掘形をなし、一辺約0.6m、深さ0.2~0.3mを測る。柱痕跡は、断面観察から約0.2mを測る。建物の主軸は、北から5°30'西に振り、S B 1050と近接し、ほぼ同等の規模をもつことから、S B 1050の建て替えによる建物とみられる。柱穴から平安時代前期前葉の土器(第87図4~6)が出土している。

掘立柱建物 S B 1080 (第10図) 調査区の南部中央で検出した東西2間(3.8m)、南北2間(3.1m)の総柱建物である。柱間は不揃いで1.5~1.9mを測る。柱穴掘形は南の柱列がよく残存し、一辺約0.4mの歪な方形を呈する。建物主軸は、北から西に4°30'西側に位置する。S B 1050・1070よりも柱穴掘形の規模はやや小さいが、建物主軸はやや西に振っている。

掘立柱建物 S B 1100 (第10図) 南部で検出した東西1間(1.8m)、南北1間(1.8m)の小規模な建物である。北西の柱穴は削平を受けていたが、3基の柱穴を確認し、柱間6尺の建物として復元した。柱穴掘形は一辺約0.6~0.7mの方形を呈し、断面観察による柱痕跡は、直径約0.2mを測る。建物の主軸は、北から1°西に振り、おおむね正方位である。

柵列 S A 1090 (第11図) 掘立柱建物 S B 1080の西側で検出した南北3間(5.0m)の柵列である。柱間は、1.8~1.9m(6尺)を測る。柱穴掘形は、一辺0.25~0.4mの歪な方形を呈し、深さは0.15mと周囲の建物よりも浅い。S B 1080の西に1.5m(5尺)の位置で、建物の主軸を揃えることから、S B 1080に伴う柵列とみられる。

柱列 S A 1060 (第11図) 東壁南部寄りで検出した南北に3間の規模をもつ柱列である。柱間



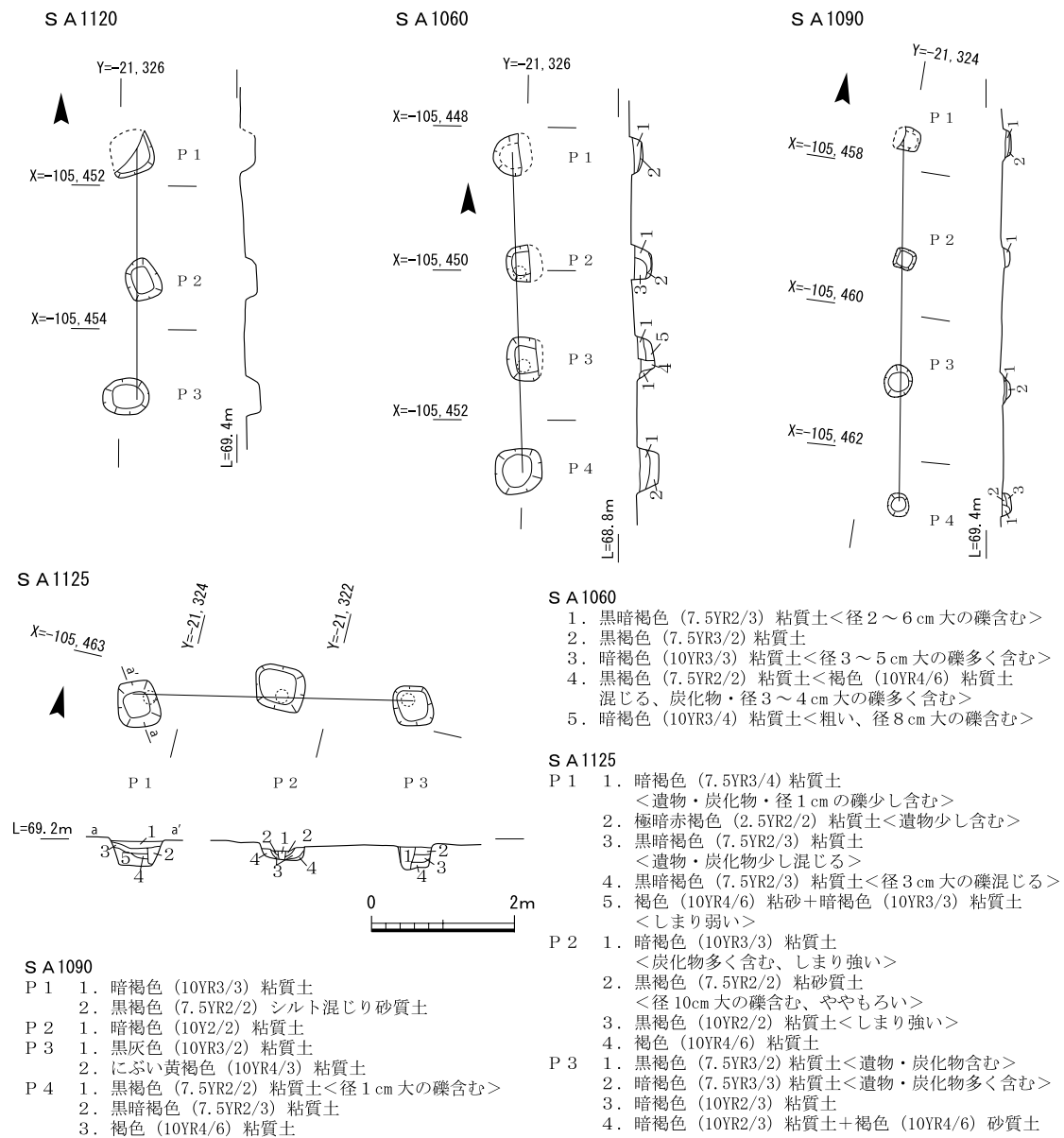
第10図 1区掘立柱建物平面・断面図

は1.5m(5尺)を測り、柱穴掘形は、約0.5~0.6mの方形をなす。東側は調査区外のため確認できないが、建物の西側柱列の可能性はある。

柱列 S A 1120 (第11図) 西壁南部で検出した南北に2間の規模をもつ柱列である。柱穴は、一辺約0.4~0.5mの方形掘形をなす。西に拡張する建物の東側柱列の可能性はある。

柱列 S A 1125 (第11図) 南部で検出した東西2間(4.0m)以上の柱列である。柱間は、約2.0mを測り、おおよそ7尺に対応する。柱掘形は、一辺約0.5~0.7m、深さ0.4mを測る。S B 1050から約2.1m(7尺)南に位置し、主軸を揃えることから、S B 1050に伴う塀の可能性はある。土師器杯が出土しており、平安時代前期前半の柱列と推定される。

土坑 S K 1026 (第9図) 中央東寄りで検出した歪な方形の土坑で、一辺1.4~1.5m、深さ0.2~0.25mを測る。須恵器杯Aが出土しており、平安時代前期前半の土坑と推定される。



第11図 1区柱列・柵列平面・断面図

②第1遺構面(上層遺構)

1区の旧地形は北から南へ緩やかに傾斜しており、標高69.2～69.3mで第1遺構面を検出した。調査区北部では、近現代の耕作などにより遺構面が大きく削平され、同心円状のスプリンクラーによる攪乱(径約2m)を多数確認した。攪乱は深く基盤層に及んでいる。主な検出遺構は、平安時代前期後半～中世とみられる柱穴群や溝1条、近世～近代の溝群である。また、柱穴から椀形滓の一部とみられる鉄滓が出土した。上層遺構の柱穴には瓦器片を含むものがあり、柱穴の時期は中世に帰属する可能性が高い。1区では包含層中でも椀形滓1点が出土した。

土坑S K 1017(第8図) 調査区南部で検出した円形の小土坑である。径0.4m、深さ0.3mを測る。

溝S D 1001～1012・1015～1018(第8図) 北部を中心に東西及び南北方向に素掘り溝群を検出した。幅約0.2～0.3m、深さ約0.1～0.3mを測る。近世～近代の耕作溝と推定される。

溝S D 1013(第8図) 西壁南部周辺で検出した溝で、幅0.5m、深さ0.1～0.2mを測る。北西から南東へ掘削された溝である。遺物は出土せず、時期は不明であるが、3区で検出したS D 3001の延長上にあり、同一の溝とみられる。S D 3007は、2区S D 2001、5区S D 5001へとつづく平安時代前期後半とみられる溝で、S D 1013も同時期と推定される。

溝S D 1014(第8図) 北壁南部周辺で検出した溝である。北西から南東へ掘削された溝で、幅0.3～0.4m、深さ0.1mを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

(3)2区検出遺構(第12図)

2区では飛鳥時代末期～平安時代にかけての遺構群をおもに検出した。古墳時代後期の柱穴1基、飛鳥時代末期～奈良時代の土器棺墓2基、溝2条、奈良時代の竪穴建物1基、奈良～平安時代の掘立柱建物7棟・柱列7条、柱穴群や土坑のほか、平安時代の溝1条、鎌倉時代の土坑1基等を検出した。

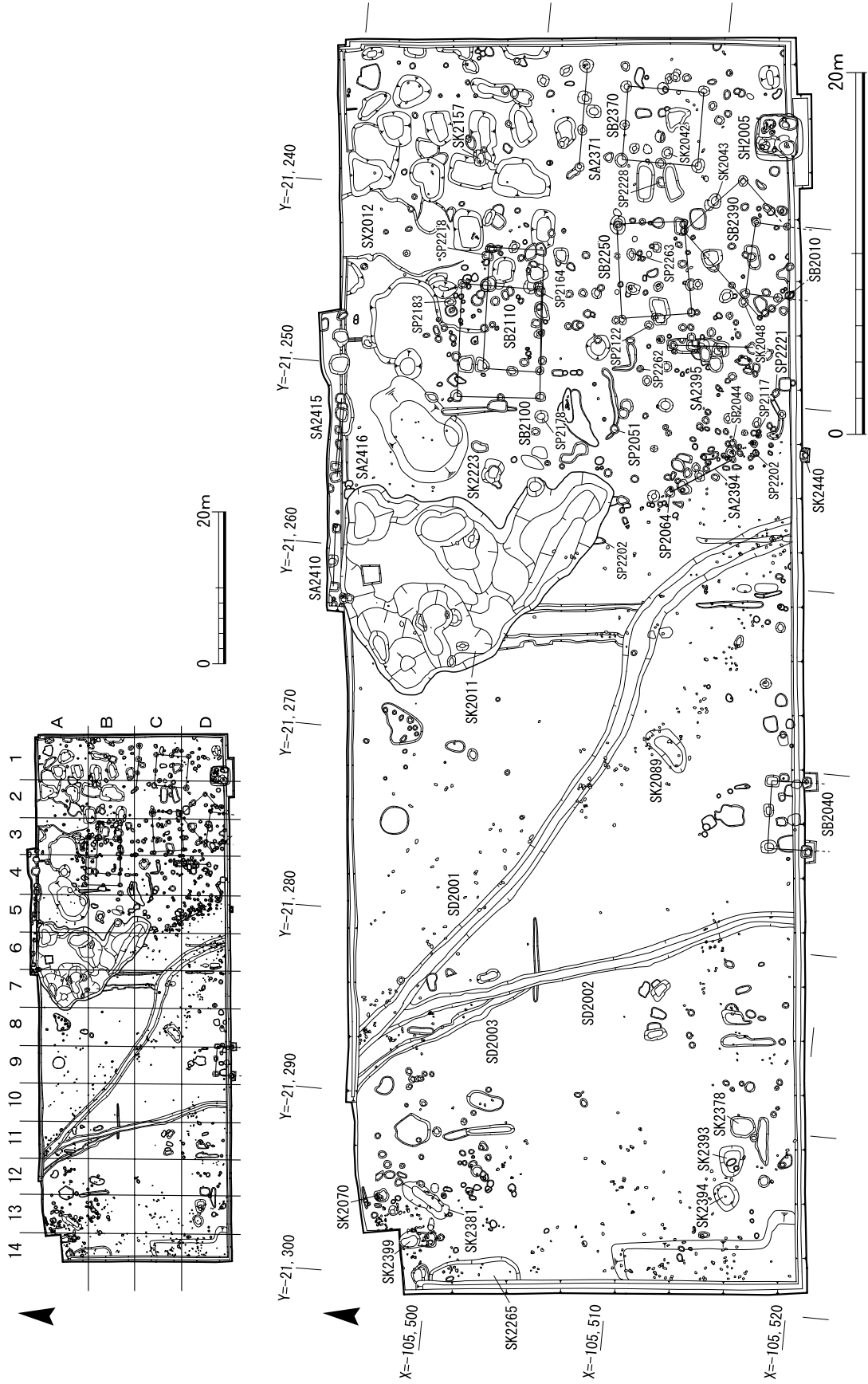
①古墳時代

柱穴S P 2051(第17図) 南東部で検出した柱穴で、直径0.4m、深さ0.3mを測る。須恵器壺(第88図29)が出土し、古墳時代後期の柱穴と推定される。

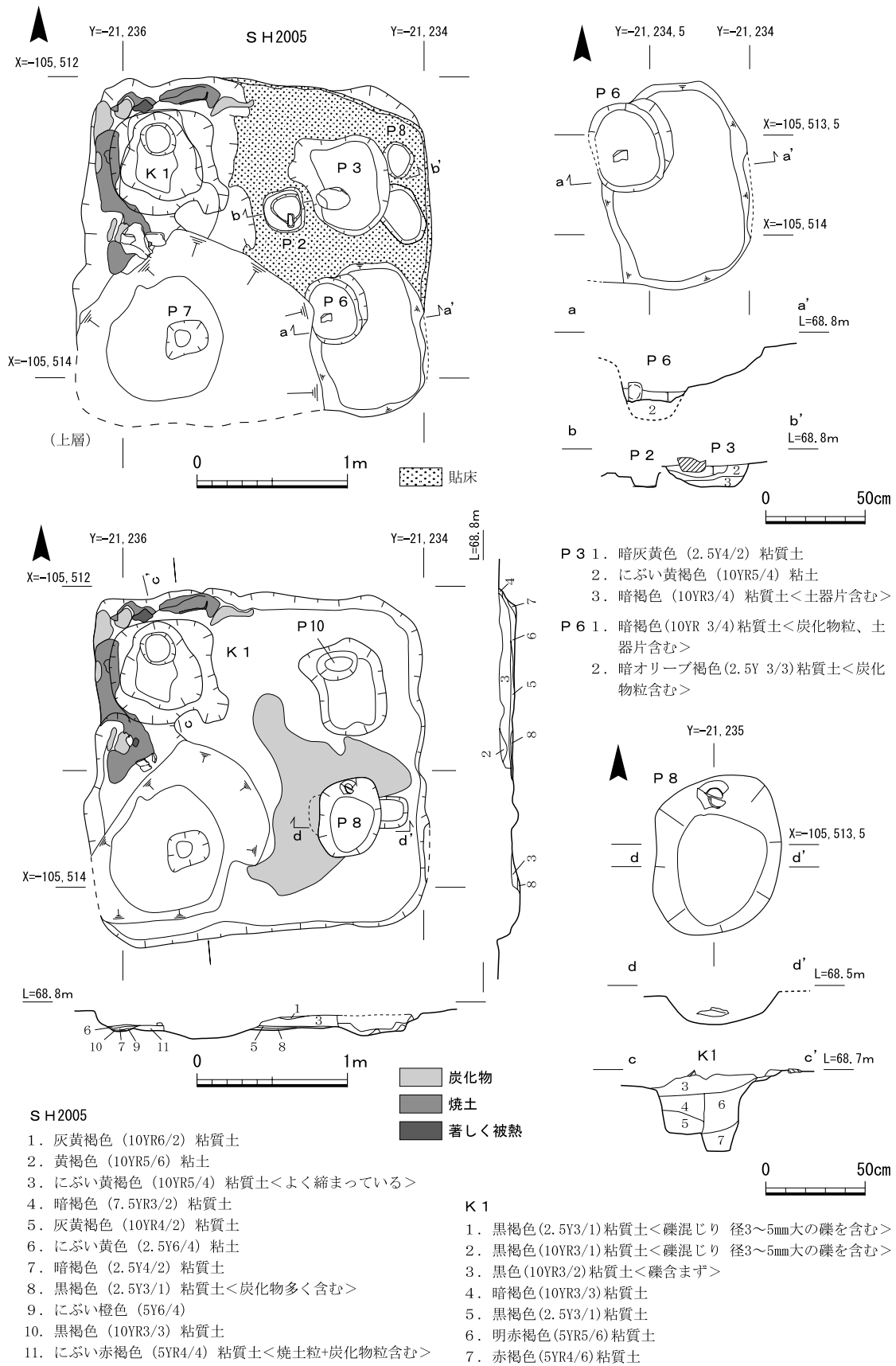
柱穴S P 2221(第17図) 南東部で検出した柱穴で、直径0.3m、深さ0.2mを測る。須恵器高杯(第88図59・60)が出土し、時期はおおよそ飛鳥時代末期～奈良時代初期とみられる。

②奈良～平安時代

竪穴建物S H 2005(第13図) 調査区南東隅で検出した建物である。平面形は方形を呈し、規模は、1辺2.2m～2.3m、深さ約0.1mを測る。床面の南西部は一部後世の削平を受けるが、北東部を中心に黄褐色粘土による貼り床を検出した。貼り床は約5cmの厚さを測り、貼り床上で土坑(K 1)や柱穴(P 2、3、6、8)を確認した。北西隅で検出した住居内土坑K 1は、規模長さ1.05m、幅0.7m、深さ0.3mを測り、周囲内壁は上部が被熱し、埋土に細かな焼土塊や炭化物を含む。貼り床を除去した南東部の床面下層で柱穴P 8を確認しており、P 7とともに、主柱穴を



第12図 2区遺構平面図・地区割り図



第13図 2区竪穴建物SH2005平面・断面図

なすとみられる。居住を目的とした建物としては規模が小さく、工房的な性格をもつ作業施設と推定される。出土遺物は、柱穴P 6から緑釉陶器椀が出土している。また、埋土から、鉄製刀子とみられる鉄器片が出土しており、鍛冶に関わる可能性があることから、埋土の洗浄を実施したが、鍛造剥片等は出土していない。建物の主軸は、おおよそ北から1°西に振り、ほぼ正方位の主軸をもつ。出土土器から、平安時代前期中葉の建物と推定される。

掘立柱建物 S B 2010 (第14図) 南東部の南壁周辺で検出した桁行2間(4.0m)、梁行2間(3.8m)以上の建物である。柱間は1.8~1.9mを測る。建物の主軸は、北から1°東に振る。柱穴から布目痕をもつ平瓦の一部が出土している。

掘立柱建物 S B 2040 (第14図) 南西部の南壁周辺で検出した建物である。東西に3基の柱穴を確認したため、南を一部拡張して確認した。桁行2間(3.7m)、梁行2間(2.2m)以上の南北棟とみられる。柱穴掘形は、一辺0.65~0.8m、深さ0.3mの方形を呈する。建物の主軸は、北から1°西に振る。遺物は出土していないが、建物主軸と埋土の状況から、奈良時代末~平安時代前期の建物と推定される。

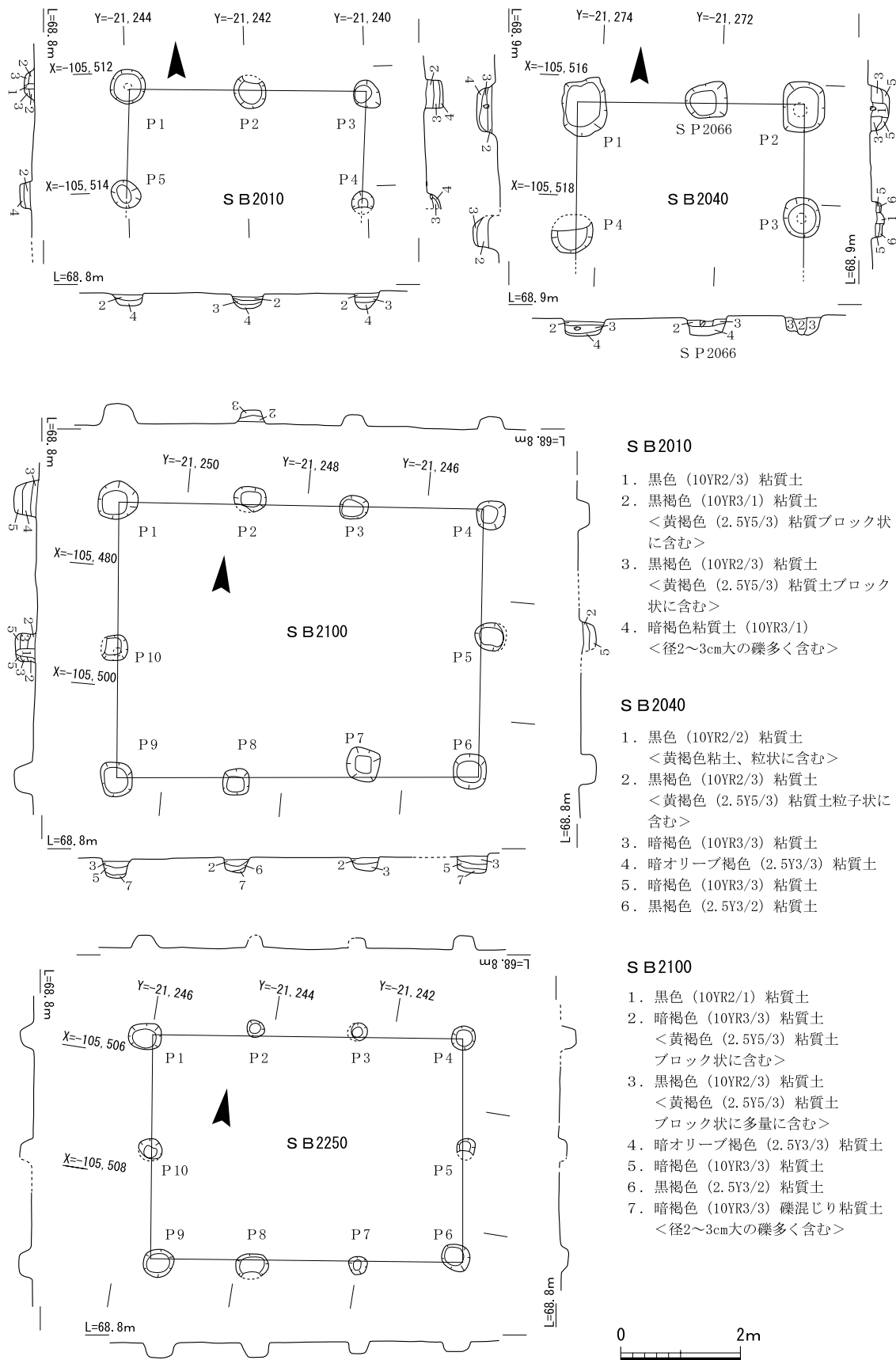
掘立柱建物 S B 2100 (第14図) 北東部で検出したS B 2110と重複する建物である。桁行3間(6.3m)、梁行2間(4.5m)の東西棟である。桁行の柱間は2.0~2.2mを測り、おおよそ7尺をとる。攪乱が特に著しい地点で、柱穴は不整形のものが多く、完存しているものは一辺約0.5mの方形掘形をもつ。建物の主軸は、北から4°西に振る。柱穴2から瓦が、P 6から土師器杯が出土している。後述するようにS B 2110の廃絶後の建物である。

掘立柱建物 S B 2250 (第14図) 東部中央南寄りで検出した建物である。桁行3間(5.2m)、梁行2間(3.8m)の規模をもつ。柱間は1.7~1.8mを測り、約6尺である。柱穴掘形は、不整形あるいは歪な方形を呈する。建物の主軸は、北から9°振る。わずかながら奈良時代末~平安時代前期の土器が出土している。

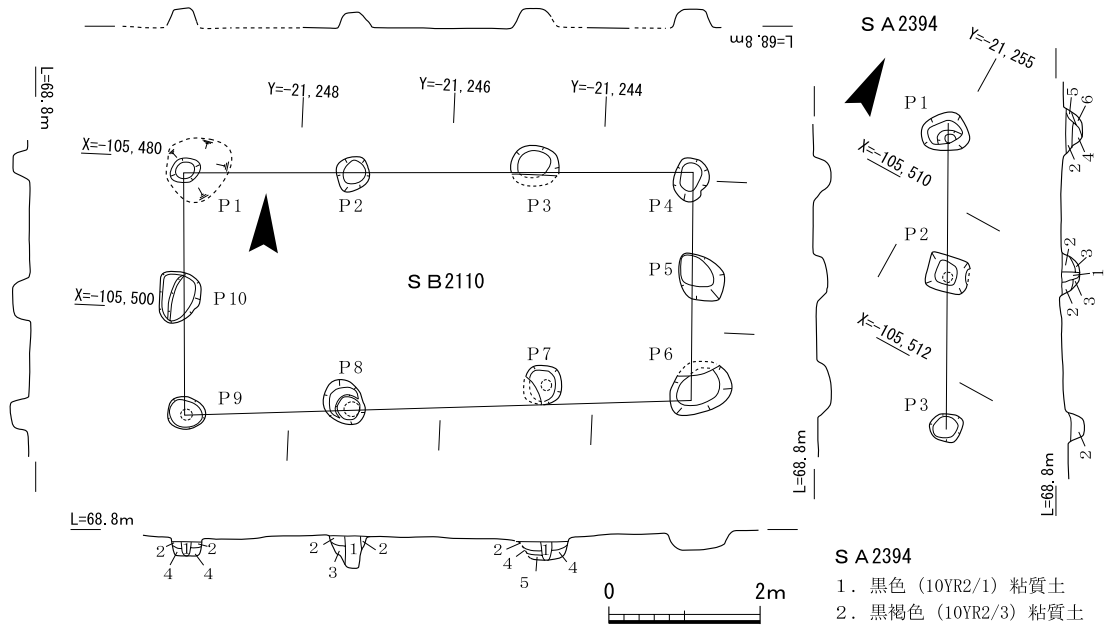
掘立柱建物 S B 2110 (第15図) S B 2100と重複して検出した。桁行3間(6.7m)、梁行2間(3.1m)の東西棟である。桁行の柱間は約2.1~2.3m、梁行の柱間は約1.5~1.6mを測る。柱穴掘形は、削平のために不整形のものを含むが、一辺約0.6m前後の方形掘形から構成されるとみられる。建物の主軸は、北から2°西に振る。柱穴(P 4・6・8)から須恵器杯B、杯B蓋などの遺物(第88図30~32)が出土しており、平安時代前期前葉以降と推定される。S B 2100によって柱穴の一部が削平されることから、先行する建物であることがわかる。

掘立柱建物 S B 2390 (第15図) 2区南東で検出した梁行2間(4.4m)、桁行3間(6.4m)の建物である。建物の南東は一部調査区外へ延び、また削平が著しく、北西柱筋の柱穴の一部を欠く。柱穴掘形は、径約0.3~0.5mの歪な円形を呈し、建物の主軸は、北から43°30'東へ振る。主軸が周囲の建物と大きく異なることから、周囲の建物に先行する奈良時代の建物である可能性が高い。

掘立柱建物 S B 2370 (第16図) 調査区東部で検出したほぼ正方位の主軸をもつ建物である。東西2間(4.2m)、南北2間(4.1m)の柱構成をなし、柱間は2.1mを測り、おおよそ7尺である。柱穴は7基からなり、建物南柱列の中央の柱穴を欠く。柱穴掘形は歪な方形を呈し、一辺約0.6~



第14図 2区掘立柱建物 S B 2010・2100・2250平面・断面図

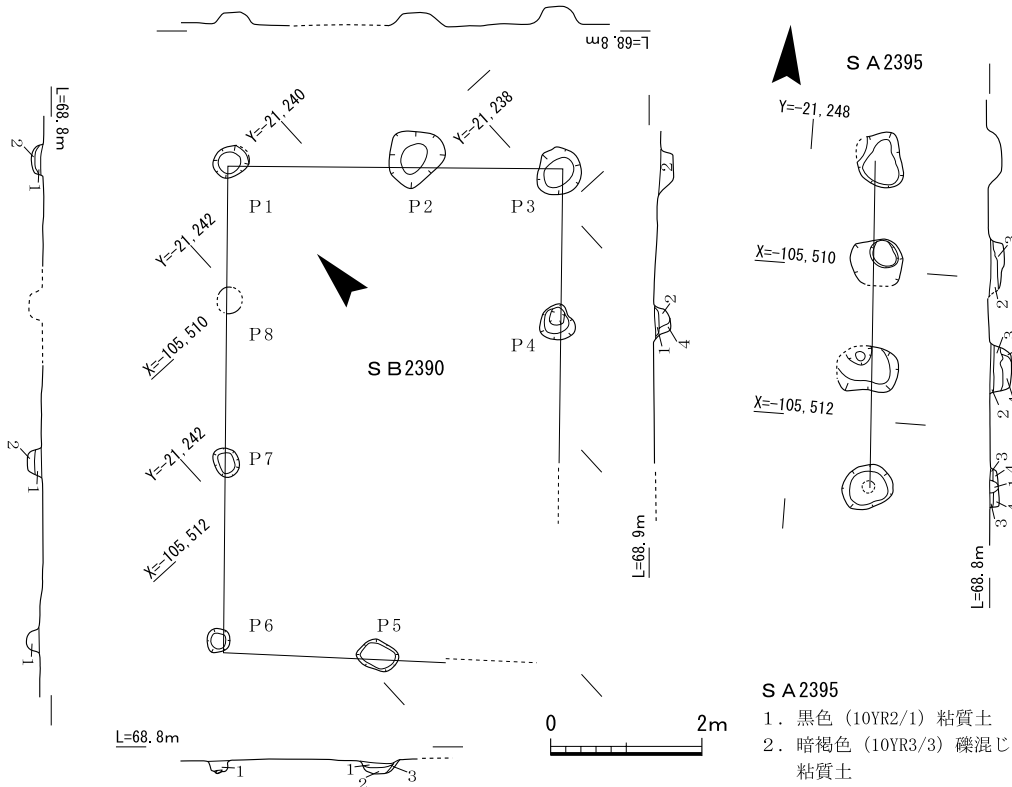


SB2110

- | | |
|--|--|
| 1. 黒色 (10YR2/1) 粘質土 | 4. 暗褐色 (10YR3/4) 礫まじり粘質土 |
| 2. 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土
＜黄褐色 (2.5Y5/4) 粘土ブロック多く含む＞ | 5. 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土
＜黄褐色 (2.5Y5/4) 粘土ブロック含む＞ |
| 3. 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土 | |

SA2394

- | |
|--------------------------|
| 1. 黒色 (10YR2/1) 粘質土 |
| 2. 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土 |
| 3. 暗褐色 (10YR3/4) 礫混じり粘質土 |
| 4. 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土 |
| 5. 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土 |
| 6. 暗オリーブ褐色 (10YR3/3) 粘質土 |



SB2390

- | | |
|---|--|
| 1. 黒褐色 (10YR3/3) 粘質土 | 3. 暗褐色 (10YR3/4) 礫まじり粘質土 |
| 2. 黒褐色 (10YR2/3) 礫混じり粘質土
＜径2~3cm大の礫含む＞ | 4. 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土
＜黄褐色 (2.5Y5/4) 粘土ブロック含む＞ |

SA2395

- | |
|---------------------------|
| 1. 黒色 (10YR2/1) 粘質土 |
| 2. 暗褐色 (10YR3/3) 礫混じり粘質土 |
| 3. 黒褐色 (2.5YR3/1) 礫混じり粘質土 |
| 4. 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土 |
| 5. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土 |

第15図 2区掘立柱建物 SB2110・2390、柱列 SA2394 平面・断面図

0.8m、深さ0.4～0.5mを測る。平面プランが方形で、柱穴の深さが深く、周辺建物と異なる性格をもつ建物とみられる。目隠し塀とみられるS A2371を北側に伴う。柱穴(P 2・4・6)から須恵器杯や壺の小片(第88図34～36)が出土しており、平安時代前期中葉以降の建物と推定される。

柱列S A2371(第16図) S B2370の北側に接して検出した柱列である。柱構成は3間から成り、柱間は約1.8～2.0mを測る。柱穴掘形は一辺約0.5～0.7mの歪な方形を呈する。S B2370に隣接し、方位を揃えることから、S B2370に伴う目隠し塀とみられる。

柵列S A2394(第15図) 中央南部東寄り検出した2間以上の柵列である。柱間は、1.8～1.9m(6尺)を測る。溝S D2001の南西部の流れと平行に設けられた柵の可能性はある。この周辺では、輪郭の不明瞭なピットを複数確認しており、植栽痕跡とみると、柵に伴い植樹が行われていた可能性がある。同様の状況は、S D5001の周辺でも確認され、洪水対策の可能性はある。

柱列S A2395(第15図) 南東部で検出した3間の規模をもつ柱列である。北側3基の柱穴は、複数の柱穴と重複して検出した。柱穴掘形は、一辺0.6～0.8mの歪な方形を呈し、深さ0.1～0.3mを測る。柱間は約1.4～1.5m(5尺)を測る。柱列は、北から3°30′西に振る。出土土器(第88図39)から、平安時代前期前半以降の柱列と推定される。

柱列S A2410(第16図) 北壁東部で柱穴の一部を検出し、北側に拡張して確認した東西方向の柱列である。2間(3.3m)以上の規模をもち、柱間は1.5m(5尺)～1.8m(6尺)を測る。柱穴掘形は一辺約0.5mの隅丸方形で、深さ0.3～0.4mを測る。調査区外の北側にさらに柱列が続くとみると、建物を構成する柱列の可能性はある。この地区では正方位の主軸をもつ建物が平安時代前期前半であることから、当該期の建物の可能性がある。

柱列S A2415(第16図) 柱列S A2410の東側で検出した2間(3.9m)の規模をもつ柱列である。柱間1.9～2.0m(6.5尺)を測る。調査区外の北に柱列が延び、梁行2間の南北棟となる可能性がある。主軸がほぼ正方位であることから、平安時代前期前半の可能性はある。

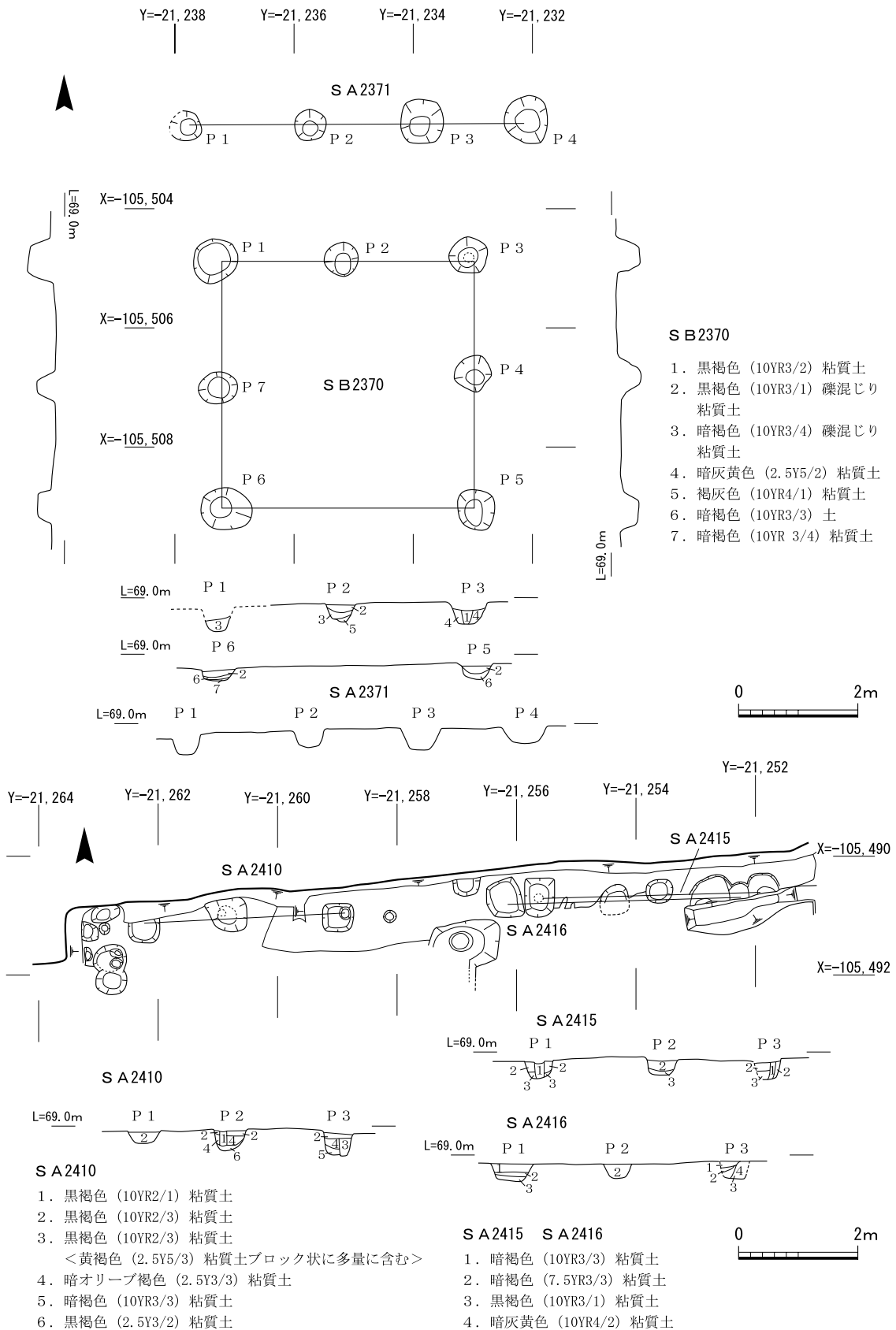
柱列S A2416(第16図) 柱列S A2415とほぼ同じ地点で、主軸を揃えて検出した東西2間(3.9m)の柱列である。梁行2間の南北棟の南側柱筋を構成する可能性がある。S A2416と柱間がほぼ同じ規模をもち、主軸が揃うことから、前後関係は不明であるが、建て替えの関係にあるとみられる。

柱穴S P2064(第17図) 調査区中央南寄りで検出した円形の柱穴である。径約0.65m、深さ0.25mを測る。小片のため図化できなかったが、奈良時代から平安時代前期の土師器甕が出土している。

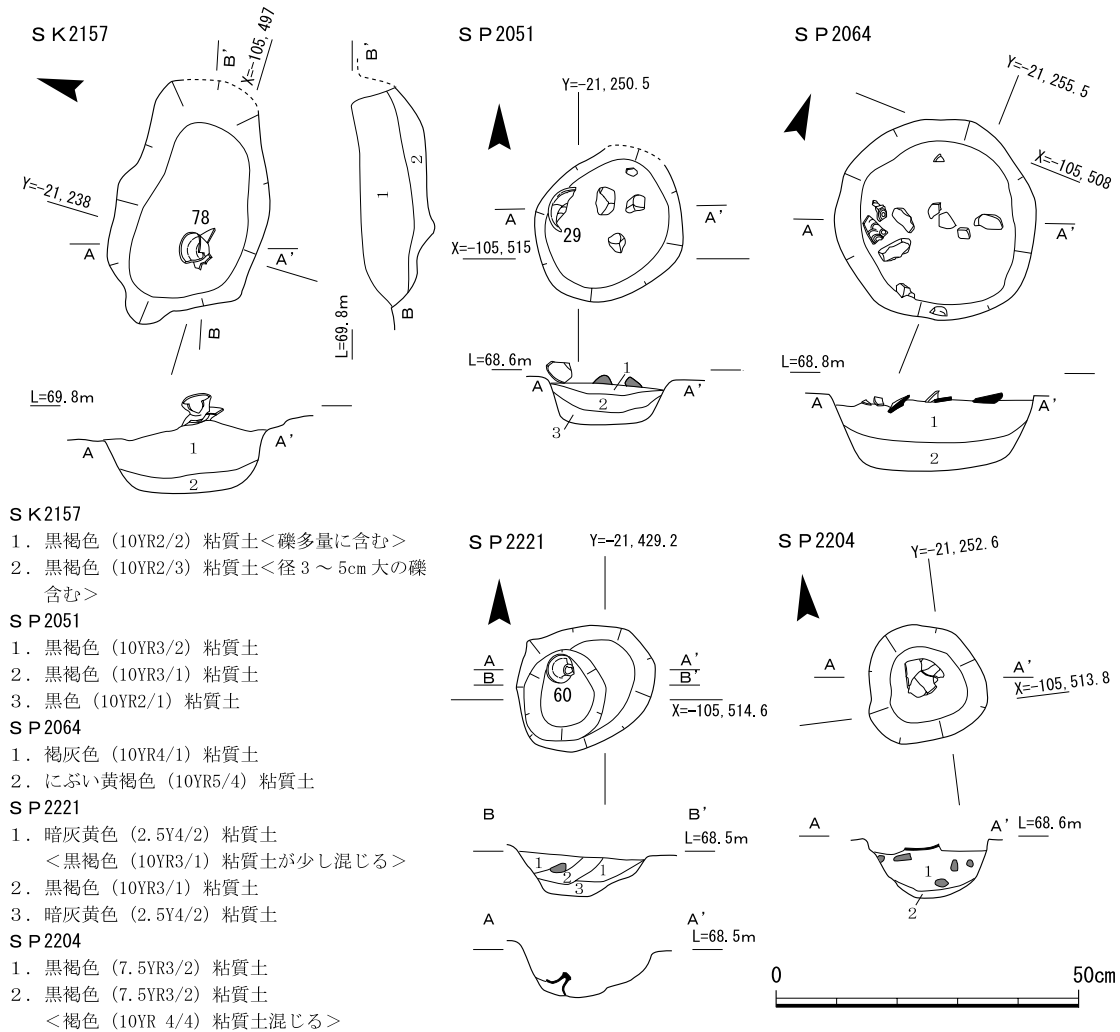
柱穴S P2204(第17図) 南西部で検出した歪な円形の柱穴で、径0.35m、深さ0.2mを測る。小片のため図化できなかったが、埋土から奈良時代から平安時代前期の須恵器杯が出土している。

柱穴S P2051(第17図) 東部中央で検出した歪な方形の小土坑である。埋土には、10cmの石材を多く含む。埋土から古墳時代後期の土器(第88図29)が出土している。

土坑S K2157(第17図) 北東部で検出した歪な方形の小土坑である。長さ0.75m、幅0.5m、深さ約0.25mを測る。飛鳥時代末から奈良時代前葉の須恵器平瓶(第89図78)が出土している。



第16図 2区掘立柱建物 S B 2370、柱列 S A 2410・2415・2416平面・断面図



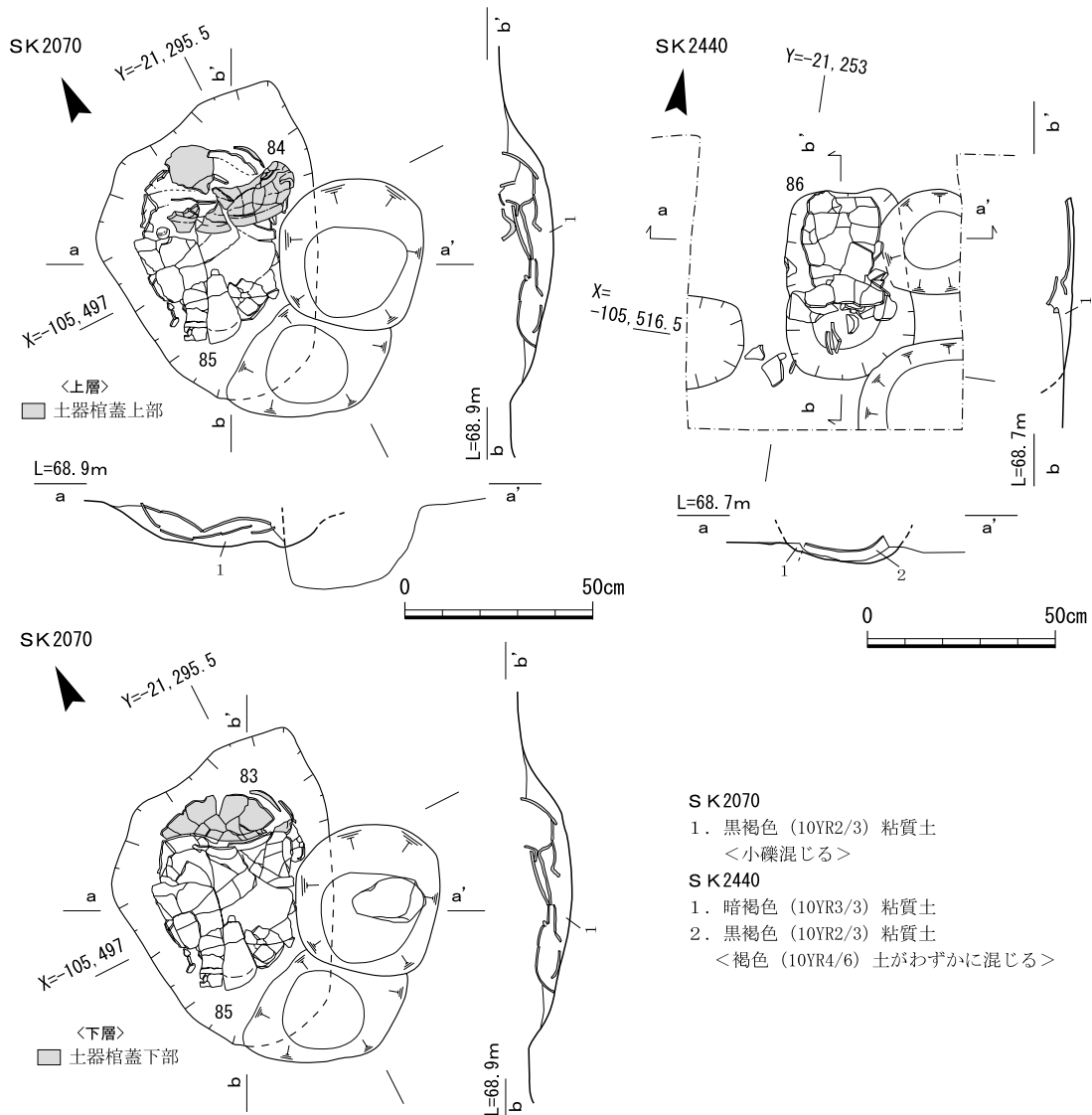
第17図 2区土坑・柱穴平面・断面図

土器棺墓SK2070 (第18図) 調査区北西隅で検出した。土壌内に、長胴甕と鍋 (第89図83~85) を組み合わせ、棺としたものである。土壌は上層を大きく削平され、規模は長さ0.8m、幅0.6m、深さ0.1mを測る。棺身とみられる長胴甕は横位で検出し、甕の口縁に2点の鍋の口縁を上下に挟む形で合わせて配置し、棺蓋としている。時期は、飛鳥時代末から奈良時代前葉とみられる。

土器棺墓SK2440 (第18図) 調査区南壁で土器の一部を確認し、拡張して検出した。土壌内に長胴甕 (第90図86) が横位で埋置されていることから、土器棺墓と推定される。土壌は長さ約0.5m以上、幅0.35m以上を測る。おおよそ飛鳥時代末から奈良時代前葉の土器棺墓とみられる。

土坑SK2223 (第19図) 中央北部で検出した方形の土坑である。底部は掘り鉢状をなし、規模は長さ1.3m、幅1.1m、深さ0.3mを測る。奈良時代末から平安時代前期前葉の須恵器杯Bや皿A (第89図79・81) が出土している。

土坑SK2265 (第19図) 調査区北西隅で検出した南北に長い不整形の土坑である。規模は長さ4.9m、幅1.4m以上、深さ0.2mを測る。土坑内から奈良時代前期の土師器鍋 (第90図87) が出土している。



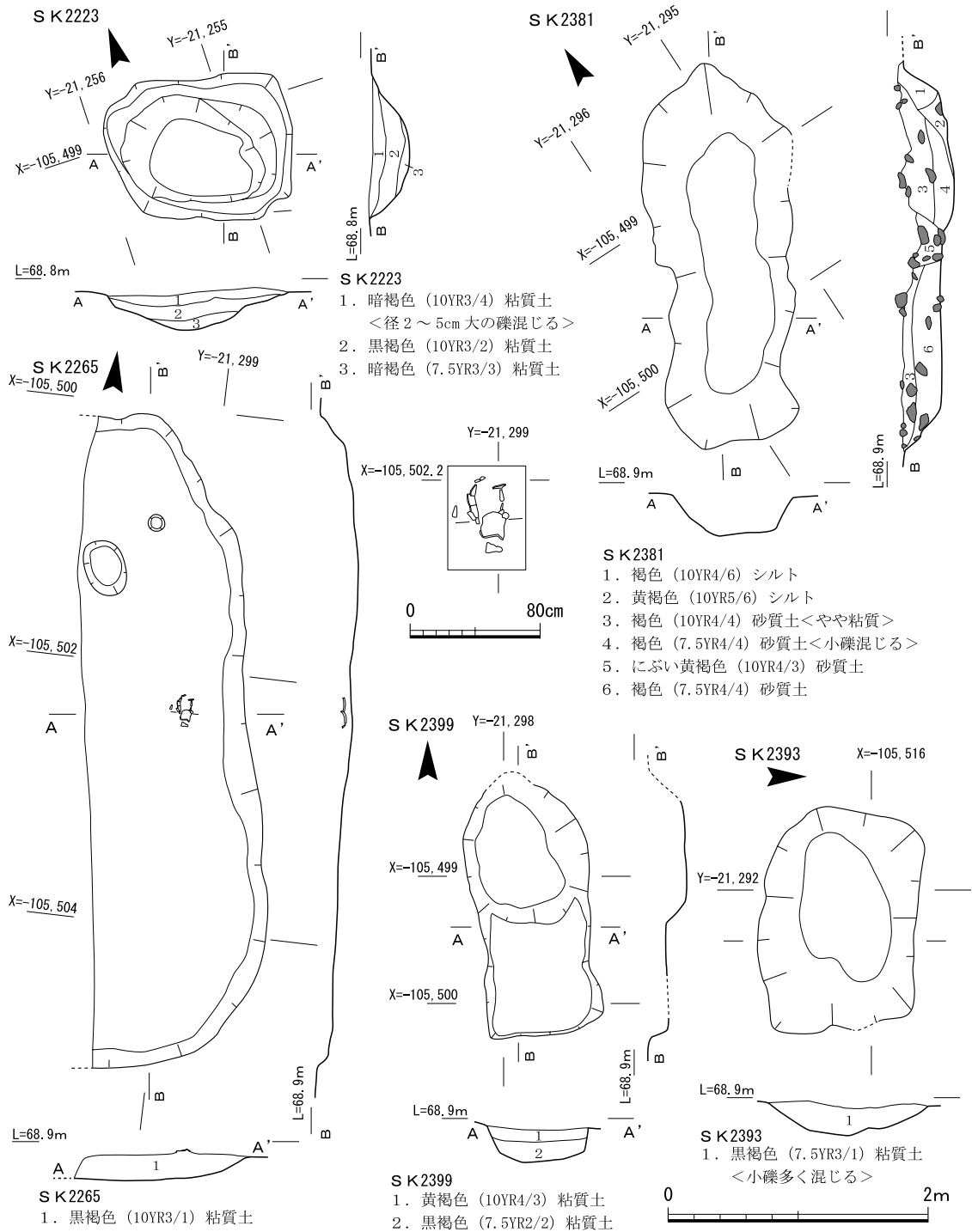
第18図 2区土器棺墓S K 2070・2440平面・断面図

土坑 S K 2381 (第19図) 調査区北西端で検出した。規模は長さ2.9m、幅1.2m、深さ0.4mを測る。埋土に10cm大の礫を多く含む。土器器細片が出土しているが、時期は不明である。土坑の形状や土器棺墓 S K 2070に近接することから、埋葬施設の可能性がある。

土坑 S K 2393 (第19図) 南西部で検出した方形土坑である。規模は、長さ1.7m、幅1.2m、深さ0.2mを測る。遺物は出土していないが、埋土の状況などから、奈良～平安時代と推定される。

土坑 S K 2399 (第19図) 調査区北西隅部で検出した長方形の土坑である。規模は、長さ1.9m、幅0.9m、深さ0.15～0.25mを測り、北側が深く掘削されている。須恵器片が出土していることから、奈良～平安時代の土坑とみられるが、時期を明確にできる資料ではない。

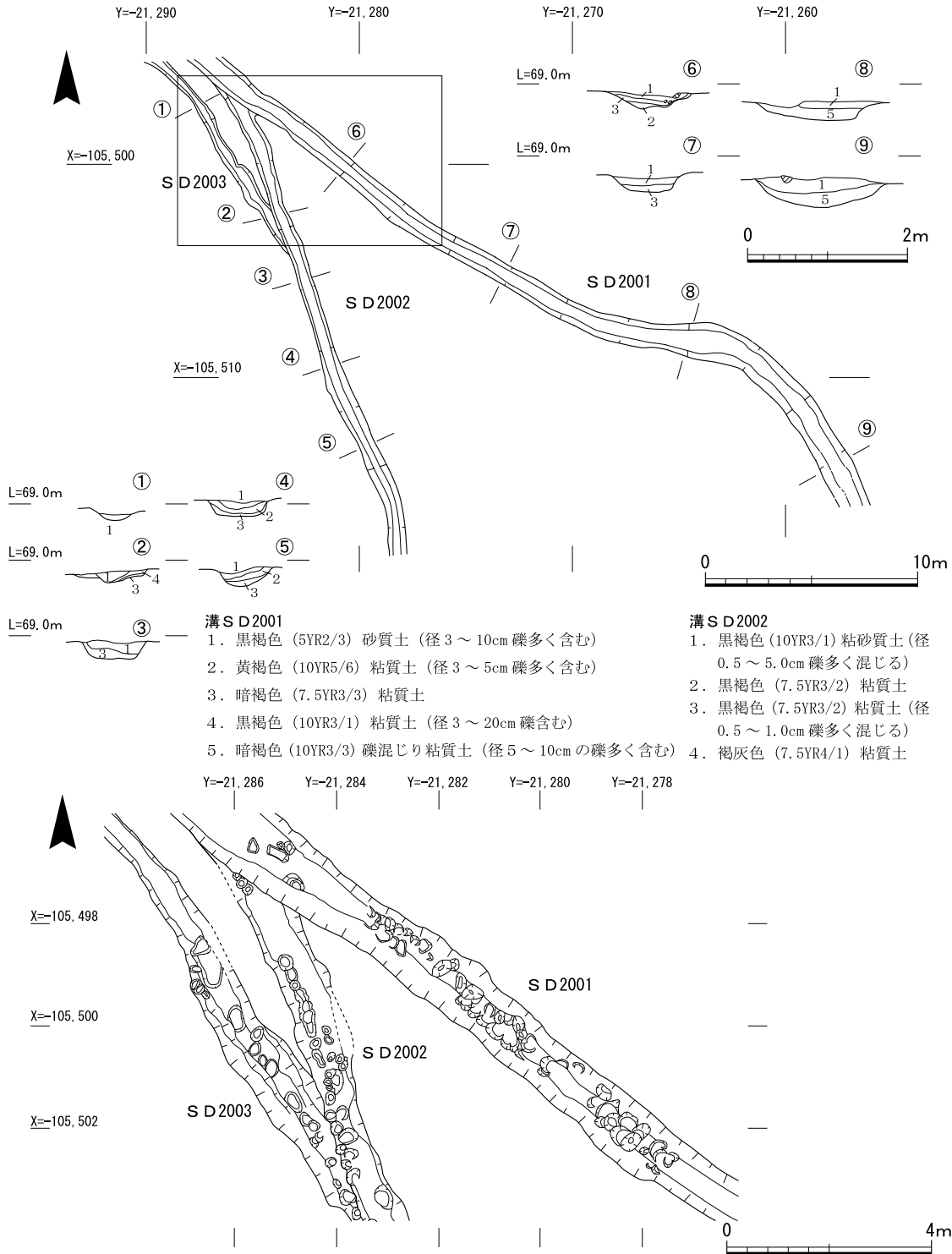
溝 S D 2001 (第20図) 調査区西部から中央にかけて検出した溝である。北西から南東へ向かって掘削された溝で、幅約1.5～1.6m、深さ約0.4mを測る。埋土は、最下層に暗褐色シルトが堆積するが、中層には5～10cm大の砂礫を多く含み、流路として機能していたとみられる。S D 2001は、北西に位置する3区溝 S D 3001と同一の溝であり、南東の延長上に位置する5区 S D



第19図 2区土坑群平面・断面図

5001に続くとみられる。S D 2001は、洪水性の砂礫土によって埋没しており、埋土から須恵器杯、鉢(第90図88~95)などが出土した。S D 2001は、同一の溝とみられる5区溝S D 5001が平安時代前期中葉の掘立柱建物群の廃絶後に掘削されていることから、平安時代前期後半の溝と推定される。

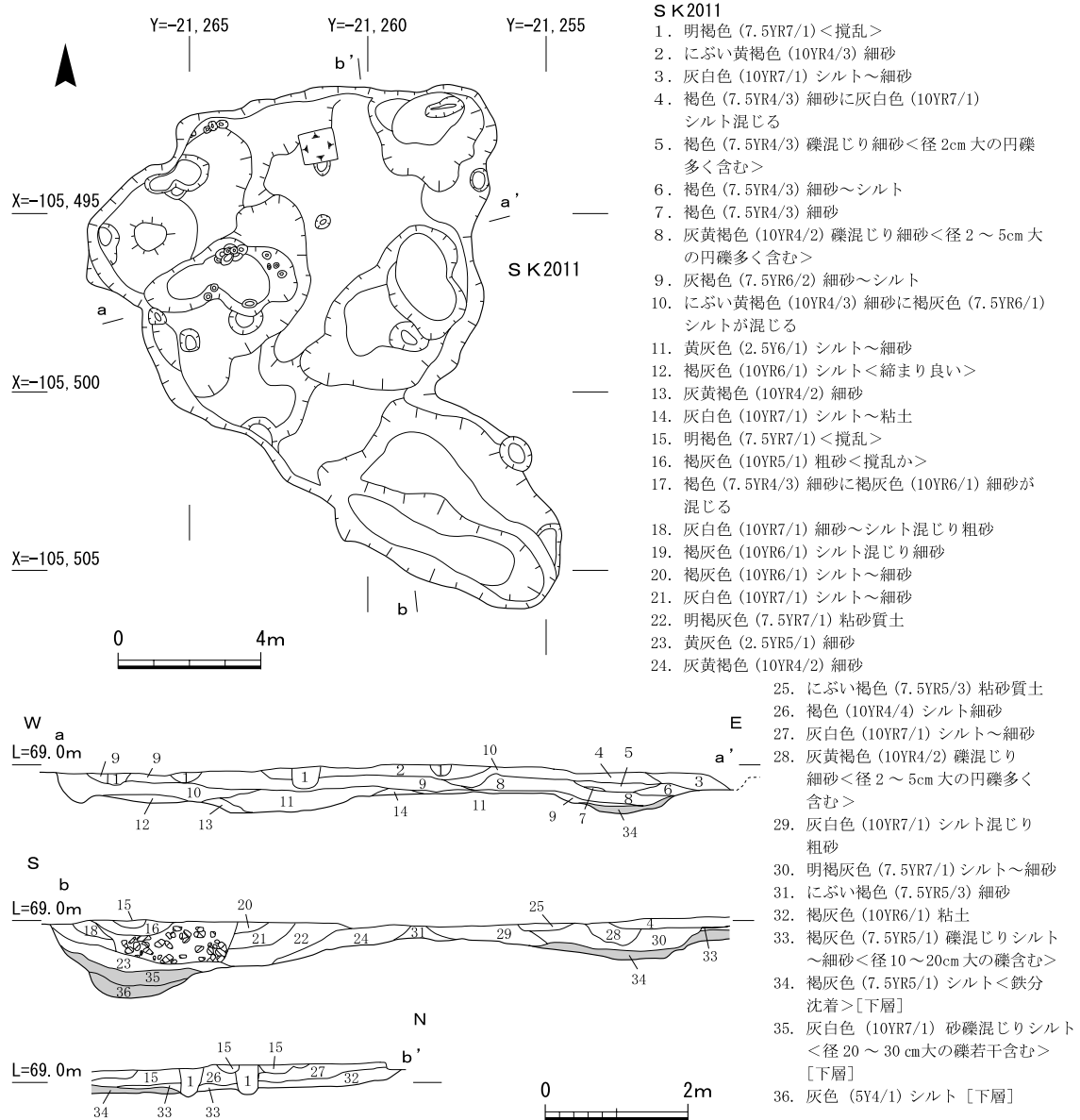
溝S D 2002(第20図) 西部で南北約25mにわたって検出した溝である。北西部は後世の削平が著しいが、南西部ではよく残存し、幅1.5~1.6m、深さ0.4mの規模で確認した。北西から南東



第20図 2区溝 S D 2001~2003平面・断面図

へ向けて掘削され、埋土には上層に 5~15cm 大の礫を多く含む。北西部では溝底に鋤鍬によるとみられる掘削痕が確認できる。S D 2002は、3区 S D 3002と5区 S D 5160に繋がる同一の溝とみられる。さらに約100m離れた平成3年度第9次調査地の溝 S D 1は、これらの推定延長線上に位置し、同一の溝の可能性はある。S D 2002からは時期の判別できる遺物は出土していない。

溝 S D 2003 (第20図) 溝 S D 2002の西側で検出した溝で、幅0.3m、深さ0.1mを測る。北西か



- S K 2011**
1. 明褐色 (7.5YR7/1) <攪乱>
 2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂
 3. 灰白色 (10YR7/1) シルト～細砂
 4. 褐色 (7.5YR4/3) 細砂に灰白色 (10YR7/1) シルト混じる
 5. 褐色 (7.5YR4/3) 礫混じり細砂<径 2cm 大の円礫 多く含む>
 6. 褐色 (7.5YR4/3) 細砂～シルト
 7. 褐色 (7.5YR4/3) 細砂
 8. 灰黄褐色 (10YR4/2) 礫混じり細砂<径 2～5cm 大の円礫多く含む>
 9. 灰褐色 (7.5YR6/2) 細砂～シルト
 10. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂に褐灰色 (7.5YR6/1) シルトが混じる
 11. 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト～細砂
 12. 褐灰色 (10YR6/1) シルト<締まり良い>
 13. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂
 14. 灰白色 (10YR7/1) シルト～粘土
 15. 明褐色 (7.5YR7/1) <攪乱>
 16. 褐灰色 (10YR5/1) 粗砂<攪乱か>
 17. 褐色 (7.5YR4/3) 細砂に褐灰色 (10YR6/1) 細砂が混じる
 18. 灰白色 (10YR7/1) 細砂～シルト混じり粗砂
 19. 褐灰色 (10YR6/1) シルト混じり細砂
 20. 褐灰色 (10YR6/1) シルト～細砂
 21. 灰白色 (10YR7/1) シルト～細砂
 22. 明褐色 (7.5YR7/1) 粘砂質土
 23. 黄灰色 (2.5YR5/1) 細砂
 24. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂
 25. にぶい褐色 (7.5YR5/3) 粘砂質土
 26. 褐色 (10YR4/4) シルト細砂
 27. 灰白色 (10YR7/1) シルト～細砂
 28. 灰黄褐色 (10YR4/2) 礫混じり細砂<径 2～5cm 大の円礫多く含む>
 29. 灰白色 (10YR7/1) シルト混じり粗砂
 30. 明褐色 (7.5YR7/1) シルト～細砂
 31. にぶい褐色 (7.5YR5/3) 細砂
 32. 褐灰色 (10YR6/1) 粘土
 33. 褐灰色 (7.5YR5/1) 礫混じりシルト～細砂<径 10～20cm 大の礫含む>
 34. 褐灰色 (7.5YR5/1) シルト<鉄分沈着>[下層]
 35. 灰白色 (10YR7/1) 砂礫混じりシルト<径 20～30 cm 大の礫若干含む> [下層]
 36. 灰色 (5Y4/1) シルト [下層]

第21図 2区土坑 S K 2011平面・断面図

ら南東に向かって掘削され、南東部で S D 2002 と合流する。出土遺物はない。

鎌倉時代～江戸時代

土坑 S K 2011 (第21図) 調査区中央北部で検出した大規模な土坑である。平面形は不整形であり、規模は南北15.8m、東西5.8m (南部)～12.0m (北部)、深さは南部の最深部で1.1mを測る。上層は近世以降の堆積層であり、中層に人頭大の礫を含む粗礫層が堆積し、最下層に鉄分が沈着した礫混じりシルト層が堆積する。土坑底部は、不規則な起伏がみられ、繰り返し掘削された状況が窺える。出土遺物 (第90図96～104) は、最下層から瓦器細片が出土し、近世遺物との攪乱層となっている中層から白磁椀や瓦質羽釜が出土した。調査地周辺は良好な真土が得られることから、鎌倉時代前期に土取りのために掘削された土坑と推定される。中層で確認された粗礫層には礫の間に細かな空隙があり、人為的に廃棄された礫とみられ、砂礫に混じり人頭大の砂岩礫を多く含むことから、洪水に伴う堆積物の廃棄土坑として、近世後期以降に再利用されたと考えられ

る。

落ち込み S X 2012 (第12図) 調査区北東部で検出した不整形の浅い落ち込みである。調査範囲外の北側にさらに広がるとみられる。規模は、長さ6.5m以上、幅2m、深さ0.1~0.2mを測る。遺物は出土していないが、埋土に砂礫が多く含まれることから、中世以降の浅い流路の可能性が
(高野陽子・牧田梨津子)

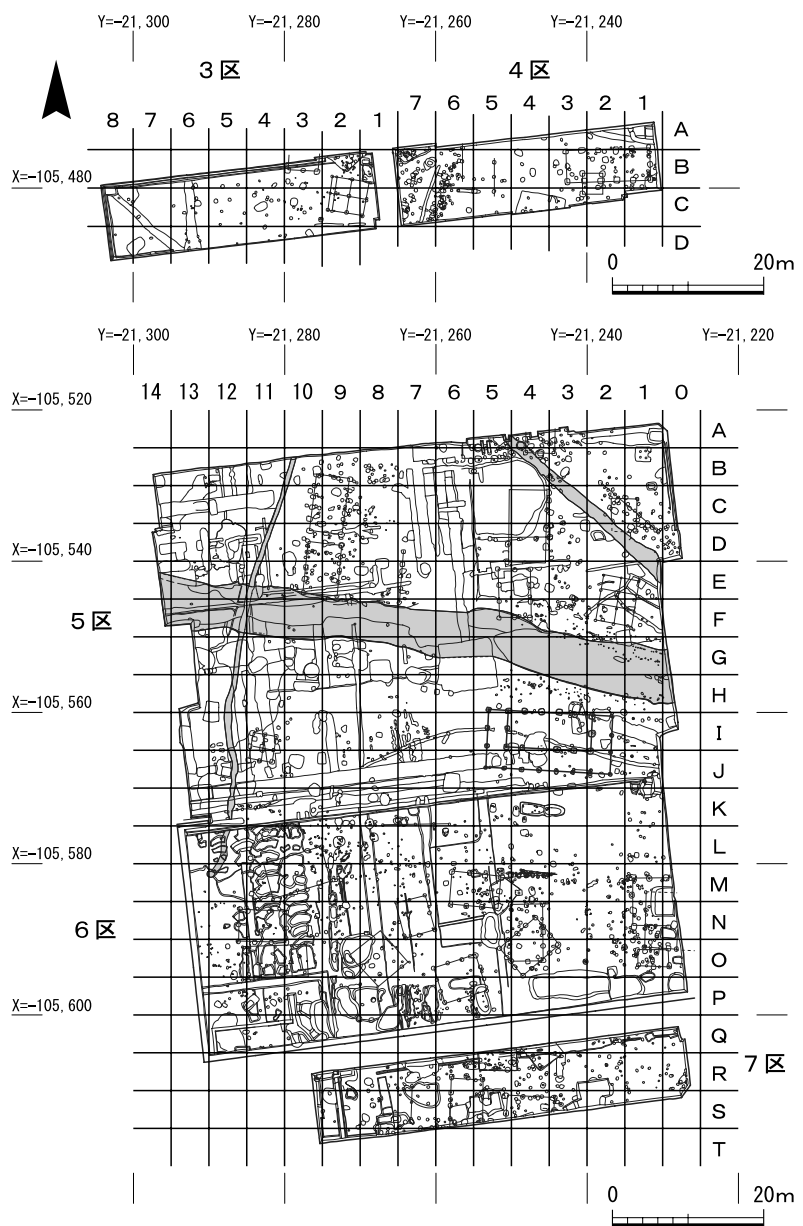
3)平成24年度の調査内容(3~9区の調査)

平成24年度は、府立大学農学部農場内の7か所と府立大学構内の2か所で発掘調査を実施した。農学部農場内では、北部に3・4区を設定し、南部に5~7区を設定した。さらに府立大学構内では、5号館の北側で8区及びその拡張区の調査を実施し、体育館の南側で9区の調査を実施した。平成24年度の調査地は、植物園北遺跡と下鴨半木町遺跡に分かれ、3~7区は、植物園北遺跡に、8・9区は下鴨半木町遺跡に含まれる。平成24年度の調査面積は、全体で6000㎡を測る。

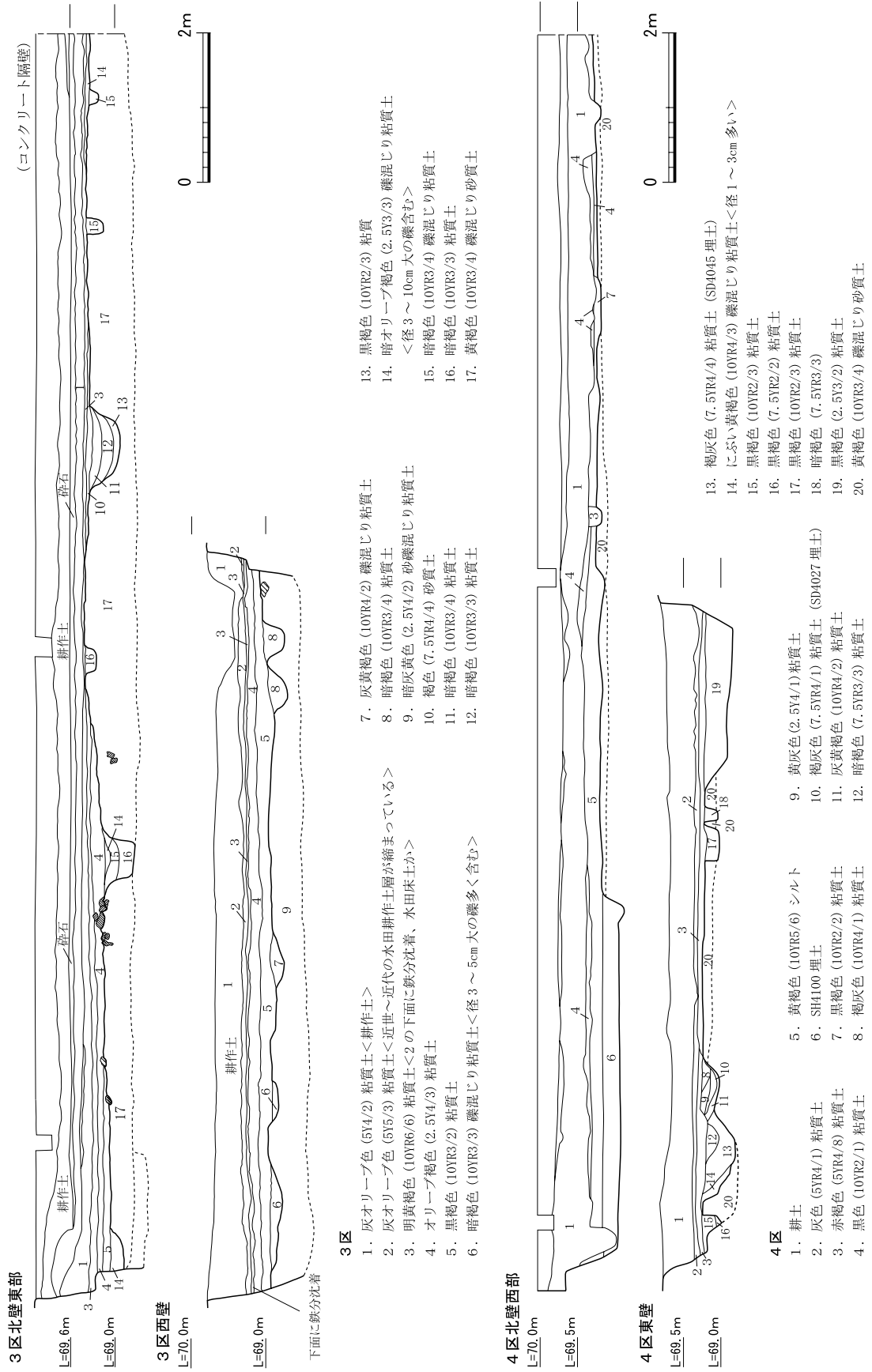
なお、調査にあたり、平成24年度は、調査区域の選定・変更に対応して新たな地区割を設定した(第22図)。地点が連続する3区、4区は、方位を座標軸に合わせ、東西を5mごとに15分割(算用数字表記)、南北を4分割(アルファベット表記)し、算用数字とアルファベットを組み合わせた並列表記による地区割とした。また、5~7区についても、同様の方法によって、東西を14分割、南北を20分割して地区割を設定した。

(1)3・4区の調査

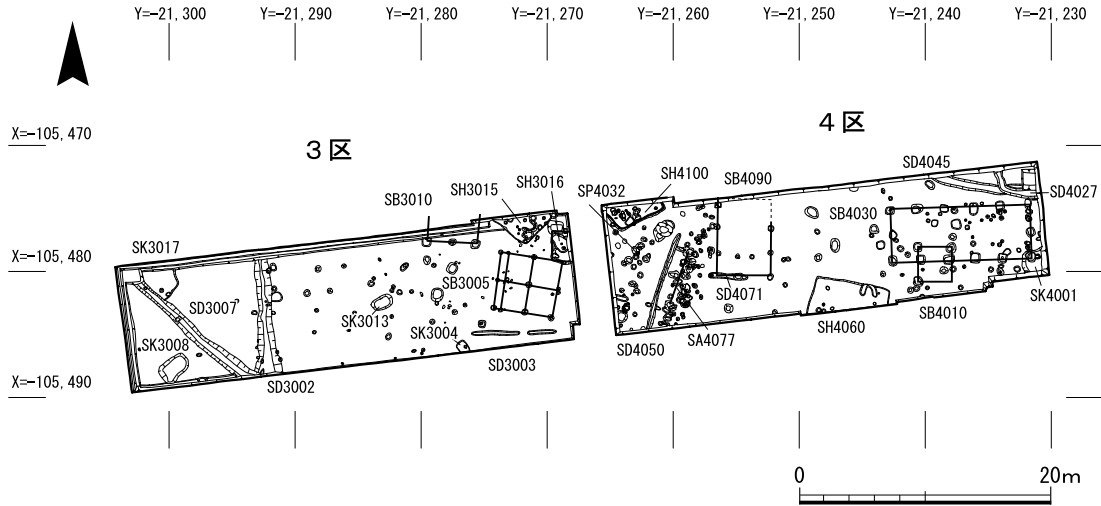
3・4区は、農学部農場



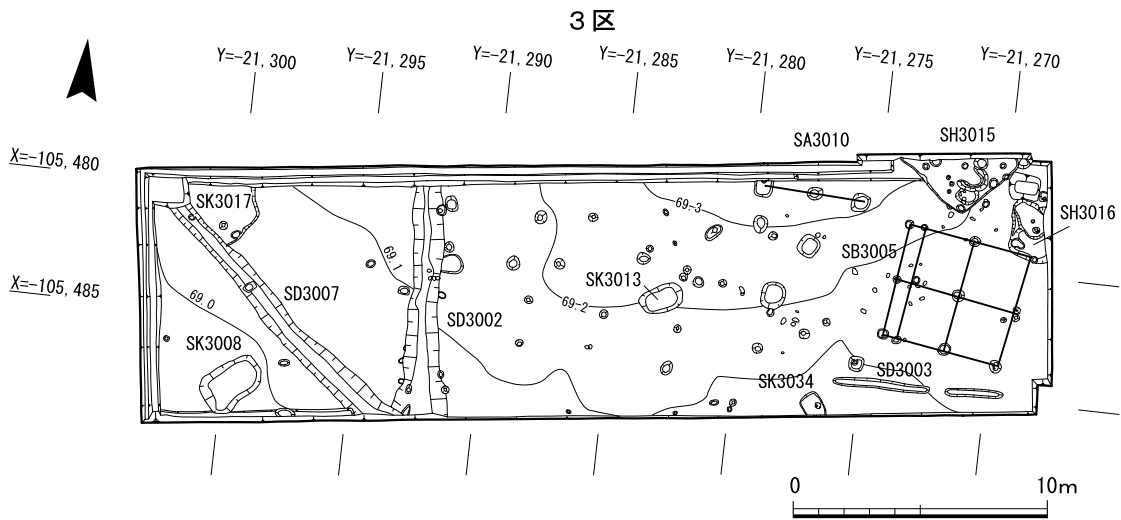
第22図 3~7区地区割り図



第23図 3区北壁・西壁、4区西壁・東壁土層断面図



第24図 3・4区地区割り図



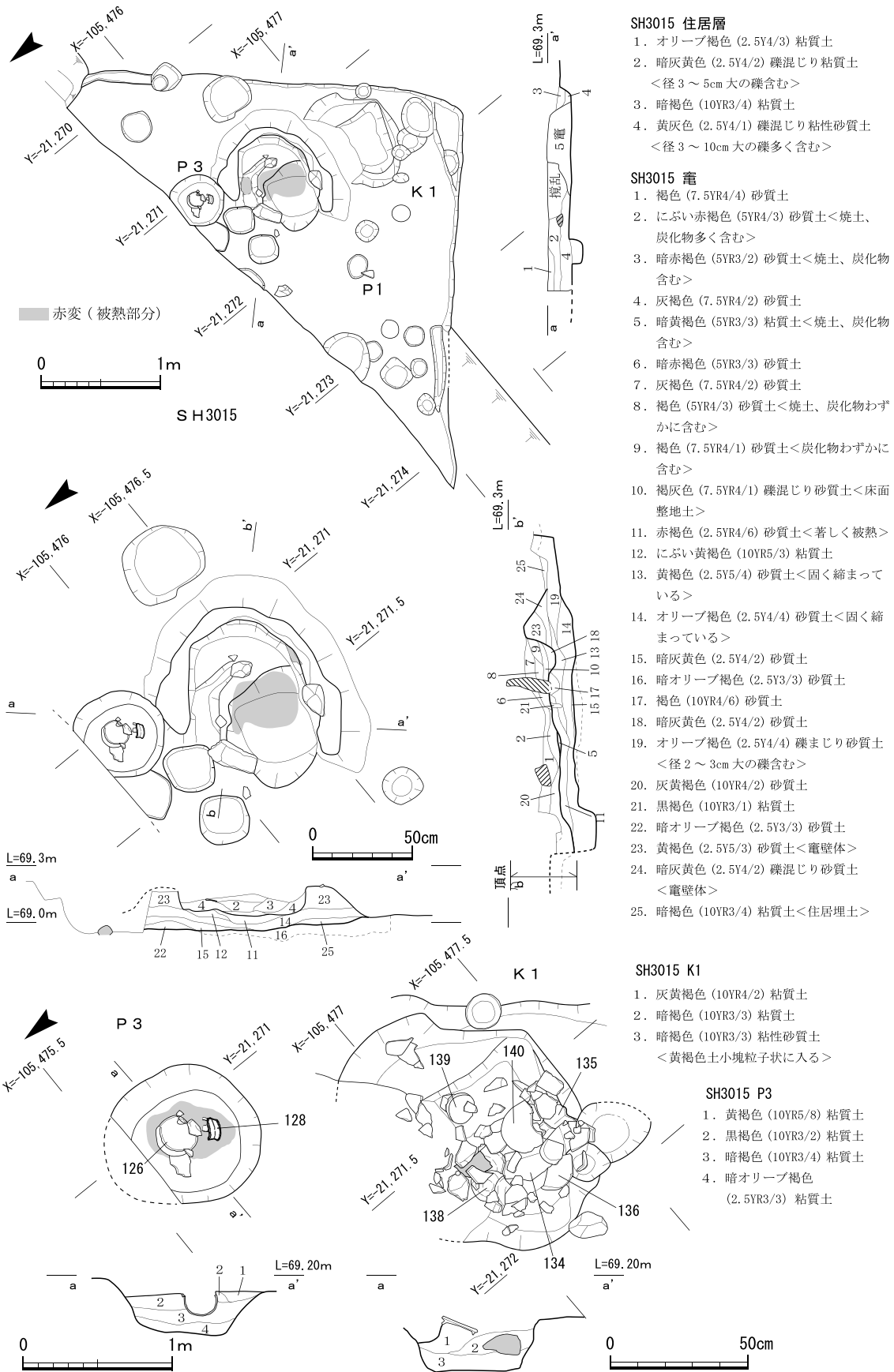
第25図 3区遺構平面図

北部で東西に設定した調査区である。西に設定した3区は370㎡、東に設定した4区は355㎡を測る。

①基本層序(第23図)

3・4区は東西に接し、基本層序は西から東へ連続的に確認することができる。調査前の現地表は、3区西端、4区東端ともに標高69.8mを測る。3区層位は、上層から順に、灰オリーブ色粘質土(耕作土、第23図3区北壁2層)、明黄褐色粘質土(同3層)、オリーブ褐色粘質土層(中世の遺物包含層か、同4層)を部分的に検出した。4区では、耕作土床土とみられる灰色粘質土(第23図4区北壁1層)、黒色粘質土(近代～近世遺物包含層、同4層)を検出し、さらにその下層で、地形の起伏に合わせ、黄褐色シルト(近世遺物包含層、同5層)を検出した。3区北壁西部では標高68.9～69.0mで、中央の3区東端と4区東端では標高69.3mで、基盤層の黄灰色礫混じり粘質土層を検出した。

②3区検出遺構(第25図)



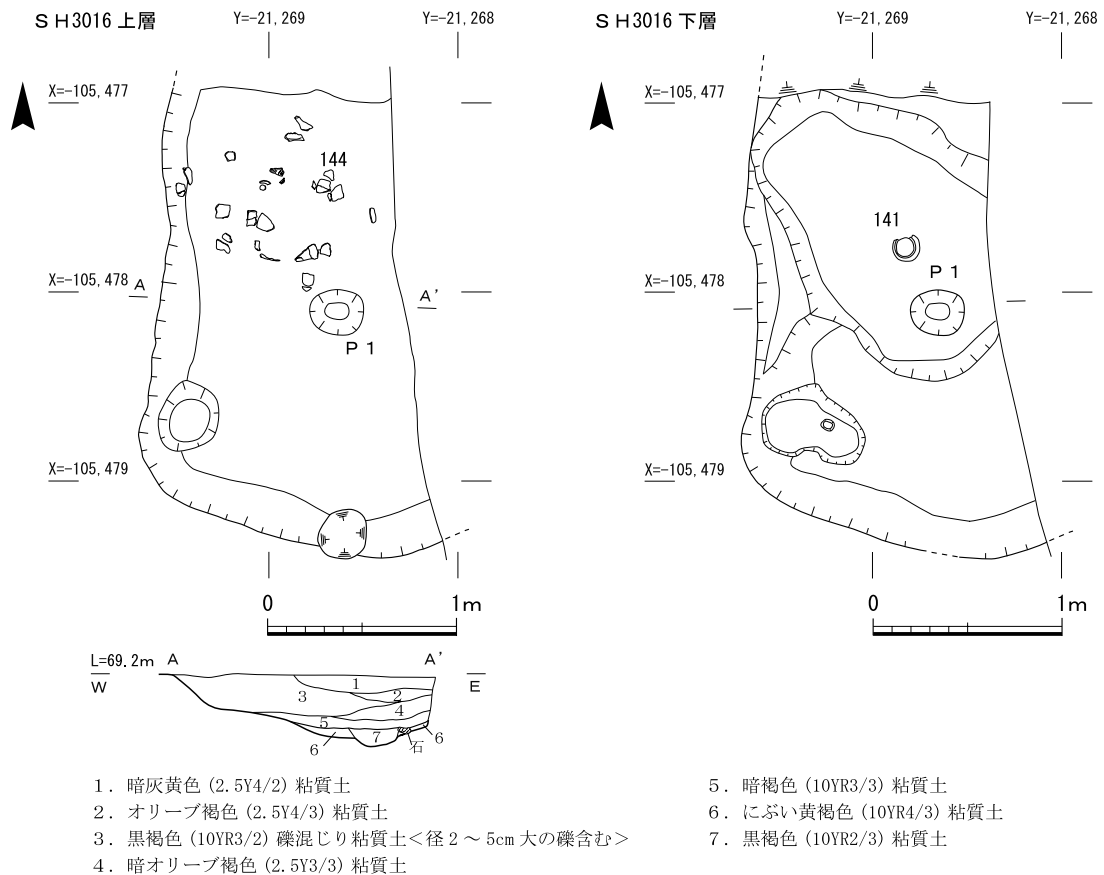
第26図 3区竪穴建物 S H3015全体及び施設平面・断面図

3区では、奈良時代の竪穴建物2棟、奈良～平安時代前期の掘立柱建物1棟、柱列1条、土坑群、溝2条、近世の素掘り溝1条を検出した。

a. 奈良～平安時代

竪穴建物 S H3015 (第26図) 北東部北壁周辺で検出した。竈を付設する方形の竪穴建物である。規模は一辺約3.3m以上を測る。床面の南側約2分の1を検出した。北側はさらに調査区外へと広がる。床面からは大小の多数の柱穴を確認しているが、P1を主柱とする、本来4基の主柱から構成される建物とみられる。建物主軸は、北から50°西へ振る。北東の壁体の中央寄りで、馬蹄形の竈を検出した。規模は、長さ1.05m、幅1.15m、高さ0.2mを測る。竈は焚き口を北東に向け、燃焼部の基部に棒柱状の石材を立て支石としている。壁体両袖部の内側にも、それぞれ小石材を配している。北東の石材は元位置を保っていないが、本来は焚き口の両側に立て、壁体の補強としたものであろう。竈の燃焼部床面は、赤褐色を呈し、著しく被熱していた。竈の南側に接して楕円形状の土坑K1を検出し、土師器甕3点、須恵器杯など(第91図132～140)が出土した。また、竈の北側に接して小土坑を検出し、小型の土師器甕2点(第91図126・128)が出土した。この小土坑に埋納された甕は、竈の袖部の構築後にその一部を削平して掘削されていることから、竈の廃絶時の祭祀に伴う土器である可能性が高い。奈良時代前半の建物と推定される。

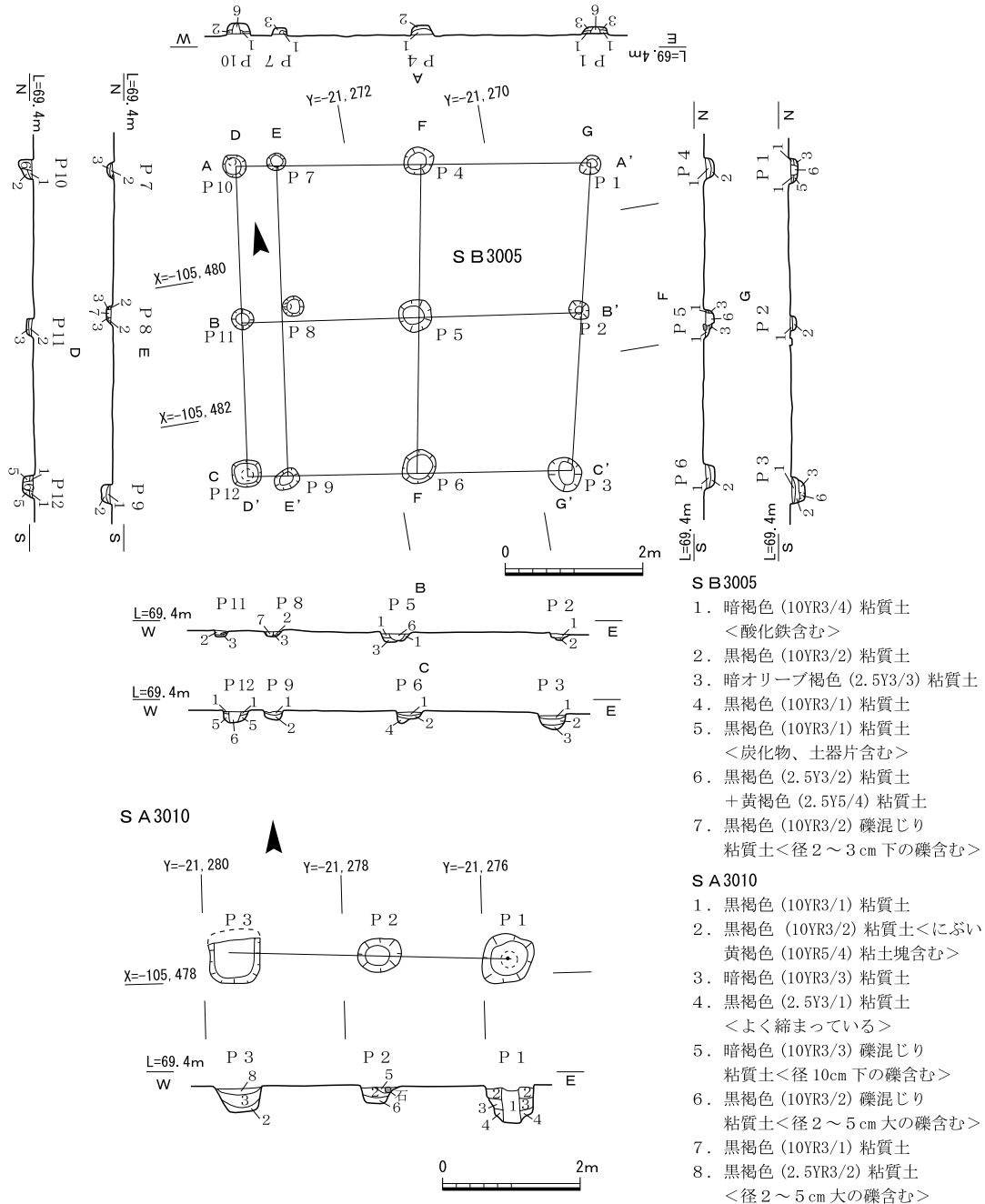
竪穴建物 S H3016 (第27図) 北東部東壁周辺で検出した方形の竪穴建物である。規模は、一



第27図 3区竪穴建物 S H3016 平面・断面図

辺2.8m以上を測る。床面の東半分を検出し、検出面からの深さは0.2~0.4mを測る。床面北側は土坑状に深く掘削されるが、この部分を平坦に整地し、貼り床としていた。貼り床上で柱穴1基(P1)を確認した。柱穴は床面中央寄りで検出しており、主柱は2基から構成される建物とみられる。埋土中層で土師器甕が出土し、貼り床下層で須恵器杯Aが出土した。竪穴建物としては規模が小さいことから居住を目的とした住居ではなく、貯蔵のための「室」など、半地下式の施設の可能性がある。埋土から奈良時代の土器(第91図141~144)が出土している。

掘立柱建物 S B 3005 (第28図) 桁行2間(4.3~4.5m)、梁行2間(4.5m)の総柱建物である。柱間は、2.1m(7尺)~2.4m(8尺)を測る。柱穴掘形は、径0.3~0.4mの円形を呈する。西に廂か



第28図 3区掘立柱建物 S B 3005、S A 3010平面・断面図

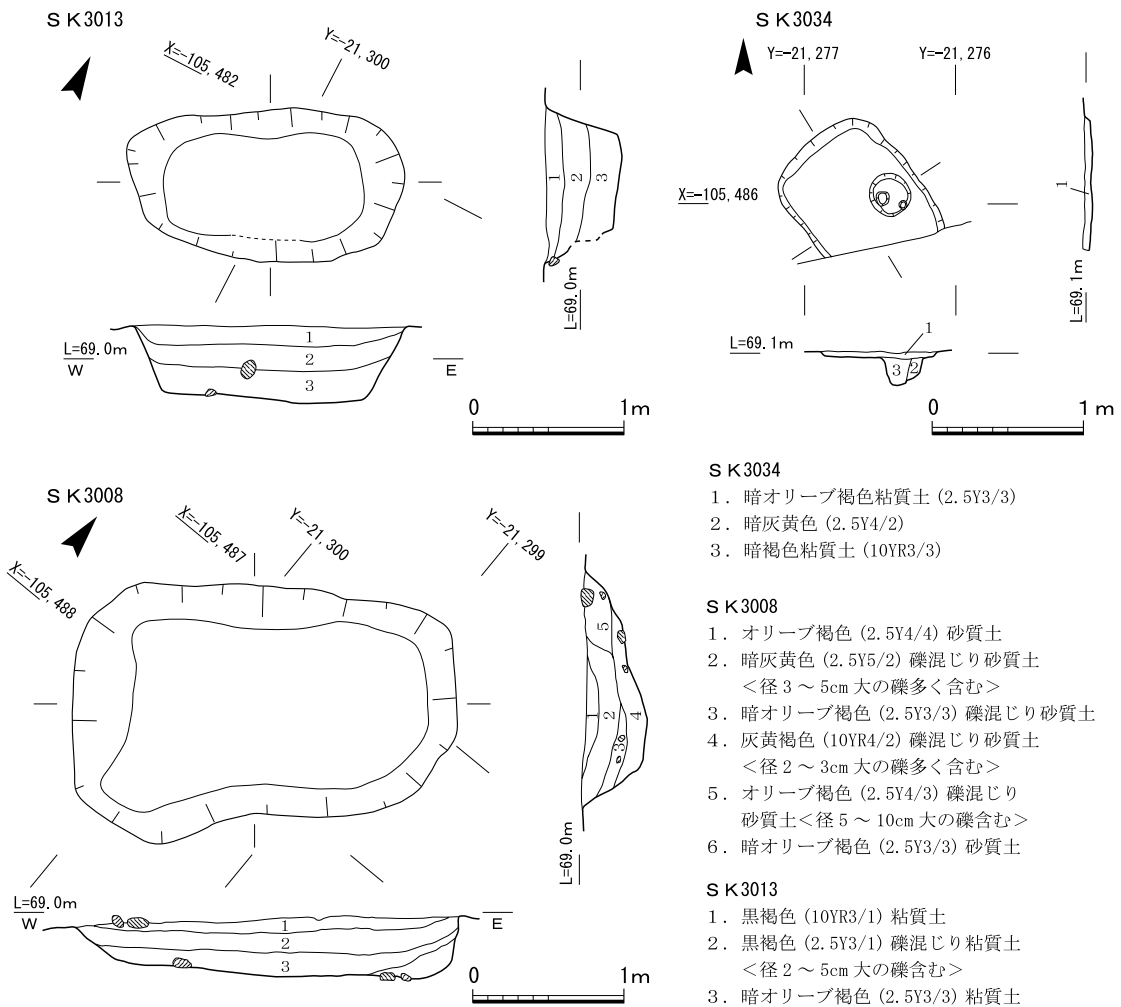
縁が付くとみられるが、柱筋の出が0.6m(2尺)と短いことから、縁の可能性が高い。建物の主軸は、北から10°30′東に振る。埋土の色調は灰白色系の土色を呈し、平安時代の建物群と異なることから、中世以降の建物である可能性が高い。

柱列 S A 3010 (第28図) 中央北端で検出した東西2間(4.1m)の柱列である。柵(塀)あるいは掘立柱建物の一部とみられる。柱間は2.0~2.1m(7尺)を測る。主軸は北から1°30′東に振る。柱穴の掘形は隅丸方形をなし、規模は一辺0.6~0.7m以上、深さ約0.3~0.5mを測る。柱列が北側に拡張し、建物を構成する場合は、梁行2間の南北棟の南柱筋となる。建物主軸と柱穴の形状から、平安時代前期前半の柱列と推定される。

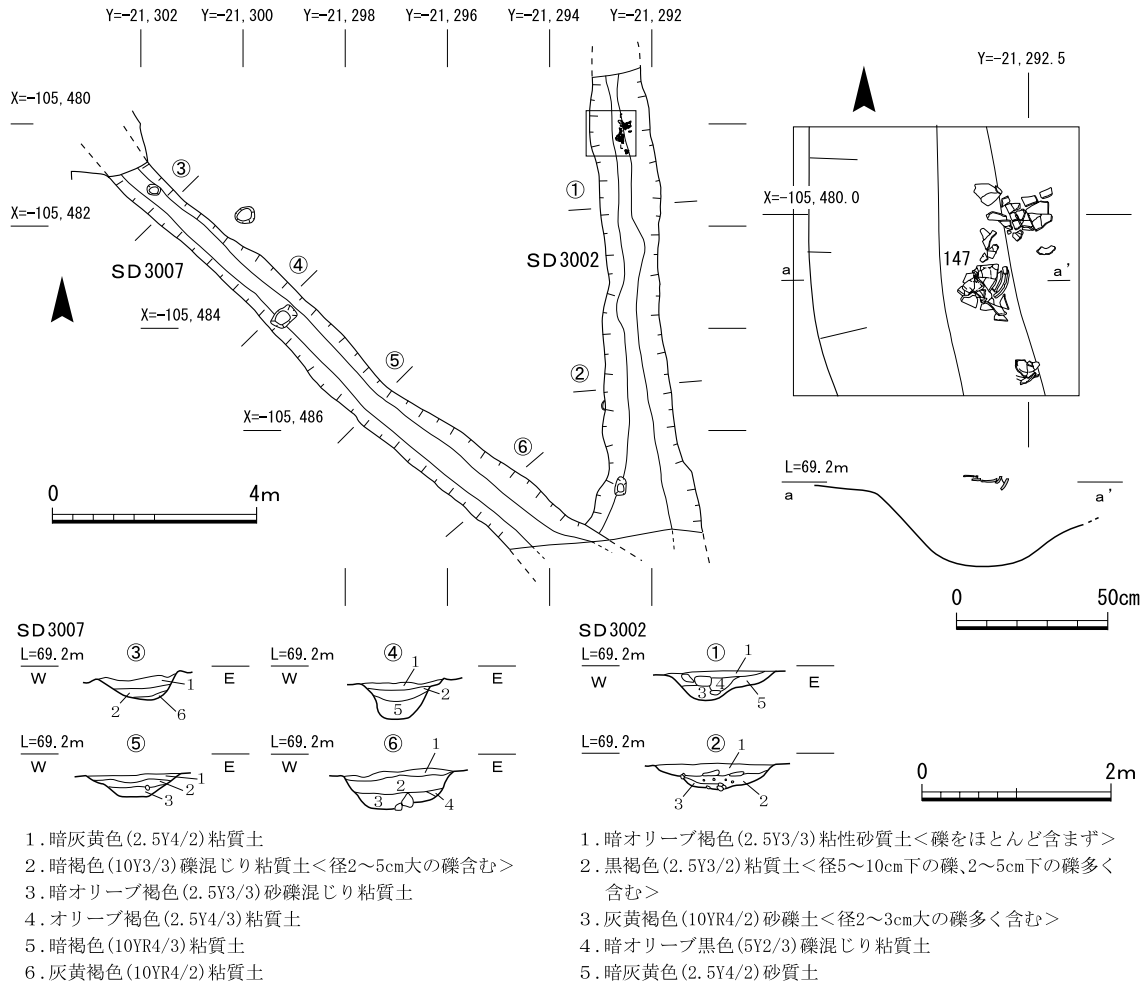
土坑 S K 3013 (第29図) 中央部で検出した歪な方形の土坑である。規模は、長さ1.8m、幅1.0mを測る。土師器片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

土坑 S K 3034 (第29図) 南西部南壁周辺で検出した。平面形は方形を呈し、規模は長さ0.9m以上、幅0.8m、深さ0.2mを測る。柱痕跡状の落ち込み(径0.25m)があり、柱穴の可能性も想定されるが、単独で主軸は正方位にのらず、規模の大きさから土坑と判断した。

土坑 S K 3008 (第29図) 南西端で検出した長方形の土坑である。長さ2.5m、幅約1.5m、深さ



第29図 3区土坑群平面・断面図



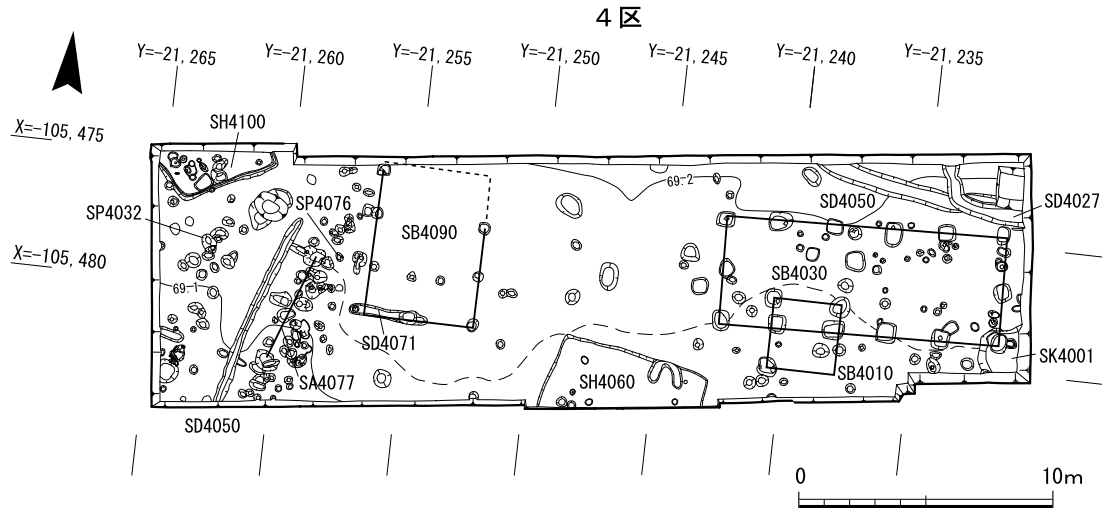
第30図 3区溝SD3002・3007平面・断面図

0.4mを測る。埋土中から土師器片が出土しているが、詳細な時期は不明である。2区北西の土器棺墓や土壌と近接し、棺痕跡等は確認できないが、形状から埋葬施設の可能性がある。

土坑SK3017(第25図) 北西端で検出した不整形の矩形を呈する落ち込みである。幅2.4m以上、深さ0.2mを測る。底部が平坦であることから、竪穴建物の残欠の可能性がある。須恵器片が出土し、埋土の状況から奈良時代以降の落ち込みとみられる。

溝SD3002(第30図) 東部で検出した北から南へと掘削された溝である。溝SD3007と南端で交差し、削平される。幅1.2~1.5m、深さ0.3mを測る。埋土は、下層に暗褐色シルト混じり砂礫を多く含み、流水を伴う溝とみられる。北側の北壁寄り、溝上層から土師器甕、須恵器杯身など(第92図147~150)が出土し、時期は飛鳥時代後半から奈良時代初頭と推定される。約80m北に位置する第9次調査地で検出された溝SD1は、SD3002の北延長にあり、同一の溝の可能性がある。また、南には同一の溝とみられる2区溝SD2002、5区溝SD5160を南北約100mにわたって確認した。

溝SD3007(第30図) 西部で検出した北西から南東へと掘削された溝である。幅0.7~1.2m、深さ0.2~0.3mを測る。埋土中層には5~10cm大の礫を多く含む砂礫層が堆積し、氾濫性の堆積物を伴う激しい流水があったとみられる。遺物は出土していないが、1区溝SD1013と、2区溝



第31図 4区遺構平面図

S D 2001はそれぞれ延長上にあり、同一の溝とみられる。

b. 江戸時代

溝 S D 3003 (第25図) 南東部で検出した東西方向の素掘り溝である。幅0.3m、深さ0.15mを測り、灰色粘質土を埋土とする。1区で検出した細溝群と同様、近世の耕作溝とみられる。

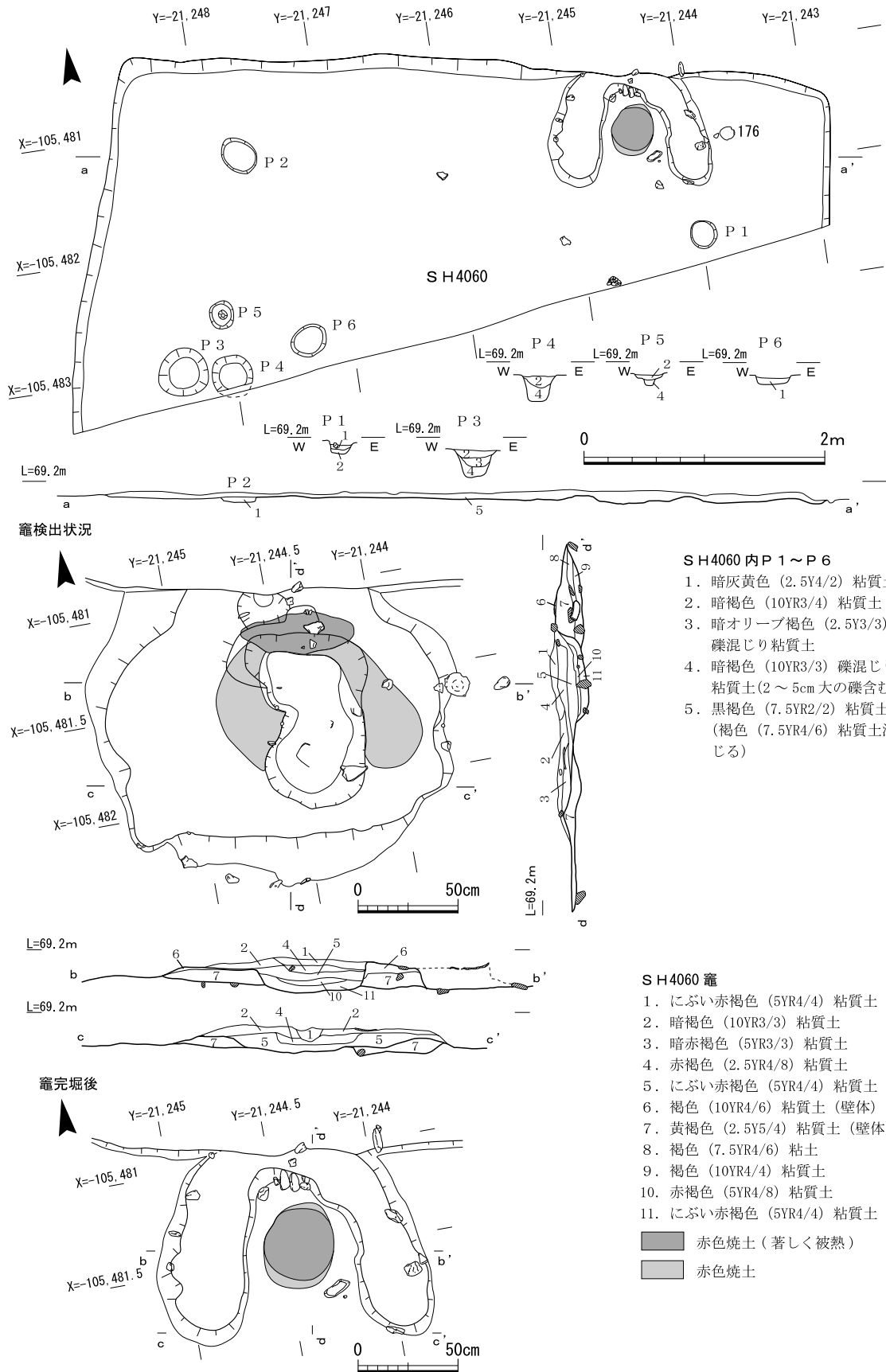
③ 4区検出遺構(第31図)

4区の主な検出遺構は、奈良～平安時代の竪穴建物2棟、掘立柱建物3棟、柱列1条、土坑1基、溝3条等である。

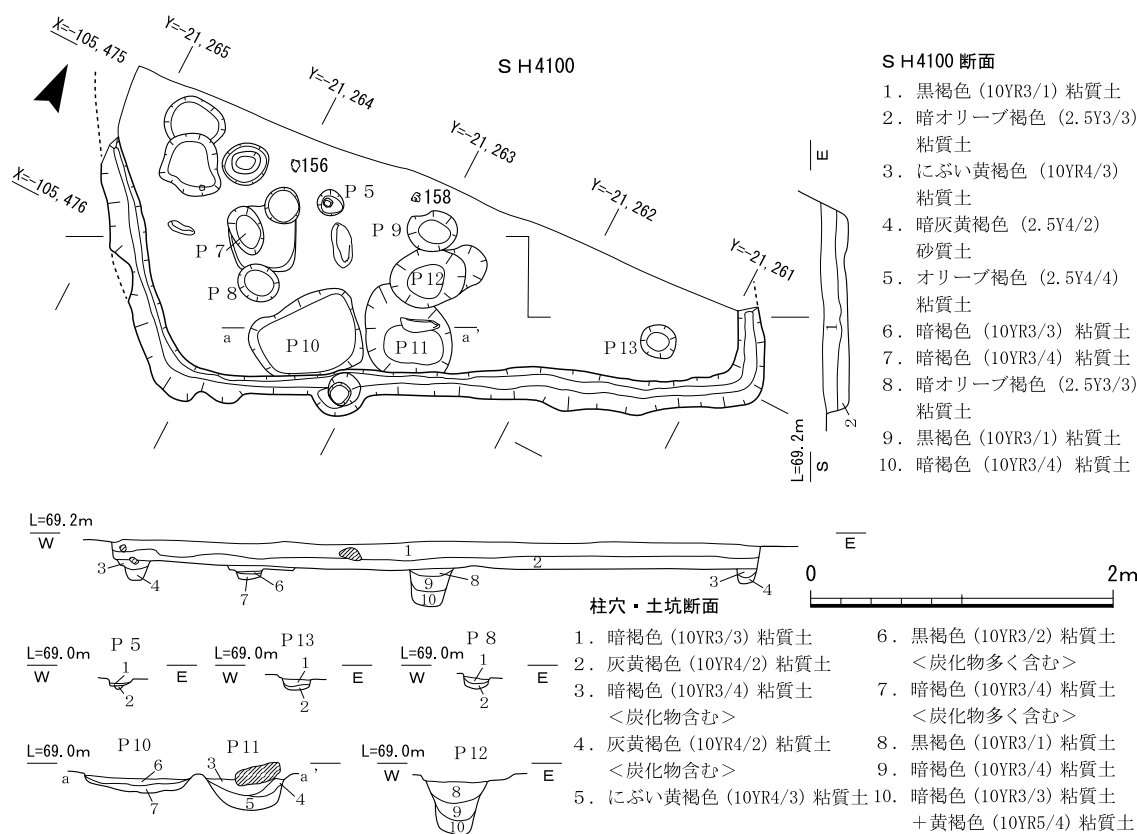
a. 奈良～平安時代

竪穴建物 S H 4060 (第32図) 中央南で検出した方形の平面形を呈する竪穴建物である。床面の北側の約3分の1を検出したもので、規模は一辺約6.3mを測る。建物の壁体は大きく後世の削平を受け、深さは約0.1mを測るに過ぎない。南東床面で検出したP 6が主柱穴の一つとみられ、4基の主柱から構成される建物と推定される。建物の主軸は、北から7°30′東に振る。建物の北壁東寄りで、壁体に造り付けられた馬蹄形の竈を検出した。竈は、焚き口を南西に向け、黄褐色粘質土を用いて壁体を構築しており、規模は長さ1.0m、幅1.4m、残存高約0.1mを測る。燃焼部床面は、にぶい赤褐色を呈し、弱い被熱痕跡を留める。燃焼部周辺から支脚等は検出されなかった。竈の東側の袖部に接して須恵器杯蓋(第93図154)が出土した。一部打ち欠きが認められ、竈の廃絶時の祭祀に用いられた土器の可能性はある。須恵器の年代から奈良時代前半の竪穴建物と推定される。

竪穴建物 S H 4100 (第33図) 北西隅で一部を検出した方形の竪穴建物である。床面の約3分の1を検出し、多数の柱穴や小土坑を確認した。このうち主柱穴は、南西床面のP 7が対応し、4基の主柱からなる建物とみられる。建物主軸は、北から28°西に振る。火処は確認されず、調査区外側に展開するものと推定される。床面で検出した10・11は、貯蔵穴の可能性はあるが、土坑内から遺物は出土していない。床面から須恵器杯類のほか、砥石が出土している。出土土器から、奈良時代前半の建物と推定される。



第32図 4区竪穴建物SH4060平面図、同竈平面・断面図

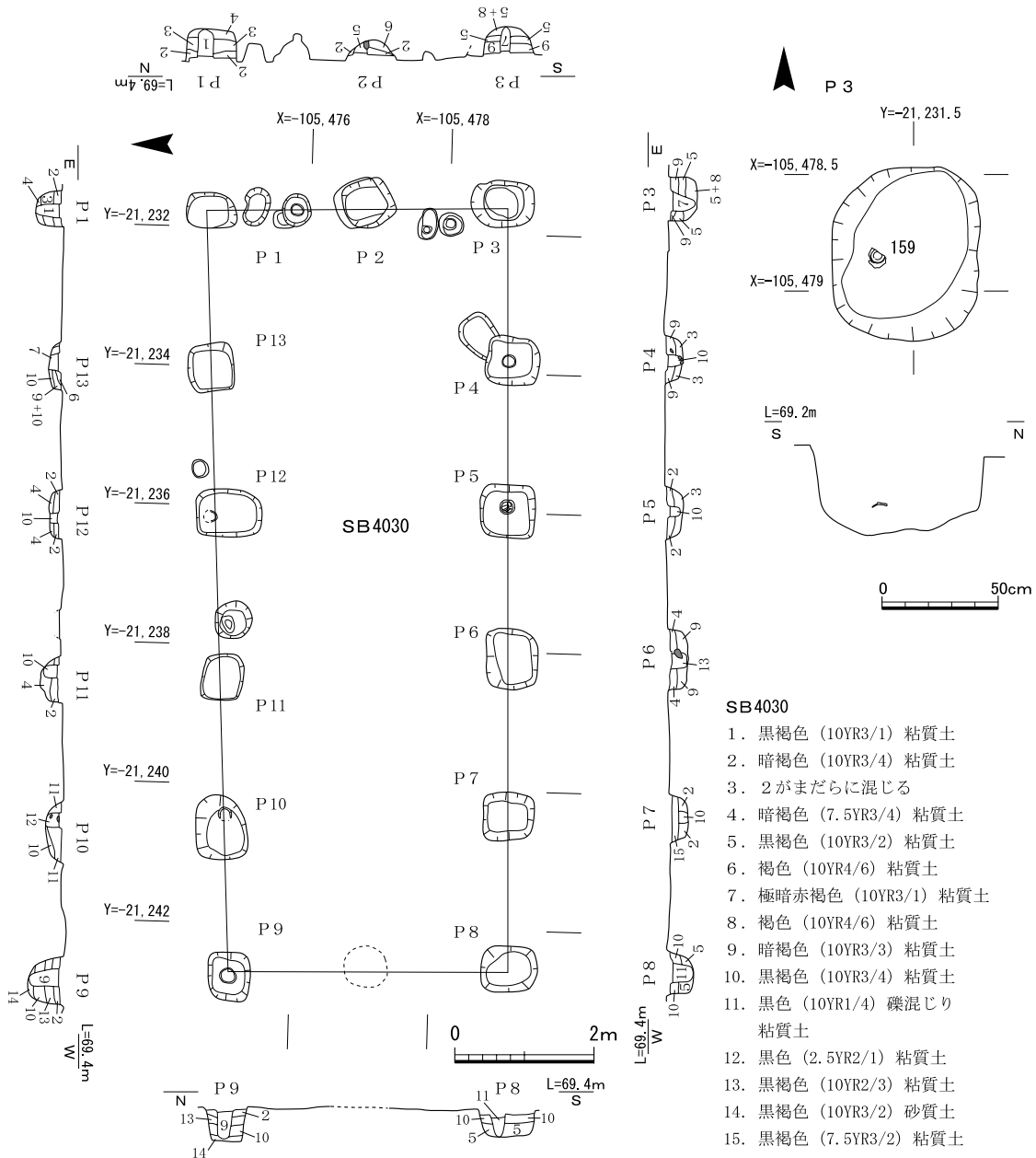


第33図 4区竪穴建物S H4100 平面・断面図

掘立柱建物 S B 4030 (第34図) 東部で検出した桁行5間(10.7m)、梁行2間(4.0m)の東西棟である。柱間は2.0~2.2mを測り、ばらつきがみられるがほぼ7尺である。5区で検出した廂付建物 S B 5130の身舎と同様の規模をもつ。建物の主軸は、北から1°30′西に振る。柱穴掘形は、一辺0.7~0.9mの隅丸方形を呈し、深さ0.2~0.4mを測る。柱穴のうち、P 1はS D 4045と重複して検出し、切り合い関係から、S D 4045が埋め戻されたのちに建てられた建物であることが判明した。また、P 3はS K 4001の埋没後に掘削されたものである。東柱筋の柱間に東柱とみられる小柱穴を検出している。P 3から平安時代前期中葉の須恵器杯(第93図159)が出土している。

掘立柱建物 S B 4010 (第35図) S B 4030と一部重複して検出した。規模は、桁行1間(2.7m)、梁行1間(2.7m)を測る。南東隅の柱穴を欠くが、建物主軸は正方位の主軸をもち、柱間が完数尺(9尺)をとることから、建物として復元した。一辺0.7~0.8m、深さ約0.15mの方形柱穴から構成される。全体に柱穴掘形が浅いことから、南東隅の柱穴は削平されたとみられる。S B 4030の柱穴と直接切り合いはみられないが、主軸を北に揃え、方形の柱穴掘形をもつことから、S B 4030に先行する奈良時代末から平安時代前期前葉の建物と推定される。

掘立柱建物 S B 4090 (第35図) 西部北寄りで検出した桁行3間(6.0m)、梁行2間(4.2m)の南北棟である。柱穴掘形は、一辺約0.5mの歪な方形を呈する。全体に柱穴の残存状況は約0.1mと浅く、大きく削平を受けたとみられ、一部の柱穴を欠く。建物の主軸は、北から1°西に振る。柱穴の遺物はみられない。



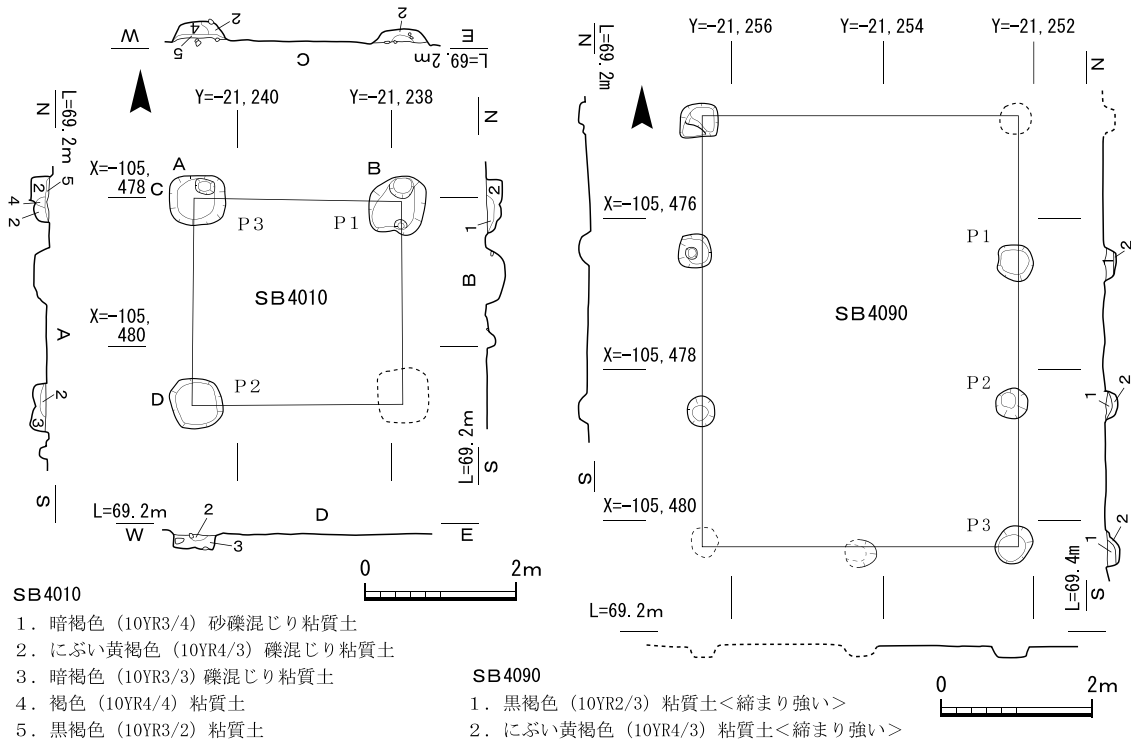
第34図 4区掘立柱建物S B 4030平面・断面図

柵列 S A 4077 (第31図) S B 4090の西側で検出した柵列である。3基の柱穴から構成される柱間2間(5.0m)の柵列である。

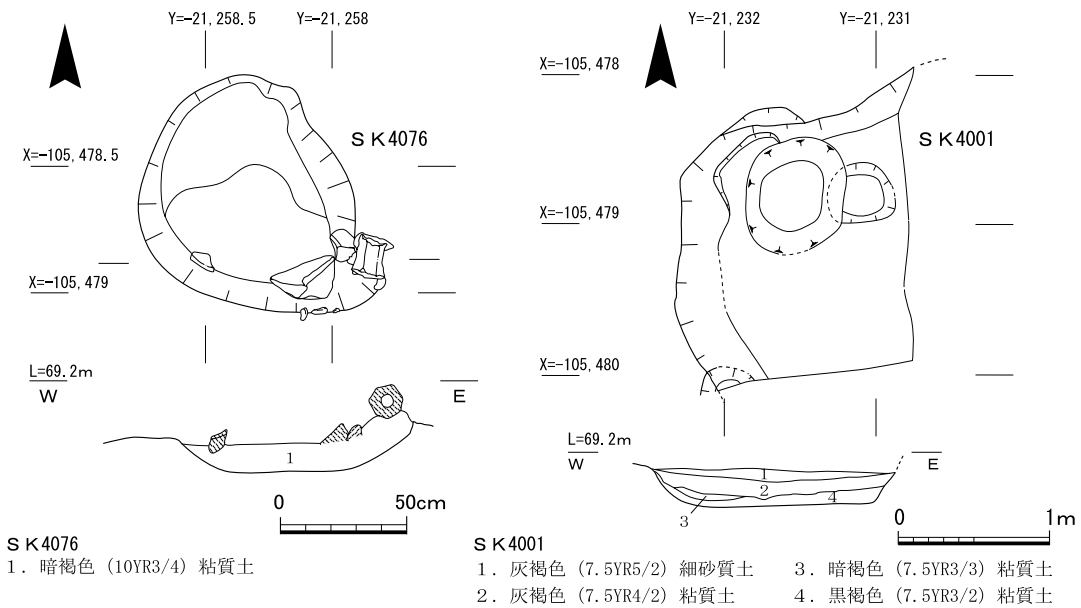
土坑 S K 4076 (第36図) S B 4090の西側で検出した不整円形の土坑である。径0.8m、深さ0.2mを測る。奈良時代後期～平安時代前期の土師器高杯の脚部(第93図166)が出土している。周辺で多数の柱穴を確認したが、柱間が不規則であり、建物等を復元するには至っていない。

土坑 S K 4032 (第31図) 西端で検出した歪な方形の土坑である。一辺約0.5m、深さ0.2mを測る。平瓦が出土している。

土坑 S K 4001 (第36図) 南東角で検出した土坑である。一部を検出したにとどまるが、平面形は歪な方形を呈するとみられ、規模は一辺1.7m以上を測る。底部は平坦で、柱穴状の落ち込



第35図 4区掘立柱建物S B 4010・4090平面・断面図

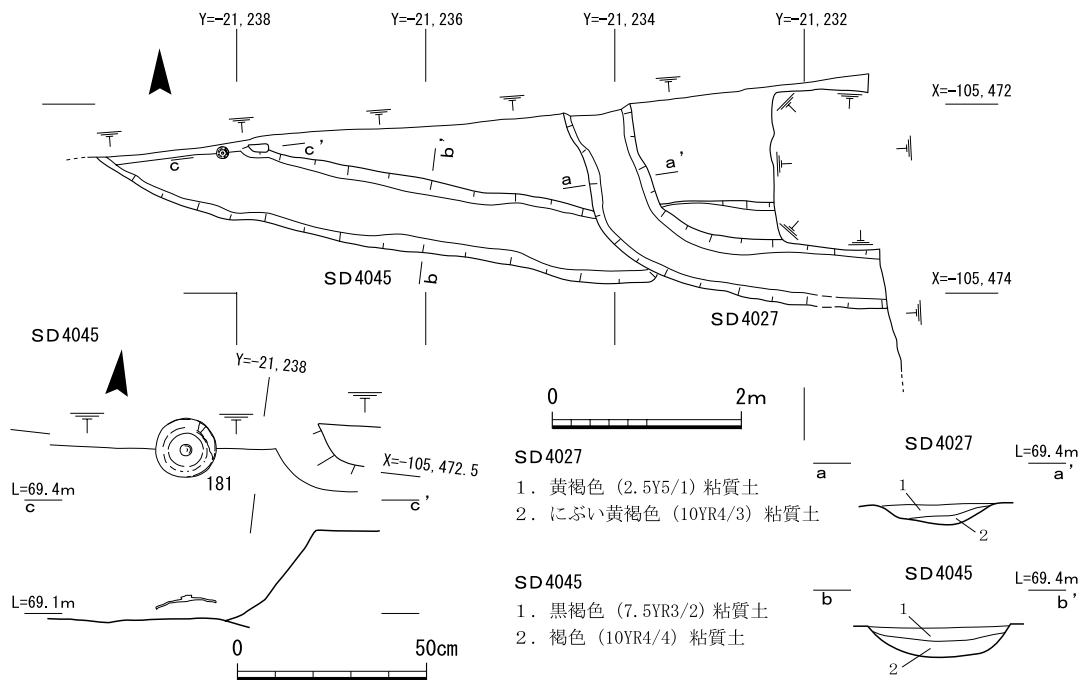


第36図 4区土坑S K 4076・4001平面・断面図

みを検出していることから、竪穴建物の可能性がある。S B 4030の一部を削平されることから、平安時代前期以前の土坑とみられる。

溝S D 4045 (第37図) 北東で検出した北西から南東に緩やかにながれる溝である。規模は、幅0.8m、深さ0.15mを測る。S B 4030のP 1によって一部が削平され、先行する溝であることが明らかである。埋土上層から須恵器杯B蓋(第93図171)が出土し、奈良時代後期と推定される。

溝S D 4027 (第37図) 溝S D 4045と一部重複して確認した。北西から東へ屈曲し、規模は、



第37図 4区溝SD4027・4045平面・断面図、須恵器出土状況

幅0.7m、深さ0.15mを測る。SD4045とはほぼ流路を同じくし、再掘削した溝と推定される。

溝SD4071(第31図) 掘立柱建物SB4090の南柱筋と重複して一部を検出した溝である。東西約4m、幅約0.5m、深さ0.15mを測る。SB4090の廃絶後に掘削されるが、詳細な時期は不明である。

溝SD4050(第31図) 西端で検出した北東から南西に向けて掘削された溝である。幅約0.4～0.5m、深さ0.1mを測る。埋土の状況や溝の東側に不規則な柱穴群がみられることから、2区溝SD2001・5区溝SD5002と同様、おおよそ平安時代前期後半の溝と推定される。

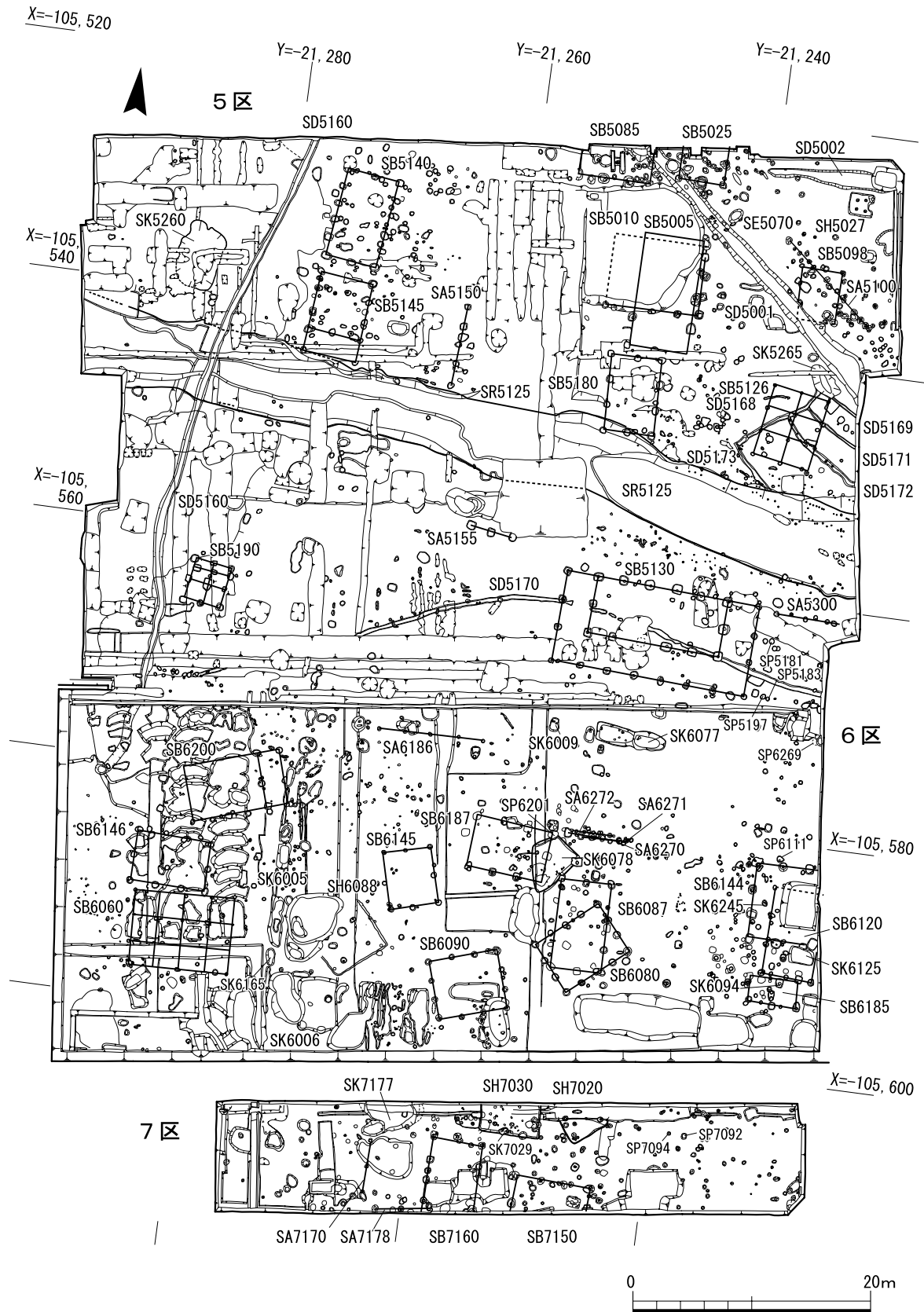
(高野陽子・牧田梨津子)

(2) 5～7区の調査(第38図)

5～7区は、農学部農場南部に設定した調査区である。調査面積は北から順に、5区は2510㎡、6区は1890㎡、7区は480㎡を測る。平成24年度前半に5区北東部分のみを先行して着手した。その後、大型温室や付属設備あるいはコンクリート隔壁などの重機による除却作業を進め、各区の調査を併行して進めた。当初、5・6区の間には通用路が存在し独立した調査区であったが、調査の進展に応じ、通用路下層の調査を実施したため、最終的に連結した大規模な調査区となった。この通用路下層の調査において、今回の調査で最も規模の大きな三面廂建物SB5130を検出した。

①基本層序(第39・40図)

調査地は、北から南に向かって緩やかに低くなり、5区から7区にかけての遺構検出面の標高

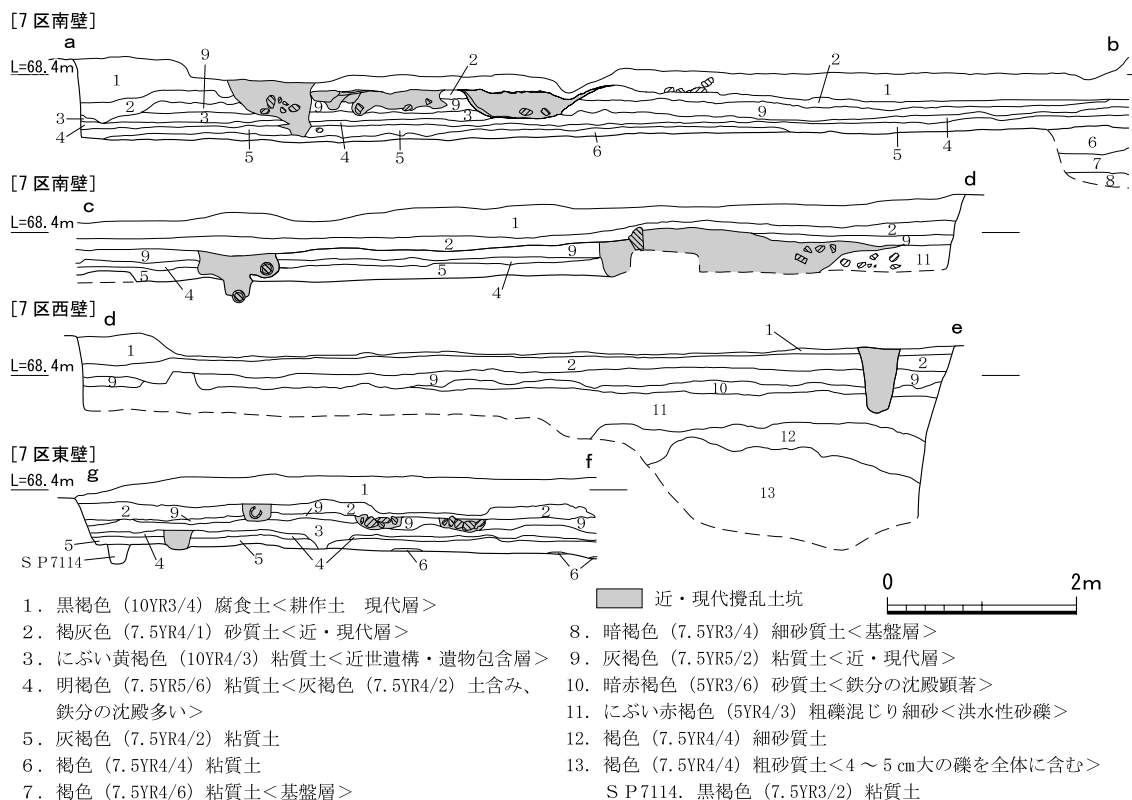


第38図 5～7区遺構平面図



第39図 5区東壁、6区東壁・西壁土層断面図

- S R 5125埋土**
- a. 黒褐色 (7.5YR3/1) 粘質土
 - b. 灰色 (7.5YR6/1) 粗砂礫混じり細砂質土
 - c. 灰オリーブ色 (7.5Y5/3) 粗砂礫混じり粘土
 - d. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 細砂質土
 - e. 灰色 (7.5Y5/1) 粗砂礫混じり砂質土
 - f. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土
 - g. 灰黄色 (2.5Y6/2) 細砂質土
 - h. 暗オリーブ色 (5Y4/3) 粗砂礫混じり砂質土
 - i. 灰黄色 (2.5Y6/2) 細砂質土
 - 1. 黒褐色 (10YR3/4) 腐植土<耕作土・現代>
 - 2. 褐灰色 (7.5YR4/1) 砂質土<近・現代>
 - 3. 灰褐色 (7.5YR5/2) 粘質土<近世土坑含む>
 - 4. 灰褐色 (7.5YR4/2) 細砂質土<明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土の鉄分沈殿多い>
 - 5. 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土<マンガン粒多い>
 - 6. 褐色 (7.5YR4/4) 粘質土<基盤層>
 - 7. 灰褐色 (7.5YR5/2) 粗砂礫混じり砂質土
 - 8. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粗砂混じり砂質土
 - 9. 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土
 - 10. 褐色 (7.5YR4/3) 粗砂
 - 11. 灰褐色 (7.5YR4/2) 粗砂混じり土
 - 12. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粗砂礫
 - 13. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粗砂混じり細砂土
 - 14. 灰褐色 (7.5YR5/2) 粗砂礫
 - 15. 灰黄褐色 (10YR5/2) 粗砂
 - 16. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土
 - 17. 灰褐色 (7.5YR4/2) 粗砂
 - 18. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗砂質土
 - 19. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土<柱穴>
 - 20. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土<柱穴>
 - 21. 黒褐色 (7.5YR3/2) 細砂混じり粘質土
 - 22. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粗砂混じり細砂質土

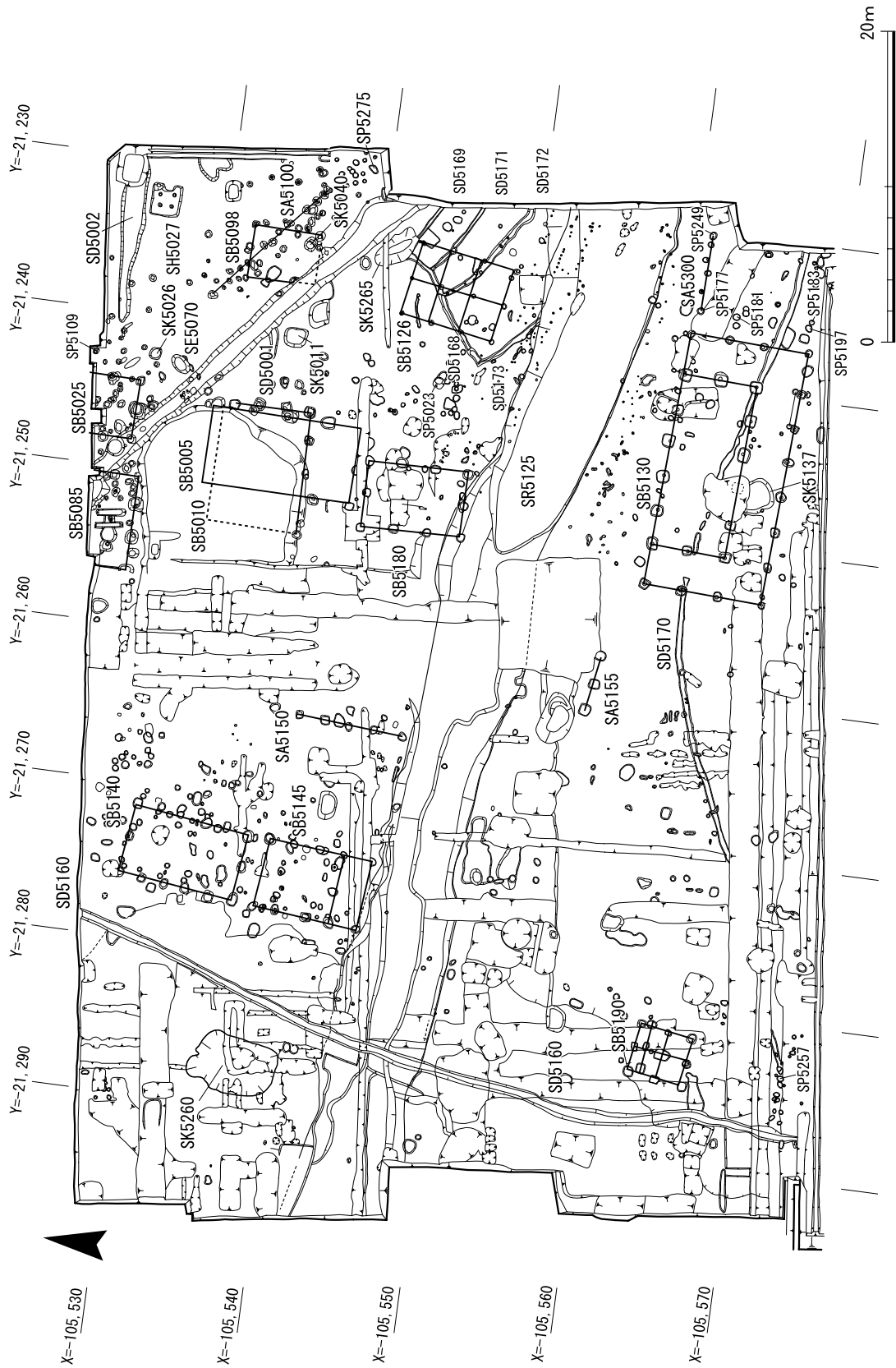


第40図 7区南壁・西壁・東壁土層断面図

差は約1.5mを測る。5～7区の土層堆積状況は、賀茂川の氾濫原として堆積した砂礫層が、西側を広く覆っているため、東壁と西壁とで大きく相違している。各区の西部では、そうした洪水性の厚い砂礫層がみられ、各時期の遺構群の存在を良好に捉えることができないが、比較的影響の少ない東側は、遺構検出面、ベースとなる基盤層を確認することができた。基本層序は、6区の東壁の堆積状況から、1層の農場耕作土、2層の近・現代層、第39図6区東壁2・3層、近世遺物包含層)、灰褐色細砂質土(同4層)、灰褐色粘質土(5層、中世遺物包含層)、褐色粘質土(同6層、基盤層)の順に堆積する。5区中央では、S R 5125の埋土(第39図 a～i)を、約0.5mの厚さで確認した。基盤層は黄褐色砂礫混じり粘質土で、5区で標高68.3m、6区中央で68.1mを測る。全体に農場に関連する近・現代の施設に伴う攪乱坑が複雑に入り組んでいる。7区各層位は、1層は近世の陶磁器(肥前系陶磁器など)を含む層であり、その下層の褐灰色粘質土(第40図7区東壁2層)は下部にマンガン粒、鉄分の沈着があり、近世以降の耕地化された間の床土層とみられ、さらに下層のにぶい黄褐色粘質土(第40図7区東壁3層)は、わずかながら近世に属する遺物が出土する遺物包含層である。4・5層は、地形の起伏に応じて部分的に確認され、中世の堆積層とみられる。7区は、中央の標高約67.9mで基盤層の褐色粘質土(第40図7・8層)を検出した。

②5区検出遺構(第41図)

主な検出遺構は、古墳時代前期の土坑1基、飛鳥時代後半～平安時代の竪穴建物1棟、掘立柱建物10棟、土坑4基や井戸1基、溝7条等である。さらに中世と推定される掘立柱建物1棟のほか、近世の旧河道1条や土坑等を検出した。



第41図 5区遺構平面図

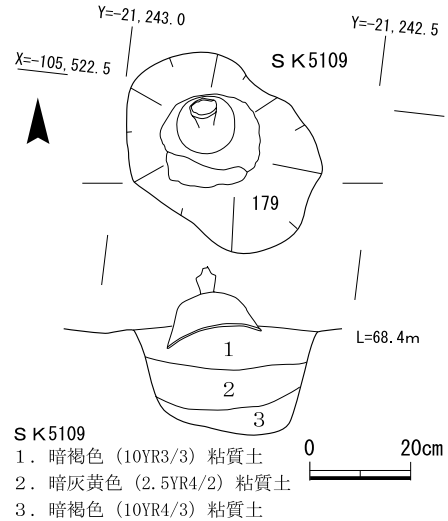
古墳時代

土坑 S K 5109 (第42図) 北東北壁に接して検出した不整形形の小土坑である。径0.4m、深さ約0.3mを測る。高杯(第94図179)が杯部を下に向け倒立した状態で出土した。時期は、古墳時代前期前半に属する。

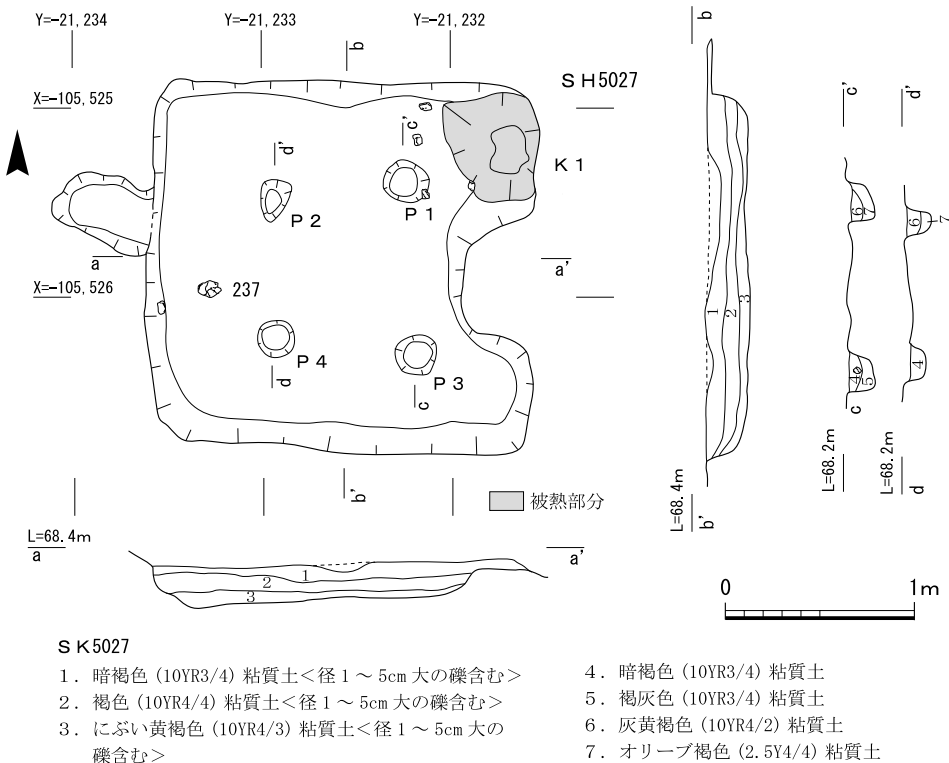
奈良～平安時代

竪穴建物 S H 5027 (第43図) 北東部で検出した方形の平面形をもつ小規模な竪穴建物である。規模は、一辺2.1m、深さ約0.25 mを測る。床面で主柱とみられる4基の柱穴を確認し、北東隅で弱い被熱痕のみられる焼土坑(K 1)を検出した。また、建物東壁の中央に接して、床面を半円状に掘り残して形成された高まりを確認した。西壁中央には、西側に延びる浅い溝状の落ち込みがみられる。規模が小さいことから居住を目的とした住居ではなく、2区 S H 2005と同様に、工房的な性格をもつ建物とみられる。須恵器杯Bの小片が出土しており、時期は平安時代前期前半と推定される。

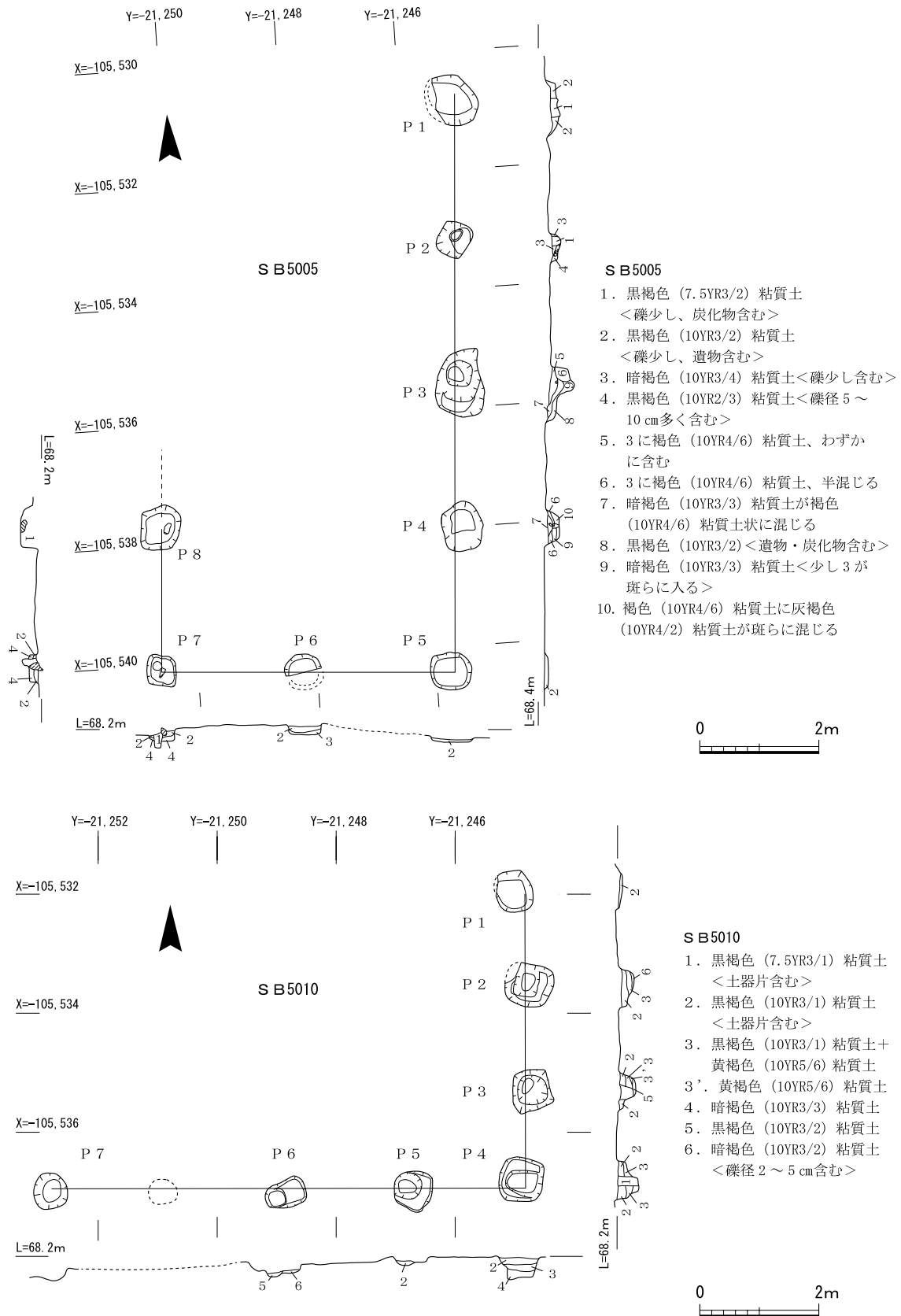
掘立柱建物 S B 5005 (第44図) 北東部で検出した南北棟の建物である。桁行4間(9.8m)、梁行2間(5.0m)の規模をもち、柱間は2.4~2.5m(8尺)を測る。建物主軸は、北から4°東に振る。北西部の柱穴4基は、近代以降の大規模な土取りによる攪乱坑により大きく削平されている。柱



第42図 5区土坑 S K 5109平面・断面図



第43図 5区竪穴建物 S H 5027平面・断面図



第44図 5区掘立柱建物 S B 5005・5010平面・断面図

穴掘形は方形を呈し、規模は一辺約0.7～0.8mを測る。東柱筋の各柱穴に南東に広がる柱の抜取穴が確認される。西柱筋とS B 5130の身舎西柱筋はおおよそ南北ライン上にあり、主軸を同じくすることから、S B 5130と同時期の関係性の高い建物とみられる。S B 5130の北27.3m (91尺)に位置する。平安時代前期中葉の土器(第94図180～183)が出土している。

掘立柱建物 S B 5010 (第44図) S B 5005と一部重複して検出した建物である。北西部の柱穴群を削平によって欠くが、桁行4間(8.0m)、梁行3間(4.8m)の東西棟として復元できる。柱間は、1.8m (6尺)を測る。一辺0.6～0.8m、深さ0.1～0.3mの方形掘形の柱穴から構成される。建物主軸は、北から1°30′西に振る。主軸を北に揃え、S B 5005に先行する。

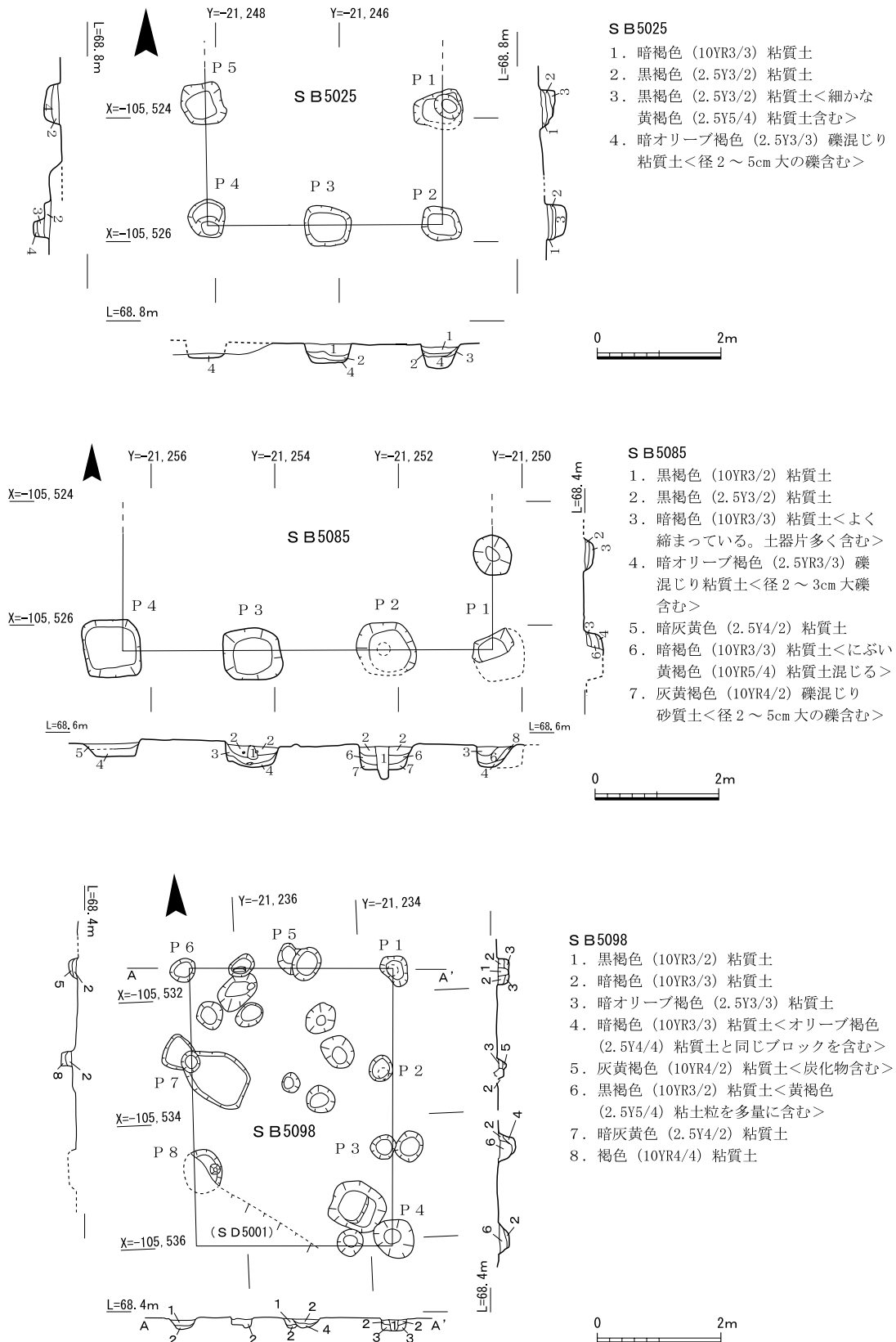
掘立柱建物 S B 5025 (第45図) 北東北壁周辺で検出した建物である。桁行1間以上(1.8m)、梁行2間(3.6m)の南北棟である。柱間は、1.8m等間で6尺を測る。建物主軸をほぼ北にとり、振れはみられない。西隅の柱穴P 4が溝S D 5001に削平されているが、溝底で柱穴の基底を確認した。一辺約0.7mの方形掘形の柱穴からなる。平安時代前期中葉の土器(第94図191)が出土している。

掘立柱建物 S B 5085 (第45図) S B 5025の西側で検出した桁行3間(6.3m)、梁間1間(1.8m)以上の建物である。柱間は、1.8(6尺)～2.4m(8尺)を測る。建物主軸は北から1°西に振る。柱穴掘形は、一辺0.7～0.9mと大きく、深さ約0.4mを測る。埋土から平安時代前期中葉の土器(第94図187～189)が出土している。

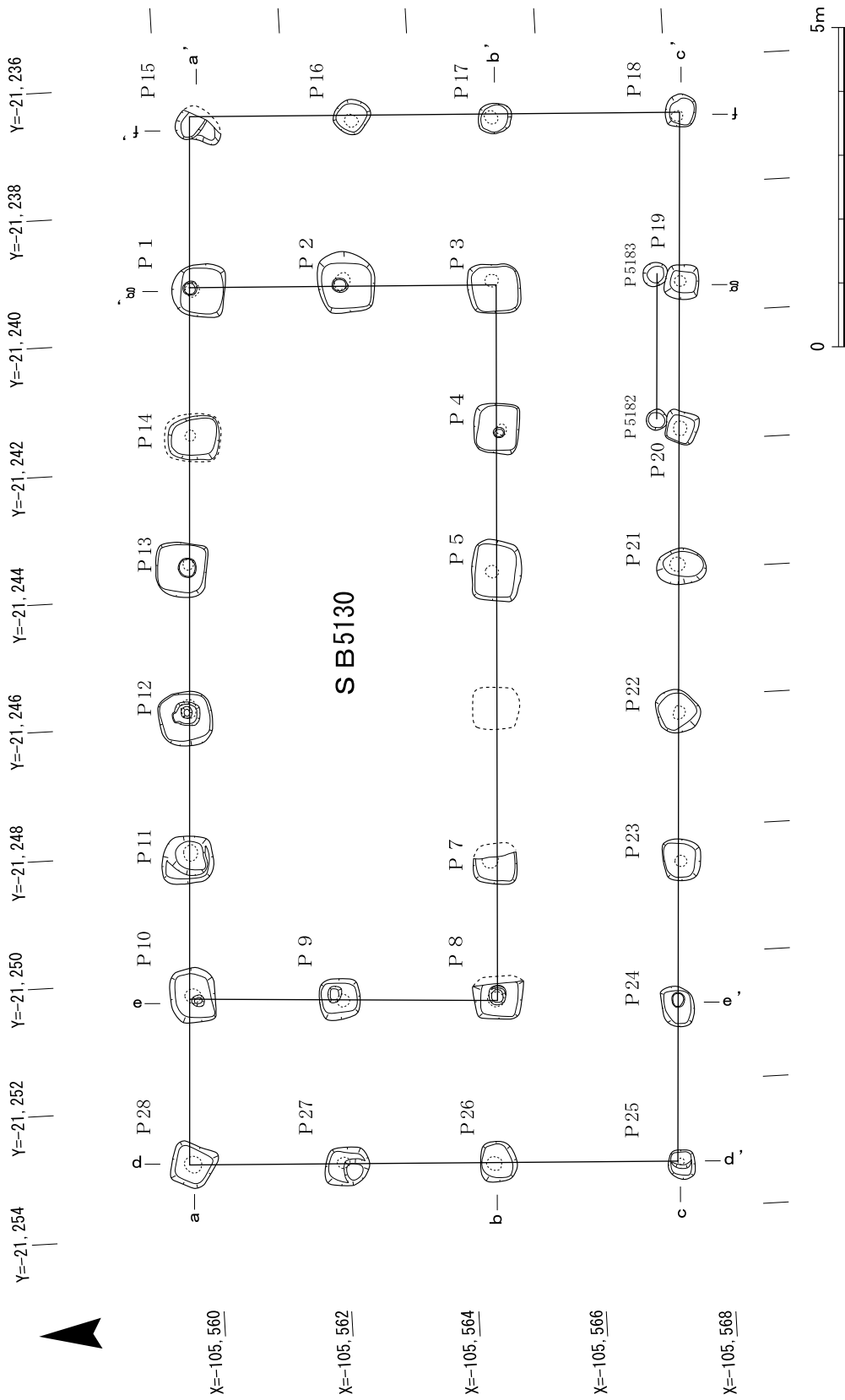
掘立柱建物 S B 5098 (第45図) 北東部で検出した桁行3間(4.5m)、梁行(3.3m)の南北棟である。柱間は不揃い(1.4～1.8m)で、S D 5001と重複する南西部の柱穴を欠くが、建物規模がほぼ完数尺(35尺)をとることから建物として復元した。柱穴の平面形は、歪な方形あるいは不整形をなし、一辺0.4～0.5mを測る。平安時代前期前半の土器(第94図190)が出土している。

掘立柱建物 S B 5130 (第46・47図) 南西部で検出した建物である。重機によるコンクリート隔壁の除却作業を進めるなかで検出した建物で、近現代の削平及び攪乱によって柱穴の一部は遺失している。建物構造は、身舎に三面の廂をもつ三面廂建物である。廂を含めた総長は、掘形のほぼ中心にある柱痕跡の心々間距離で、東西16.4m、南北7.8mを測る。身舎は、桁行5間(11.25m)、梁行2間(4.8m)の東西棟である。身舎の柱間は、桁行約2.25m (7.5尺、造営尺は一尺30.0cm)、梁行2.4m (8尺)を測り、梁行をより大きくとる柱配置である。廂は、身舎の南と東西に配される。廂の出は、南廂が3.0m (10尺)、東廂・西廂はそれぞれ2.55m (8.5尺)を測り、南廂と東西廂で廂の出は異なる。身舎柱間よりも廂の出が大きく、南廂をより広くとることが特徴である。建物主軸は、北から4°東に振る。身舎の床面積は54㎡を測り、廂を含めた建物全体の床面積は127.9㎡を測る。

身舎柱穴は、本来、14基から構成されるが、平側の側柱のうちの1基は近代の攪乱により削平され、13基を確認した。また、南側柱の柱穴P 7の半分と北側柱のP 14の上層は大きく削平され、また妻側の北東角柱P 1・南西角柱P 8についても一部が削平されている。身舎の柱穴掘形は隅丸方形を呈し、規模は一辺約0.75m (2.5尺)～0.9m (3尺)を測る。深さは約0.25～0.45mと浅く、

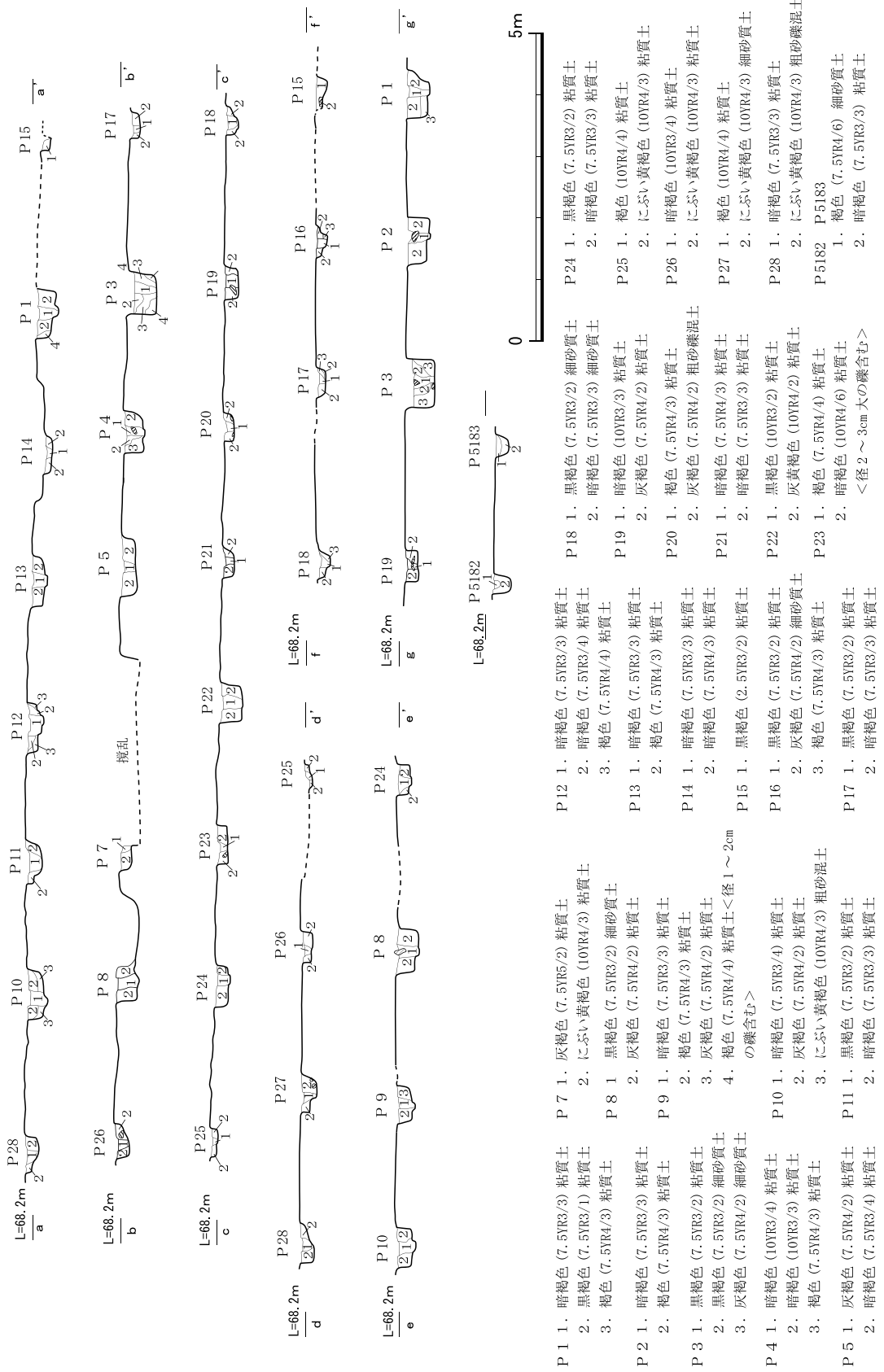


第45図 5区掘立柱建物 S B 5025・5085・5098平面・断面図



第46図 5区三面廂建物 S B 5130平面・断面図

S B5130



第47図 5区三面廂建物 S B5130柱列断面図

大きく後世の削平を受けたとみられる。掘形に明確な柱抜き取り穴はみられず、柱穴を掘り下げる過程で柱痕跡の多くを確認した。身舎柱穴の多くで、掘形の底面に柱の基部の圧痕によるみられう円形の窪みを検出している(P 1・2・4、8~10、12・13)。身舎柱径は、掘形底部の形状や、柱痕跡からおおよそ25cm前後とみられる。一方、廂柱穴は、14基から構成されるが、妻側の東廂のP15の半分と、西廂のP25の上層は大きく削平を受けている。柱穴掘形は、歪な方形ないし一部弧を描く楕円形状の輪郭を呈する。廂柱穴は身舎柱穴よりも規模はやや小さく、一辺0.5~0.7m、深さは約0.15~0.2mを測る。廂の柱穴のうち、南廂の東から2間の柱間にあたる柱穴P19とP20に、北に平行して1間分の柱列を構成する柱穴(P5182・5183)を検出した。柱穴掘形は円形をなし、規模は径0.3m、深さ0.15mを測る。小規模な柱穴であることから、建物の本体構造に関わるものではなく、南廂のP19とP20の柱間に階段を取り付けた場合の床を支える束柱か、あるいは建物足場に関連する柱穴の可能性がある。また、各柱穴内や建物周辺では瓦が出土していないことから、屋根は檜皮葺きであった可能性が高い。

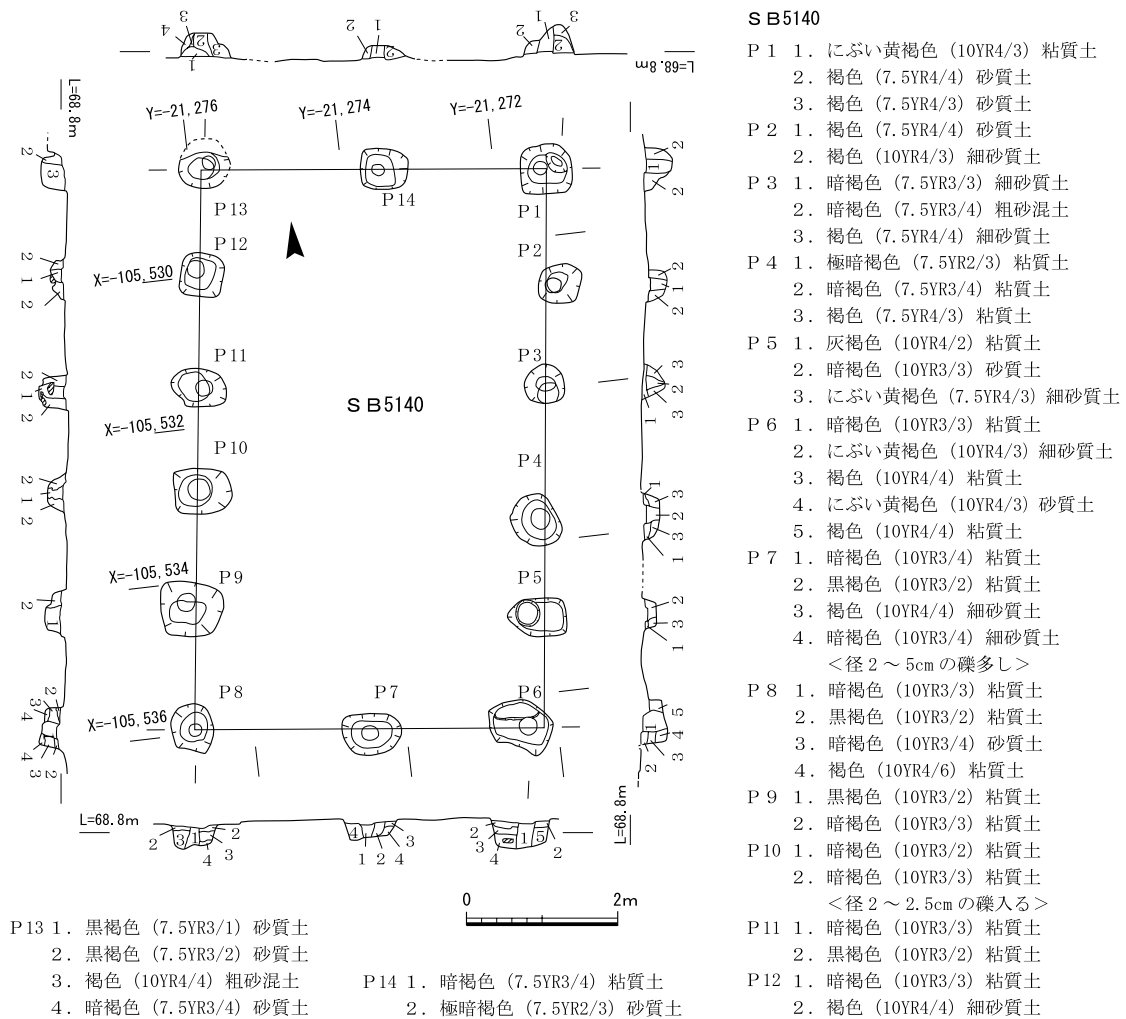
身舎・廂の柱穴から、小破片ではあるが、土師器杯、須恵器杯蓋や緑釉陶器、灰釉陶器など(第94図192~206)が出土し、平安時代前期中葉(Ⅱ期古、9世紀中葉)に位置づけることができるが、平安時代前期後半(10世紀前葉、Ⅱ期新)に属する猿投産の緑釉陶器皿(第94図201)1点が含まれる。これは掘形から出土したものだが、柱穴の検出にあたっては、明確な抜き取り穴は確認しておらず、検出面直上まで攪乱が及び不整地面であったこと、P29の検出面に極めて近いレベルで出土した小破片であることから混入の可能性が高いと考えられる。周辺に平安時代前期後半の遺構(SA5300)が確認されることや、精査中に同時期の灰釉陶器が出土していることから同様の評価をするものである。以上から、SB5130は平安時代前期中葉(9世紀中葉)に造営され、東に近接するSA5300の設置時期である前期(10世紀前葉)までに廃絶したと考えられる。

調査終了後の平成25年度に、柱穴のうち、身舎妻側の柱穴P1~3・15・18・19については、保存のため切り取り作業を実施した。また柱穴切り取り保存作業に伴い、建物全体の3次元測量を実施しており、その測量成果については巻末に付載した(付図1・2、図版61・62参照)。

掘立柱建物SB5140(第48図) 北西部で検出した桁行5間(7.5~7.6m)、梁行2間(4.5m)の南北棟である。柱間は、桁行1.5~1.6m(5尺)、梁行2.25m(7.5尺)を測り、梁行の幅をより大きくとる柱構造である。建物の主軸は、北から7°30'東に振る。柱掘形は、やや歪な方形を呈し、一辺0.6~0.8m、深さ0.35~0.45mを測る。平安時代前期中葉の土器(第94図209~213)が出土している。

掘立柱建物SB5145(第49図) 掘立柱建物SB5140の南で検出した建物である。桁行4間(4.6m)、梁行2間(6.9m)の南北棟である。建物主軸は、北から4°東へ振る。SB5145とほぼ主軸を揃えることから、その建て替えに伴う建物とみられる。柱穴から平安時代前期中葉の土器(第94図214~217)が出土している。短期間のうちにSB5140からSB5145に建て替えられているようである。

掘立柱建物SB5190(第49図) 南西部で検出した桁行2間(3.5~3.6m)、梁行2間(3.0m)の



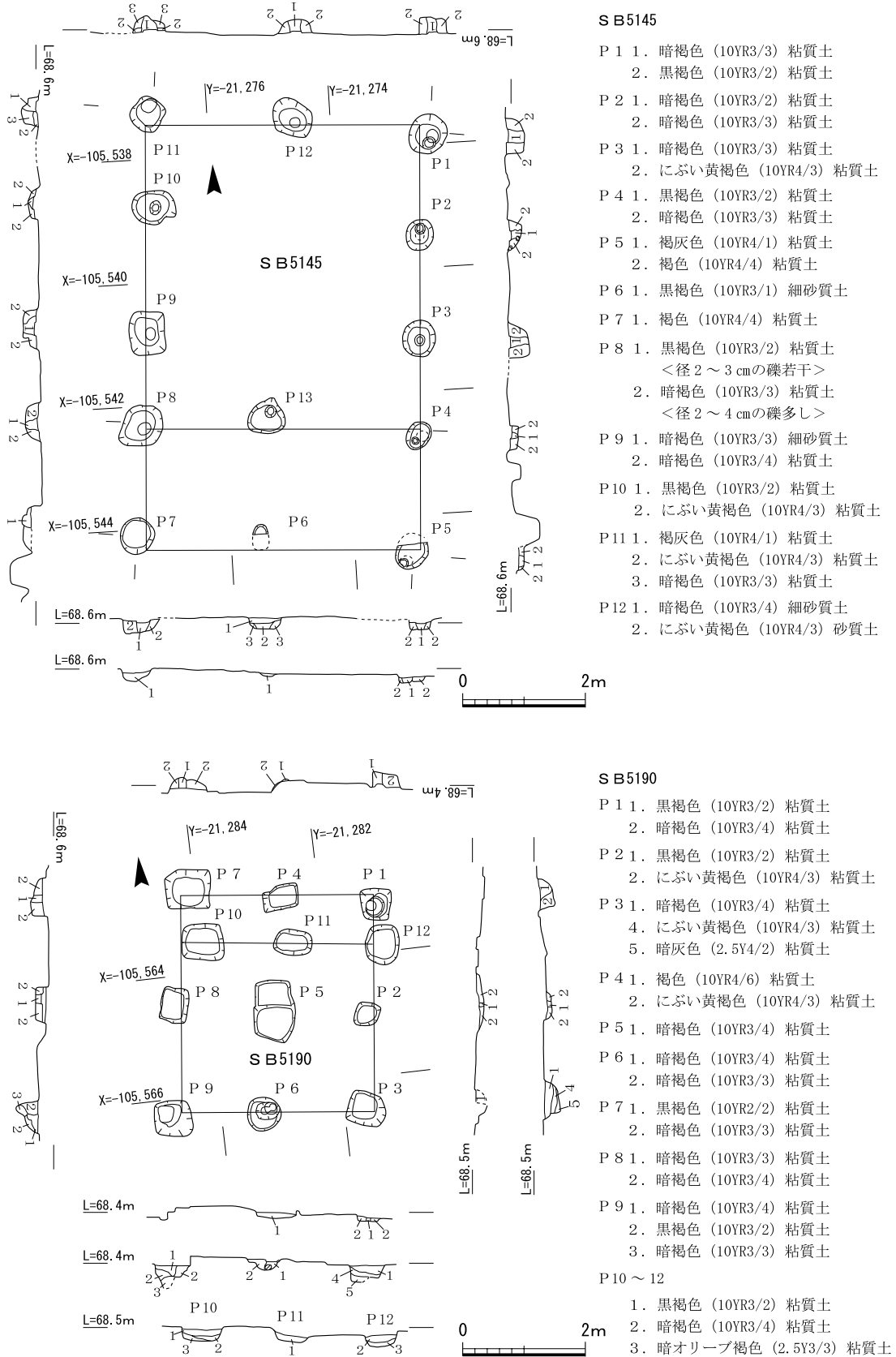
第48図 5区掘立柱建物S B 5140平面・断面図

総柱の建物である。北柱筋の南に平行して東柱とみられる東西2間の柱列を検出した。建物の主軸は、北から9°東に振る。方形の柱穴掘形をなし、規模は一辺0.5~0.7m、深さ0.15~0.3mを測る。柱穴内から平安時代前期前半の須恵器杯B蓋(第94図221)が出土している。

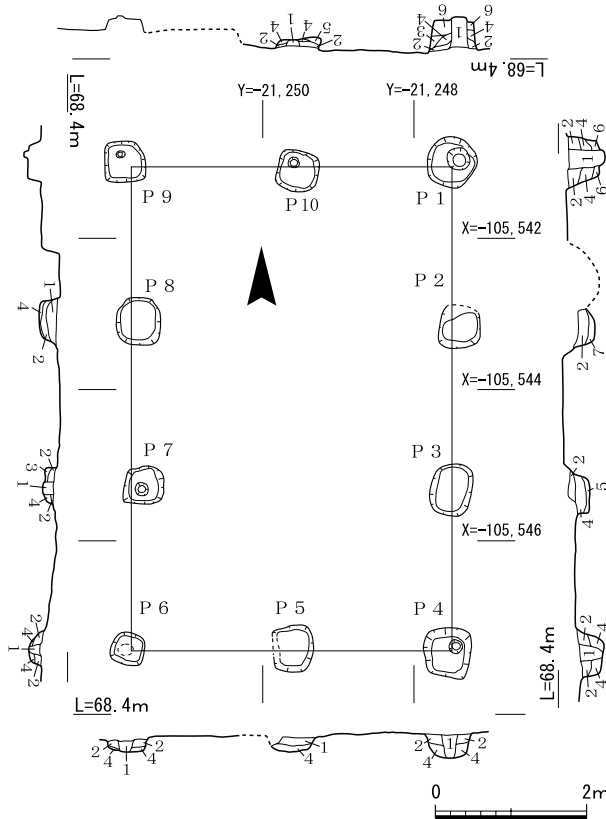
掘立柱建物S B 5180(第50図) 掘立柱建物S B 5005の南で検出した建物である。桁行3間(6.6m)、梁行2間(4.2m)の南北棟である。柱間は、2.1~2.2m(7尺)を測る。建物の主軸は北にあり、ほぼ振れはみられない。柱穴掘形は方形を呈し、規模は一辺約0.8m、深さ0.4mを測る。柱穴から平安時代前期中葉の土器(第94図218~220)が出土している。

柱列S A 5150(第51図) 北部中央で検出した5間(8.4m)の南北柱列である。柱間は、1.7~1.8m(6尺)を測る。主軸は、北から5°東に振る。方形掘形の柱穴からなり、規模は一辺0.5~0.8m、深さ約0.4mを測る。S B 5005、S B 5130と主軸を揃えることから、同時期の平安時代前期中葉の柱列と推定される。西側には雑舎とみられるS B 5140・5145や廃棄土坑S K 5260があり、目隠し塀であった可能性がある。

柱列S A 5155(第51図) 南部中央で検出した東西2間(1.8m)の柱列である。柱間は、1.8m(6



第49図 5区掘立柱建物 S B5145・5190平面・断面図



- | | |
|--|--|
| 1. 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土
<マンガン粒多く含む> | 4. 黒褐色 (10YR3/3) 粘質土 |
| 2. 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘質土 | 5. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 |
| 3. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土
<黄褐色粘質土をブロック状に含む> | 6. 暗褐色 (10YR3/4) 粘質土 |
| | 7. 暗オリーブ褐色 (2.5YR3/3)
<径2~3cm大の礫含む> |

第50図 5区掘立柱建物 S B5180平面・断面図

柵列 S A 5100 (第41図) 溝 S D5001の東で検出した5間(8.5m)の規模をもつ柵列である。柱間は1.8m(6尺)~2.4m(8尺)を測る。柱間隔は揃わないが、円形掘形をもつ柱穴を列状に検出し、溝 S D5001の北延長である2区溝 S D2001の東側の柵列と同様な状況がみられることから、柵列として復元した。

柱穴 S P 5181 (第41図) S B5130の東で検出した円形掘形をもつ柱穴である。S P 5181は、径0.4m、深さ0.3mを測る。平安時代前期前半の土器(第95図230)が出土した。

柱穴 S P 5197 (第41図) S P 5197は、S P 5181の南に5mの地点で確認したもので、規模は径0.3m、深さ0.25mを測る。S B5130の東廂からそれぞれ1.5m離れて検出し、東柱筋に近接することから、S B5130の足場を構成した柱穴の可能性はある。

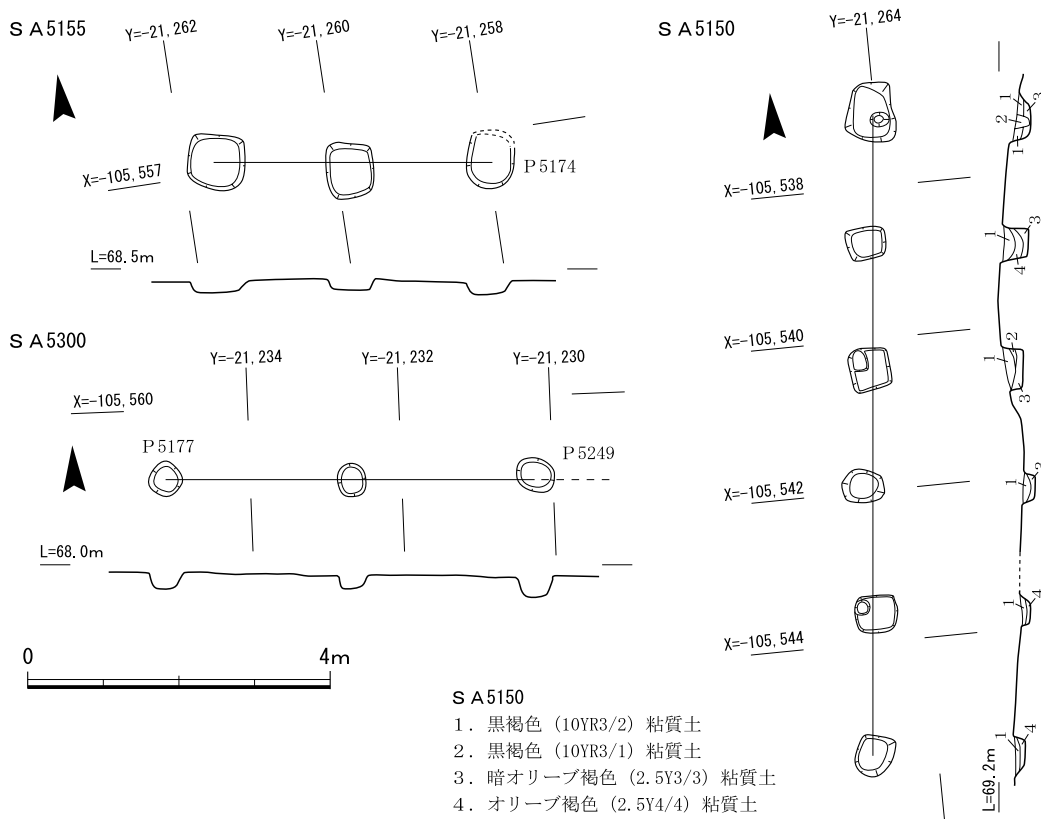
土坑 S K 5011 (第52図) 北東部で検出した長方形の土坑である。長さ1.45m、幅1.25m、深さ0.1mを測る。奈良~平安時代の土師器小片が出土している。

土坑 S K 5026 (第52図) 北東部で検出した小土坑である。歪な方形を呈し、規模は一辺0.7m、深さ0.2mを測る。埋土に炭化物を多く含む。平安時代前期前半の土器が出土している。

土坑 S K 5040 (第52図) 北東部で検出した方形の土坑である。規模は、一辺1.0m、深さ0.3mを測る。図化できなかったが、平安時代の土師器甕の体部が出土している。

尺)を測り、主軸は北から81°西に振る。一辺0.6~0.7mの方形掘形の柱穴からなる。周辺は大きく削平を受けており、深さは0.15~0.2mを残すにすぎない。2間の柵か、あるいは北側が大きく攪乱を受けることから、柱列がさらに展開し、南北1~2間の規模をもつ建物である可能性がある。

柵列 S A 5300 (第51図) S B5130の東で検出した東西2間以上の柱列(4.8m)である。柱間は、2.4m(8尺)を測り、柱穴掘形は、径0.4m、深さ0.2mの歪な円形を呈する。調査区外となる東へさらに拡張する可能性が高い。平安時代前期後半の土器(第95図222~225)が出土している。建物を構成するには至らないが、S A 5300の南側には円形掘形をもつ柱穴群が確認され、さらに調査区外となる東に広がると思われることから、これらを区画する柵列と推定される。



第51図 5区柱列S A 5155・5150、柵列S A 5300平面・断面図

土坑S K 5203(第41図) 東部で検出した不整形の土坑である。規模は、長さ1.1 m、幅0.9m、深さ0.3mを測る。土坑内から平安時代前期後葉の須恵器杯B(第95図239)が出土している。

土坑S K 5260(第52図) 北西部で検出した南北に長い不整形の土坑である。播り鉢状の形状を呈し、規模は、長さ5.3m、幅4.7m、深さ0.8mを測る。中層に10~20cm大の礫を多量に含み、礫に混じって土器や布目瓦が出土した。出土遺物は小片が多く、生活残滓の廃棄土坑とみられる。出土遺物のうち、上層と中層の遺物に接合関係があり、また礫間に孔隙がみられることから、多量の礫は人為的に廃棄され、短期間のうちに埋め戻された状況が伺える。埋土から平安時代前期中葉の土器(第95・96図240~258)が出土している。

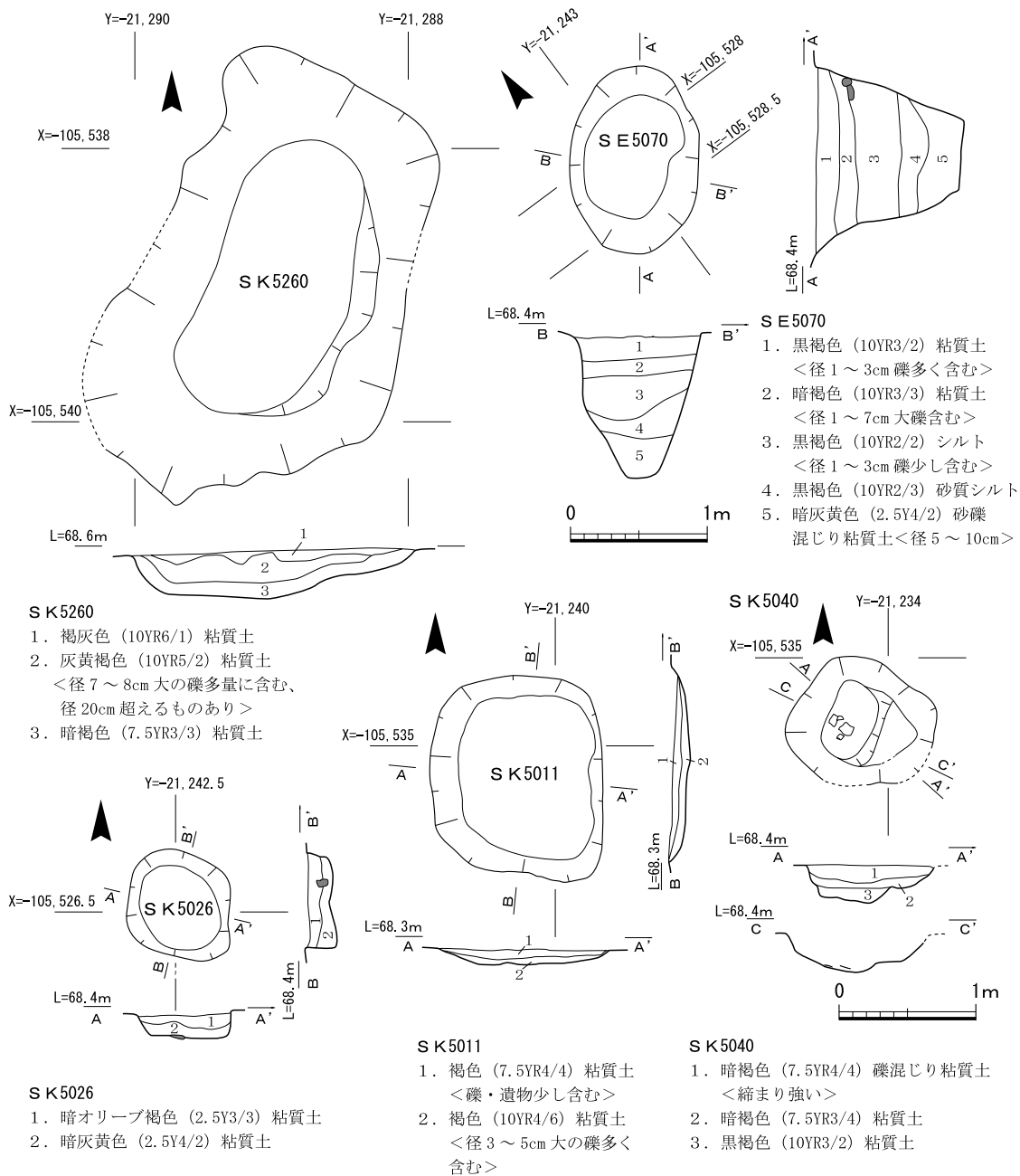
土坑S K 5265(第54図) 東部で検出した土坑である。平面形は楕円形状を呈し、規模は長径3.3m、短径1.6m、深さ0.7mを測る。耕作溝とみられるS D 5168・5169などの細溝群と連結する。各溝に配水するための水溜めとしての機能をもつ土坑とみられる。連結するS D 5168から出土した土器より、同時期の平安時代前期後葉~中期初の土坑と推定される。

井戸S E 5070(第52図) 北東部で検出した。平面形は楕円形をなし、長径1.35m、短径0.95m、深さ1.1mを測る。埋土は中層に黒褐色シルトが堆積し、基底部分は礫層面に達する。現状では湧水は確認できないが、竪坑状の形状を呈し、堆積土壌がシルト質であることから素掘りの井戸とみられる。土器は、須恵器、土師器などの小片が出土しているが、詳細な時期は不明である。埋土及び出土遺物の状況から、時期はおおよそ奈良~平安時代と推定される。

溝 S D 5001 (第53図) 北東部で検出した溝である。2区溝 S D 2001の南東延長となる溝で、北西から南東へ掘削され、さらに調査区外へと延びる。幅1.5~2.2mを測る。深さは約0.3~0.6mを測り、南東に向かって深く掘削される。緑釉陶器の素地とみられる須恵器(第96図259)が出土している。溝 S D 2001と同じく平安時代前期後半の溝である。

溝 S D 5160 (第53図) 調査区西部で検出した。北東から南東に向かって緩やかに蛇行する溝である。幅0.5~1.0m、深さ0.1~0.2mを測る。5区では、約50mにわたって検出し、6区北西端で消滅する。北部の2区溝 S D 2002・3区溝 S D 3002と同一の溝であり、飛鳥時代後半~奈良時代初期とみられる。

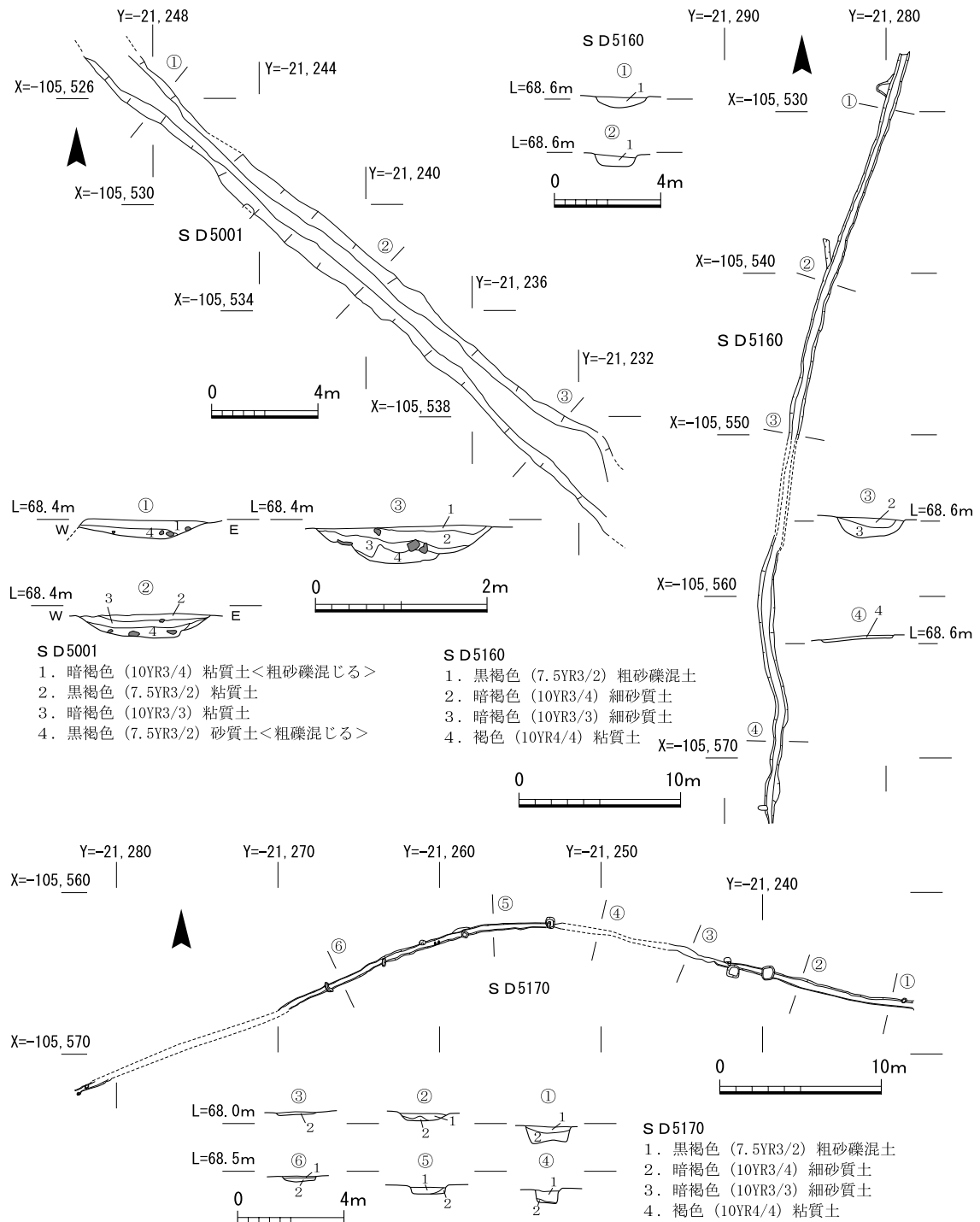
溝 S D 5170 (第53図) 掘立柱建物 S B 5130と重複し、西から東へ大きく弧を描くように蛇行



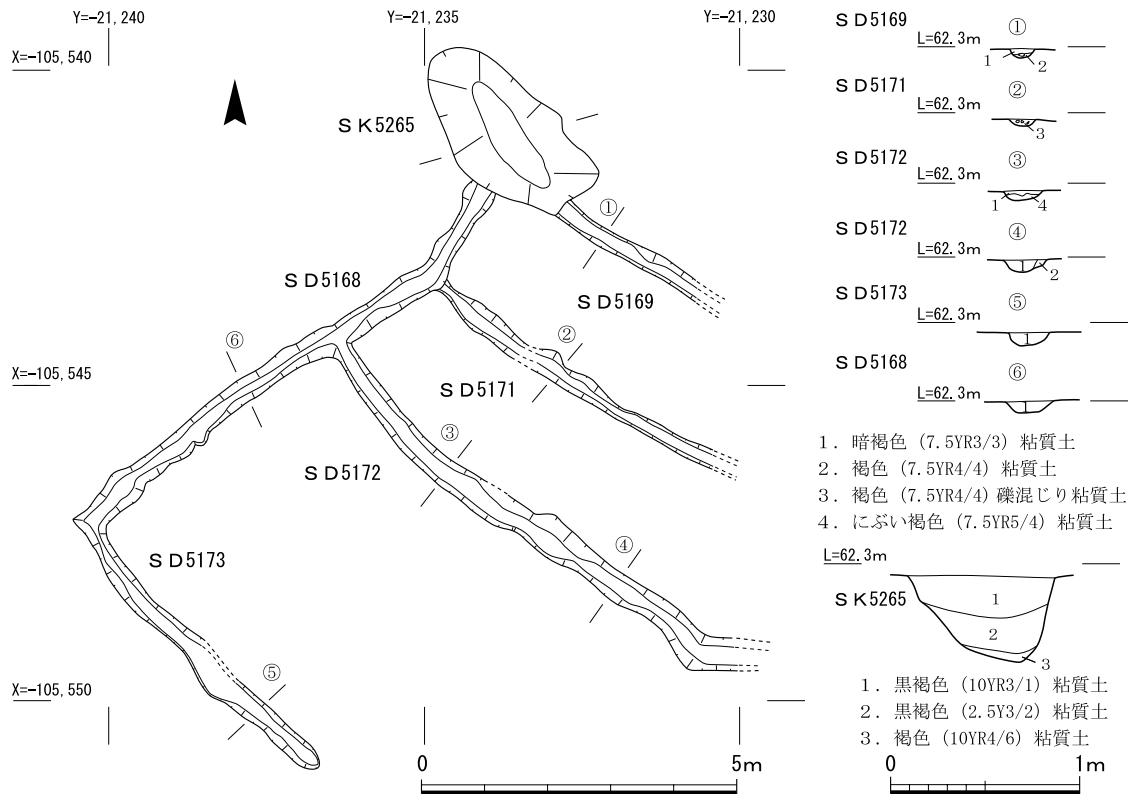
第52図 5区土坑群、井戸 S E 5070平面・断面図

して検出した溝である。幅約0.4m、深さ5~20cmを測る。西側は大きく攪乱を受けるが西壁周辺までわずかながら残存し、東西に約55mにわたって検出した。S B5130の柱穴によって一部を削平されていることから、平安時代前期中葉以前の溝と推定される。

溝S D5168・5169・5171・5172・5173(第54図) 5区東部で検出した耕作溝とみられる細溝群である。南西へ掘削されるS D5168と、南東へ枝状に分かれるS D5169・5171・5172・5173からなる。南西方向に掘削されるS D5168は、8.5mにわたって検出し、南東方向に掘削さ



第53図 5区溝S D5001・5160・5170平面・断面図



第54図 5区溝群、土坑S K 5265平面・断面図

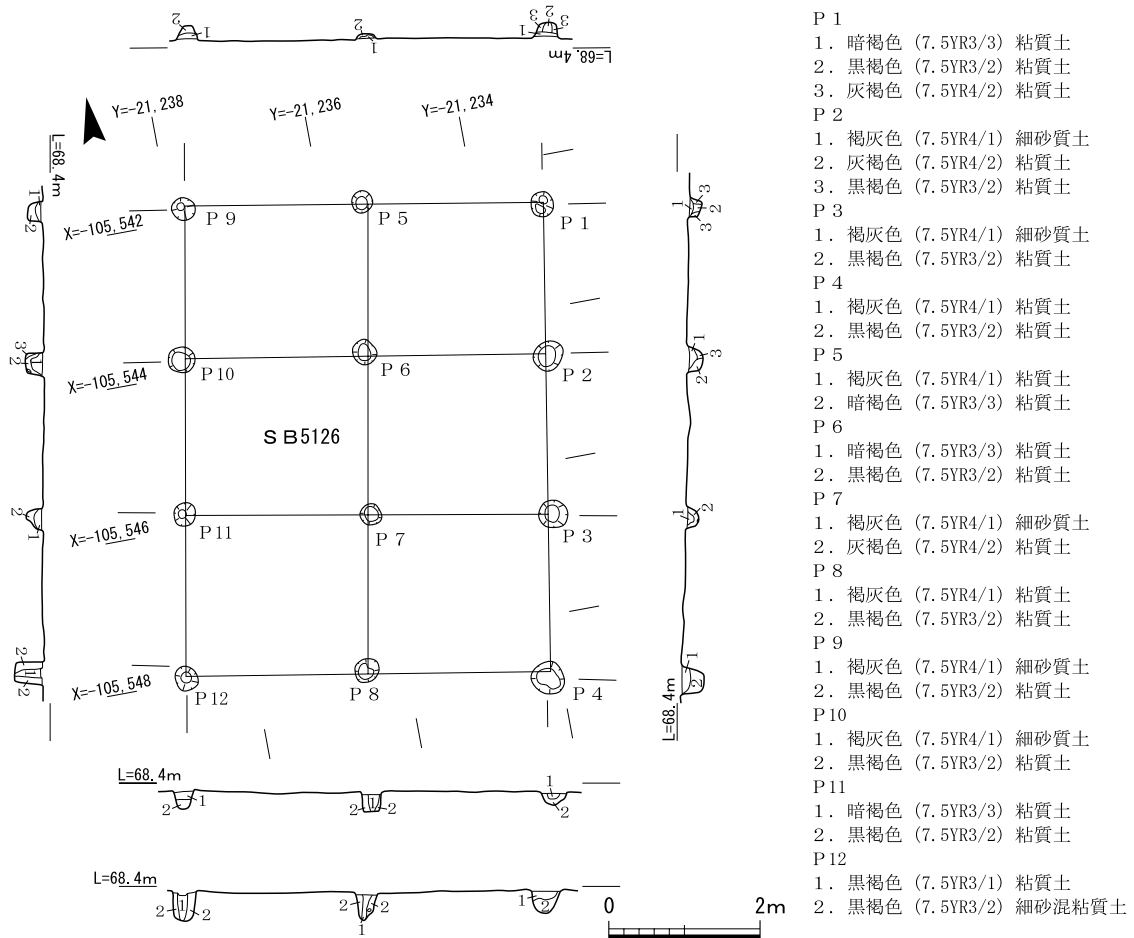
れる溝で最も長いS D 5172は8 m以上の規模をもつ。おおよそ幅0.25~0.1 m、深さ0.5~0.1mを測る。S D 5168とS D 5169は、S K 5265と連結する。S D 5001とS K 5265は上層でつながるとみられ、S K 5265に一旦水をため、S D 5168からS D 5171・5172・S D 5174へ配水したと考えられる。時期は、S D 5001と同時期の平安時代前期末~中期と推定される。

鎌倉時代~江戸時代

掘立柱建物S B 5126 (第55図) 東部で検出した掘立柱建物である。桁行3間(6.2m)、梁行2間(4.8m)の規模をなす。柱間は、桁行2.1m(7尺)、梁行2.4m(8尺)を測る。柱穴掘形は円形を呈し、径0.3m、深さ0.3mを測る。建物の主軸は、北から11°東に振る。出土遺物は確認できないが、柱穴の形態や埋土の状況から中世後期~近世の建物と推定される。

土坑S K 5131 (第41図) 三面廂建物S B 5130内で検出した歪な円形の土坑である。径2.3m、深さ0.15mを測る。S B 5130と切り合い関係はみられず、埋土の状況から中世以降の土坑と推定される。

流路S R 5125 (第56図) 中央部で北西から南東に流れる大規模な流路である。調査区の東西に長さ約70mにわたって検出した。規模は、幅5.5~7.0m、検出面からの深さは0.3~0.4mを測る。流路の基底は幅広く平坦面を形成し緩やかに立ち上がる。上層は大きく削平され、各所が攪乱を受けているが、5区東壁断面では最大幅8.0mの流路として復元できる。流路の最下層は拳大の礫が多量に含まれる固く締まった砂泥が堆積し、また埋土中層にも0.1~0.2m大の中礫が多く含まれることから、豊富な水量をもつ流路であったとみられる。流路の南東部において、流路基



- P 1
 1. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土
 2. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土
 3. 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土
- P 2
 1. 褐灰色 (7.5YR4/1) 細砂質土
 2. 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土
 3. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土
- P 3
 1. 褐灰色 (7.5YR4/1) 細砂質土
 2. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土
- P 4
 1. 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘質土
 2. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土
- P 5
 1. 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘質土
 2. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土
- P 6
 1. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土
 2. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土
- P 7
 1. 褐灰色 (7.5YR4/1) 細砂質土
 2. 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土
- P 8
 1. 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘質土
 2. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土
- P 9
 1. 褐灰色 (7.5YR4/1) 細砂質土
 2. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土
- P 10
 1. 褐灰色 (7.5YR4/1) 細砂質土
 2. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土
- P 11
 1. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土
 2. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土
- P 12
 1. 黒褐色 (7.5YR3/1) 粘質土
 2. 黒褐色 (7.5YR3/2) 細砂混粘質土

第55図 5区掘立柱建物 S B 5126 平面・断面図

底から法面に径0.1m大の小穴群を多数確認した。護岸のために穿たれた杭跡とみられる。また流路東端の北肩部では、こうした杭跡を列状に検出したが、調査区外の東に近世の鞍馬街道が接することから、架橋施設などに関連する杭列の可能性はある。陶磁器類のほか、「寛永通寶」などの銭貨が出土していることから、近世から近代にかけての流路と推定される。近世絵図では、周辺に近世の上賀茂村と下鴨村の境界とされた「乙井川」が存在していたことが判明しており、S R 5125が「乙井川」に該当するものと考えられる。

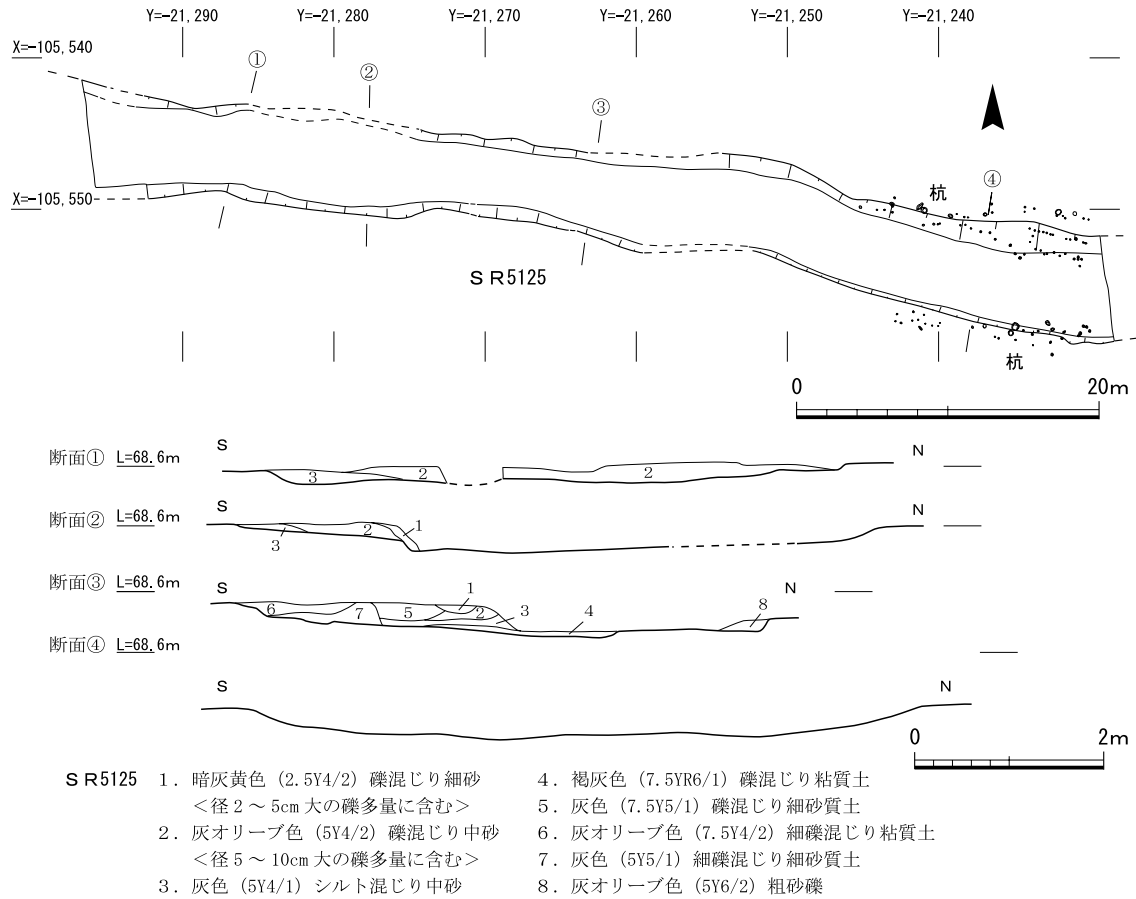
溝 S D 5002 (第41図) 北東部の北壁に沿って東西に検出した浅い溝である。幅0.8~1.4m、深さ0.1~0.3mを測り、長さ8m以上を測る。遺物はわずかながら染付等が出土しており、近世の耕作に伴う溝とみられる。

③ 6区の検出遺構 (第57図)

調査前は、大型温室、コンクリート隔壁で仕切られた耕作地であったが、こうした近現代構造物を重機により除去し、地表下約0.7mの6層上面で各時期の遺構を検出した。主な検出遺構は、竪穴建物1棟、掘立柱建物11棟、柵列6条、溝2条、土坑6基、その他多くの柱穴、杭跡である。

a. 古墳時代

竪穴建物 S H 6088 (第58図) 6区中央南寄りで検出した。西側を大きく土坑 S K 6005で削平



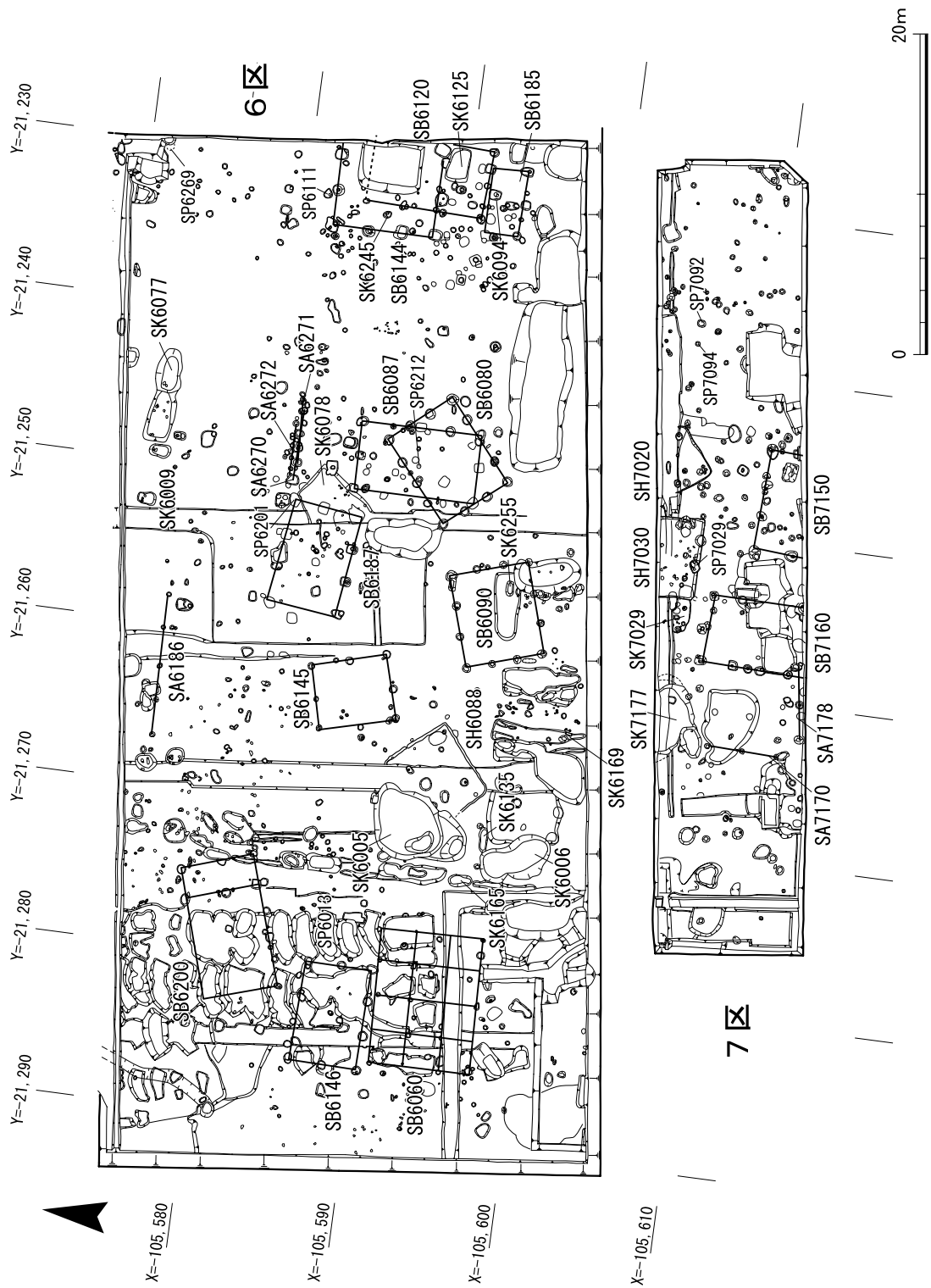
第56図 5区流路S R 5125平面・断面図

されているが、3辺を確認した。柱穴掘形は一辺4.8~5mの方形で、深さ0.1~0.15mと浅い。4基の主柱(P 2~4・9)からなる建物である。直径0.45~0.5m、深さ0.1~0.2mを測る。火処としての竈は確認できなかったが、赤褐色粘質土の焼け土を含む楕円形の土坑1基(K 6)を東側隅で検出した。土坑の大きさは長さ0.7m、幅0.4m、深さ0.1mを測る。建物の時期は、底面から出土した須恵器蓋(第97図269)から古墳時代後期後葉に属するとみられる。

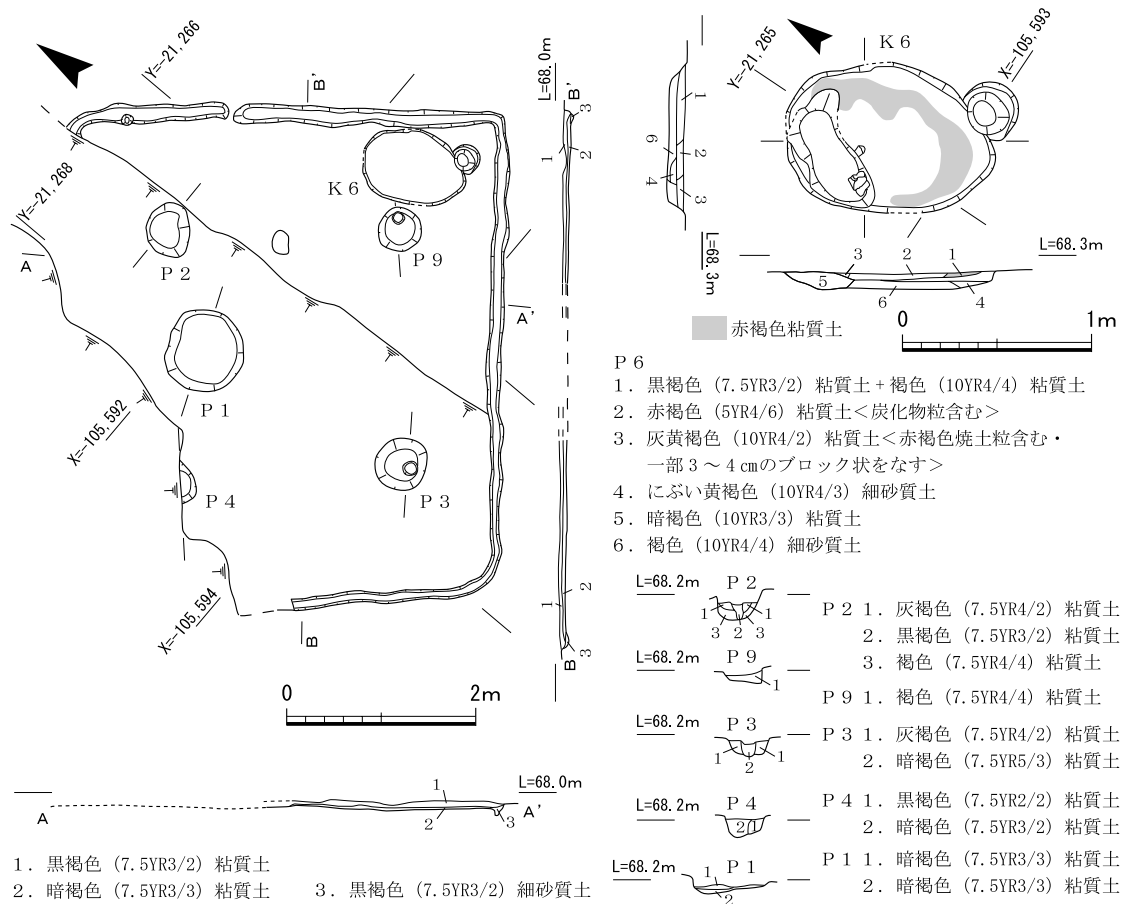
b. 奈良時代~平安時代の遺構

掘立柱建物 S B 6060 (第59図) 6区南西部に位置する桁行4間(8.5m)、梁行3間(6.3m)の東西に長い総柱の建物である。いずれの柱穴からも柱位置の痕跡は確認できなかったが、掘形中心での柱間寸法はほぼ2.1m(7尺)等間である。柱穴の平面形は、円形で直径0.2~0.35m、深さ0.1~0.4mを測る。主軸は北から1°20'西に振る。柱穴掘形や柱痕内から土師器皿・杯・甕、須恵器長頸壺、緑釉陶器椀(第97図273~278)などが出土した。これらの出土土器から、時期は平安時代中期後葉以降とみられる。

掘立柱建物 S B 6080 (第60図) 桁行4間(6.2m)、梁行3間(4.7m)で東西棟の建物である。柱間寸法は、梁行、桁行とも1.5m(5尺)等間である。柱穴の平面形はほぼ円形で、直径0.5~0.8m、深さ0.2~0.4mを測る。柱穴P 6とP 13以外、柱位置の痕跡は明瞭ではない。上部が大きく削平されているのか、抜き取り痕についても確認できなかった。主軸は北から43°西に振る。出土遺



第57図 6・7区遺構平面図



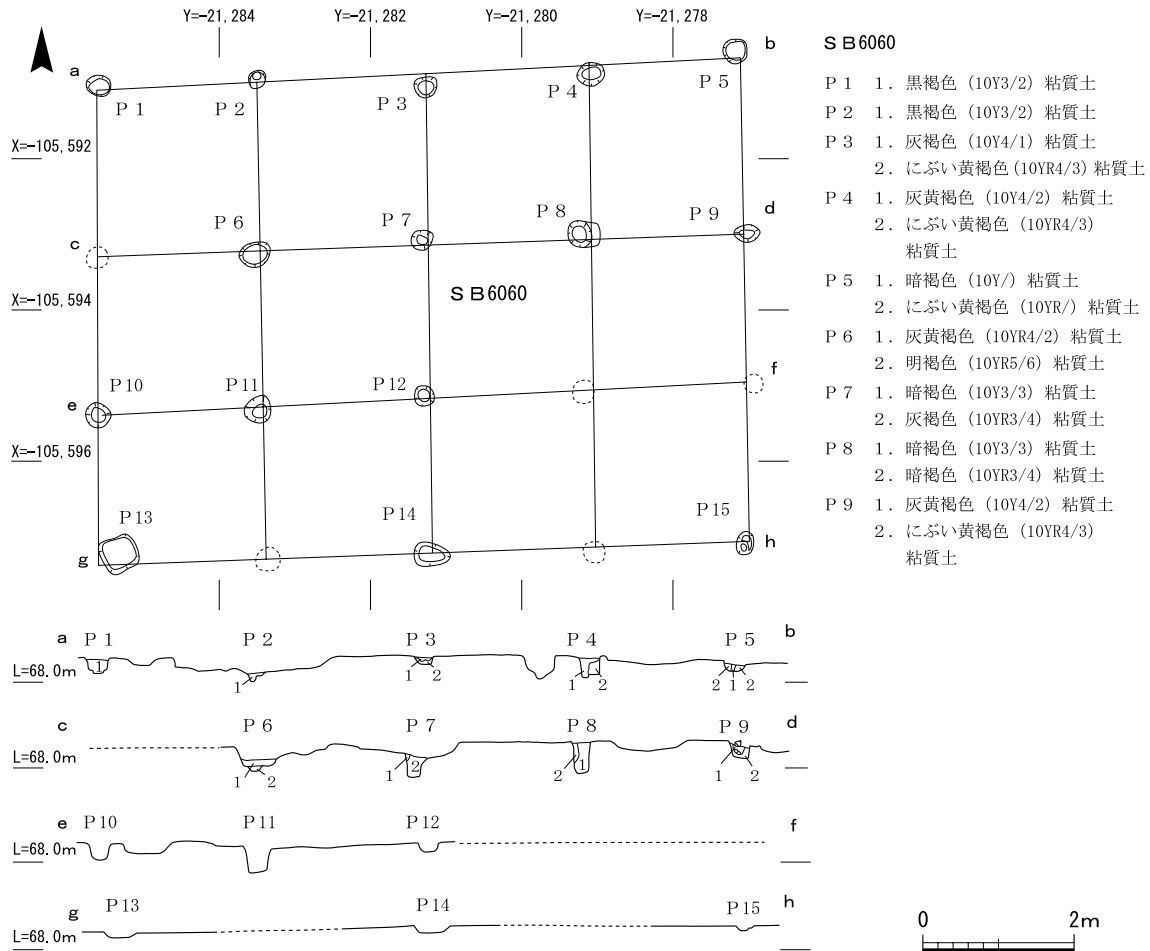
第58図 6区竪穴建物S H6088平面・断面図

物にはP 6の柱痕から出土した完形の須恵器鉢(第97図279)がある。この遺物を廃絶時の地鎮に伴うものと考え、建物の時期は平安時代前半と推定できる。

掘立柱建物S B6087(第61図) 掘立柱建物S B6080と重複して検出した。桁行2間(7.5m)、梁間2間(4.3m)の南北棟である。柱間寸法は、梁行で2.1m(7尺)、桁行で1.8m(6尺)の等間である。柱穴の平面形は、P 9・10は直径0.6~0.75mの円形、その他はおおよそ幅0.5~0.6mのほぼ方形とみられる。深さは0.25~0.3mを測る。主軸は北から1°20'西に振る。柱穴P11から平安時代前期前葉の須恵器杯B(第97図280)が出土している。

掘立柱建物S B6120(第61図) 東壁近くで検出した。北東隅の柱穴は後世(近代以降)の掘り込みで消失しているが、南北2間(5m)、東西2間(4.3m)の南北棟である。柱間寸法は、南北は2.4m(8尺)等間、東西は2.1m(7尺)等間である。柱穴の平面形はいずれも円形に近く、直径0.5~0.65m、深さ0.2~0.5mを測る。柱痕跡はP 3を除き確認できた。建物主軸は北から2°東に振る。出土遺物には平安時代前期後葉の須恵器皿、須恵器杯、緑釉陶器片、青磁など(第97図270~272)がある。

掘立柱建物S B6090(第62図) 南壁寄りの中央部で検出した東西3間(5.8~6m)以上、南北3間(5m)の東西棟である。柱間寸法は、南北1.8m(6尺)、東西2mである。柱穴の平面形は円形で、直径0.45~0.65m、残存の深さ0.15~0.5mである。柱痕跡は、P 9及びP 12で確認した。

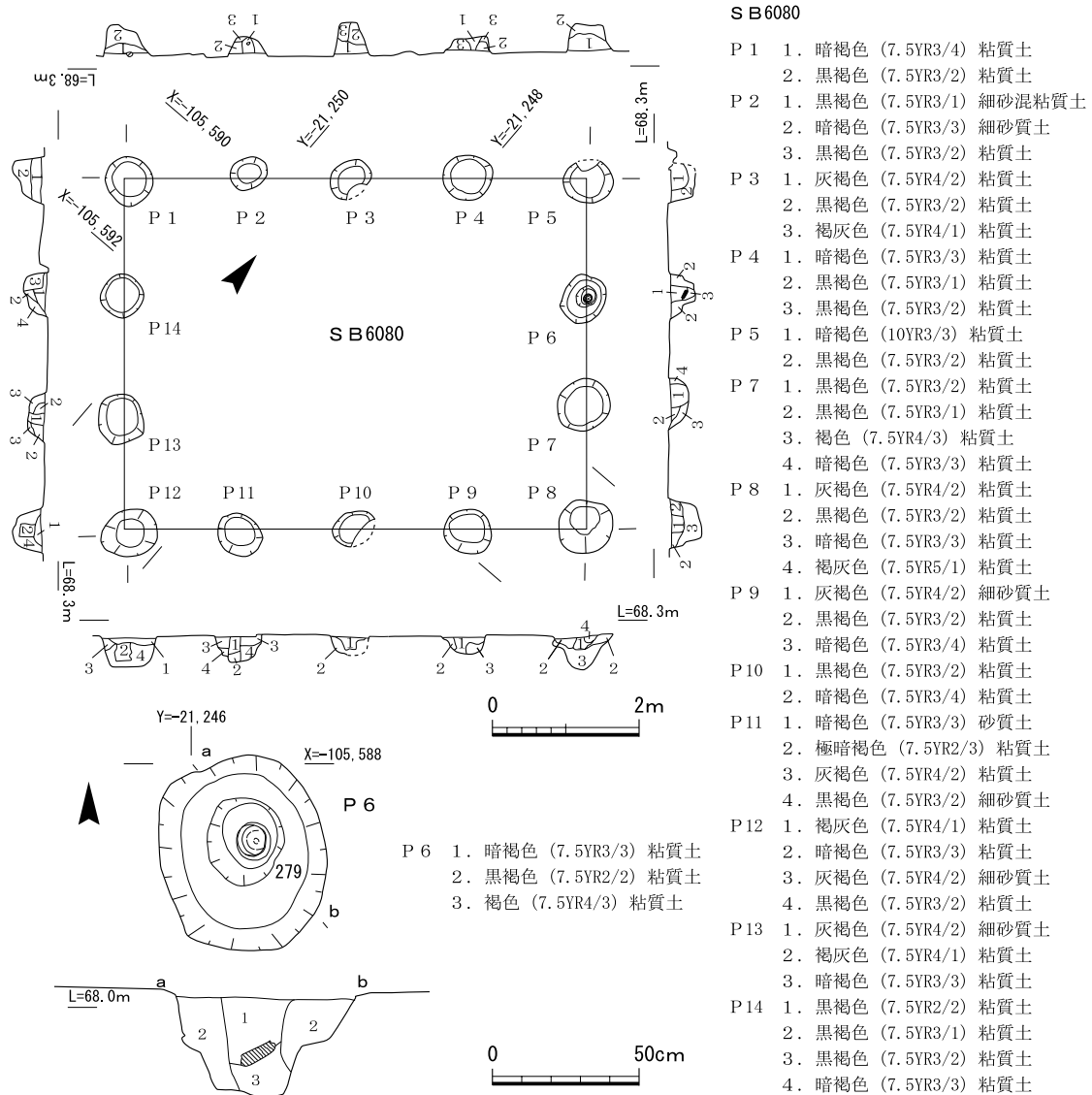


第59図 6区掘立柱建物 S B 6060平面・断面図

主軸は北から17°西に振る。出土遺物は、細片で時期を明確にすることができない。

掘立柱建物 S B 6144 (第63図) 調査区東壁に阻まれ、南北3間(6.6m)、東西2間分(4.6m)を検出した。柱穴の形状・規模からみて、少なくとも東西4間以上の建物となろう。柱間寸法は、南北2.1m(7尺)、東西2.4m(8尺)を測り、東西方向の柱間が長い。柱穴の平面形は、P 2とP 4は円形に近く、その他は方形で、規模は0.75~1.0m、深さ0.45~0.5mを測る。柱痕跡はP 5を除き断面で確認した。比較的大型で深い柱穴ながら、いずれも抜き取り痕は見られなかった。埋土は、小豆色に近い暗褐色粘質土を主とする。主軸は北から1°20'西に振る。出土遺物にはP 2から出土した土師器鍋(第97図284)など平安時代前期後半の土器がある。

掘立柱建物 S B 6185 (第63図) S B 6144の南側にほぼ平行して検出した東西棟である。北辺中間に柱穴を欠くが、桁行2間(4.2m)、梁行1間(2.4m)の規模を測る。柱間寸法は東西に長く、南北2.4m(8尺)、東西2.1m(7尺)である。柱の平面形はすべて方形で一辺0.6~0.7m、幅0.55~0.6m、深さ0.25~0.4mを測る。柱痕跡はすべてで確認できた。残りの良好な柱穴ではあり、抜き取り痕はなかった。主軸は北から1°20'西に振る。出土遺物には、須恵器壺、灰釉陶器椀、無釉陶器皿など(第97図292~294)がある。これらの土器は平安時代中期前葉に属する。なお、北辺柱筋中央部で建物の内側に掘られた方形土坑 S K 6094がある。後述するが、本建物に伴う地鎮

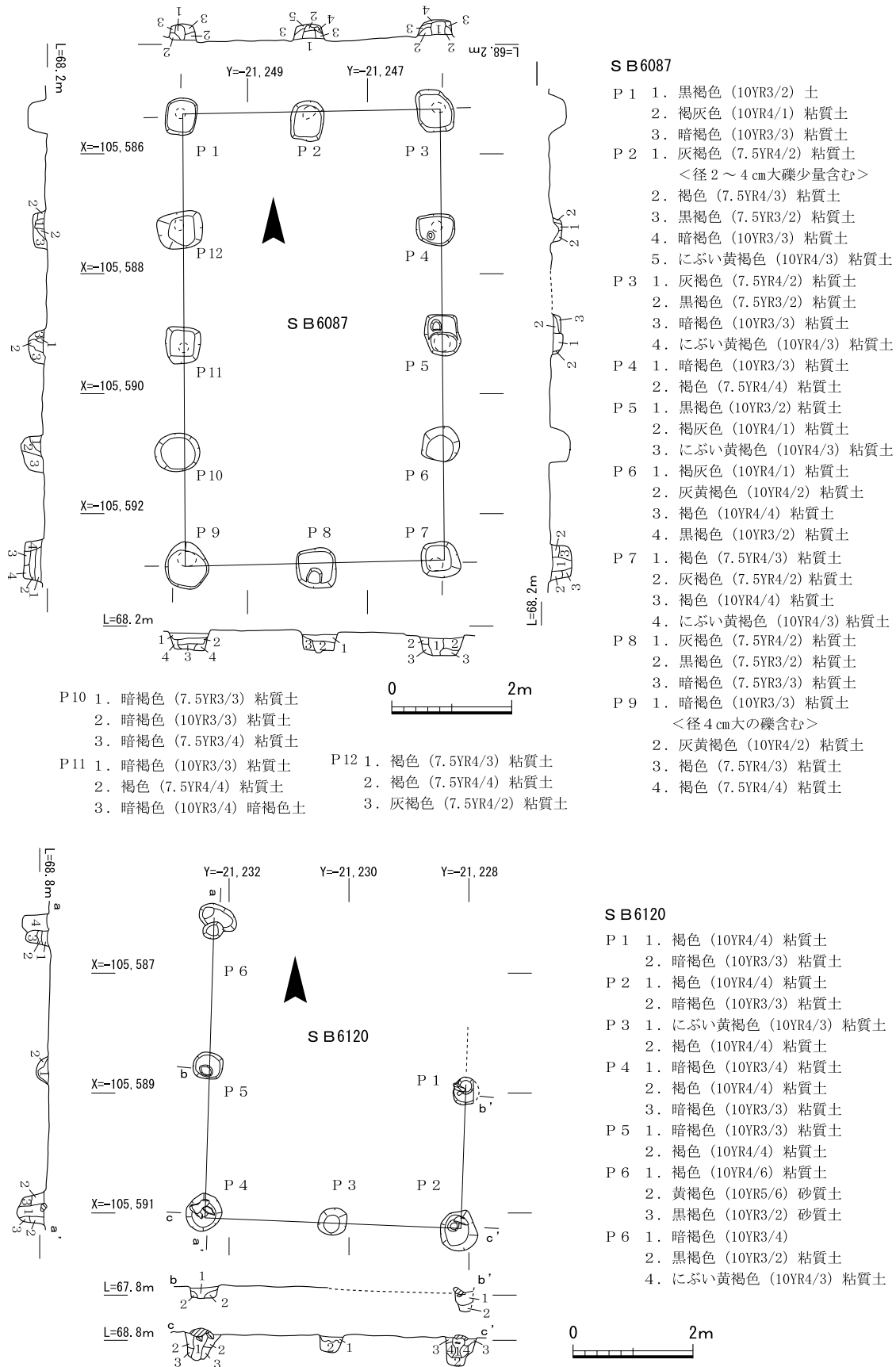


第60図 6区掘立柱建物 S B 6080平面・断面図

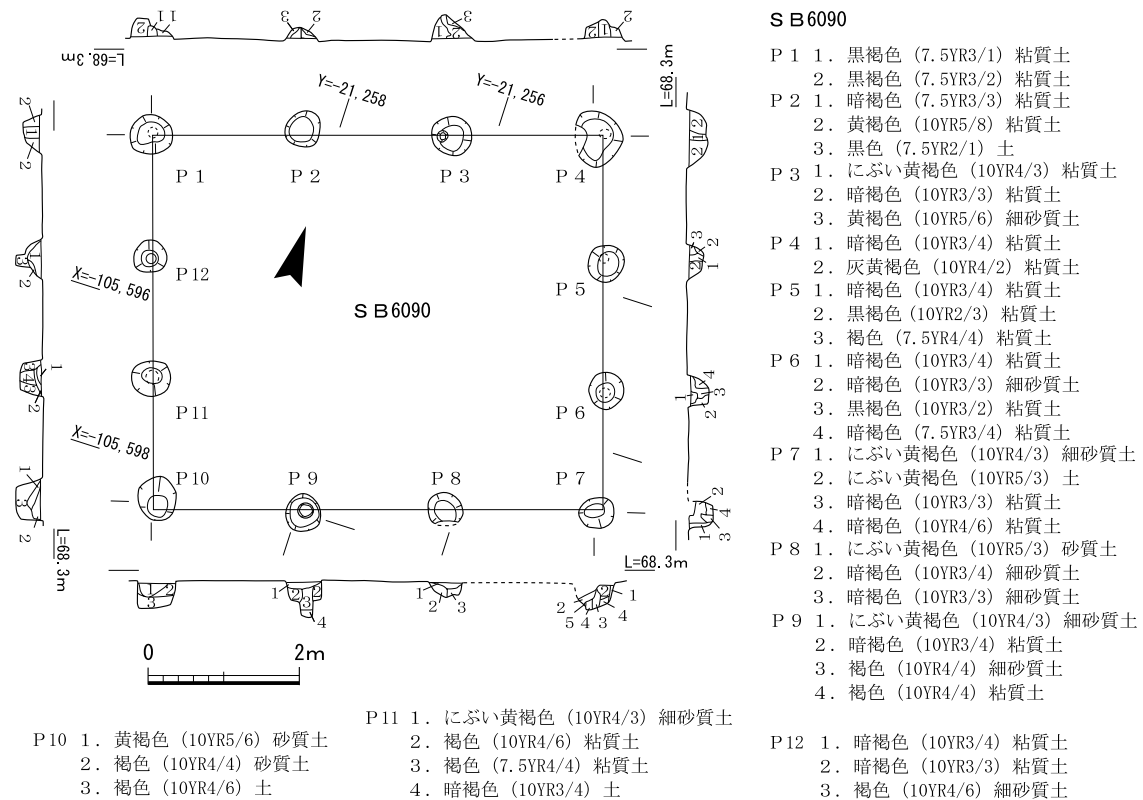
などの施設とみられ、平安時代中期前葉の土器が出土している。

掘立柱建物 S B 6145 (第64図) 6区中央部で検出した桁行2間(4.9m)、梁行2間(4.1m)の南北にやや長い建物である。円形の中心から測った柱間寸法は、南北2.4m(8尺)、東西1.8m(6尺)と2.1m(7尺)である。柱穴の平面形は円形で最大径は0.4~0.6m、残存の深さ0.15~0.3mを測る。柱痕跡はP 1とP 5以外は不明瞭である。建物の主軸は北から18°西に大きく振る。出土遺物は土師器及び須恵器の細片で時期は特定できなかった。建物の主軸方向などから、奈良時代末期~平安時代前期の建物である可能性がある。

掘立柱建物 S B 6146 (第64図) 調査区西部で検出した桁行3間(6.4m)、梁行2間(4.2m)の東西棟である。柱間寸法は梁行2.1m(7尺)、桁行1.8m(6尺)及び2.1m(7尺)を測る。柱穴の平面形は円形で、直径0.4~0.7m、深さ0.2~0.45mを測る。柱痕跡はP 3を除き確認できた。建物の主軸は、梁行が北から1°東に振る。出土遺物には平安時代前期中葉の黒色土器碗、須恵器杯・壺、



第61図 6区掘立柱建物 S B 6087・6120平面・断面図



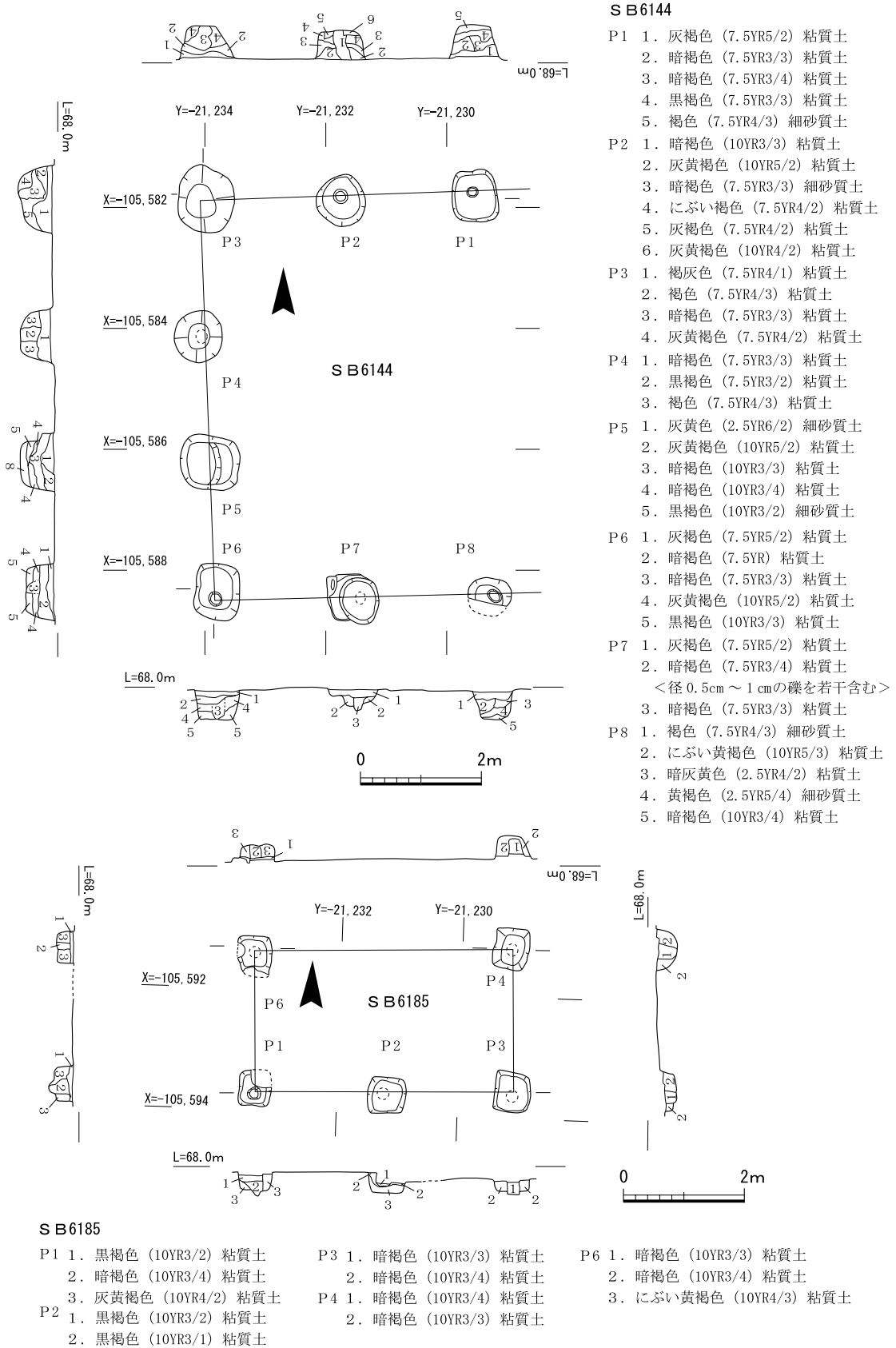
第62図 6区掘立柱建物 S B 6090平面・断面図

土師器甕など(第97図285~291)がある。

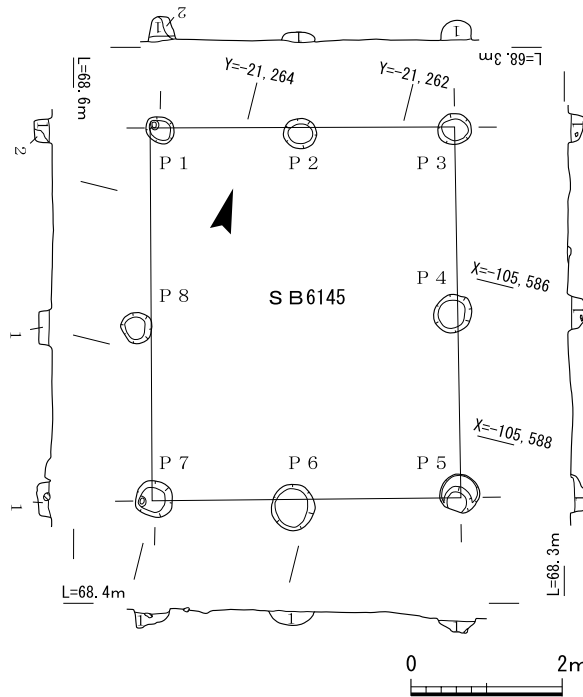
掘立柱建物 S B 6187 (第65図) 6区のほぼ中央で検出した、桁行3間(6.5m)、梁行2間(4~4.6m)の東西棟である。柱間寸法は、梁行東側で2.1m(7尺)、同西側で2.4m(8尺)、桁行2.1m(7尺)を測る。建物の側柱のほかにも、西寄りの内側柱筋上に1基の柱穴を検出した。西柱筋のうち北西隅柱穴(P1)はやや北に位置し、西柱筋が張り出すことから、廂の可能性はある。柱穴の平面形は方形で、規模は長さ0.55~0.8m、深さ0.1~0.3mを測る。主軸は、南北の梁行は北から4°西に振る。P3から平安時代前期後葉~中期前葉の土師器甕(第97図283)などが出土している。

掘立柱建物 S B 6200 (第66図) 6区の北西側で検出した東西棟である。後世の削平などで、西辺と、北辺の一部及び北西隅の柱穴が未検出ながら、直交する南と東柱筋から建物を復元した。桁行5間(8.4m)、梁行2間(4.7m)である。側柱の他にも、東から2間目にあたる南北柱筋中間に柱穴が1基ある。東柱筋が廂となる可能性を残すが、その場合は柱穴の深さが身舎よりも深くなることから、むしろ東の1間分は間仕切りとみておきたい。南北柱筋の間にある柱穴(P4)は東柱と推定される。柱間寸法は、梁行で2.1~2.7m、桁行1.5~1.7mを測る。柱穴の平面形はやや歪な方形で、長さ0.4~0.7m、幅0.35~0.55m、深さ0.1~0.3mを測る。建物主軸は、北から17°西に振る。柱穴P5から奈良時代末期~平安時代前期前葉の土器(第98図296)が出土している。

柱列 S A 6199 (第67図) 北西部で検出した方形掘形をもつ南北2間(4.8m)の柱列である。柱間寸法は2.1m(7尺)と2.4m(8尺)である。掘形の形状・規模は、建物の方形柱穴としても遜色のないもので、長さ0.6~0.8mの規模をもち、深さ0.15~0.25mを測る。主軸は北から2°西に振る。

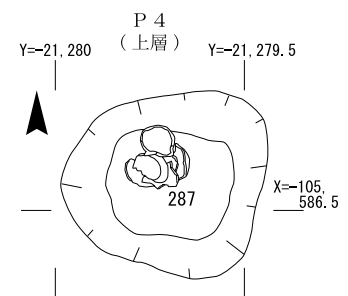
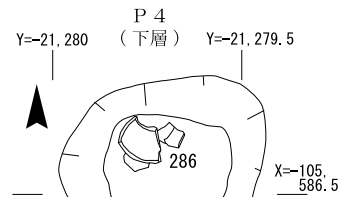
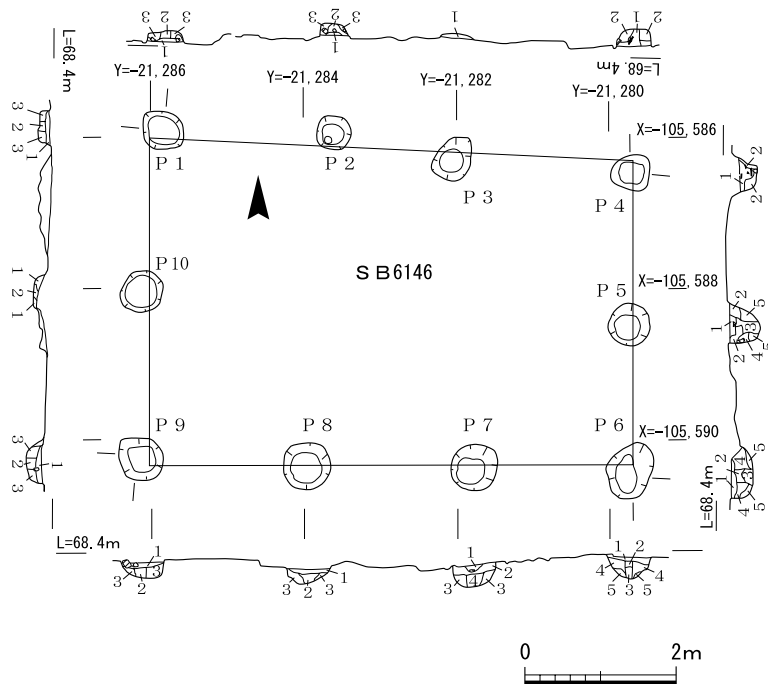


第63図 6区掘立柱建物 S B 6144・6185平面・断面図

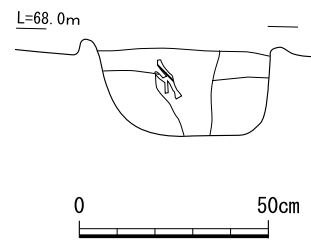


- S B 6145**
- P 1 1. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土
 - 2. 暗褐色 (7.5YR3/4) 土
 - P 2 1. 黒褐色 (7.5YR3/4) 粘質土
 - P 3 1. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土
 - P 4 1. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土
 - P 5 1. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土
 - P 6 1. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘質土
 - P 7 1. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土
 - P 8 1. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土

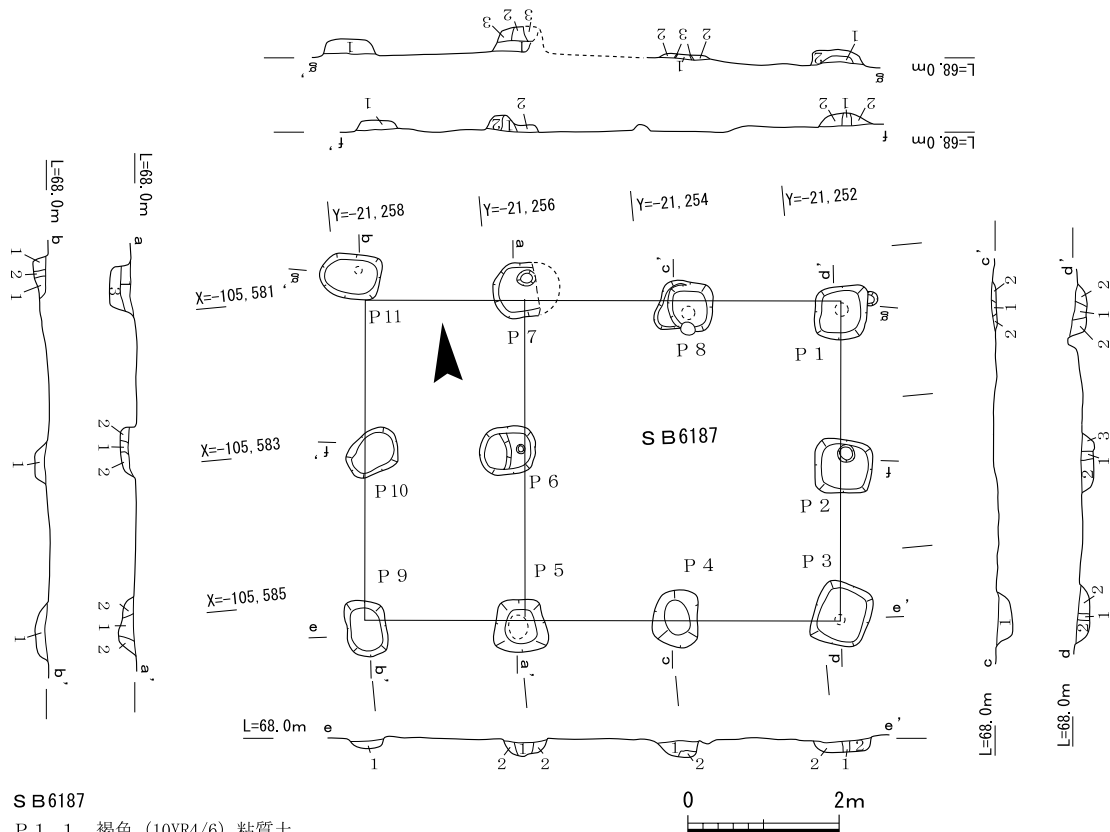
- S B 6146**
- P 1 1. にぶい褐色 (7.5YR5/3) 粘質土
 - 2. 褐色 (7.5YR4/4) 粘質土
 - 3. 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土
 - P 2 1. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土
 - 2. 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土
 - 3. 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土
 - P 3 1. 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土
 - 2. 褐色 (7.5YR4/6) 粘質土
 - 3. 灰褐色 (7.5YR5/2) 粘質土
 - P 4 1. 黒暗褐色 (7.5YR3/2) 粘質土
<径 5 ~ 1.5 cm の礫も含む>
 - 2. 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土
<径 5 cm 大の礫疎らに含む>
 - P 5 1. 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土
 - 2. 褐色 (7.5YR4/2) 粘質土
 - 3. 黒褐色 (7.5YR3/2) 細砂質土
 - 4. 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土
 - 5. 褐色 (7.5YR4/4) 粘質土



- S B 6146**
- P 6 1. 灰黄褐色 (10YR5/2) 細砂質土
 - 2. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土
 - 3. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質土
 - 4. 灰褐色 (7.5YR5/2) 粘質土
 - 5. にぶい褐色 (7.5YR5/4) 粗砂混土
 - P 7 1. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土
 - 2. 褐色 (7.5YR4/3) 細砂質土
 - 3. 褐色 (10YR4/6) 細砂質土
 - 4. 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土
 - P 8 1. 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土
 - 2. にぶい褐色 (7.5YR5/4) 細砂質土
 - 3. 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土
 - P 9 1. 灰褐色 (7.5YR5/2) 粘質土
 - 2. 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土
 - 3. 暗褐色 (7.5YR3/3) 土
 - P 10 1. 褐色 (7.5YR4/6) 粘質土
 - 2. 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土



第64図 6区掘立柱建物 S B 6145・6146平面・断面図



S B 6187

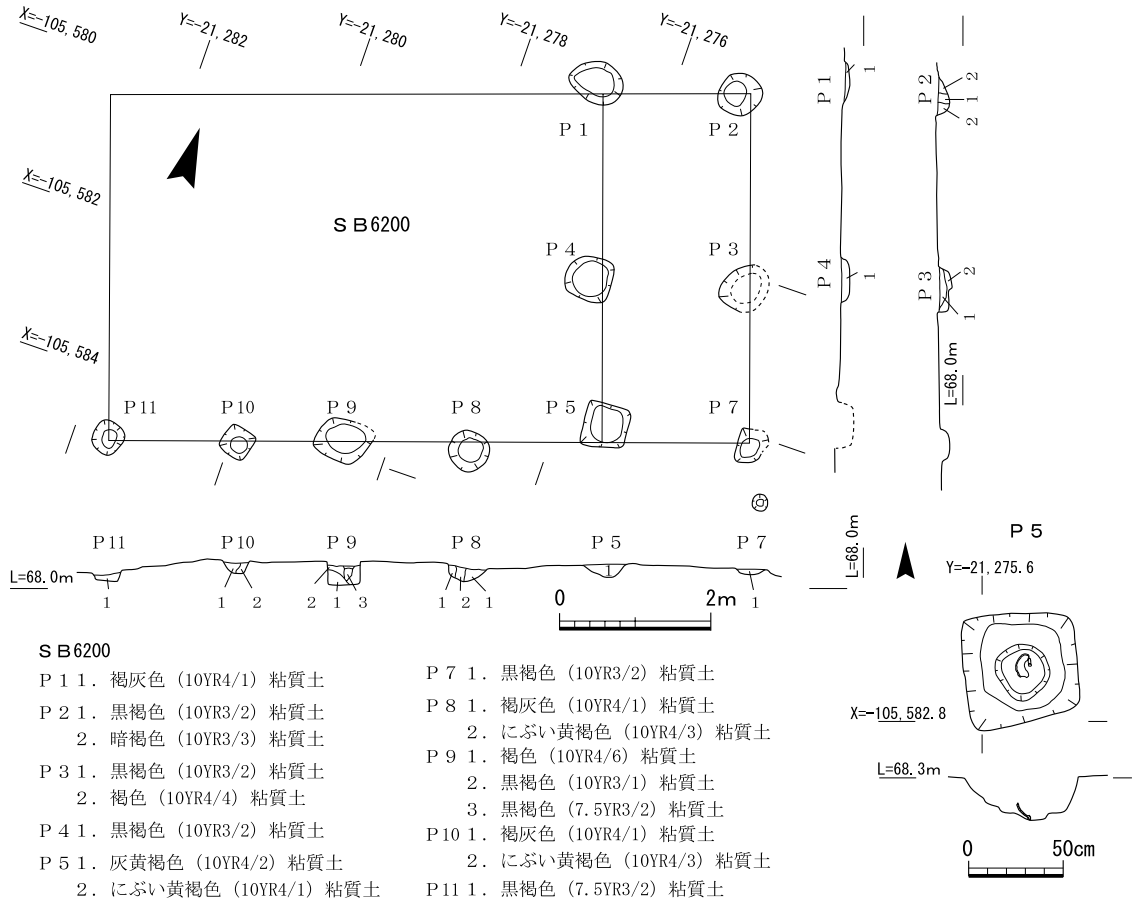
- | | | | | | |
|-----|----------------------|-----|-------------------------|------|-------------------------|
| P 1 | 1. 褐色 (10YR4/6) 粘質土 | P 5 | 1. 暗褐色 (10YR3/4) 粘質土 | P 8 | 1. 褐色 (10YR4/4) 粘質土 |
| | 2. 褐色 (10YR4/4) 粘質土 | | 2. 褐色 (10YR4/4) 粘質土 | | 2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土 |
| P 2 | 1. 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土 | P 6 | 1. 褐色 (10YR4/6) 粘質土 | | 3. 灰黄褐色 (10YR4/2) |
| | 2. 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土 | | 2. 褐色 (10YR4/4) 粘質土 | P 9 | 1. 褐色 (10YR4/4) 粘質土 |
| | 3. 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土 | P 7 | 1. 褐色 (10YR4/4) 粘質土 | | 2. 褐色 (10YR4/4) 粘質土 |
| P 3 | 1. 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土 | | 2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土 | P 10 | 1. 褐色 (10YR4/4) 粘質土 |
| | 2. 暗褐色 (10YR3/4) 粘質土 | | 3. 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土 | | 2. 灰黄褐色 (10YR4/2) |
| P 4 | 1. 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土 | | | P 11 | 1. にぶい黄褐色 (10YR4/3) |
| | 2. 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土 | | | | 2. 灰黄褐色 (10YR4/2) |

第65図 6区掘立柱建物 S B 6187平面・断面図

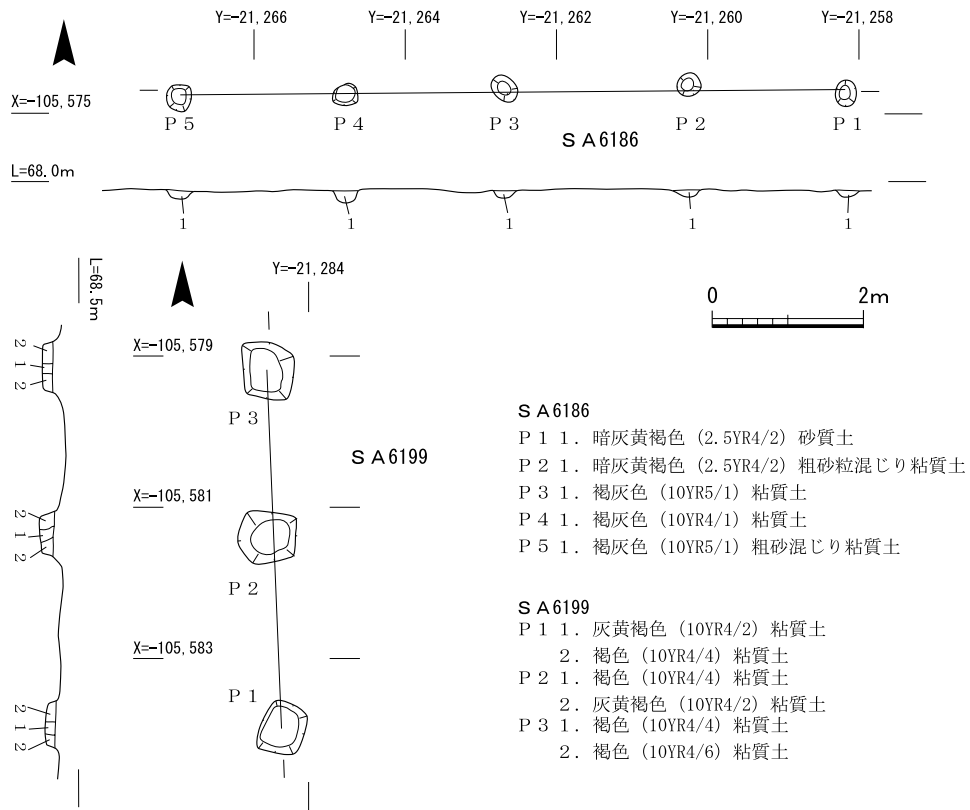
時期の判明する遺物は出土していない。

柵列 S A 6186 (第67図) 北壁中央部に近く、東西方向に4間分(8.8m)検出された。掘形は明瞭ではなく、直接打ち込まれた杭列とみられる。杭間寸法は、P 2とP 3の杭間のみ2.4m(8尺)で、その他の杭間は2.1m(7尺)である。杭跡の平面形は円形で、直径約0.3m、深さ0.1~0.15mを測る。建物主軸は、北から1°東に振る。遺構の北側は、後世の掘り込みや土坑による削平が顕著で、建物等の遺構はみられない。出土遺物がないため正確な設置時期は不明である。

柱列 S A 6270・6271・柵列 S A 6272 (第68図) S B 5130の約15m南で、東西方向の柵列3~4基を検出した。もっとも南側の柱列 S A 6270は、2間(4.4m)で、柱間寸法は2.1~2.3mを測り、P 6202、P 6175、P 6208から構成される。柱穴掘形は方形で、規模はP 6208は一辺約0.6mを測り、P 6202・6175は一辺0.8~0.9m、深さ約0.4~0.5mを測る。P 6175は基底部に柱当りとみられる径0.25mの落ち込みが確認できる。またP 6202から平瓦が出土している。主軸は北から1°30'西に振る。柱列 S A 6271は、2間(3.9m)で、柱間寸法は1.8~2.0mを測る。P 6205、6177、6176から構成される。柱穴掘形は、歪な方形及び不整形で、一辺0.35~0.45m、深さ0.2~0.35mを測る。



第66図 6区掘立柱建物SB6200平面・断面図



第67図 6区柵列S A6186、柱列S A6199平面・断面図

S A6270よりも、各柱穴は一回り小さく、深さも浅い。主軸は北から1°西に振る。S A6272はS A6270、6271よりもやや東寄りで検出した2間(3.7m)の柵列である。円形の掘形をもつ柱穴からなり、径約0.3~0.35m、深さ0.25mを測る。主軸は、北から2°東に振る。この周辺では大小の柱穴を多数検出しており、柵列の建て替えが行われたとみられる。また、瓦は調査地全体のなかでも、特にこの地点に集中して出土しており、周囲に瓦を使用する施設があった可能性が高い。奈良時代の須恵器(第97図295)が出土している。S B5130とほぼ主軸を揃えることから、S B5130の前庭の南限に設けられた柵列であった可能性が高い。

柱穴S P6013(第57図) 円形柱穴で、直径0.2m、深さ0.1mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土である。平安時代前葉の土師器皿(第98図297)が出土している。

柱穴S P6212(第57図) 円形柱穴で、直径0.3m、深さ0.15mを測る。掘立柱建物S B6080内にある。平安時代前期中葉の須恵器杯B(第98図299)が出土している。

柱穴S P6269(第57図) 北東隅から、土坑に一部削平された状態で検出した。直径約0.25m、深さ0.15mを測る。須恵器皿B(第98図298)が出土した。

柱穴S P6111(第57図) 掘立柱建物S B6144のP2の北側で検出した方形柱穴である。長さ0.5m、幅0.4m、深さ0.2mを測る。平安時代中期後半に属するとみられる土師器羽釜の破片(第98図301)が出土した。

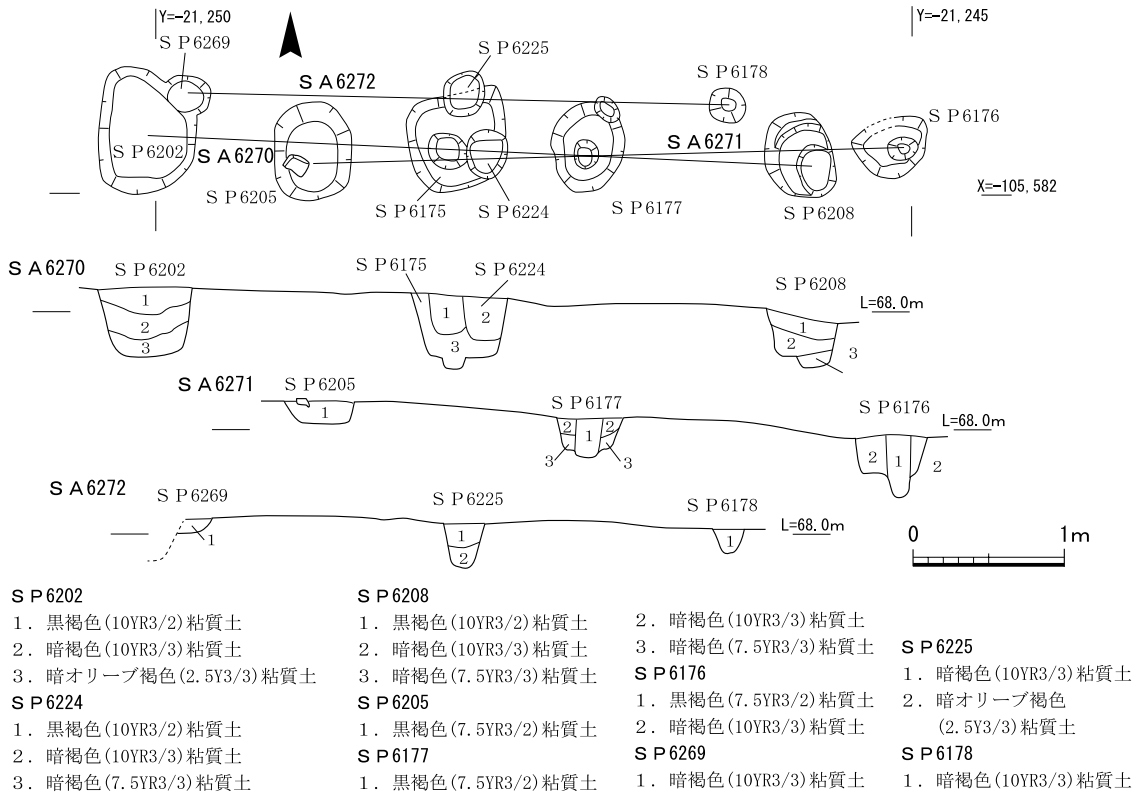
土坑S K6094(第57図) 掘立柱建物S B6185内の北辺中央で検出した方形土坑である。長さ0.8m、幅0.6m、深さ0.3mを測る。建物の柱筋からは外れる。土坑中央部から角礫と頸部を欠く須恵器壺(第97図292)が、底部を上にした状態で、破片となって出土した。地鎮などの行為をとどめている可能性がある。埋土からは平安時代前期前葉の土器が出土している。

土坑S K6078(第57図) 調査区中央部で検出された幅広の歪な隅丸方形を呈する土坑である。掘立柱建物S B6087と掘立柱建物S B6187のP1により一部削平され、建物に先行する遺構である。長さ5m以上、幅4m、深さ0.1~0.25mを測る。平安時代前期後葉の土師器甕、須恵器皿・杯A・壺、灰釉陶器椀など(第98図306~313)が出土している。

土坑S K6005(第69図) 竪穴建物S H6088と重複して検出した土坑である。平面形は幅広の隅丸方形である。上層を近世土坑として掘削をはじめたが、下層より平安時代の遺物がまとまって出土した。規模は、長さ5.4m、幅3.7m、深さ0.85mを測る。埋土は褐灰色・灰褐色を呈し、径5mmから1cmの細礫を含む砂質土で、最下層の褐灰色細砂質土の上面に鉄分が沈着している。土坑内からは平安時代前期後葉を中心とする緑釉陶器皿・椀など(第98図315~318)が出土した。

土坑S K6169(第57図) 竪穴建物S H6088の南で検出した細長い土坑である。長さ5m、幅1.3m、深さ0.1~0.15mを測る。埋土は、暗褐色粘質土及びにぶい黄褐色細砂質土で、北半部から平安時代中期前半とみられる灰釉陶器椀の破片(第98図324)が出土した。

土坑S K6165(第57図) 土坑S K6006の北側で検出した楕円形の土坑である。長さ1.5m、幅0.65m、深さ0.3mを測る。埋土は、にぶい黄褐色細砂質土及び褐色粘質土が混在している。平安時代前期前葉の土器(第98図326)が出土している。



第68図 6区柱列S A 6270・6271、柵列6272平面・断面図

土坑 S K 6135 (第57図) 南部で検出した東西に細長い楕円形状の土坑である。長さ1.6m、幅0.45m、深さ0.25mを測る。12世紀後半の白磁碗の底部(第98図327)が出土した。

土坑 S K 6245 (第69図) 調査区東部で確認した小土坑である。平面形が楕円形状の土坑である。長径0.55m、短径0.4m、深さ0.2mを測る。須恵器大型鉢(第98図300)が完形で出土し、鉢の下層のレベルで長さ0.15mの扁平な石材が出土した。地鎮に関わる土坑とみられる。平安時代前期中葉から後葉頃の土坑であろう。

c. 江戸時代

6区では、肥前系陶磁器をはじめ近世の土器類を出土した大小の土坑を検出した。少なくとも十数基を確認している。主なものを記したい。

土坑 S K 6006 (第57図) 土坑 S K 6005の南で検出した不定形な楕円形である。規模は、長さ4.5m、幅2.6m、深さ0.5mを測る。埋土は大きく4層に分かれ、褐灰色及びにぶい黄橙色粘質土を主とし、上半に焼土を多く含む。江戸時代後期の青磁碗など(第98図319~321)が出土している。

土坑 S K 6009 (第69図) 調査区北東の北壁近くで検出したやや歪な隅丸方形の土坑である。規模は、長さ1.2m、幅0.75m、深さ0.45mを測る。上層から石材が出土している。検出状況及び埋土の状態から江戸時代後期と推定される。

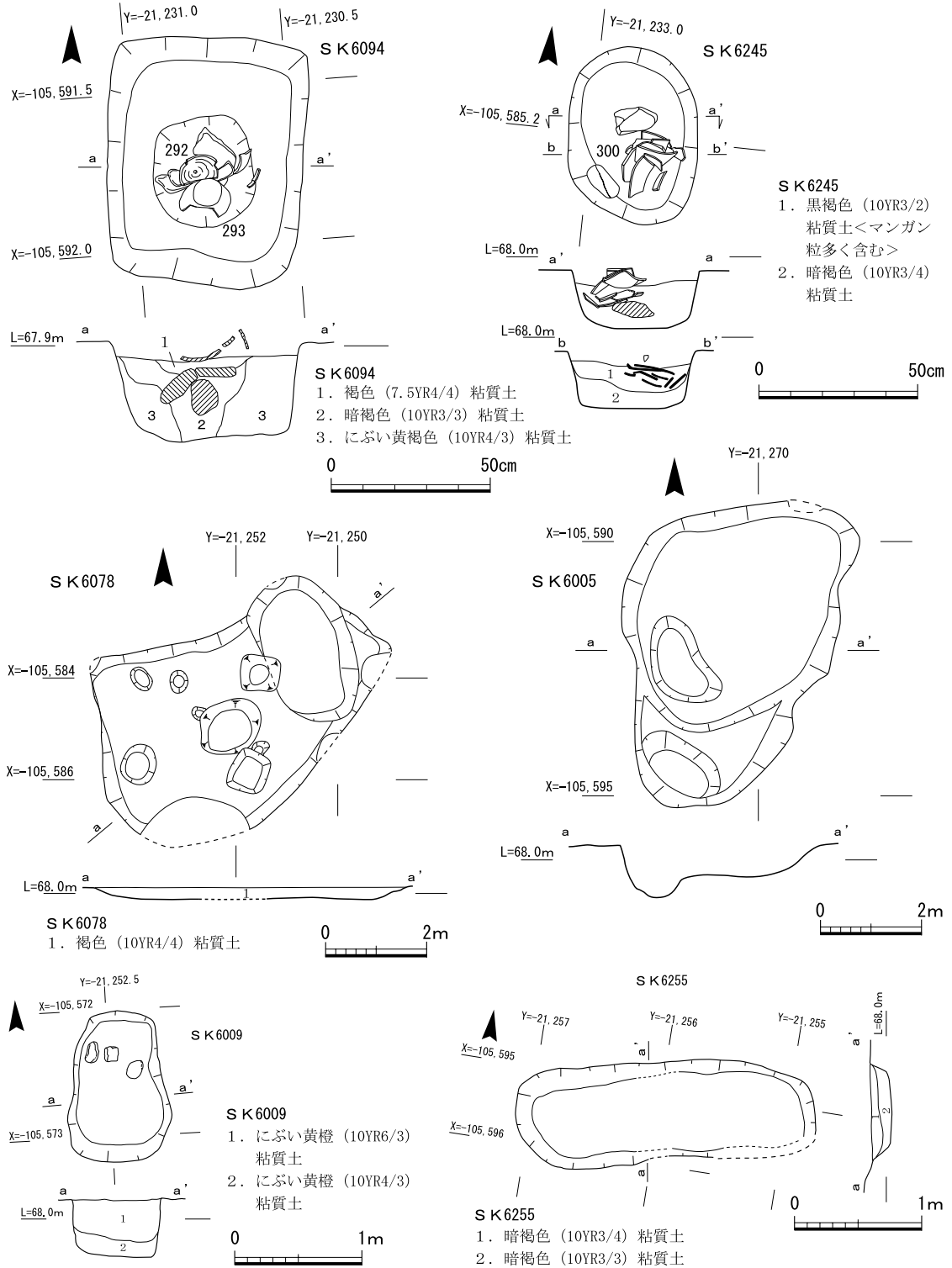
土坑 S K 6077 (第57図) 調査区北東側に掘られた楕円形の大型土坑である。大きく3基の土坑が次々に拡張されている。規模は、長さ3m、幅1.1m、深さ0.4mを測る。最下層から有機質の編み物の断片や肥前系陶磁器碗の破片などが出土した。江戸時代後期のものであろう。

土坑 S K 6255 (第69図) 歪な長方形土坑である。長さ2.35m、幅1.8m、深さ0.3mを測る。埋土に炭化物等を多く含む。検出状況から、江戸時代後期の土坑と推定される。

(黒坪一樹・高野陽子)

④ 7区の検出遺構(第57図)

6区南側の調査区である。両区の間は、コンクリートで造られた通路で分断されている。掘削



第69図 6区土坑群平面・断面図

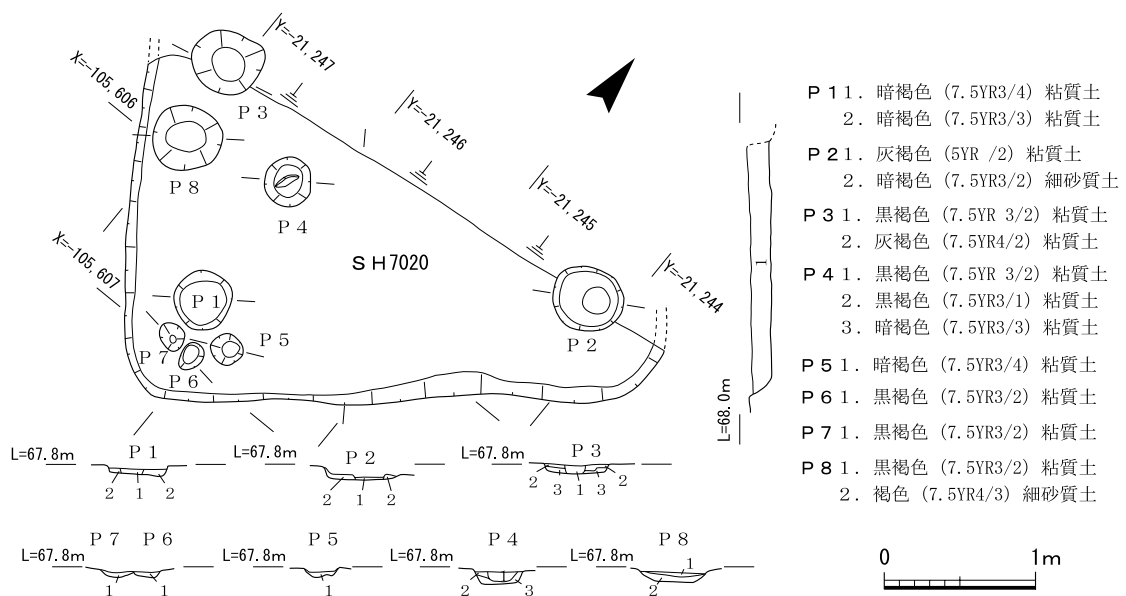
前は6区同様、コンクリートの隔壁で細かく区画された耕地であった。重機でコンクリート隔壁を除却し、さらに耕作土及び床土の第5層までを除去し、第6層上面で人力による精査をすすめた。

検出したおもな遺構は、奈良～平安時代の竪穴建物2棟、掘立柱建物2棟、柱列1条、柵列1条、土坑3基、柱穴群、杭跡などである。

竪穴建物 S H 7020 (第70図) 北壁中央で床面の約3分の1を検出した住居である。平面形は一辺3.6mの方形を呈し、検出面での深さは0.25mを測る。建物主軸は、北から20°西に振る。主柱穴は3基を確認し、直径約0.25m、深さ約0.1mを測る。床面から、土師器甕、須恵器甕(第100図334・335)などが出土し、奈良時代前半の住居とみられる。

竪穴建物 S H 7030 (第71図) 調査区中央寄りで検出した方形の竪穴建物である。規模は、一辺5.2m、深さは0.3mを測る。建物の主軸は北から4°西に振る。埋土の堆積は暗褐色粘質土や暗褐色細砂礫など3層に分かれる。東壁の南端近くに、馬蹄形に造り付けられた竈を検出した。竈壁体は、長さ1.25m、幅1.3m、高さ0.1～0.15mを測る。燃烧部内は、鮮やかな赤色の焼土及び炭化物が層を成し、良好に残っていたが、支脚は確認できなかった。また、燃烧部から掻き出された炭化物や焼け土の広がりが見られた。その他の施設として、南壁のやや東側に半円形に掘られた土坑K1がある。直径0.6m、深さ0.2mを測る。中から須恵器杯B(第98図342)が出土した。おそらく貯蔵穴であろう。出土土器から、建物の時期は奈良時代前半と推定される。なお、土坑K2は、本建物の南壁を削平して掘削されることから、より新しい時期のものとみられる。長軸0.75m、短軸0.5m、深さ0.45mを測る。中から須恵器杯A・杯B、扁平な大型の板石などが出土し、奈良時代前期前半と推定される。

掘立柱建物 S B 7150 (第72図上) 南東側で検出された南北1間分(2.4m)、東西3間分(6.5m)の建物である。南側は調査区外のため全体規模は不明である。柱間寸法は東西2.1m(7尺)と2.4m(8



第70図 7区竪穴建物 S H 7020平面・断面図

尺)で、南北P 1・6間は2.4m(8尺)である。柱穴の掘形は、P 1～4は隅丸方形に近く、P 1とP 6は楕円形を呈する。一辺は0.5～0.9m、深さは北東隅のP 4のみ0.8mと極端に深く、他のものは0.3～0.5mを測る。柱位置の痕跡はP 2とP 5を除き確認できたが、いずれも柱根は遺存せず抜き取り痕もみられなかった。埋土は褐色及び暗褐色の粘質土である。主軸は真北からわずかに1°西に振る。ほぼ真南北に建てられている。埋土から奈良時代から平安時代前期前葉の土器(第100図343・344)が出土している。

掘立柱建物 S B 7160(第72図下) S B 7150から西に18m離れて検出された桁行3間分(5.4m)、梁行2間(4.2m)の南北棟である。柱間寸法は梁行2.1m(7尺)、桁行1.8m(6尺)等間である。建物の主軸は、北から1°東に振る。柱穴の掘形は、P 1・P 3・P 8が方形、その他の柱穴は円形に近い。柱穴は直径0.45～0.7m、深さは0.15～0.3mを測る。柱痕跡はP 2を除き確認できた。建物の主軸は、北から2°東に振る。平安時代前期中葉の土器(第100図345～348)が出土している。

柱列 S A 7178(第73図右) 南壁寄りで確認した東西方向の柱列である。南側に展開して掘立柱建物になる可能性がある。長さは4.2mで、柱間寸法は2.1m(7尺)を測る。柱穴の掘形は円形で、最大寸法は0.45～0.5m、深さは0.1～0.35mを測る。柱痕跡はP 1・2で確認した。主軸は北から1°30′西に振る。

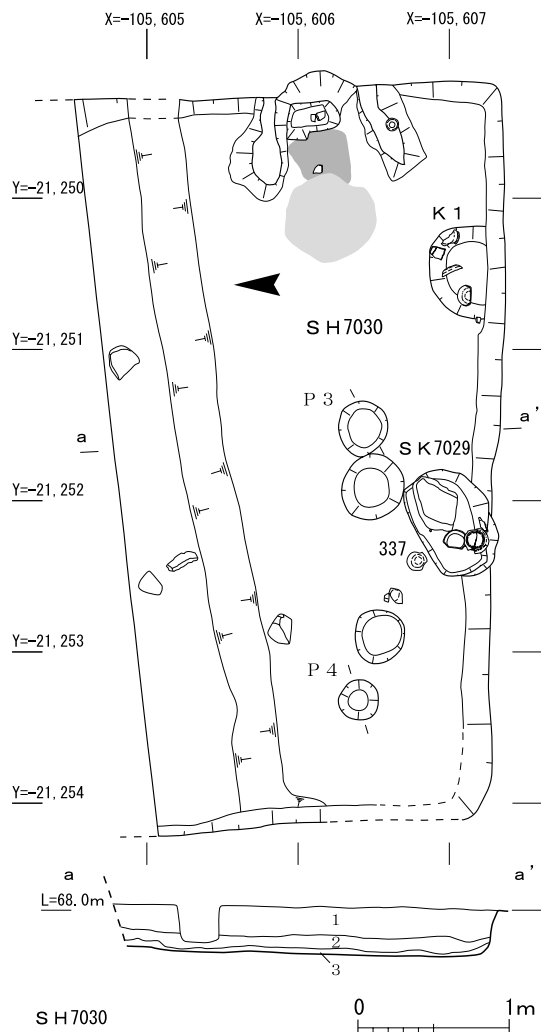
柵列 S A 7170(第73図左) 西半部で検出した南北方向に延びる柵列である。長さ4.3mを測り、柱間寸法は、2.1m(7尺)を測る。主軸は、北から1°東に振る。柱穴掘形は円形をなし、直径0.25～0.3m、深さ0.1～0.2mを測る。主軸や柱穴埋土の状況から、平安時代前期後半の柵列と推定される。

柱穴 S P 7094(第57図) 調査区中央で検出した円形の掘形をもつ柱穴である。規模は、直径0.3m、深さ0.2mを測る。緑釉陶器皿(第100図349)が出土している。

土坑 S K 7031(第57図) 竪穴建物 S H 7030の西側で検出した不整形の土坑で、同建物に一部削平される。北西側にゆるやかな弧を描くラインから、竪穴建物ではなく、大型土坑とした。規模は2.0m、深さ0.35mを測るが、全体の形状及び大きさは北壁により不明である。

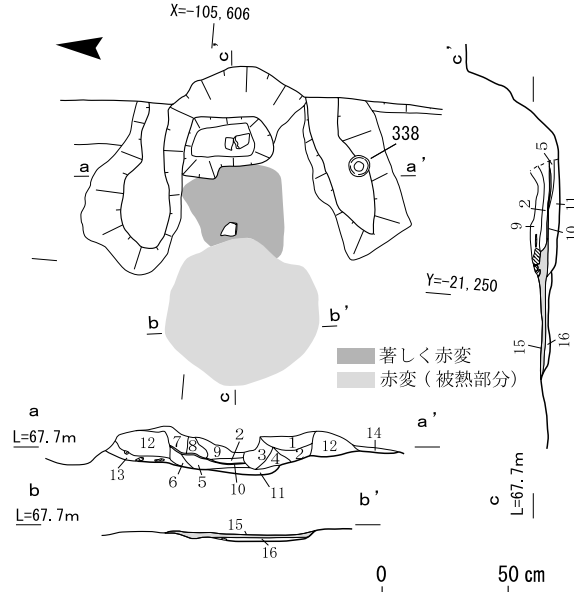
土坑 S K 7029(第74図右) 調査区中央で検出した土坑である。平面形は楕円形状を呈し、規模は長径2.0m以上、短径1.2m以上を測る。北側にさらに拡張するものとみられる。奈良時代前半の土器(第100図359～361)が出土した。

土坑 S K 7177(第75・76図) 北壁により全体の形状は不明ながら、確実に北側にも拡張する大型土坑である。規模は、半円形の部分で直径5.3m、深さ0.7m、南西側の楕円形の部分が長径2.2m、短径1.3m、深さ0.2mを測る。埋土は大きく上層・中層・下層の3層に分かれ、それぞれ7層：灰黄褐色粘質土、9層：暗褐色粘質土、10層：暗褐色粘質土(0.1～0.3m大の礫を多量に含む)に対応する。出土土器は、平安時代の須恵器・土師器・陶磁器(第101～105図362～446)である。今回調査の全体で最も多く遺物が出土した遺構である。すべて7層と9層から出土し、両層の出土土器に顕著な年代差は認められない。出土土器から、時期は平安時代前期前葉から中葉と推定さ



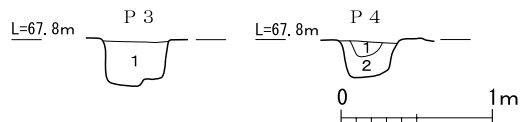
S H 7030

1. 暗褐色 (7.5YR 3/3) 粘質土
 <褐色 (7.5YR4/4) 土を斑らに含む>
2. 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土
3. 暗褐色 (10YR3/3) 礫混じり粘質土<径2~5cm礫含む>

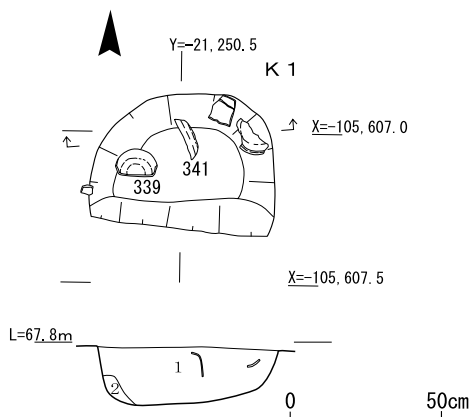


S H 7030 竈

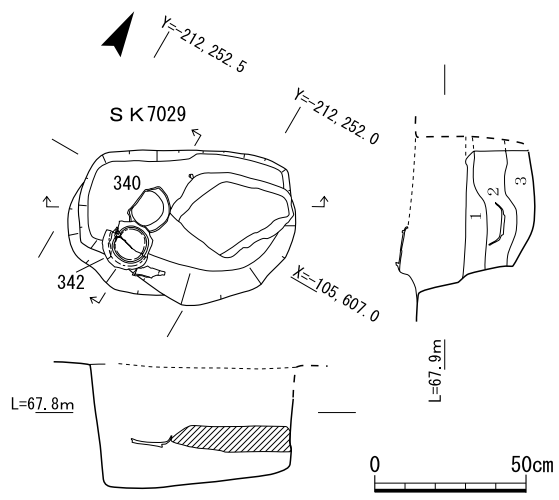
1. 褐色 (5YR6/6) 細砂質土
2. 極暗赤褐色 (5YR2/4) 粘質土
3. 灰褐色 (7.5YR5/2) 細砂質土
4. 暗赤褐色 (5YR3/6) 粘質土
5. 赤褐色 (5YR4/8) 粘質土
6. 褐色 (7.5YR4/4) 細砂粒混じり粘質土
7. 赤褐色 (5YR4/6)
8. 明赤褐色 (5YR5/6)
9. 橙色 (7.5YR7/6) 細砂質土
10. 炭層
11. にぶい赤褐色 (2.5YR4/4) 粘質土
12. 暗赤褐色 (5YR3/2) 粘質土
13. 灰褐色 (5YR4/2) 粘質土
14. 暗赤灰色 (2.5YR3/1) 砂質土
15. 極暗褐色 (5YR2/4) 粘質土
16. 褐色 (10YR4/4) 砂質土



- P 3 1. 暗褐色 (7.5YR 3/4) 粘質土
- P 4 1. 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土
 2. 褐色 (7.5YR3/2) 粘質土

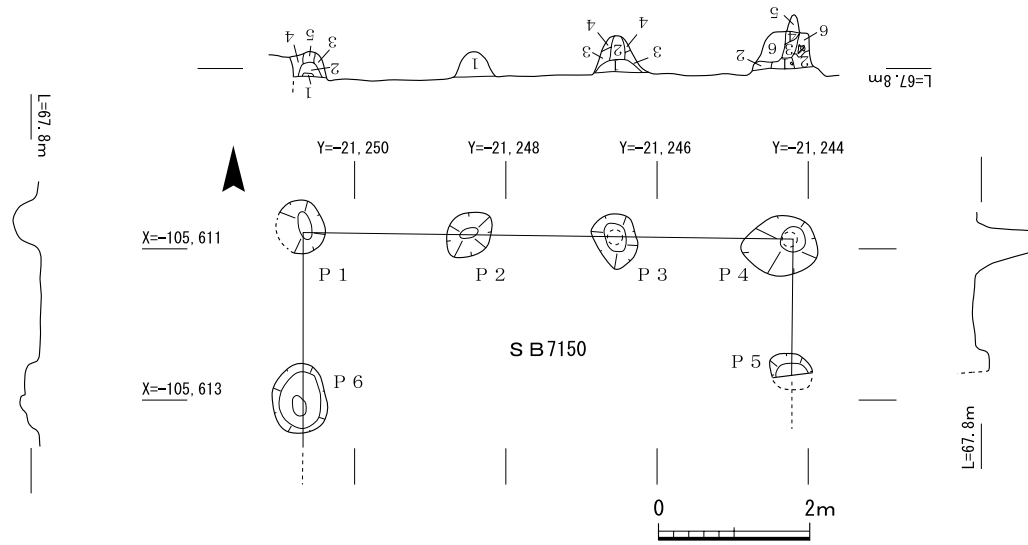


- K 1 1. 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土
 2. 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土



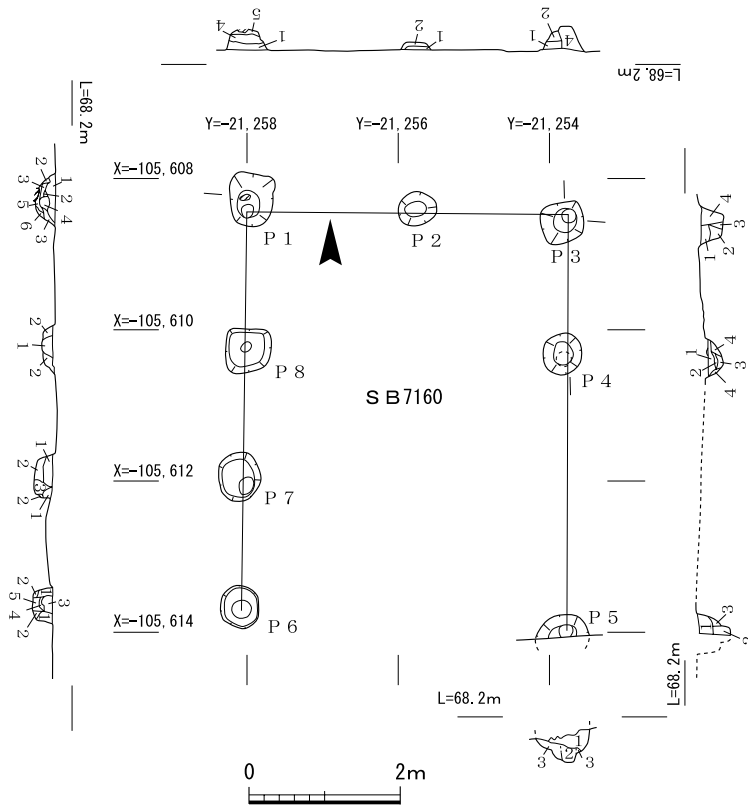
- S K 7029 1. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土
 2. 褐色 (10YR4/4) 粘質土
 3. 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土

第71図 7区竪穴建物 S H 7030全体、竈部、土坑平面・断面図



SB7150

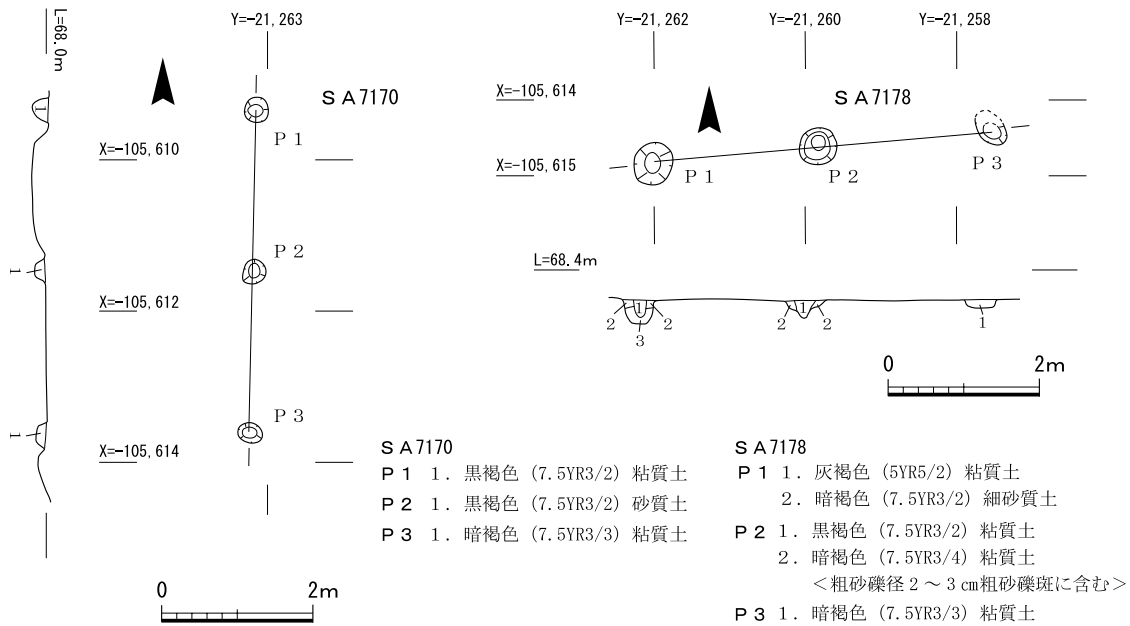
- P 1** 1. にぶい褐色 (7.5YR5/3) 粘質土 2. 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土 3. 褐色 (7.5YR4/4) 粘質土 4. 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土 5. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土
- P 2** 1. 暗灰黄褐色 (2.5YR4/2) 砂質土 3. 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土 2. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土 4. 褐色 (7.5YR4/6) 粘質土 4. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土
- P 3** 1. 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土 2. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土 3. 褐色 (7.5YR4/6) 粘質土 4. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土
- P 4** 1. 暗褐色 (10YR3/4) 砂質土 2. 褐色 (7.5YR4/4) 粘質土 3. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土 4. 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土 5. 褐色 (10YR4/4) 粘質土 6. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土



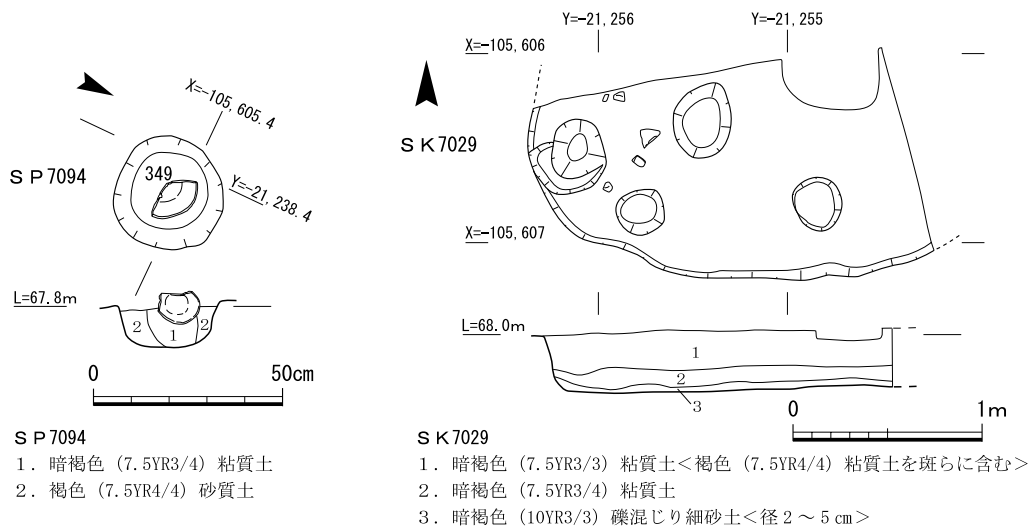
SB7160

- P 1** 1. 暗褐色 (10YR3/4) 砂質土 4. 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土 5. 褐色 (10YR4/4) 粘質土
- P 2** 1. にぶい褐色 (7.5YR5/3) 粘質土 2. 褐色 (10YR4/6) 粘質土
- P 3** 1. 褐色 (7.5YR4/6) 細砂質土 2. にぶい褐色 (7.5YR5/4) 粘質土 3. 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土 4. 褐色 (7.5YR4/2) 粘質土
- P 4** 1. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土 2. 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土 3. にぶい褐色 (7.5YR5/4) 粘質土 4. 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土
- P 5** 1. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土 2. 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土 3. 暗褐色 (7.5YR3/4) 細砂質土 <明褐色を斑らに含む> 4. 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土
- P 6** 1. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 2. 褐色 (7.5YR4/6) 粘質土 3. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土 4. 灰褐色 (7.5YR4/2) 細砂質土 5. 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土
- P 7** 1. 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土 2. 褐色 (7.5YR4/6) 粘質土 3. 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質土
- P 8** 1. 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土 2. 褐色 (7.5YR4/2) 粘質土

第72図 7区掘立柱建物SB7150・7160平面・断面図



第73図 7区杭列 S A 7170・7178平面・断面図

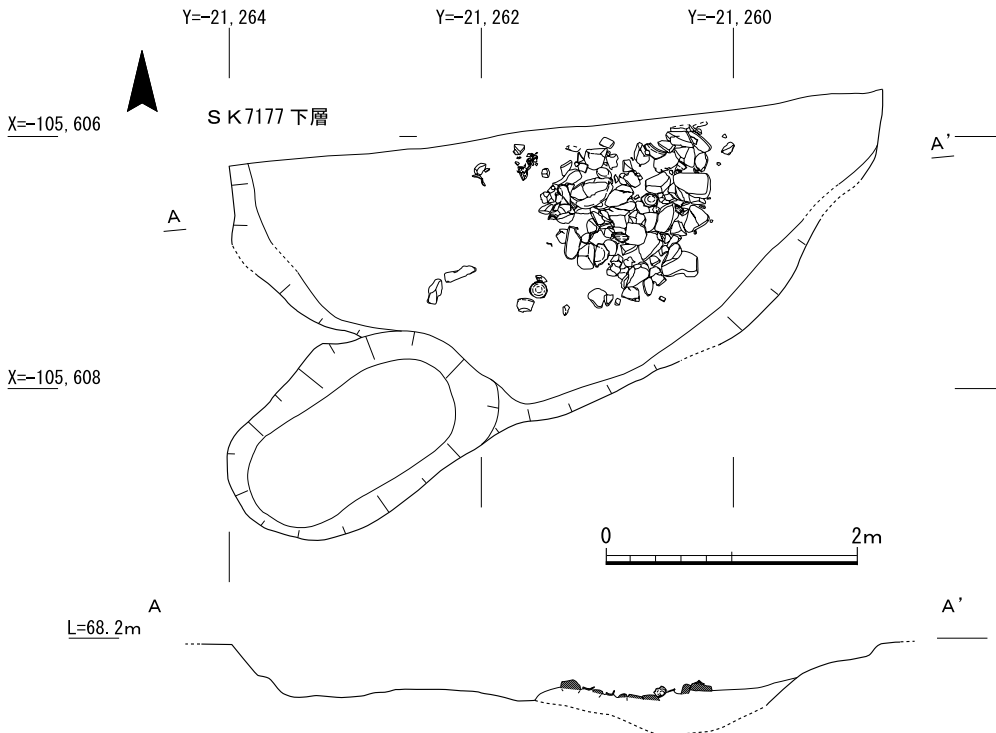
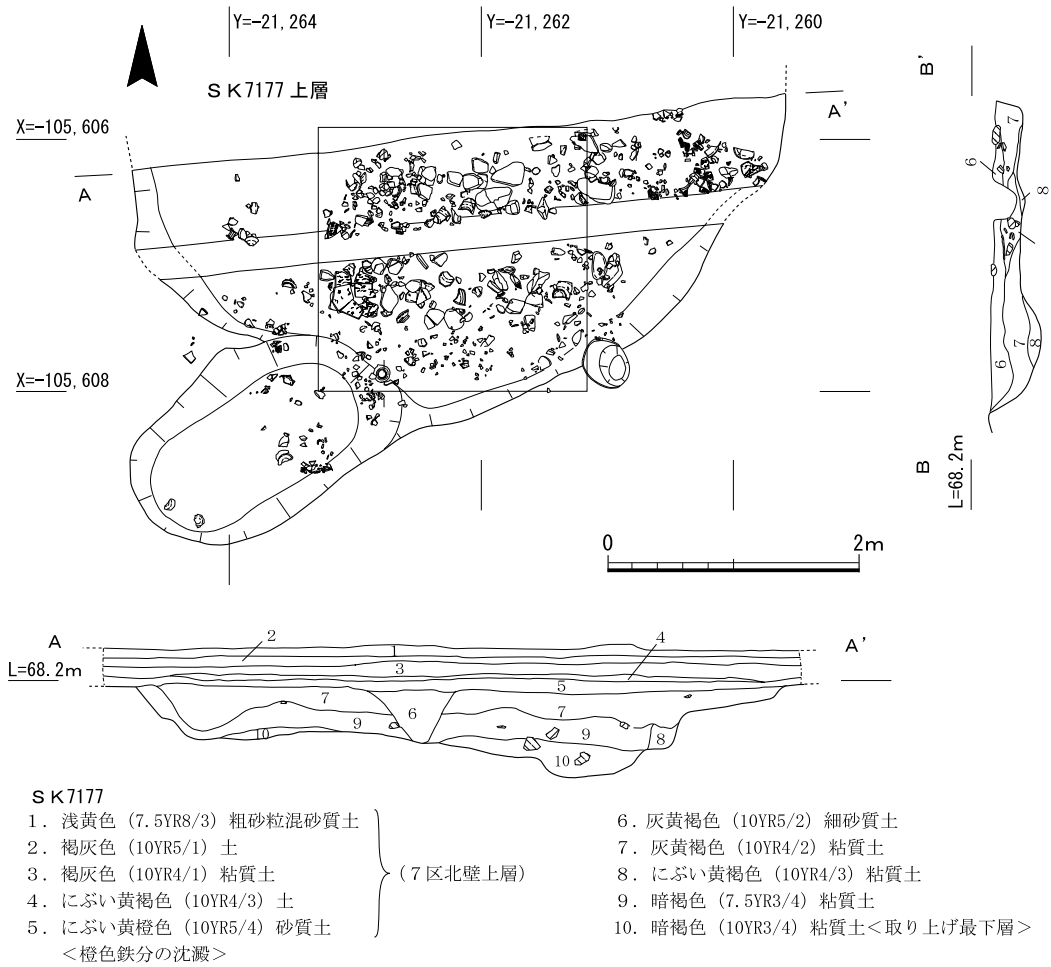


第74図 7区柱穴 S P 7094、土坑 S K 7029平面・断面図

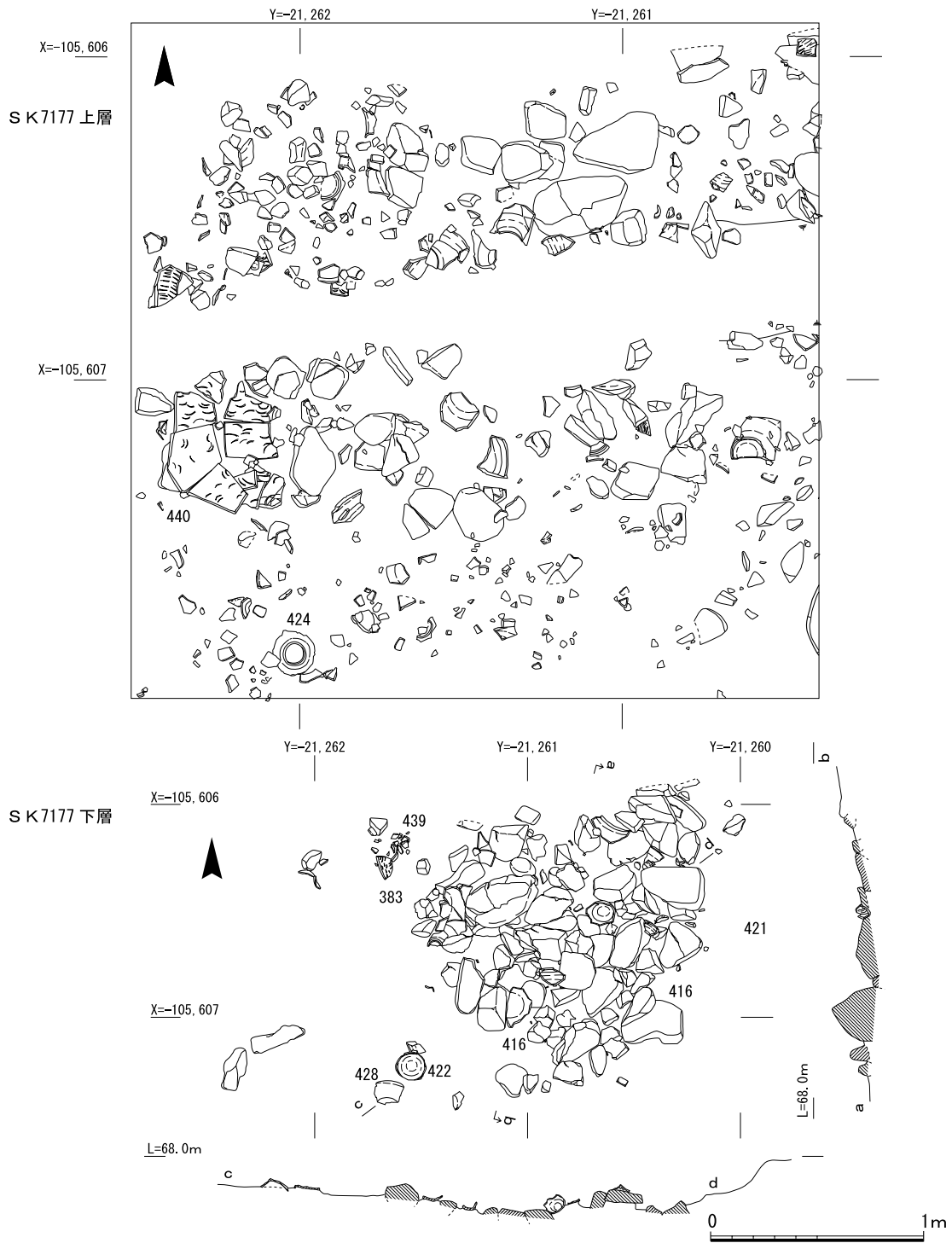
れる。なお10層中の礫は、投棄されたものとみられる。(黒坪一樹)

3) 8・9区及び周辺部の調査

8・9区は、教養教育共同化施設(仮称)の建設に伴う周辺施設の移転工事に先立ち、府立大学構内で調査を実施したものである。8区は、7区南西に約120mの地点に設定した調査区である。府立大学構内北部の5号館北側に位置し(第77図)、北には府立植物園が隣接する。当初、100㎡の調査として開始したが、遺構の広がりを確認するため西側50㎡を拡張し、計150㎡の調査を実施した。調査面積は152㎡を測る。また、8区の調査と並行して、8区西側で8 A地点と8 B地点(第78図)の2か所のグリッド調査を実施した。調査面積は、8 A地点は5㎡、8 B地点は3㎡を測る。9区は、府立大学構内西部の体育館南側に設定した調査区である。調査面積は235㎡を



第75図 7区土坑S K7177遺物出土状況図(1)



第76図 7区土坑S K7177遺物出土状況図(2)

測る(第77図)。さらに、周辺部の調査として、農場西部において、平成23年度に2か所のグリッド調査を実施しており、それぞれ西部A地点(3㎡)、西部B地点(2㎡)として以下に報告する(第77図)。

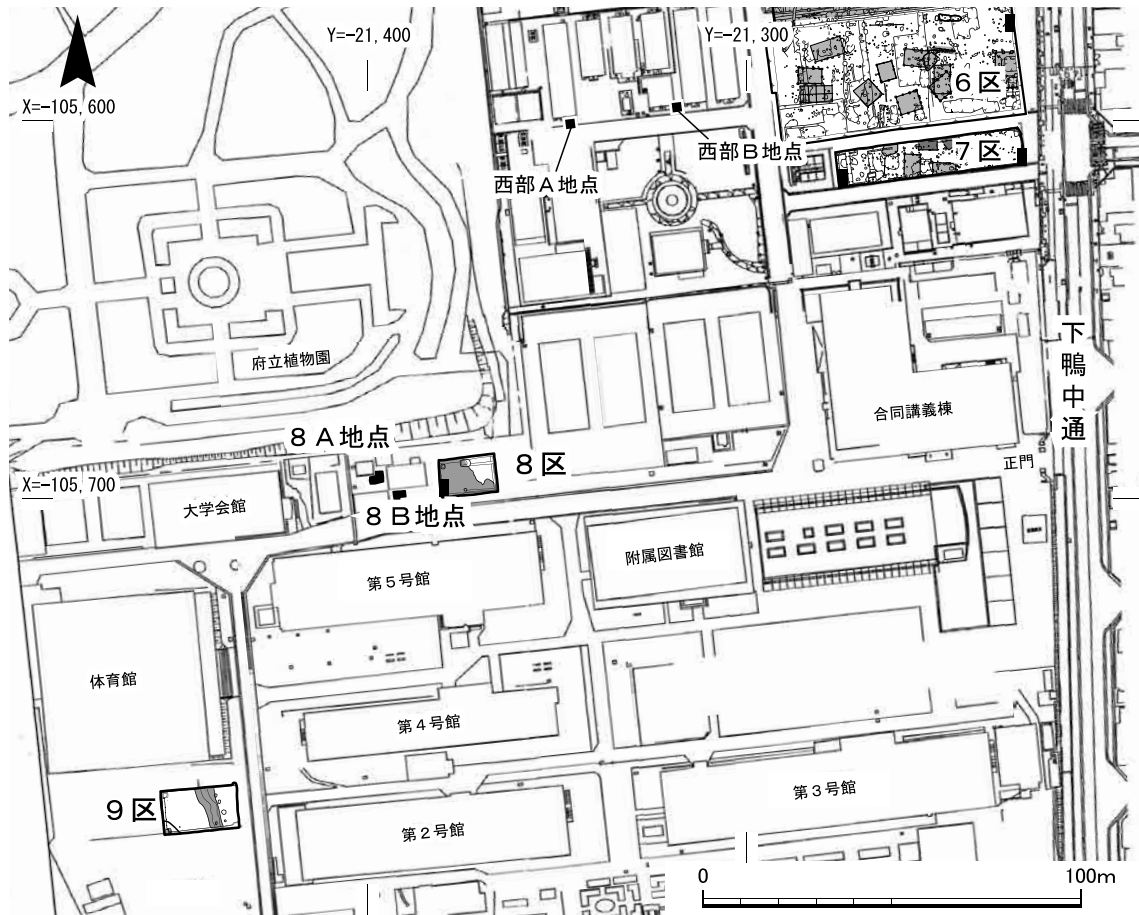
① 8区の調査

a. 基本層序(第79図)

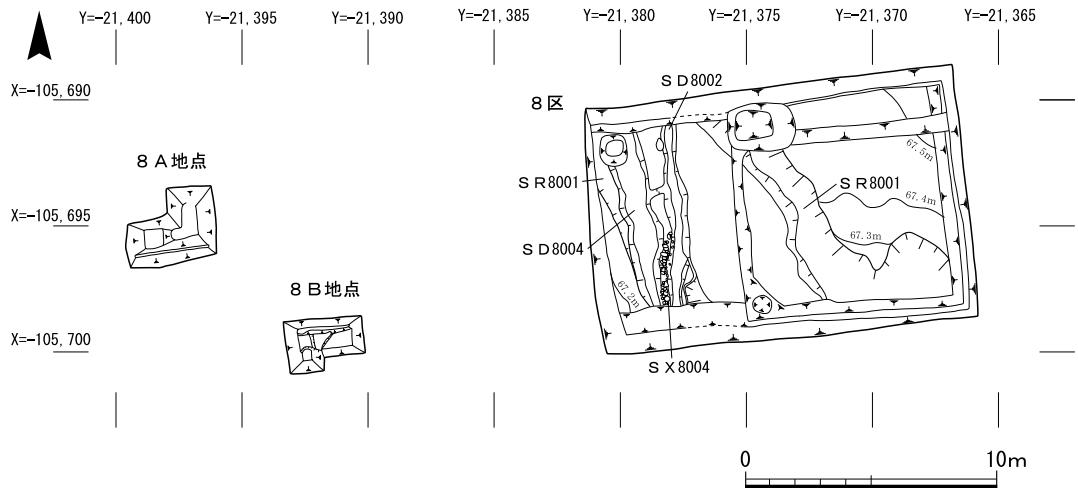
8区は、調査前には駐輪場として使われていた地点で、一帯は平坦な地形であった。現地表面の標高は68.2mを測る。基準層序は、表土下0.6~0.8mまで近現代の客土であり、客土直下に旧耕作土層とみられる浅黄色極細砂(1層)を確認した。以下、灰オリーブ細砂(2層)、暗オリーブ色粘質土(3層)が堆積し、標高67.3mで堅く締まった灰色砂礫土層を検出した。中央から西部にかけては流路を検出し、表土下1.7mの標高67.3mで流路の基底部を確認し、基盤となる灰色砂礫土層を検出した。この灰色砂礫土層は、農場を中心とするこれまで調査区の基盤層位と大きく異なるため、流路基底部の重機による断ち割り調査を行った。表土下約3mのおおよそ標高65.3mまで掘削し、基盤と同様の0.15~0.2m大の礫を多量に含む灰色砂礫土層が続くことを確認した。断ち割り調査の過程で須恵器小片が出土した。層中には、洪水性の堆積層とみられる堆積単位が確認され、周辺は中世以前の旧河道の氾濫原として、繰り返し洪水性の堆積が重ねられたものとみられる。

b. 検出遺構(第80図)

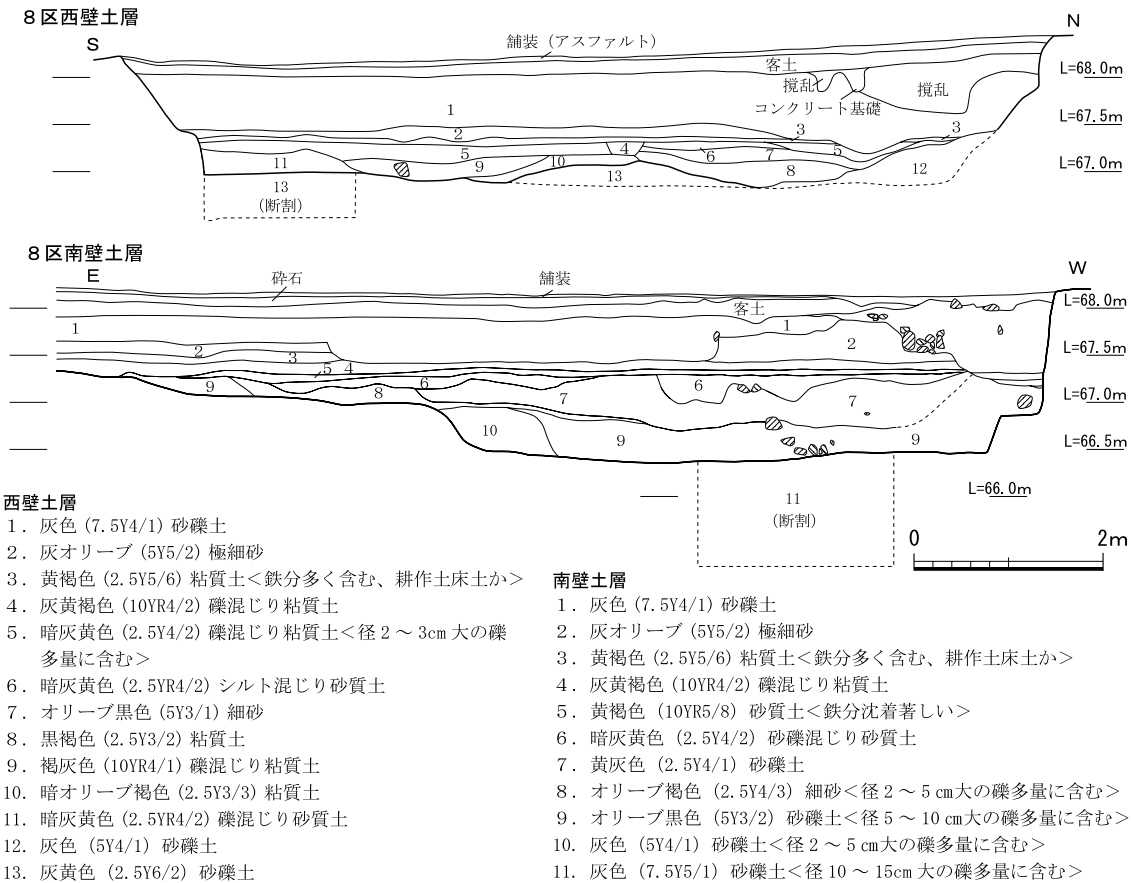
表土下約0.4mまで、重機によって近現代堆積土層を除去したところ、標高67.5m付近で柱穴群を確認した。層位から近現代建物に伴う柱穴群とみられるが(図版52-(2))、こうした建物の存



第77図 8区、8A・8B地点、9区調査区配置図

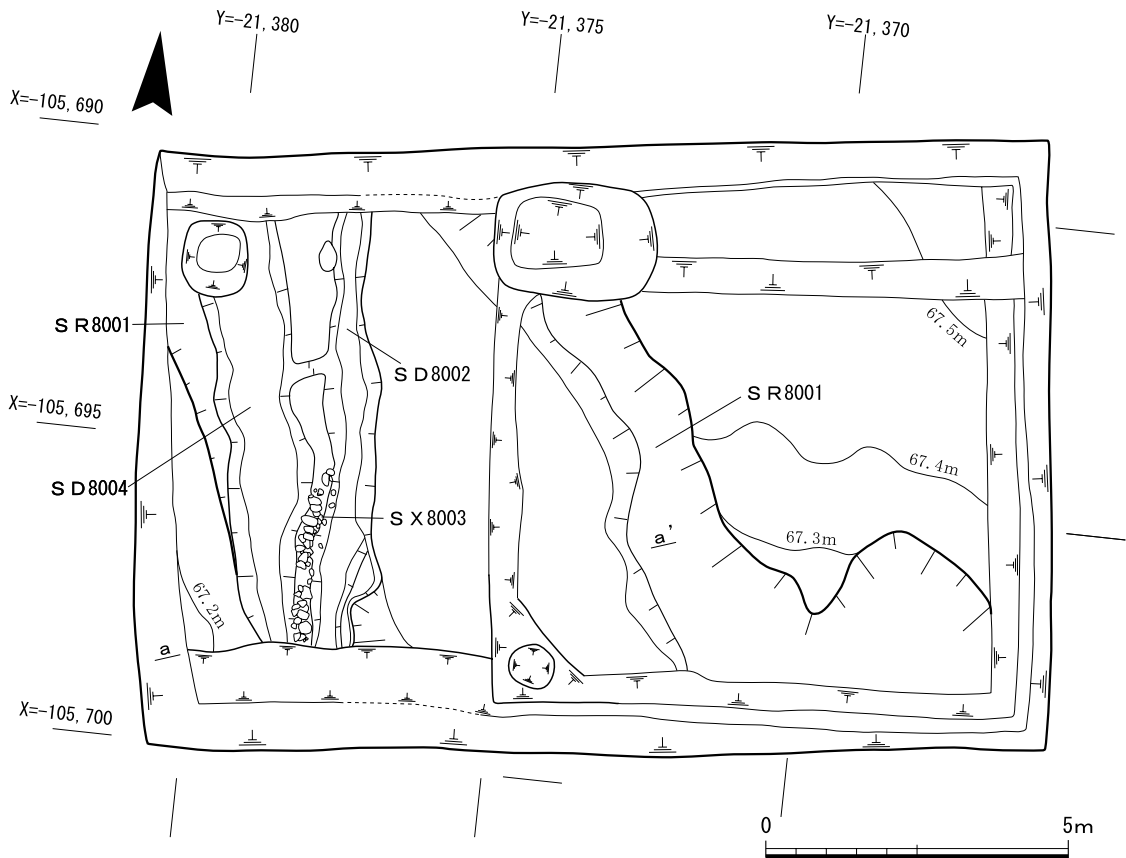


第78図 8区、8A・8B地点遺構平面図



第79図 8区西壁・南壁土層断面図

在は、府立大学の全学舎が下鴨に統合された昭和37(1962)年以降の記録では確認されていない。府立植物園との敷地境界に近い北壁に、柱穴群と関連するとみられる煉瓦基礎を検出しており、西部調査地点で検出した粗製コンクリート基礎と同様、米軍家族住宅に関連する建物の可能性がある。



第80図 8区遺構平面図

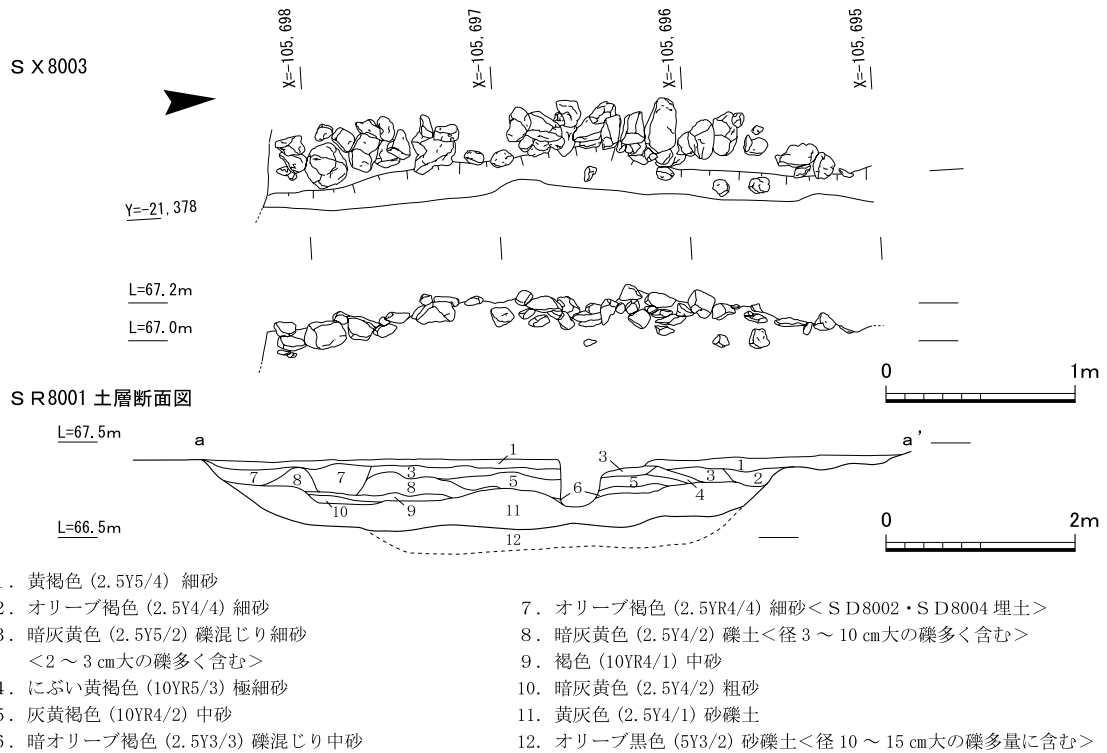
8区のおもな検出遺構は、鎌倉時代～室町時代の流路3条、集石遺構1基である。

流路 S R8001 (第80図) 調査区西半分で検出した北西から南東へやや蛇行して流れる自然流路である。幅約9～10m、深さ0.4～0.6mを測り、東側肩部に浅瀬を形成する。流路の西肩は S D8004に削平されている。埋土は、5～10cm大の砂礫を多量に含み、葉理状の砂層の堆積が各所にみられる。出土遺物は少ないが、わずかながら土師皿や陶磁器類が出土しており、鎌倉時代の流路と推定される。

溝 S D8002 (第81図) 流路 S R8001の東部で検出した溝である。北西から南東へ流れる S R8001の西側を南北方向に再掘削した水路である。幅0.7～1.0m、深さ0.2mを測る。出土土器から、時期は鎌倉時代～室町時代と推定される。

溝 S D8004 (第80図) 溝 S D8002の西側で検出した溝である。幅0.8～1.4m、深さ0.3mを測る。S D8002に先行する溝で、S R8001の肩部を再掘削したものである。

集石 S X8003 (第81図) 溝 S D8002の流れに沿って、南北に3mにわたって検出した集石である。一部に石材を3段に積んだ人為的な造作がみられることから、本来は数段の乱石積みによる石列であった可能性がある。S D8002の西側に南北に列状に石材が集められていることから、護岸施設と考えられる。S D8002に伴うことから、鎌倉時代末～室町時代の遺構と推定される。



第81図 8区集石 S X 8003平面・断面図

② 8 A 地点・8 B 地点の調査

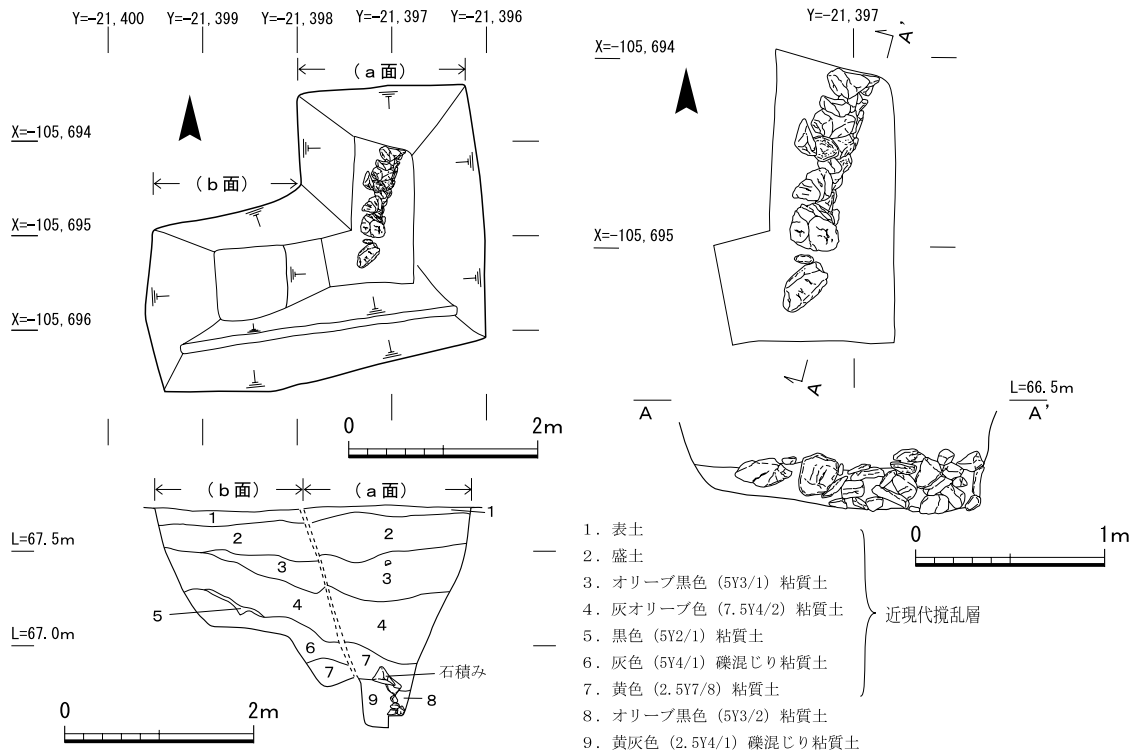
a. 8 A 地点(第82図)

8区西側の動物管理棟の西に設定したグリッドである。現地表面の標高は67.9mを測る。攪乱が著しい地点で、表土下約1.6mまで近現代の攪乱が及んでいた。攪乱は、表土下0.5mまでは、水道・ガス管の配管などによるものだが、その下層の攪乱層には、多量の陶磁器類やガラス、金属片、プラスチックなどのほか、昭和初期までに生産された化粧品瓶などがあり、長期にわたる生活残滓を含むことがわかる。重機によってこうした攪乱土層を除去し、標高約66.3mで石列を検出した。

石列は、北東から南西に向かって約1.3mの長さにわたって確認した。東側に面を揃え、0.1~0.3m大の自然石や割石を用い、3~4石を積み上げたものである。調査区外の北東と南西へさらに延びるとみられる。石積みは、おおよそ標高65.8mを基底としており、約0.3mの高さまで遺存していた。石材は砂岩、頁岩などの堆積岩類からなる。一部の断ち割りにより、石材背面となる西側に黄褐色礫混じり粘質土を検出したが、裏込めの有無は確認していない。石積みは、形状や使用している石材から近世の畦畔などが想定されたが、出土遺物にわずかながら土師器皿が含まれることから、中世前期に遡る可能性がある。

b. 8 B 地点(第83図)

8区西側の動物管理棟の南に設定したグリッドである。現地表面の標高は67.8mを測る。表土下約0.6mまで全体に近現代の攪乱がみられ、これらを重機掘削で除去後、人力掘削で下層調査



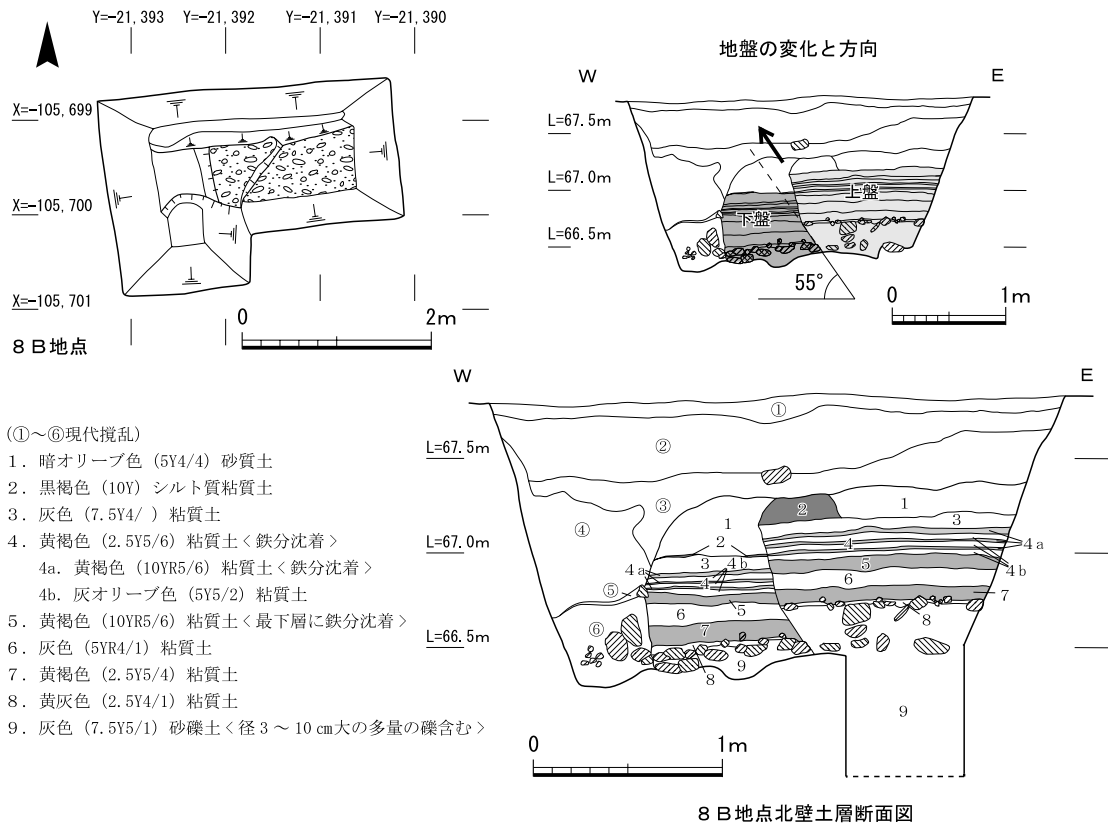
第82図 8区8A地点平面・土層断面図

を進めた。基本層序は、攪乱から部分的に遺存している黒褐色シルト質粘質土層(第83図2層)を標高67.2mで確認し、以下、灰色粘質土(同3層)、黄褐色粘質土と灰オリーブ色粘質土の互層(同4層)、黄褐色粘質土(同5層)、灰色粘質土(同6層)、黄褐色粘質土(同7層)の順に堆積する。表土下1.3~1.5mで基盤層と判断する堅く締まった灰色砂礫土層を確認した。

グリッド内では、西壁寄り、表土下1.5mの基盤層の下層まで、現代の攪乱が深く及んでいた。基盤とする砂礫土層は、西側の攪乱を除く全面で確認したが、顕著な遺構、遺物は出土していない。しかしながら、地震による周辺地盤への影響が窺える新たな知見が得られた。

標高67.5~66.7mで検出した基盤面は、中央部で大きく二分され、東西の地盤に約0.2mの段差が生じ、東側の地盤がせり上がる状況がみられた。過去に起きた大きな地殻変動によって生じたせん断と推定される。断層の走向は、北から36°東に振る。北壁では、東側の地盤(上盤)が約55°の角度で西側の地盤(下盤)の斜め上方へ動き、逆断層状の層位が生成されていることが観察できる。こうした層位については、水平方向に強い圧縮応力がかかる場所に生じるとされ、下盤が斜め下に動き、上盤が斜め上に動く形で生成する。今回確認した地盤変化は、極めて限られた範囲で確認したものであるが、大規模な地震によって、周辺の地盤の褶曲と地下水位の変動などが生じ、局所的に圧縮応力がかかったことにより生じた可能性が高い。水平方向に対するせん断面の傾斜角は55°を測り、東側隆起の高角度を示しており、マグニチュード6以上の大地震により生じた^(注14)と推定される。

地震が生じた時期については、上層の黒褐色シルト質粘質土(第83図2層)が上盤と下盤に分断



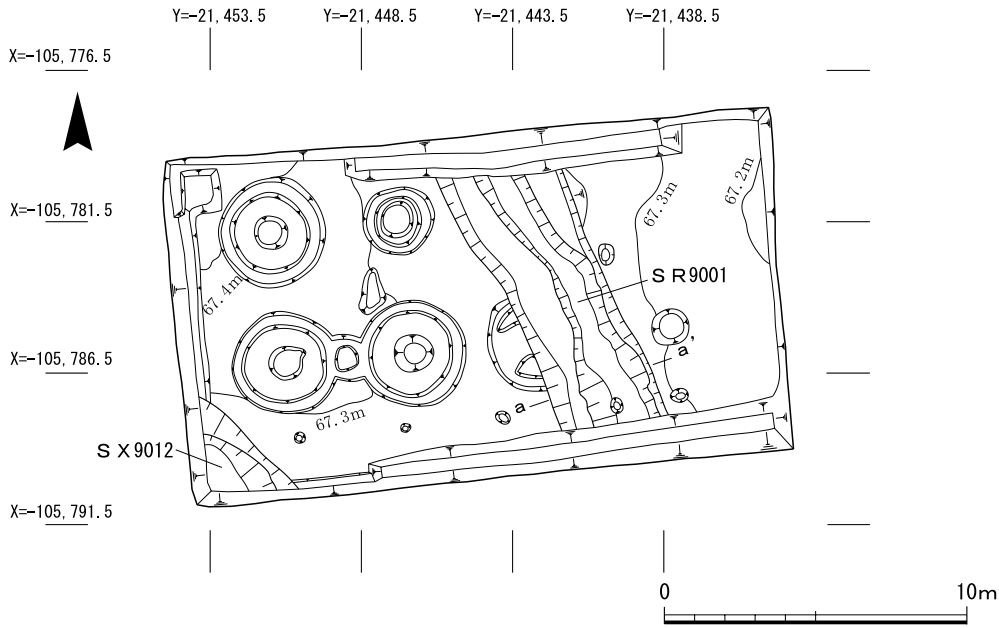
第83図 8区8B地点平面・土層断面図

されることから(第83図)、その堆積以降に地盤変化が生じたことが明らかである。しかしながら、同層位では遺物が出土しておらず、地震の時期を明確にできないため、土壌から採取される微量の炭化物を資料として、加速器による放射性炭素年代分析を実施した。その結果、黒褐色シルト質粘質土の堆積時期は17世紀後半以降とされた。この層位の上層(同3層)は、昭和30年代以降とみられる生活残滓が含まれるが、両層位には整合面がみられず、黒褐色シルト質粘質土の時期をさらに絞り混むことは困難となっている。こうしたことから、地震の時期については、おおよそ17世紀後半から第2次世界大戦頃までと考えることができる。この間の京都市街に大きな被害を与えたマグニチュード6以上の大規模地震は、寛文2(1662)年の近江・若狭を震源とするいわゆる「寛文地震」(推定M7.6)と、亀岡市付近を震源としたとされる文政13年(1830)の「京都地震」(あるいは「文政京都地震」、推定M6.5)があげられる。黒褐色シルト層直下の灰色粘質土・黄褐色粘質土は遺物を含まないが、色調・堆積状況から8区の近世遺物包含層に近く、その上層の強く土壌化した黒褐色シルト質粘質土は、近世後期～末期以降の堆積土層である可能性が高い。こうした点から、大きな地盤変化をもたらした地震は、近世末期の文政13(1830)年の「京都地震」によるものと推定される。^(注15)

③9区の調査

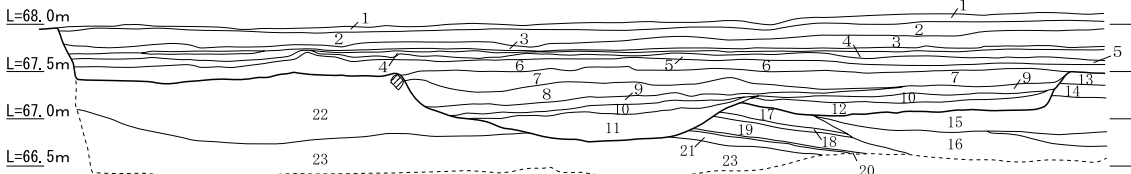
a. 基本層序(第85図)

9区は、構内体育館南側に設定した調査区である。現地表面の標高は68.0～68.1mを測る。基



第84図 9区遺構平面図

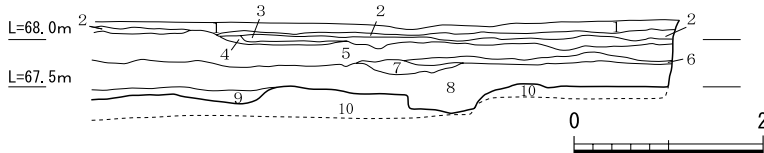
9区南壁東部



9区南壁東部

- | | | |
|---|---|---|
| 1. 表土 | 8. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粘質土 | 16. 灰色 (7.5Y4/1) 砂礫土<粗砂+径12cm大の礫多量に含む> |
| 2. 浅黄色 (2.5Y7/4) 粗砂客土 | 9. 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂混じりシルト | 17. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粗砂 |
| 3. 灰色 (5Y5/1) 礫混じり粘質土<径2~5cm大の礫含む> | 10. 暗褐色 (10YR3/3) 礫混じり粘質土 | 18. 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂礫土 |
| 4. 黒褐色 (2.5Y3/2) 礫混じり粘質土<径2~3cm大の礫含む> | 11. 灰色 (5Y5/1) 砂礫土<径10cm大礫多く含む> | 19. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粗砂 |
| 5. 黄褐色 (2.5Y5/6) 粘質土<下層床土か、上下2層の床土状の層位あり> | 12. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂礫土<径5~10cm大の礫多く含む> | 20. 灰色 (5Y5/1) 砂礫土<径1~2cm大の礫多量に含む> |
| 6. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土<径2~3cm大の礫含む> | 13. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 砂礫土<2~3cm大の礫多量に含む、5~10cm大の礫もわずかに含む> | 21. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粗砂 |
| 7. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粘質土<礫極めて少ない> | 14. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 | 22. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂礫土<洪水性堆積、径15cm~20cm大の礫多く含む> |
| | 15. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂礫土<径2~3cm大の礫多量に含む、5~10cm大の礫もわずかに含む> | |

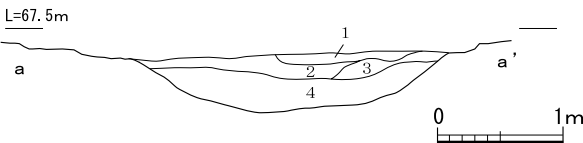
9区西壁北部



9区西壁北部

- | | |
|---------------------------|-----------|
| 1・2層南壁と同じ | 3・4層近代整地土 |
| 5. 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質土<客土> | |
| 6. 明赤褐色 (5YR5/6) 砂質土<焼土か> | |
| 7. 暗褐色 (10YR3/4) 砂質土 | |
| 8. 黒色 (2.5YR2/1) 粘砂質土 | |
| 9. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂質土 | |
| 10. 灰色 (5Y5/1) 砂礫土 | |

S R 9001



S R 9001

- | |
|--|
| 1. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 礫混じり粘質土<径2~5cm大の礫多く含む> |
| 2. 褐色 (10YR4/4) 粘性砂質土<礫ほとんど含まず> |
| 3. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性砂質土<径2~5cm大の礫を含む> |
| 4. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂礫土<径5~15cm大の礫多量に含む、2~3cm大の礫も多くみられる> |

第85図 9区西壁・南壁・流路S R 9001断面図

本層序は、表土下0.3～0.4mに、近現代の客土を確認し、以下、灰色礫混じり粘質土(第85図3層)、黒褐色礫混じり粘質土(同4層)、暗灰黄色粘質土(同6層)(以上、近代遺物包含層)の順に堆積し、表土下0.7mで近世遺物包含層とみられるオリブ褐色砂質土層(同8層)及び灰黄褐色シルト層(同9層)を検出した。調査区北半は、基盤層の直上まで近代の生活残滓を含む黒色粘砂質土が全体に広がり、近世遺物包含層は削平されている。また、調査区南東部についても、洪水堆積物とみられる砂礫土層を表土下0.6mのレベルで検出し、約1.0m以上の厚さで堆積することから、包含層はすでに流失しているとみられる。標高約67.3mで、基盤層と判断する暗褐色砂礫土層を確認した。この層位は0.15～0.2m大の礫を多量に含む洪水性の堆積層である。南壁周辺で下層の断ち割り調査を実施した結果、基盤層の下層に薄い葉理状の堆積層を挟みながら、表土下2.5mまで堆積していることを確認した。なお、9区包含層中では、わずかながら古墳時代後期の土器を出土しており、周辺に同時期の遺構が存在する可能性がある。

b. 検出遺構(第84図)

9区では、鎌倉時代末～室町時代の落ち込み1基、江戸時代の流路1条を検出した。

調査は、重機を用いて表土下約0.6mまで、客土及び近代堆積層を除去し、以下、人力掘削により調査を進めた。客土直下で、調査区全体に点在する直径約2.5～3.5mの円形の攪乱坑を検出した。これらは1区の調査で検出した攪乱と同じく、農学部演習林に伴うスプリンクラー設置時の掘り込みによるものである(図版58)。

流路 S R9001(第84図) 調査区中央で検出した北西から南東へ直線的に流れる流路である。幅約3.3～3.5m、深さ0.45mを測る。流路の断面は、緩やかに立ち上がり、中央東寄りに深くなる。埋土下層には、5～15cm大の礫を多量に含むことから、洪水性の急激な水流によって流路は埋没しているとみられる。出土遺物から、時期は江戸時代から近代初めにかけてと推定される。大正14(1925)年の都市計画図(『上賀茂』都市計画京都地方委員会)では、府立植物園内の西部を通り、府立大学構内の現体育館周辺に北西から南東へむけて流れる流路が存在しており、同様の流れをもつ流路が、近世に遡り存在していたとみられる。

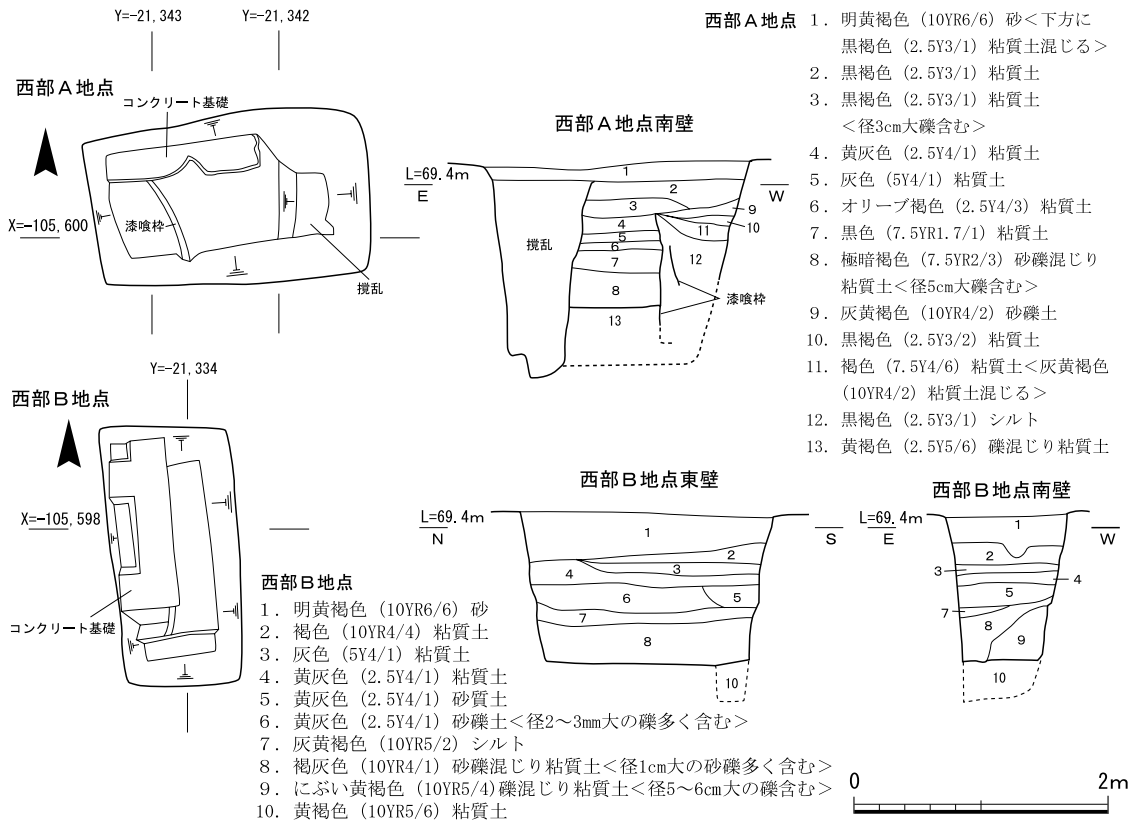
落ち込み S X9012(第84図) 調査区南西で検出した落ち込みである。幅2.0m以上、深さ0.5mを測る。基底は、南西隅でわずかに立ち上がることから、溝の可能性はある。埋土から、瓦器の小片が出土しており、時期は鎌倉時代と推定される。

④農場西部調査地点(第86図)

農学部農場西部は、地下に下水管・高圧電線・ガス管などが縦横に埋設され、大きく削平を受けている。こうした既設埋設物を避け、既存の温室群の南部で東西2地点のグリッド調査を実施した。

a. 西部A地点の調査(第86図)

現地形は、標高69.4mを測る。基準層位は、表土下約0.5mは近現代の堆積層(第86図西部A 1～3層)であり、標高69.1mで近世の堆積層とみられる黄灰色粘質土(同4層)を検出した。以下、灰色粘質土(同5層)、オリブ褐色粘質土(同6層)、黒色粘質土(同7層)、極暗褐色砂礫混じり



第86図 西部A・B地点平面・土層断面図

粘質土(同8層)の順で堆積し、標高68.4mで基盤層とみられる0.1~0.2m大の礫を多く含む黄褐色礫混じり粘質土(同13層)を確認した。この層位は、西に約55m離れた6区西壁で基盤層と認識した層位に対応するとみられる。

調査は重機によって近現代の堆積層を除去し、その下層を人力掘削により掘り進めた。グリッド内では、表土下約0.8mで北壁に沿って多孔質の粗製コンクリート基礎を検出した。また東側では、攪乱が表土下約1.7mに及び、基盤層を大きく削平していた。さらに西側では堆肥貯蔵用とみられる漆喰枠を検出し、その設置による掘り込みが基盤層に達していた。グリッド内では、顕著な遺構や遺物は確認していない。

b. 西部B地点の調査(第86図)

西A地点の約25m東に設定したグリッドである。6区西壁から約25mの地点に位置し、標高69.5mを測る。表土下約0.5mまで、西部A地点と同様、近現代の客土(第86図西部B地点1~3層)が堆積する。標高約68.9mで、近世遺物包含層の黄灰色粘質土(4層)を確認し、以下、黄灰色砂質土(5層)、黄灰色砂礫土(6層)の順で堆積する。西部A地点に対応した層序がみられ、標高68.1mで、基盤層と判断される黄褐色粘質土(10層)を検出した。

グリッド内では、標高68.8mで落ち込みの西側肩部を検出した。深さ約0.5mを測る。埋土は、葉理をなすシルトが確認され、径1~2cm大の砂礫を多量に含むことから、落ち込みは流路の一部とみられる。遺物は確認できないが、近世の堆積層(6層)から掘削されることより、同時期

の流路と推定される。また、表土下約0.35mで西部A地点と同様のコンクリート基礎を検出したが、グリッドの約西半分を覆っており、さらに西側に大きく広がるとみられる。

調査地周辺は、京都府農林学校が愛宕郡下鴨村へ移転した大正7(1918)年以降、基本的には農場として活用されており、府立大学の全学舎が下鴨の現在地に統合された昭和37(1962)年以降も、コンクリート基礎をもつ学舎の建設は記録されていない。こうしたコンクリート基礎が西部A地点と西部B地点のどちらの地点においても確認されたことから、農場西部の西辺一帯に広がることが想定される。調査地点の西に隣接する府立植物園は昭和20(1945)年の終戦に伴う連合軍の国内進駐によって接収を受け、昭和32(1957)年に接収解除となるまで、米軍家族住宅地として利用されたことが知られる。今回、西部A地点と西部B地点で確認したコンクリート基礎は、多孔質の粗製軟質コンクリートであることから、接収時の建物建設に伴う基礎の可能性がある。

(高野陽子)

4. 出土遺物

出土遺物は、平成23年度の調査では整理コンテナ22箱(1・2区)、平成24年度の調査では整理コンテナ77箱(3～9区)が出土し、合計99箱を数える。出土遺物には、土器、鉄製品、石製品、土製品、瓦類、銭貨があり、土器には、土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、磁器がある。今回、出土した遺物は、縄文時代から江戸時代までの各期の遺物を含むが、多くは奈良～平安時代に属するものである。以下、本文中に示した平安京期の出土土器の年代観は、平安京域の土器検討で示された京都編年^(注16)に準じ、その対応関係は、おおよそ平安時代前期前葉—京都Ⅰ期新(810～840年)、前期中葉—Ⅱ期古(840～870年)(以上、前期前半)、前期後半—Ⅱ期中～Ⅱ期新(870～930年)、中期前葉—Ⅲ期古(930～950)、中期中葉—Ⅲ期中(950～980)としている。

(1) 1区出土土器(第87図1～27)

土坑S K 1082出土土器(1) 1は、「く」字口縁甕である。器壁は薄く、口縁端部外面に強く丁寧なナデを施す。時期は、口縁端部の特徴的な調整から古墳時代前期とみられる。

柱穴S P 1024出土土器(2) 2は、庄内式甕の系統にある「く」字口縁甕である。口縁部は外反して立ち上がり、端部をつまみあげる。外面ハケ、内面はケズリ調整を施す。古墳時代前期前葉に帰属する。

柱穴S P 1137出土土器(3) 3は、庄内式甕である。外面は摩滅しており、調整は確認できないが、口縁部をつまみあげ、口縁端部外面に一条の沈線を施す。古墳時代前期前葉に属する。

掘立柱建物S B 1070出土土器(4～6) いずれも柱穴P 2から出土した。4は須恵器杯口縁部、5は須恵器杯B蓋、6は須恵器低脚杯の一部である。平安時代前期前葉に属する。

柱穴S P 23出土土器(7・8) 7・8は、土師器甕の口縁部である。8は口縁部端部内面が肥厚する。平安時代前期前葉と推定される。

柱穴S P 1034出土土器(9・10) 9は須恵器杯A、10は小型の土師器甕である。平安時代前期前葉に属する。

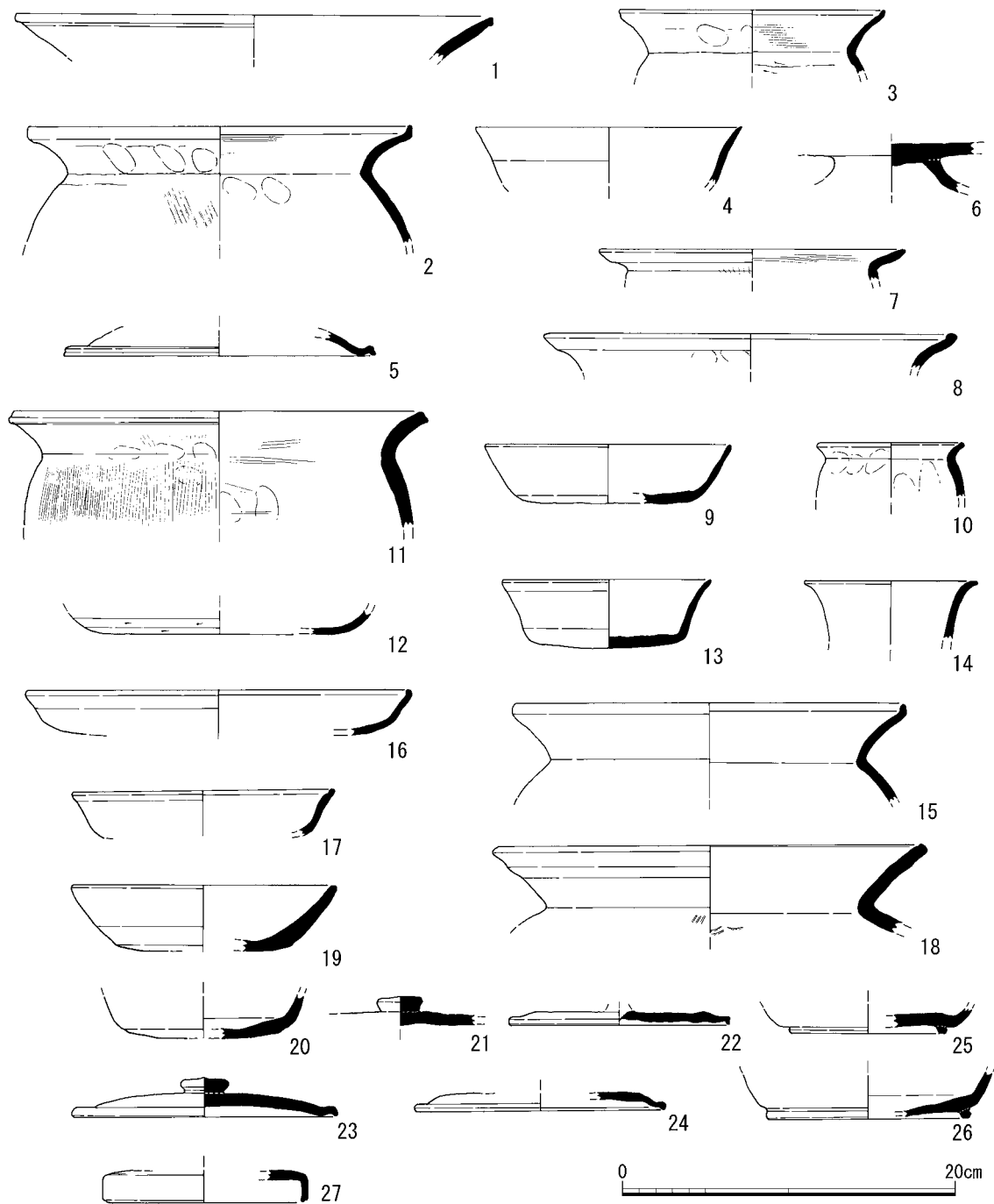
柱穴S P 1040出土土器(11) 外面ハケ調整の単純「く」字口縁甕である。奈良時代後期～平安時代に属する。

柱穴S P 1064出土土器(12) 土師器皿である。底部のケズリが認められる。

土坑S K 1126出土土器(13) 須恵器杯Aである。口縁部が外反気味に立ち上がる。平安時代前期前葉に属する。

土坑S K 1156出土土器(14) 須恵器平瓶の口縁部とみられる。平安時代前期に帰属する。

1区包含層出土土器(15～27) 15は、口縁端部をつまみあげる庄内式甕の系統にある「く」字口縁甕である。外面にハケを施す。古墳時代前期前葉に帰属する。16は土師器皿A、17は土師器杯Aである。16は口径23.0cm、17は15.4cmで、口縁外面に強くナデ調整がみられる。平安時代前期中葉の所産である。18は須恵器甕口縁部で、おおよそ奈良時代末～平安時代前期前葉と考えられる。19・20は須恵器杯Aである。21～24は須恵器杯B蓋で、いずれも平安時代前期前半と推定される。25・26は須恵器杯B、27は薬壺などの壺A蓋である。



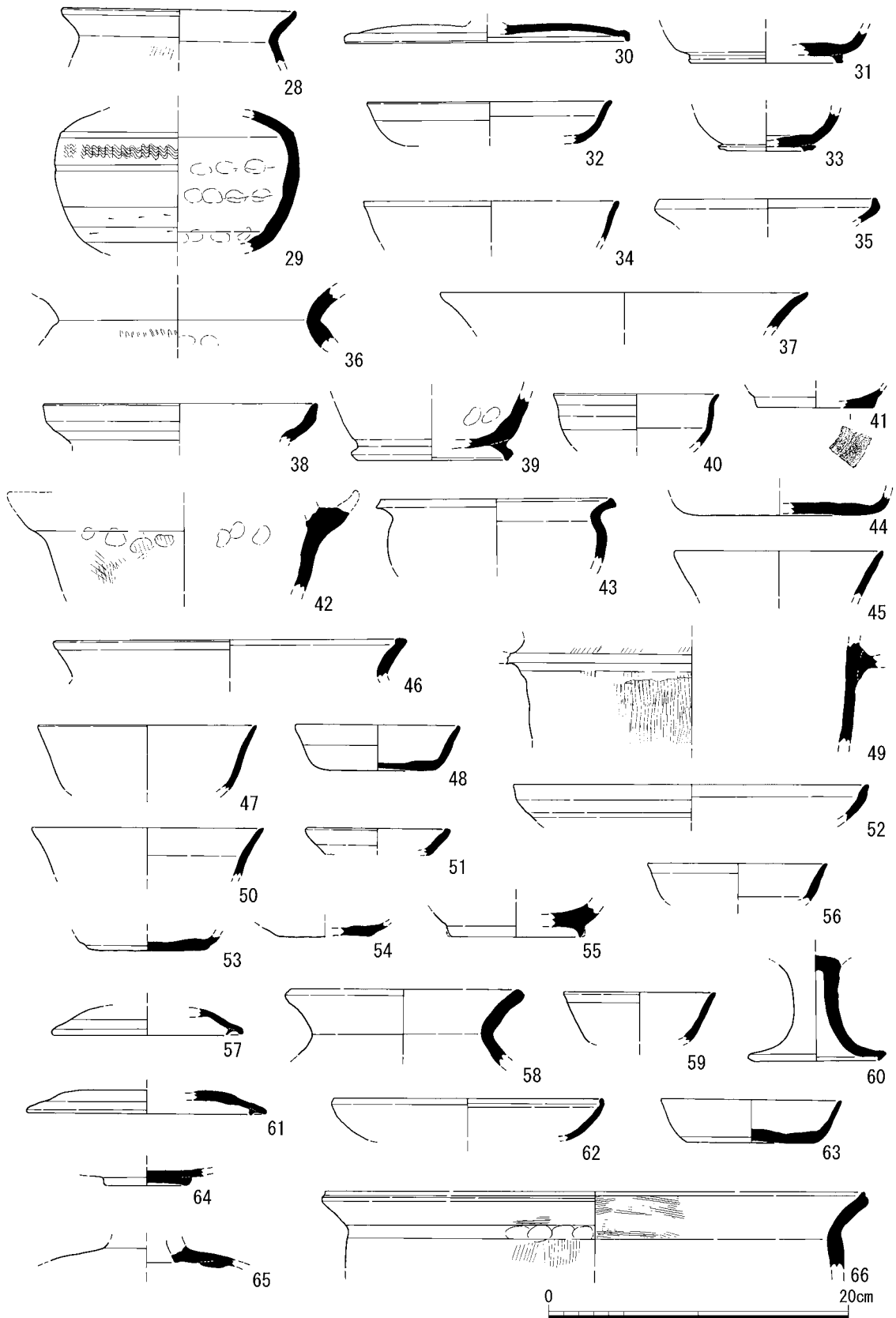
第87図 1区出土土器実測図

(2) 2区出土土器(第88図28～第90図125)

柱穴 S P 2183出土土器(第88図28) 口縁が外反して立ち上がる庄内式甕である。外面にわずかにタタキ痕がみられる。色調は、にぶい黄橙褐色を呈する。古墳時代前期前葉の甕である。

柱穴 S P 2051出土土器(第88図29) 口縁部と脚部を欠くが、須恵器台付長頸壺の体部とみられる。肩部に2条の沈線と波状文を施す。時期は、古墳時代後期後葉に位置づけられる。

掘立柱建物 S B 2110(第88図30～33) 30はP 4から出土した須恵器杯B蓋で、つまみの剥離痕がみられる。31・32は杯Bで、31はP 8、32はP 6から出土した。33はP 8から出土した須恵



第88図 2区出土土器実測図(1)

器壺の底部である。貼り付け輪高台をなす。時期は、平安時代前期前葉と推定される。

掘立柱建物S B 2370出土土器(第88図34~36) 34はP 4から出土した須恵器杯で、35はP 6から出土した須恵器鉢で口縁部に面をなし、端部を立ち上げる。36はP 2から出土した須恵器壺の頸部である。おおよそ平安時代前期前葉~中葉のものであろう。

掘立柱建物S B 2390出土土器(第88図37) P 3から出土した。口縁部が外上方へ開く土師器皿とみられる。時期は、奈良時代~平安時代前期とみられる。

掘立柱建物S B 2250出土土器(第88図38) P 9から出土した。口縁部外面に面をなす須恵器壺の口縁部である。

柵列S A 2395出土土器(第88図39) 須恵器壺の底部とみられる。高台は、貼り付け輪高台で「ハ」字状に大きく開き、内面側が接地する。時期は、平安時代前期前半と推定される。

柱穴S P 2032出土土器(第88図40・41) 40は、口縁端部が外反する須恵器椀である。41は、削り出しの平高台をもつ無釉陶器椀である。底部に糸切り痕がみられる。平安時代前期後半の資料である。

柱穴S P 2042出土土器(第88図44) 須恵器皿で、全体に器壁が厚く仕上げられる。底部はヘラ切り痕を残す。

柱穴S P 2024出土土器(第88図42) 把手付の土師器羽釜である。外面はハケを施す。

柱穴S P 2028出土土器(第88図43・45) 43は、「く」字口縁の土師器甕で、口縁端部に面をなす。45は、須恵器杯の口縁部である。おおよそ平安時代前期前半の資料であらう。

柱穴S P 2044出土土器(第88図46・47) 46は口縁端部が肥厚する土師器甕で、47は須恵器杯の口縁部で、平安時代前期前半と推定される。

柱穴S P 2079出土土器(第88図48) 須恵器杯Aで、底部はヘラ切り後ナデを施す。口径10.7cmを測る。平安時代前期前半のものであらう。

柱穴S P 2056出土土器(第88図49) 土師器羽釜で、外面をハケで仕上げる。平安時代前期後半に属する。

柱穴S P 2117出土土器(第88図50) 須恵器杯の口縁部とみられる。平安時代前期前半に属する。

柱穴S P 2122出土土器(第88図51) 須恵器皿である。口径9.4cmを測り、平安時代前期後半と推定される。

柱穴S P 2166出土土器(第88図52) 須恵器鉢の口縁部とみられる。時期は、平安時代前期後半であらう。

柱穴S P 2159出土土器(第88図53) 須恵器杯Aで、底部はヘラ切りによる。平安時代前期前半に属する。

柱穴S P 2164出土土器(第88図54) 須恵器杯の底部で、平安時代前期前半に属する。

柱穴S P 2178出土土器(第88図55) 須恵器壺の底部とみられる。平安時代前期に属する。

柱穴S P 2022出土土器(第88図56) 須恵器杯の口縁部である。

柱穴 S P 2183出土土器(第88図57・58) 57は、かえりのある須恵器杯B蓋である。58は、須恵器の「く」字口縁甕である。共に奈良時代前半の資料とみられる。

柱穴 S P 2221出土土器(第88図59・60) 59は須恵器杯の口縁部である。60は須恵器高杯で、脚部は緩やかに外反し、脚部端部を内側に折り返し肥厚させる。飛鳥時代末期～奈良時代初期に属する資料とみられる。

柱穴 S P 2224出土土器(第88図62) 口縁部が内湾気味に立ち上がる須恵器皿で、端部内面に段をなす。平安時代前期前半に属する。

柱穴 S P 2444出土土器(第88図63) 須恵器杯Aである。全体に器壁が厚く仕上げられ、底部はヘラ切り後ナデ調整される。時期は、平安時代前期前葉と推定される。

柱穴 S P 2259出土土器(第88図64) 無釉陶器碗の底部である。焼成は軟質で、平高台をなす。平安時代前期前半の資料とみられる。

柱穴 S P 2262出土土器(第88図65) 須恵器平瓶の体部で、内面上部に口縁部の接合痕が認められる。

柱穴 S P 2202出土土器(第88図66) 「く」字口縁をなす土師器甕で、口縁端部を上方に立ち上げ、外面はハケ調整を施す。奈良時代前期前半に属する。

竪穴建物 S H 2005出土土器(第89図67～75) 67・68はK 3から出土した。67は土師器杯A、68は須恵器杯である。69は須恵器壺の底部で、70は口縁部が内傾して立ち上がる須恵器甑、71・72は口縁部が屈曲して短く立ち上がる須恵器鉢、73はK 6から出土した軟質の無釉陶器皿である。器壁に緑釉は認められないが、摩耗が激しく緑釉陶器の可能性はある。底部は、削り出し平高台をなす。口径13.3cmを測る。平安京北郊産とみられる。74の緑釉陶器碗は、内面と底部外面に重ね焼きのトチンの痕跡がみとめられる。東海猿投産とみられる。75は製塩土器の口縁部で、指頭圧痕が顕著に認められる。S H 2005出土土器は、おおよそ平安時代前期中葉の土器群である。

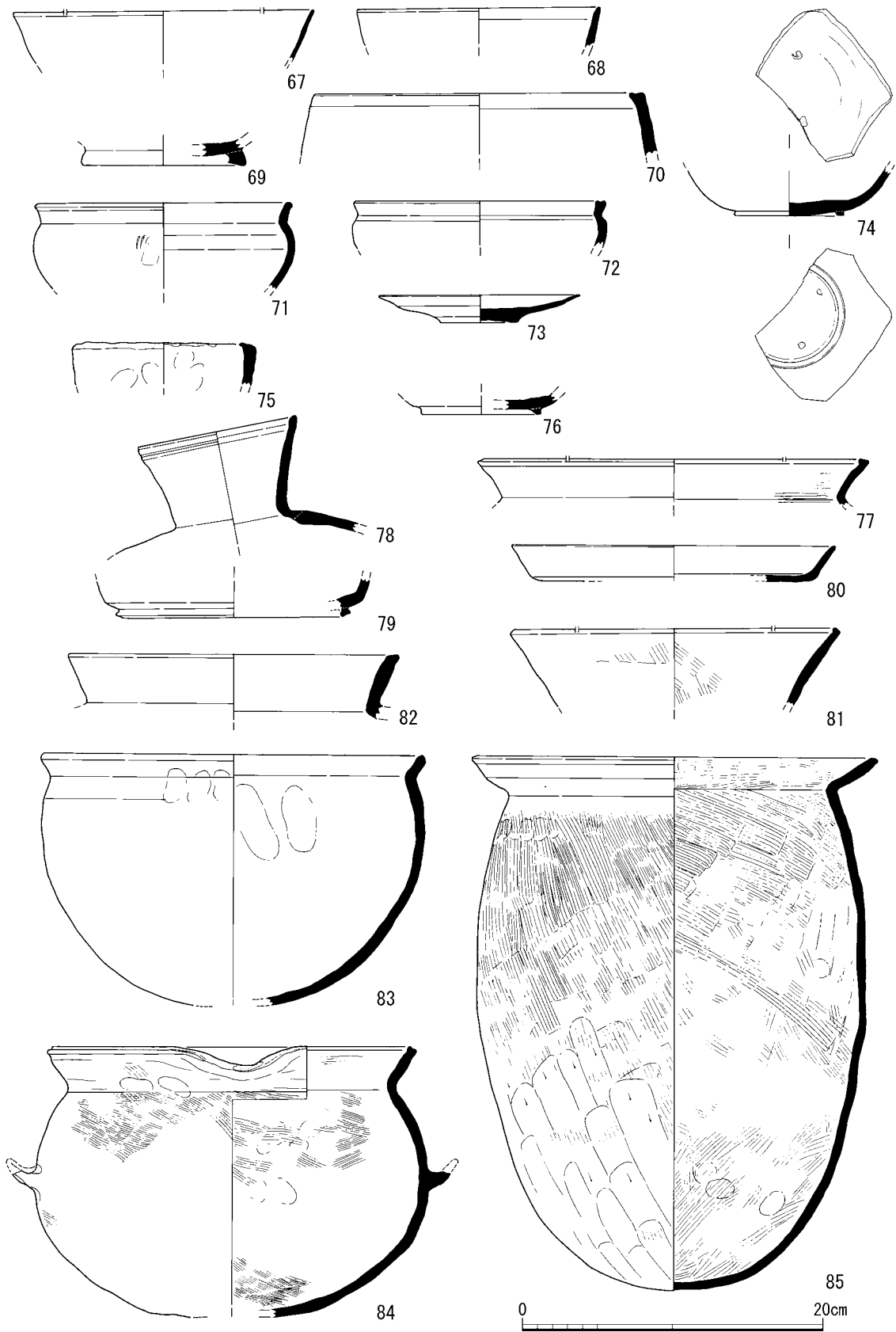
土坑 S K 2043出土土器(第89図76・77) 76は須恵器杯Bの底部である。77は「く」字口縁をなす土師器甕で、口縁端部が肥厚し、内面にハケがみとめられる。奈良時代末～平安時代前期前葉とみられる。

土坑 S K 2157出土土器(第89図78) 須恵器平瓶で、口縁部はやや傾斜して口縁部に2条の沈線が認められる。奈良時代前半のものであろう。

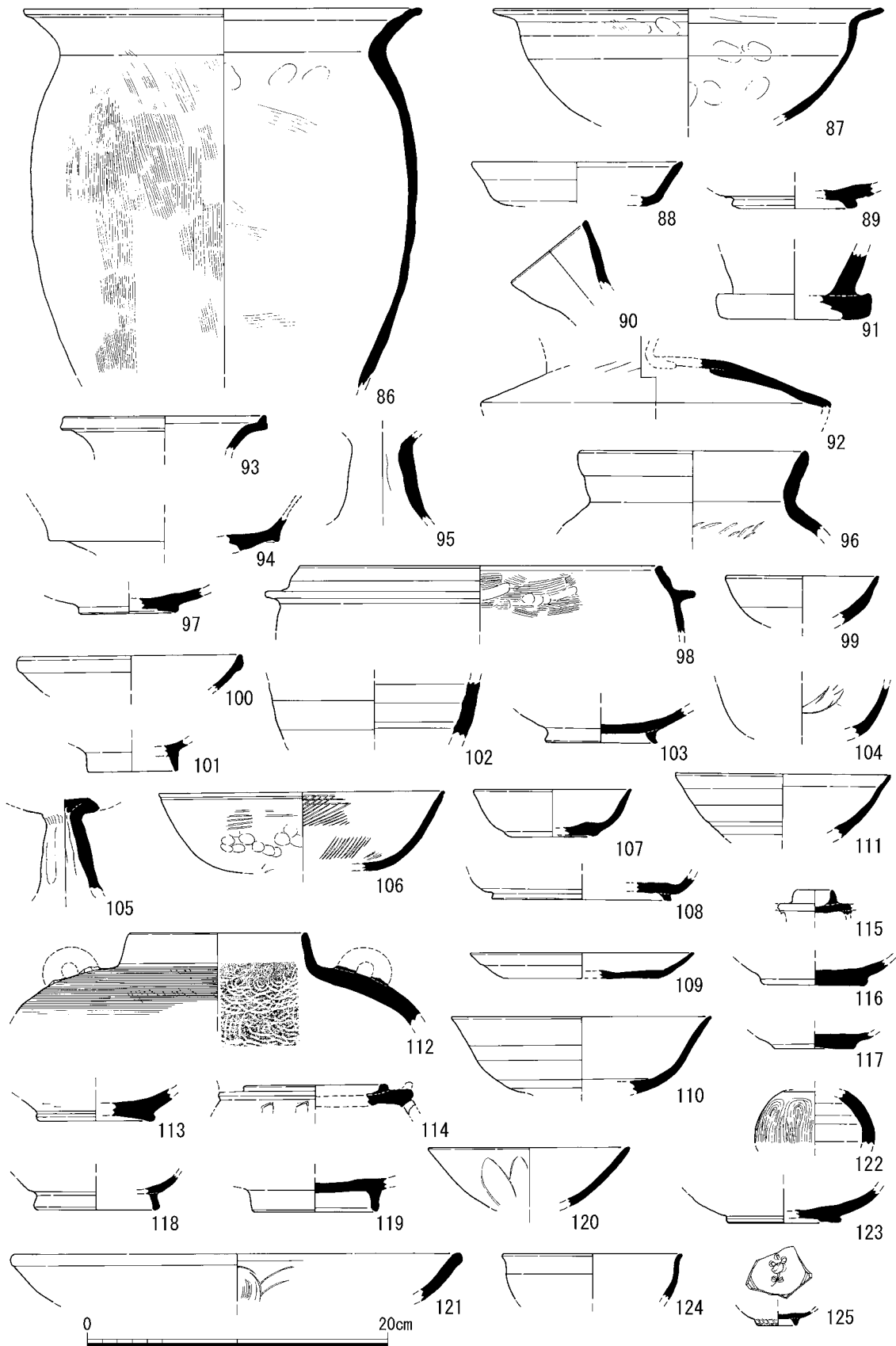
土坑 S K 2223出土土器(第89図79～81) 79は須恵器杯B、80は須恵器皿Cで、口径21.4cmを測る。以上は、平安時代前期中葉とみられる。81は、土師器高杯口縁部で、古墳時代前期の資料の混入であらう。

土坑 S K 2048出土土器(第89図82) 土師器の「く」字口縁甕である。時期は平安時代前期とみられる。

土坑 S K 2070出土土器(第89図83～85) 83は、「く」字口縁の土師器鍋である。口縁部は短く屈曲し、内外面をナデ調整する。84は把手付片口鍋である。「く」字口縁をなし、端部に沈線を巡らせる。内外面をハケ調整する。口径23.8cm。85は長胴の土師器甕である。83・84と合わせの



第89図 2区出土土器実測図(2)



第90図 2区出土土器実測図(3)

土器棺として転用されたものである。「く」字口縁をなし、外面上半はハケ、下半をケズリ、内面をハケ調整する。口径26.6cm、器高35.4cmを測る。飛鳥時代末～奈良時代初期と推定される。

土坑S K2440出土土器(第90図86) 「く」字口縁の土師器長胴甕で、土器棺に転用されたものである。口縁端部に沈線を巡らせ、体部外面は細かな縦ハケ、内面をハケのちナデ調整する。奈良時代前期に属する。

土坑S K2265出土土器(第90図87) 口縁部が大きく屈曲して開く土師器鍋である。奈良時代前期に属する。

溝S D2001出土土器(第90図88～95) 88は須恵器杯A、89は高台をもつ須恵器壺底部、90は須恵器平瓶の口縁部である。91は、須恵器鉢F、92は平瓶の体部である。92は内面に頸部の接合痕が明瞭に認められる。93は大きく開く口縁部をなし、端部を立ち上げる壺Hとみられる。以上は、平安時代前期後半～中期前半と推定される。94は古式土師器の壺口縁、95は高杯脚部で、古墳時代前期前葉の混入資料である。

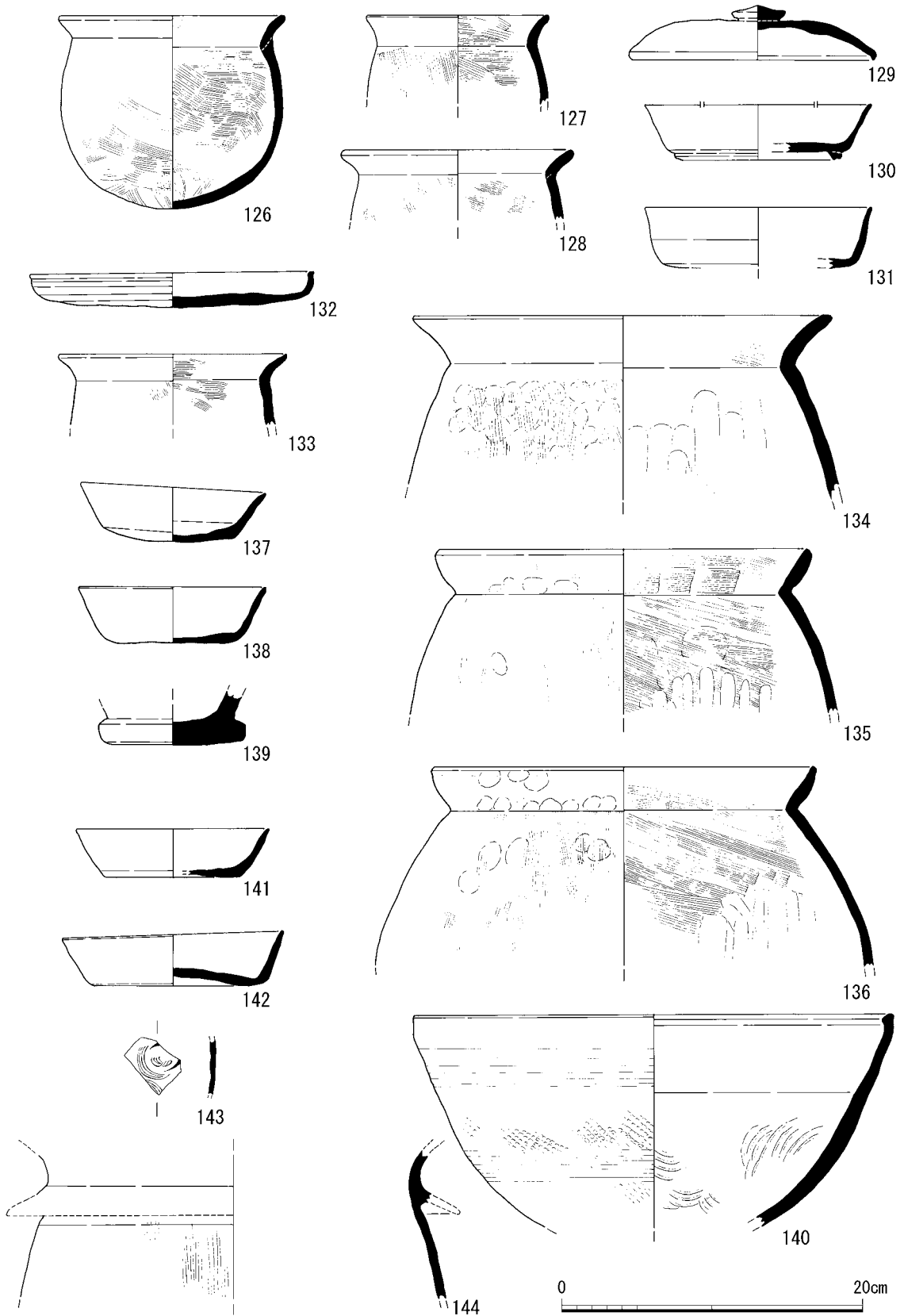
土坑2011出土土器(第90図96～104) 96は須恵器壺、97は蛇の目高台をもつ無釉陶器椀、98は瓦質土器羽釜、99は龍泉窯産の青磁椀である。100は玉縁口縁をなす白磁椀Ⅳ類、101は白磁椀の底部、102は白磁壺体部である。103は灰釉陶器椀、104は龍泉窯産の青磁椀である。おおよそ平安時代末期～鎌倉時代初期(12世紀後半～末)の資料である。

2区包含層出土土器(第90図105～125) 105は、高杯脚部で古墳時代前期に属する、106は、土師器杯Cと考えられ、内面に暗文が認められる。107は須恵器杯Aで、108は須恵器杯Bで、109は須恵器皿A、110は須恵器椀である。111は無釉陶器椀、112は体部にカキ目を施す須恵器壺Aで、肩部に把手の剥離痕がみられる。113は削り出しの平高台をもつ無釉陶器椀である。114は須恵器円面硯で平安時代前期前葉に属する。115は緑釉陶器で、形状から托と考えられる。116・117は削り出し高台をもつ軟質の緑釉陶器椀で平安時代前期前半のものであろう。京都近郊産とみられる。118・119は灰釉陶器椀の底部で、高い高台をなす。いずれも東海猿投産で、平安時代前期後半のものである。120は龍泉窯産の青磁椀、121は同じく龍泉窯産の青磁皿で、鎌倉時代前期の資料である。122は、瀬戸美濃産の壺である。仏具として用いられる形式で、室町時代に属する。123は蛇の目高台をもつ陶磁器鉢で、江戸時代後期の資料とみられる。124は江戸時代前期の瀬戸美濃産の天目茶碗であり、125は江戸時代後期の染付である。

(3) 3区出土土器(第91図126～第92図153)

竪穴建物S H3015出土土器(第91図126～140) 126～128は土師器甕である。いずれも口径12～15cmの小型品である。126・128は主柱穴P 3から出土した。127は埋土から出土した。126は球形に近い体部と短く外反する口縁部とからなる。127・128は口縁部から肩部にかけての破片で、136と同様の器形を呈すると思われる。129は須恵器杯B蓋である。全体の形状は笠形を呈し、擬宝珠つまみが付く。130は須恵器杯Bである。小破片のため、器形の復元はあくまでも推定である。131は須恵器杯Aである。

132～140はS H3015内の土坑K 1から出土したものである。133～136は土師器甕である。133



第91図 3区出土土器実測図(1)

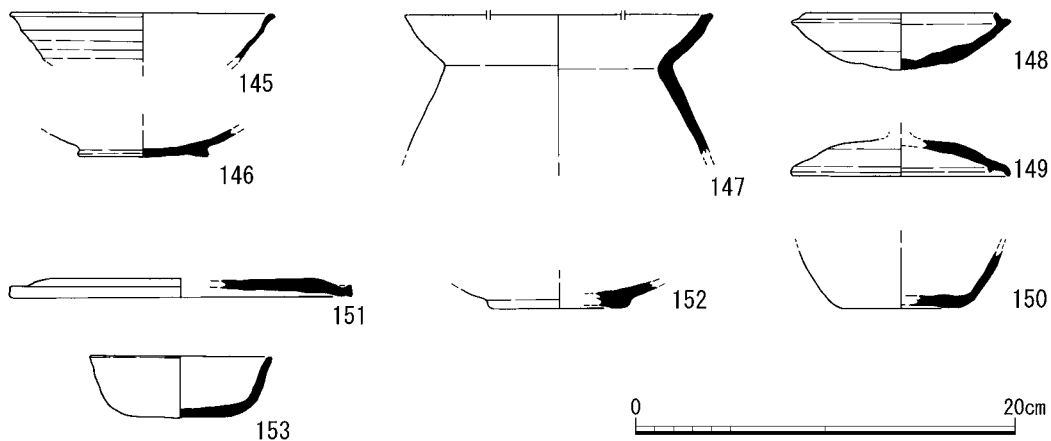
は127・128などと同法量の小型品である。134～136は、口径25～27cmの大型品で、体部中位以下の復元はできなかった。いずれも「く」字状に屈曲する口縁部を持つが、形状がわずかに違い、134は外反気味、135はほぼ直線的に延び、136は内湾気味である。132は須恵器皿である。平底気味の底部からほぼ垂直に立ち上がる短い口縁部が付く。口縁部外面に沈線状の凹線を1条巡らし、金属器を模倣したものと考えられるが、類例はあまりない。137・138は須恵器杯Aである。平底気味の底部から斜め上方に、わずかに外反しながら口縁部が延びる。139は須恵器鉢Fで、底部のみの破片である。140は大型の須恵器鉢であるが、これも類例はあまりない。焼成は軟質で、全体に摩滅気味であるが、体部外面に格子タタキ痕、内面に同心円文の当て具痕が残る。K1出土土器を含めて、S H3015出土土器はおおむね奈良時代前半のものであろう。

竪穴建物 S H3016出土土器 (第91図141～144) 141・142は須恵器杯Aである。平底の底部から斜め上方に直線的に口縁部が延びる。142は焼け歪みが見られる。143は青磁の破片である。ほかの遺物とは時期が異なるため、混入品であろう。144は土師器羽釜である。口縁部や体部下半を欠損する上、全体に摩滅が著しい。143以外は おおむね奈良時代のものであるが、詳細な時期は不明である。

掘立柱建物 S B3005出土土器 (第92図145・146) 145は灰釉陶器碗の口縁部で、薄手である。146は緑釉陶器碗の底部で、削り出し高台である。ともに柱穴P12から出土した。出土した緑釉陶器などから平安時代前期後葉のものであろう。

溝 S D3002出土土器 (第92図147～150) 147は土師器甕である。口縁端部がほぼ水平の面をなし、肩部があまり張らない器形である。148は須恵器杯Hである。口縁部が内上方に短く立ち上がり、小さな受け部を有する。149は須恵器杯G蓋である。内面に短く突出するかえりを有する。頂部の中央を欠損する。150は須恵器杯Gと思われる。口縁端部を欠損するが、口径は149とほぼ同じと推定される。S D3002出土土器は飛鳥時代中頃から後半にかけてのものであろう。

3区包含層出土土器 (第92図151～153) 151は須恵器杯B蓋である。頂部中央を欠損するが、やや扁平な器形を呈する。152は須恵器杯Aであろう。平底の底部からやや丸みを帯びて斜め外



第92図 3区出土土器実測図(2)

上方に立ち上がる口縁部を有する。口縁端部はわずかに外反する。153は緑釉陶器の皿もしくは椀の底部である。削り出しの円盤状高台である。

(4) 4区出土土器(第93図154~178)

竪穴建物S H4060出土土器(第93図154) 須恵器杯B蓋である。口縁端部を欠損するが、擬宝珠つまみを有する。S H4060出土土器は奈良時代前半のものであろう。

竪穴建物S H4100出土土器(第93図155~158) 155・156はともに須恵器杯B蓋の口縁部の破片である。笠形の器形を呈すると思われる。157は須恵器杯Aの底部である。158は須恵器杯Bである。焼け歪んでいる可能性もあるが、口縁部が大きく開く。奈良時代前半の土器群に属する。

掘立柱建物S B4030出土土器(第93図159) 無釉陶器椀の底部である。柱穴P3から出土した。出土した無釉陶器は平安時代前期中葉に位置づけられる。

柵列S A4110出土土器(第93図160・161) 160は須恵器壺の口縁部である。大きく開くことから壺Qと考えられるが、口縁端部や体部が欠損するため確実ではない。柱穴S P4041から出土した。161は灰釉陶器椀の口縁部の破片である。柱穴S P4075から出土した。S A4110出土土器は平安時代中期前葉のものであろう。

柱穴S P4007出土土器(第93図162・163) 162・163は土師器甕の口縁部である。口縁端部内面が肥厚し、頸部は緩やかに屈曲する。平安時代前半のものであろうか。

柱穴S P4010出土土器(第93図164) 須恵器の壺あるいは稜椀の底部である。奈良時代前半のものとして推定される。

柱穴S P4043出土土器(第93図165) 灰釉陶器椀の口縁部である。厚手で、釉が漬掛けとみられることから平安時代中期前葉のものと考えられる。

柱穴S P4076出土土器(第93図166) 土師器高杯の脚部である。外面は下から上に向かってヘラで面取りをする。面は7面を数える。時期は、平安時代前期後半とみられる。

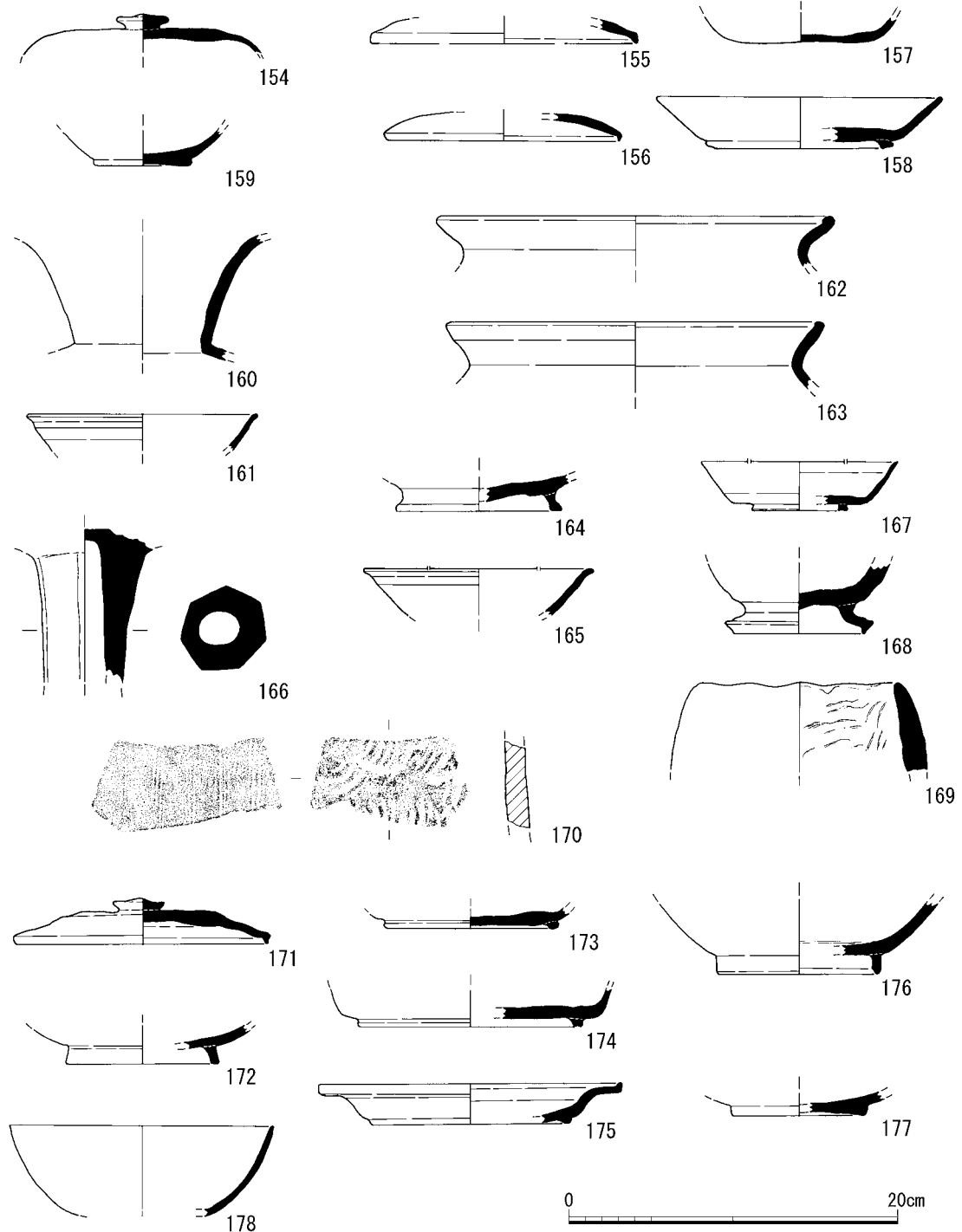
柱穴S P4023出土土器(第93図167・168) 167は、須恵器杯Bである。高台が口縁部の立ち上がり部分よりもかなり内側で接合されている。168は、須恵器壺類の底部と思われる。高台は強く「ハ」字状に開いた後、端部を屈曲させて内端部のみが接地する。全体の器形は想定しにくい。壺Qなどであろうか。奈良時代のものであろう。

柱穴S P4025出土土器(第93図169) 不明土製品。焼成が軟で、摩滅気味であるが、内面に同心円文の当て具痕が残る。

柱穴S P4041出土土器(第93図170) 170も、不明土製品である。外面には何らかの工具を使用したことを示す条線が確認でき、内面には同心円文の当て具痕が残る。色調・焼成・胎土も169と非常に類似する。

溝S D4045出土土器(第93図171) 須恵器杯B蓋である。頂部が平坦な笠形を呈する器形に擬宝珠つまみが付く。時期は平安時代前期前葉と推定される。

溝S D4027出土土器(第93図172) 緑釉陶器椀の底部である。平安時代前期中葉から後葉に位置づけられよう。



第93図 4区出土土器実測図

遺物包含層出土土器(第93図173~178) 173・174は須恵器杯Bの底部である。175は須恵器皿である。底部から大きく外反して立ち上がった体部にほぼ垂直に立ち上がる口縁端部が付く。高台は削り出しである。176は口縁部が欠損する緑釉陶器碗である。見込みには沈線を施し、貼り付けの輪高台である。平安時代中期前葉に位置づけられる。177は緑釉陶器の碗もしくは皿の底部で、削り出しの平高台である。平安時代前期中葉から後葉に位置づけられるものであろう。178は白磁碗Ⅳ類で、底部を欠損する。平安時代中頃に位置づけられる。

(5) 5区出土土器(第94図179～第96図268)

柱穴 S P 5109出土土器(第94図179) 古墳時代前期前半の土師器高杯である。

掘立柱建物 S B 5005出土土器(第94図180～183) 180・181は土師器甕である。180は緩やかに屈曲する口縁をなし、体部に荒いハケを施す。182・183は、須恵器杯B蓋である。平安時代前期中葉に属する。

掘立柱建物 S B 5025出土土器(第94図184～186) 184は須恵器杯B蓋である。185・186は土師器甕である。外面縦ハケ調整の「く」字口縁甕で、185の口縁端部は肥厚し、186は上方に立ち上がる。平安時代前期前葉～中葉とみられる。

掘立柱建物 S B 5085出土土器(第94図187～189) 187はP5087から出土した須恵器杯Aである。188はP5081、189はP5080から出土した。188は須恵器杯B蓋、189は須恵器壺口縁部である。平安時代前期中葉と推定される。

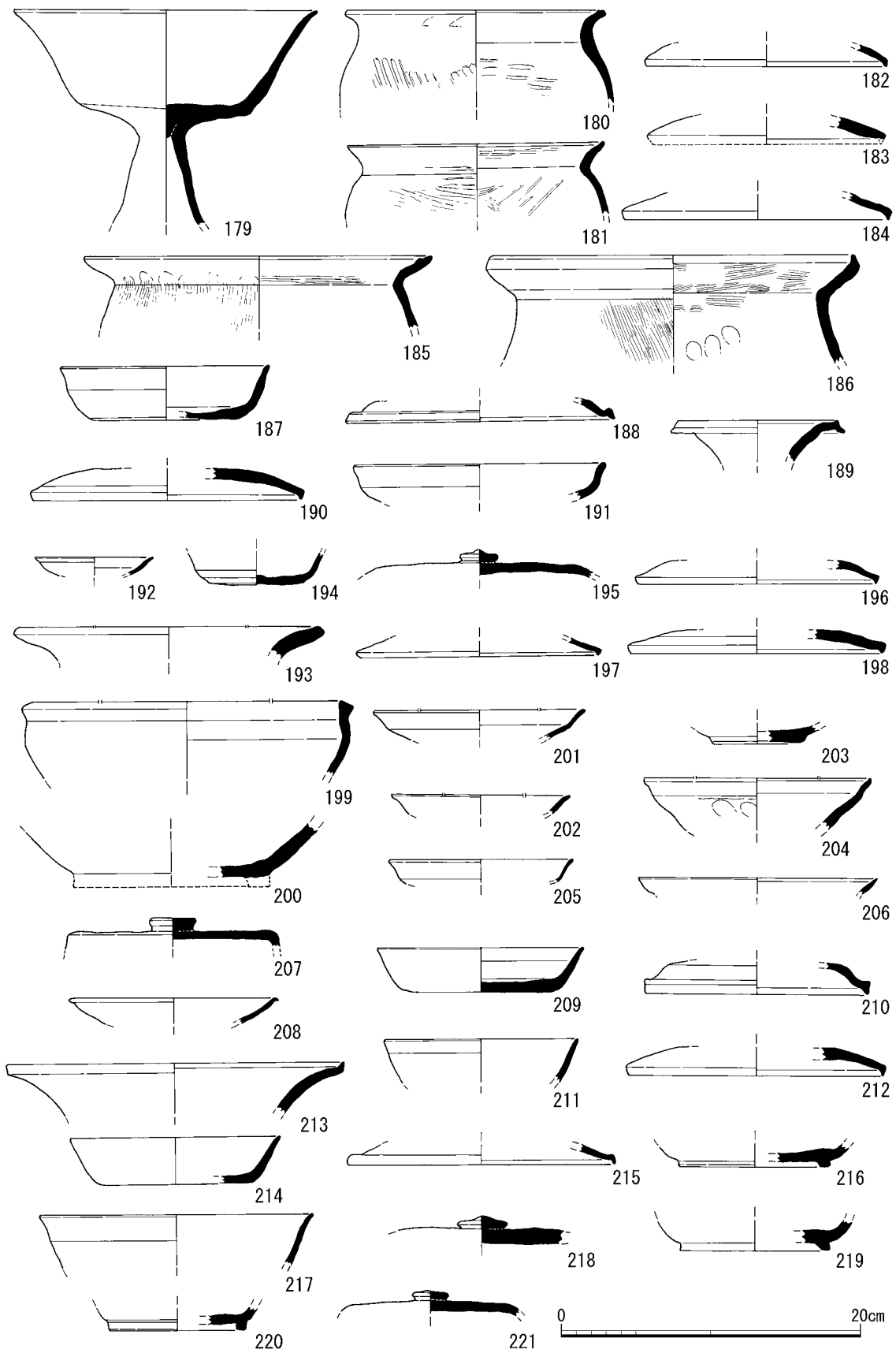
掘立柱建物 S B 5098出土土器(第94図190) P5007から出土した須恵器杯B蓋である。扁平な天井部をなし、口縁端部は垂下する。時期は、平安時代前期前葉～中葉に属する。

掘立柱建物 S B 5025出土土器(第94図191) P6から出土した須恵器皿Aである。全体に器壁が厚い。口縁部は底部から屈曲して立ち上がり、端部は外反気味に外上方へ開く。時期は平安時代前期前葉と推定される。

掘立柱建物 S B 5130出土土器(第94図192～206) 192はP17から出土した土師器皿である。口縁端部はやや外反し、端部外面にナデを施す。193はP13から出土した土師器甕である。強く外反する口縁をなし、端部はわずかに肥厚する。194はP12から出土した須恵器杯Aである。底部はヘラ切り後ナデ調整を施す。195～198は須恵器杯B蓋である。195はP11から出土した。天井部は平坦で、やや扁平なつまみを付す。口縁部を除いてほぼ全体が残存する良好な資料である。196はP28から、197・198はP8から出土した。いずれも口縁端部を下方に垂下させるものである。199は須恵器鉢で、頸部の屈曲は弱く立ち上がり、口縁端部の断面は三角形をなし、端部に面をなす。200はP11出土した須恵器壺の底部である。201はP29の最上層から出土した東海猿投産の緑釉陶器皿である。202はP3から出土した緑釉陶器皿で、猿投産とみられる。203は削り出し高台をもつ軟質の態度をもつ緑釉陶器碗である。平安京北郊産とみられる。204は灰釉陶器杯で、口縁外面に強い横ナデを施し、口縁端部はわずかに立ち上がる。灰釉の施釉はハケ塗りによる。206はP17から出土した。内面を黒色化した黒色土器A類の小破片である。以上、S B 5130の出土土器は、おおよそ平安時代前期中葉(9世紀中葉、平安京Ⅱ期古)に位置づけられるが、201の緑釉陶器皿(猿投産)は平安時代前期後半(10世紀前葉、Ⅱ期新)に属し、^(注16)時期差がみられる。

柱列 S A 5290出土土器(第94図207) P5182から出土した。須恵器壺Aの蓋である。天井部は水平に近く、扁平なつまみを付す。時期は平安時代前期中葉とみられる。

掘立柱建物 S B 5130周辺精査出土土器(第94図208) 208はS B 5130周辺で精査中に出土した灰釉陶器皿である。器壁は薄く、施釉はハケ塗りによる。東海猿投産で、平安時代中期前葉に位置づけられる。



第94図 5区出土土器実測図(1)

掘立柱建物 S B 5140 出土土器 (第94図209～213) 209は須恵器杯 A である。全体に器壁は厚く、底部はヘラ切り未調整である。口縁部は短く立ち上がり、端部は薄く丸くおさめる。210は須恵器杯 B 蓋で、天井部は高く、口縁端部外面に面をなす。213は口縁部が大きく外反して開く須恵器壺である。210の時期は、平安時代前期前葉と推定される。

掘立柱建物 S B 5145 出土土器 (第94図214～217) 214・215ともに P 5147、216は P 5213、217は P 5212から出土した。214は須恵器杯 A、215は須恵器杯 B 蓋、216は同杯 B である。215は、天井部から口縁に緩やかに下がり、端部は垂下する。おおよそ平安時代前期中葉とみられる。

掘立柱建物 S B 5180 出土土器 (第94図218～220) 218は須恵器杯 B 蓋、219・220は同杯 B である。218の器壁は厚く、幅広のつまみを付す。219の高台は底部のやや内寄りに位置し、「ハ」字状に開く。220の高台は底部周縁に付き、直立して接地する。平安時代前期前葉に位置づけられる。

掘立柱建物 S B 5190 出土土器 (第94図221) 扁平な天井部につまみを付す須恵器杯 B 蓋である。平安時代前期前半と推定される。

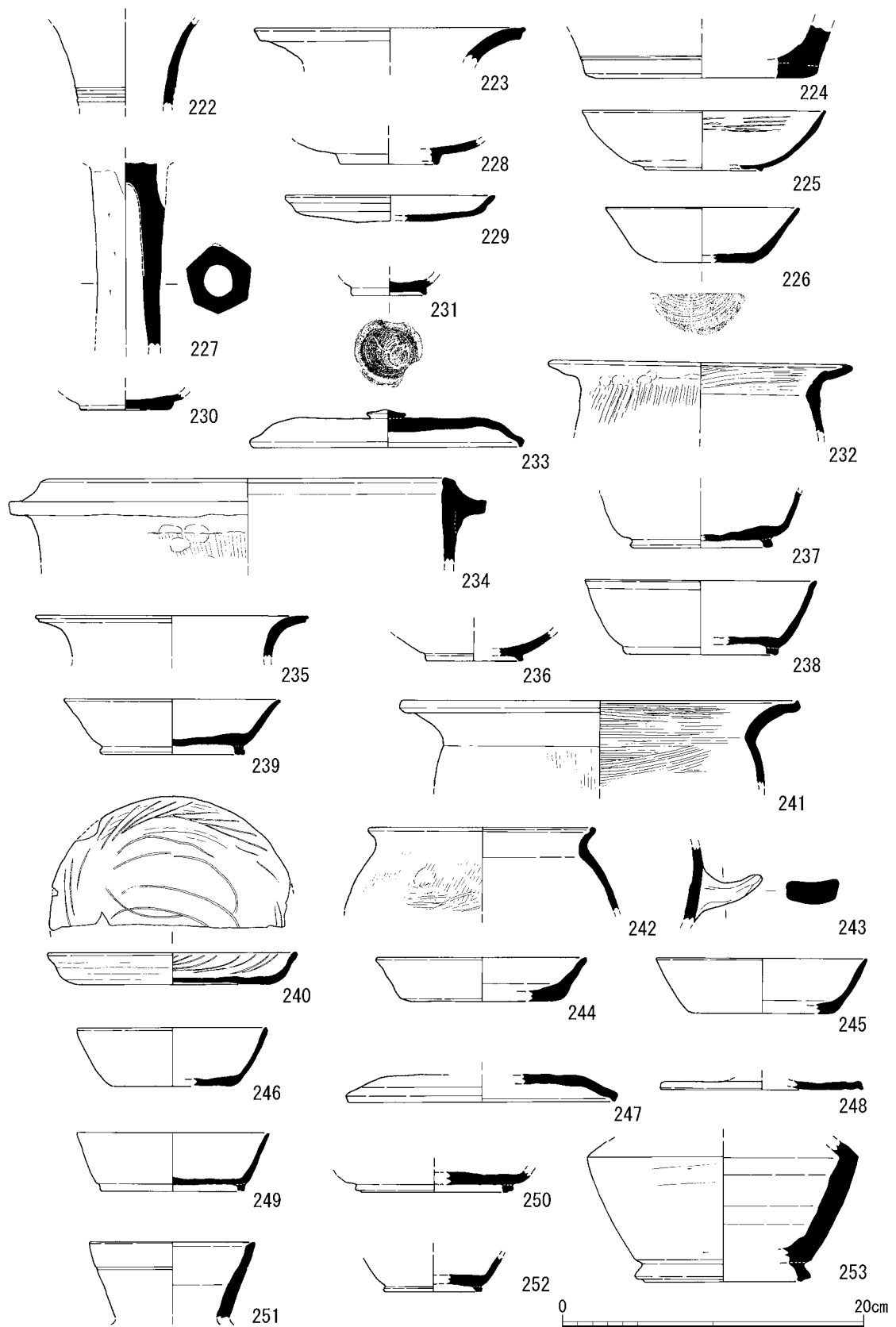
柵列 S A 5300 出土土器 (第95図222～225) 222は P 5155、223は P 5174、224～225は P 5177から出土した。222は壺頸部に沈線を巡らせるもので、肩部が屈曲する須恵器壺 K の頸部とみられる。223は、端部に面をなす須恵器壺の口縁部で、224は須恵器大型壺の平底の底部である。底部外面に一条の沈線がめぐる。225は、黒色土器 A 類で、内面にミガキを施し、底部に断面三角形の高台を付す。口径16.2cmを測る。時期は、平安時代中期前葉と推定される。

5区柱穴群出土土器 (第95図228～236) 228(S P 5035)は緑釉陶器碗である。229(S P 5176)は土師器皿である。230(S P 5181)は緑釉陶器の碗か皿である。231(S P 5186)は、無釉陶器碗である。232(S P 5179)は、土師器甕である。233(S P 5275)は須恵器杯 B 蓋である。234(S P 5257)は土師器羽釜である。235(S P 5283)は土師器壺で、236(S P 5283)は緑釉陶器碗である。

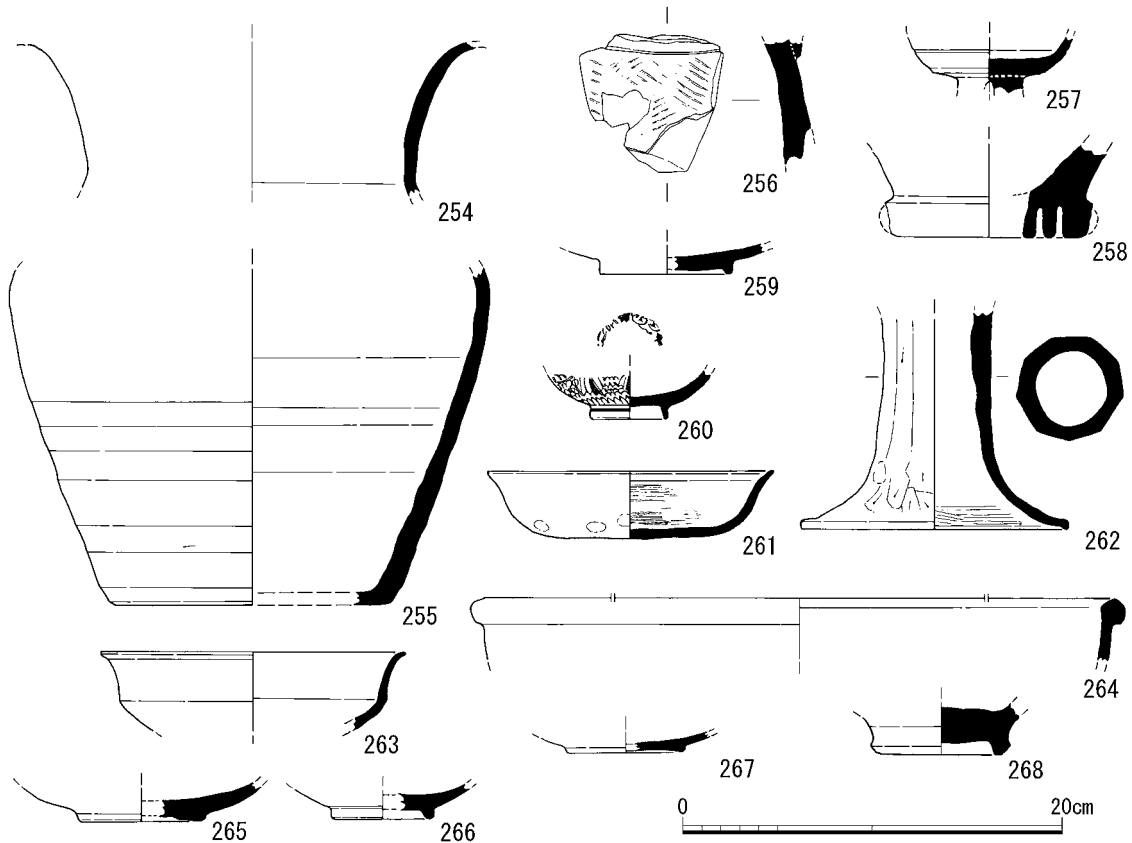
竪穴建物 S H 5027 出土土器 (第95図237) 須恵器杯 B である。底部は周縁に向かって厚く、高台は「ハ」字状に開く。おおよそ平安時代前期前葉に位置づけられる。

土坑 S K 5203 出土土器 (第95図239) 須恵器杯 B である。口縁部はやや短く、外方へ開き立ち上がる。底部は周縁を厚く成形し、高台は「ハ」字状に開く。平安時代前期後葉のものであろう。

土坑 S K 5260 出土土器 (第95図240～第96図258) 240は土師器杯 A、241の土師器甕は口縁部が大きく外反し、端部を上方に立ち上げる。243は土師器鍋の把手で、断面は台形状をなす。244～246は須恵器杯 A で、器壁が厚く短い口縁をなす244と、薄い器壁をもち口縁を外上方に大きく拡張する245・256がある。247・248は須恵器杯 B 蓋で、247は平坦な天井部から口縁へ緩やかに屈曲し、248は天井部から屈曲せず口縁に至る。249・250は杯 B、251は須恵器平瓶の口縁部、252は須恵器壺の底部で、253は、肩部が屈曲する壺 K の体部である。底部高台の断面形は「ハ」字形で、内面側が接地する。254は大型壺の頸部である。256は施釉陶器壺の肩部とみられる。火ぶくれによって器壁が膨張し凹凸がみられることから、焼き台として用いられた可能性がある。257は須恵器小型高杯で、258は底部に刺突痕がみられる須恵器鉢 F である。全体に大きな時期幅はみられず、おおよそ平安時代前期中葉と推定される。



第95図 5区出土土器実測図(2)



第96図 5区出土土器実測図(3)

溝S D5168出土土器(第95図238) 須恵器杯Bで、口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、端部はわずかに外上方へ開く。高台は直立する。

溝S D5001出土土器(第96図259) 灰白色を呈する須恵器皿で、高台は削り出し高台である。緑釉陶器の素地とみられる。おおよそ平安時代前期後葉に属するものであろう。

溝S D5125出土土器(第96図260) 近世後期の染付椀で、内面見込みに唐草文がみられる。

5区包含層出土土器(第96図261~268) 261は土師器杯Aで、底部から口縁部へ緩やかに立ち上がり、端部を外上方に引き出す。平安時代前期中葉に属する。262は、土師器高杯脚部で、9面の丁寧な面取りがみられる。平安時代前期後葉のものであろう。263は体部に明瞭な屈曲をもつ須恵器椀である。おおよそ平安時代前期前半に属する。264は玉縁の口縁をなす緑釉陶器の鉢で、中国産とみられる。265は軟質の緑釉陶器椀で、蛇の目高台をもつ。平安時代前期後葉~中期前葉のものであろう。266は緑釉陶器底部で、削り出し輪高台をもつ。平安京北郊産とみられる。267は無釉陶器の底部で、平高台をなす。268は、中国産白磁壺の底部である。

(6) 6区出土土器(第97図269~第99図333)

竪穴建物S H6088出土土器(第97図269) 須恵器杯H蓋である。頂部外面に回転ヘラケズリを施す。陶邑編年TK10型式前後のものと思われ、古墳時代後期のものである。

掘立柱建物S B6120出土土器(第97図270~272) 270は土師器皿である。いわゆる「て」字状口縁を呈する小型の皿である。271は須恵器杯Hの底部と思われる、270や271とは時期が異なるこ

とから混入品である。272は緑釉陶器碗の口縁部の小破片である。270はP 1 から、271はP 2 から、272はP 5 から出土した。271を除く S B 6120出土土器はおおむね平安時代前期後葉のものである。

掘立柱建物 S B 6060出土土器(第97図273～278) 273は土師器皿である。いわゆる「て」字状口縁を呈する。柱穴P 13から出土した。274は土師器杯類の底部であるが、口縁部が欠損するため、器形等は不明である。柱穴P 27(S P 6239)から出土した。275は土師器甕の口縁部の小破片である。口縁端部内面が肥厚するが、小破片のため口径の復元等は困難である。柱穴P 16から出土した。276は須恵器壺類の頸部の破片である。壺Kや壺Lのような長頸壺の破片である可能性が高い。柱穴P 15から出土した。277は無釉陶器碗の底部である。柱穴P 16から出土した。278は無釉陶器輪花碗の口縁部の破片である。柱穴P 13から出土した。S B 6060出土土器は平安時代前期から中期にかけてのものがあり、273が最も新しく平安時代中期後葉に位置づけられる。

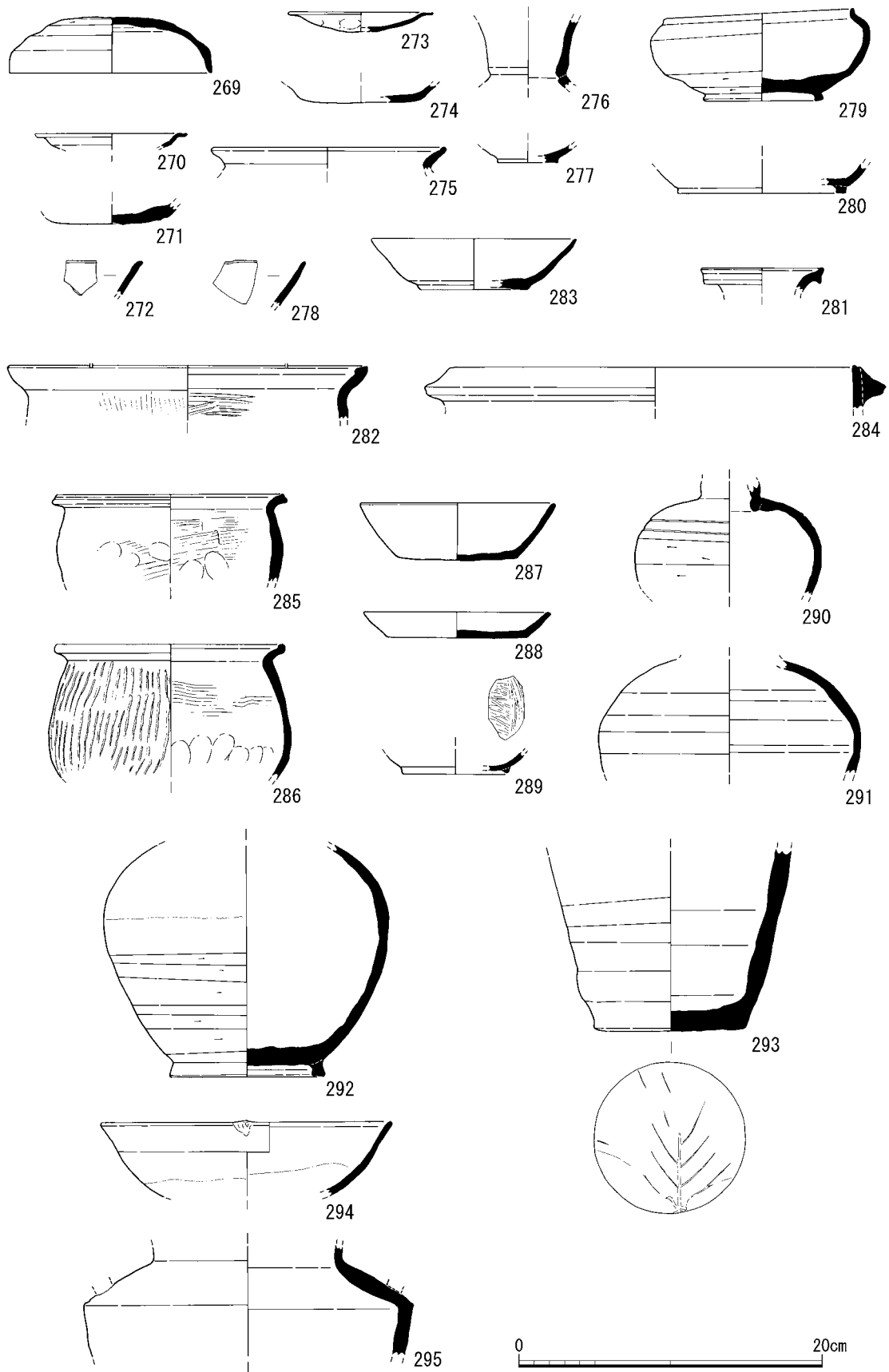
掘立柱建物 S B 6080(第97図279) 須恵器壺Dであろう。短く立ち上がる口縁部に丸みを帯びた肩部が続く。全体に扁平な印象を受ける。柱穴P 6から出土しており、出土状況から建物廃絶時の埋納の可能性がある。平安時代前半のものであろうか。

掘立柱建物 S B 6087出土土器(第97図280・281) 280は須恵器杯Bの底部の小破片である。柱穴P 11から出土した。281は須恵器壺Lなどの口縁部の破片である。広い口縁帯を形成する。S B 6087出土土器は、281が猿投窯において出現期の灰釉陶器と共伴する壺の形態に近く、平安時代前期前半に位置づけられる。

掘立柱建物 S B 6187出土土器(第97図282・283) 282は土師器甕である。口縁端部内面が肥厚するが、小破片のため口径や傾きは推定である。283は須恵器碗であろう。わずかであるが平高台状の立ち上がりを認めることができる。ともに柱穴P 3から出土した。283の時期は平安時代前期後葉から中期前葉であろう。

掘立柱建物 S B 6144出土土器(第97図284) 284は土師器羽釜の口縁部と鏝部の破片である。小破片のため、口径の復元等には至らないが、撰津型である。柱穴P 2から出土した。平安時代中期後半のものである。

掘立柱建物 S B 6146出土土器(第97図285～291) 285・286は土師器甕である。ともに肩部があまり張らない器形であるが、口縁部に形状に違いがある。285は端部外面が面をなし、286は端部内面が丸く肥厚する。また、体部の外面調整は、285がナデと粗い横方向のハケであるのに対して、286は粗い縦方向のハケを施す。287は須恵器杯Aである。平底の底部からわずかに内湾しながら外斜め上方に口縁部が延びる。288は須恵器皿Aであろう。平底の底部から外斜め上方に口縁部が短く延びる。小型品であるが、器高が低いことから皿として報告する。289は黒色土器碗の底部であろう。断面三角形の小さな高台を貼り付ける。内面にはミガキを密に施している。290・291は須恵器壺類である。どちらも壺Lの肩部から体部にかけて破片と思われる。290では体部と口頸部の成形方法について観察することができる。285～287・290は柱穴P 4から、288は柱穴P 1から、289は柱穴P 5から、291は柱穴P 6から、それぞれ出土した。時期は、S B 6146



第97図 6区出土土器実測図(1)

出土土器は平安時代前期中葉とみられる。

掘立柱建物 S B 6200出土土器(第98図296) 296は掘立柱建物 S B 6200の柱穴 P 5 から出土した。須恵器壺類の体部下半と底部である。本来の器形は判別できないが、それほど大きな個体ではない。奈良時代から平安時代前半にかけてのものであろう。

S A 6272出土土器(第97図295) 須恵器壺 B の肩部の破片であろう。肩部には自然釉が付着するが、口縁部には付着しないため、蓋を伴っていた可能性もある。また肩部には把手の剥離した痕跡も確認できる。柱穴 S P 6215 から出土した。奈良時代のものと推定される。

柱穴 S P 6013出土土器(第98図297) 297は土師器皿である。口縁部にヨコナデを加えて強く外反させる。端部はややつまみ上げ気味である。おおよそ平安時代中期前半と推定される。

柱穴 S P 6092出土土器(第98図294) 294は灰釉陶器輪花椀である。

柱穴 S P 6269出土土器(第98図298) 298は須恵器皿である。いわゆる瓷器模倣の形態をとる。高台は削り出しである。平安時代前期中葉から後葉にかけてのものであろう。

柱穴 S P 6212出土土器(第98図299) 299は須恵器椀の底部と推定される。299もいわゆる瓷器模倣の形態をとり、高台は削り出しである。平安時代前期から中期にかけてのものであろう。

柱穴 S P 6245出土土器(第98図300) 300は須恵器鉢である。平底の底部に外斜め上方に直線的に体部が延び、口縁部に至る。口縁端部には面を持つ。部分的に焼成が甘いため、摩滅の著しい箇所がある。平安時代前期中葉から後葉にかけてのものであろう。

柱穴 S P 6111出土土器(第98図301) 301は土師器羽釜である。口縁端部の直下に短い鑿が付く。摂津型で平安時代中期後半のものである。

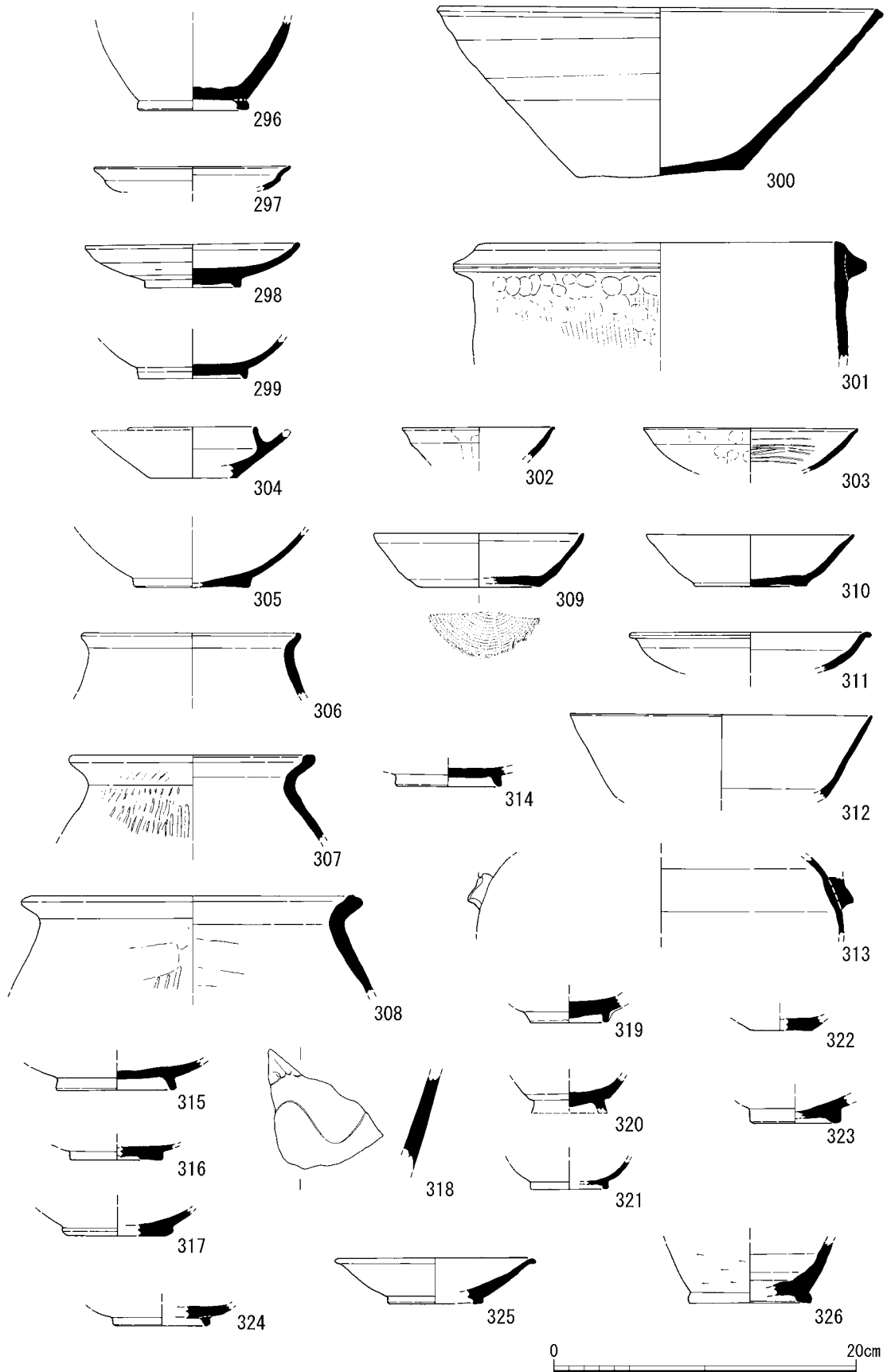
柱穴 S P 6118出土土器(第98図302) 302は灰釉陶器椀の口縁部で、厚手である。詳細な時期は不明である。

柱穴 S P 6171出土土器(第98図303) 303は瓦器椀と推定されるが、摩滅のためにぶい黄橙色を呈する。鎌倉時代前期に帰属する。

柱穴 S K 6094出土土器(第98図292・293) 292は須恵器壺 L もしくは水瓶の体部と思われる資料である。体部外面下半に回転ヘラケズリを施す。肩部には自然釉が付着する。293は須恵器壺類の体部下半の資料である。焼成時の焼き膨れによって器壁に空隙が生じている。壺 N の下半部の可能性が高い。

土坑 S K 6153出土土器(第98図304・305) 304は江戸時代の灯明皿である。底部を欠損する。305は、平高台をもつ無釉陶器椀である。混入資料とみられる。

土坑 S K 6078出土土器(第98図306～314) 306～308は土師器甕である。いずれも肩部があまり張らない体部にゆるく外反する頸部から口縁部に至るもので、口縁端部内面を肥厚させる。なお、308は306・307に比べて一回り大きい大型品である。309は須恵器杯 A である。底部に糸切り痕が見られる。310は須恵器椀である。309とほぼ同法量であるが、底部が平高台状を呈している点に、器形的な違いを認めることができる。311は須恵器皿である。器形から瓷器模倣のものと推定される。底部を欠損するが、内湾気味に立ち上がった体部が、強く折り返されて口縁部に至



第98図 6区出土土器実測図(2)

るものである。312は須恵器杯である。底部を欠損するので、杯Aか杯Bか不明であるが、口縁部が外斜め上方に直線的に延びる。313は須恵器壺類の肩部の破片である。耳状把手の一部が認められることから壺Nなどの可能性が高い。314は緑釉陶器皿の底部である。高台は削り出しである。S K 6078出土土器のうち、314は平安時代前期後葉のもので、全体としてもその前後のと推定される。

土坑 S K 6005出土土器(第98図315~318) 315・316はともに緑釉陶器椀ないし皿の底部である。いずれも削り出し高台で、315は輪高台、316は蛇ノ目高台である。317は緑釉陶器椀の底部で、削り出しの平高台である。318は白磁壺の体部の破片である。S K 6005出土土器は平安時代前期後葉を中心とするのものであろう。

土坑 S K 6006出土土器(第98図319~321) 319は青磁椀の底部である。320は瀬戸美濃天目茶椀の底部である。近世のものであり、遺構の時期を示す資料である。321は京焼椀の底部である。

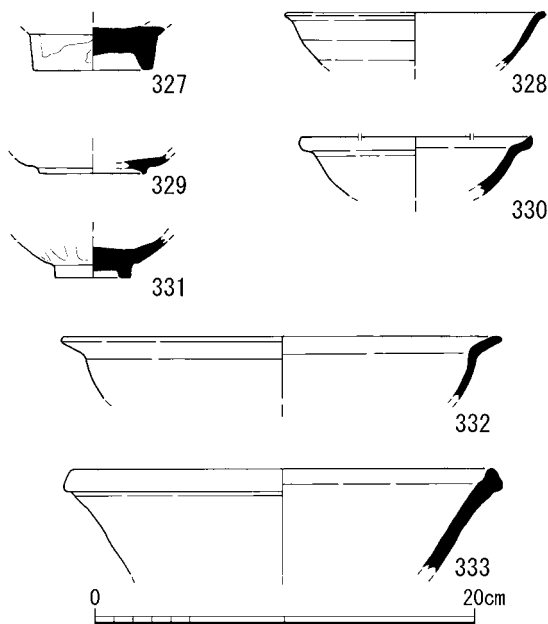
土坑 S K 6126出土土器(第98図322) 322は青磁の小型皿の底部の破片である。時期は、およそ鎌倉時代前期と推定される。

土坑 S K 6038出土土器(第98図323) 323は白磁椀Ⅱ類の底部の破片である。鎌倉時代前期に位置づけられる。

土坑 S K 6169出土土器(第98図324) 324は灰釉陶器椀ないし皿の底部の破片である。高台は貼り付けである。部分施釉であり、平安時代中期前半のものと考えられる。

土坑 S K 6098出土土器(第98図325) 325は無釉陶器皿である。高台は削り出しである。平安時代中期前葉に位置づけられる。

土坑 S K 6165出土土器(第98図326) 326は須恵器壺類の体部下半と底部である。本来の器形は判別できないが、それほど大きな個体ではない。奈良時代のものであろうか。



第99図 6区出土土器実測図(3)

溝 S D 6135出土土器(第99図327) 327は白磁椀Ⅶ類の底部である。中世前半(12世紀後半)のものである。

遺物包含層出土土器(第99図328~333) 328は須恵器杯の口縁部である。器形から瓷器模倣のものと推定される。329は緑釉陶器椀か皿の底部で、削り出し高台である。摩滅が著しく釉薬は残っていない。330は龍泉窯系青磁杯である。小破片のため口径は復元できなかった。331は龍泉窯系青磁椀の底部である。332は須恵器鉢である。口縁部が大きく屈曲して開く形態を呈する。333も須恵器鉢である。直線的に外上方に延びる体部と広い端面を持つ口縁部からなる。口縁部内面は強いナデによ

り段状になっている。いわゆる東播系の鉢であろう。

(7) 7区出土土器(第100図334～第105図446)

竪穴建物 S H 7020 出土土器(第100図334・335) 334は土師器甕である。「く」字状に屈曲する口縁部を有する。335は須恵器甕の口縁部である。小破片のため傾きや法量は推定である。外面にヘラ状工具により長さ3cm程度の刺突文を施す。詳細な時期は不明であるが、時期は奈良時代前半と推定される。

竪穴建物 S H 7030 出土土器(第100図336～342) 336は把手を有する土師器鍋または甕と推定される。同じような器形はあまり見かけない。337～340はいずれも須恵器杯Aである。口縁部が斜め上方に直線的に延びるもの(337・340)と口縁部の先端がわずかに外反するもの(338・339)とがある。以上の337～340はS H 7030の埋土から出土した。341は須恵器杯B蓋である。つまみの付近を欠損するが、笠形を呈し、口縁部内面にはかえりを有する。単位は不明瞭だが、外面に回転ヘラケズリに伴う砂粒の動きが認められる。S H 7030内の土坑K 1から出土した。342は須恵器杯Bである。口縁部の先端はわずかに外反する。S H 7030内の土坑K 2から出土した。S H 7030出土土器は奈良時代前半のものであろう。

掘立柱建物 S B 7150 出土土器(第100図343・344) 343は土師器杯Aである。口縁端部が肥厚し、内面に沈線状の凹線を施す。内面に暗文は施されていない。柱穴S P 7109から出土した。344は須恵器杯Bである。口縁部の先端の形状は不明である。柱穴S P 7022から出土した。S B 7150出土土器は奈良時代前半に帰属する。

掘立柱建物 S B 7160 出土土器(第100図345～348) 345は須恵器杯B蓋のつまみで、やや扁平な擬宝珠状を呈する。346は須恵器壺類の口縁部と推定される。頸部が大きく外反し、口縁部をやや内斜め上方につまみ上げる。壺Hなどの口縁部になる可能性が高い。347は緑釉陶器皿の底部である。348は緑釉陶器碗の口縁部である。いずれも柱穴S P 7005から出土した。S B 7160出土土器のうち、347は平安時代前期前葉～中葉にかけて、348は平安時代中期前葉のものであろう。

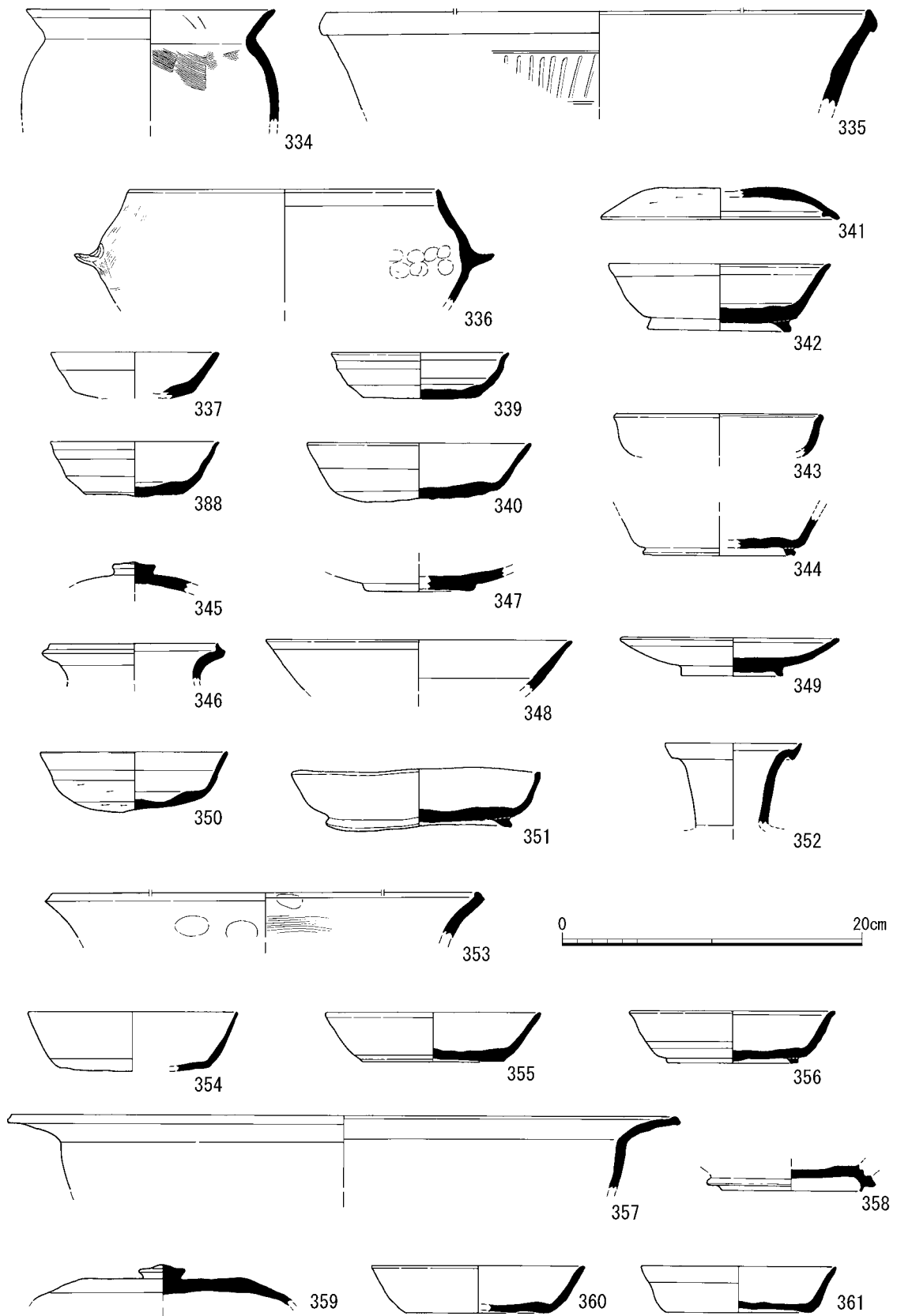
柱穴 S P 7094 出土土器(第100図349) 349は緑釉陶器皿である。削り出しの輪高台である。平安時代前期に位置づけられる。

柱穴 S P 7038 出土土器(第100図350) 350は須恵器杯Aである。焼け歪みのためか、底部の凹凸が著しい。今回出土した須恵器杯Aで底部外面に回転ヘラケズリを施す例は少ない。飛鳥時代末から奈良時代前半のものとして推定される。

柱穴 S P 7017 出土土器(第100図351) 351は須恵器杯Bである。焼け歪みのため器形のゆがみが著しい。奈良時代後半以降のものとしてみられる。

柱穴 S P 7092 出土土器(第100図352) 352は須恵器壺Kまたは壺Lの口縁部と思われる。頸部が外反気味に立ち上がり、段を持って幅広の口縁部を形成する。口縁部の下端はわずかに垂下している。奈良時代のものであろうか。

柱穴 S P 7133 出土土器(第100図353) 353は土師器甕の口縁部である口縁端部内面が肥厚する。小破片のため法量等は推定である。奈良時代のものであろうか。



第100図 7区出土土器実測図(1)

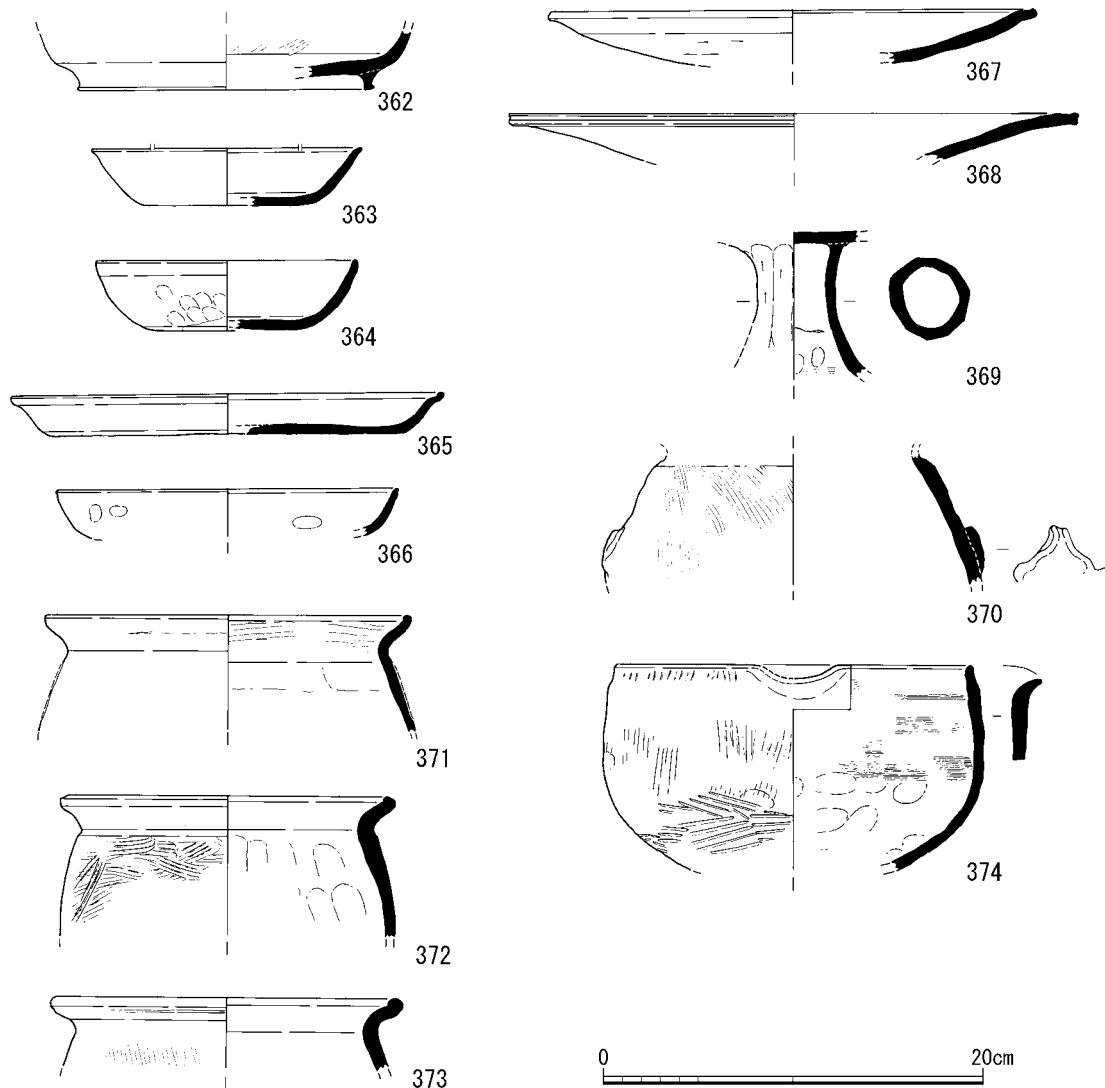
柱穴 S P 7025出土土器(第100図354~357) 354・355は須恵器杯Aである。いずれも口縁部が直線的に外上方へ延びる。354の方がやや深手である。356は須恵器杯Bである。口縁部の先端がわずかに外反する。357は土師器鍋である。時期は奈良時代と推定される。

土坑 S K 7010出土土器(第100図358) 358は須恵器壺類の底部であるが、器形については不明である。高台の端部をつまんで成形しており、内側の端部のみが接地する。奈良時代のものとみられる。

土坑 S K 7029出土土器(第100図359~361) 359は須恵器杯B蓋である。器形は、口縁端部を欠損するが、頂部がほぼ平坦な笠形を呈する。中央に擬宝珠つまみが付く。360・361は須恵器杯Aである。どちらも平底の底部に口縁部が外上方にほぼ直線的にのびる。ただし、361はわずかに外反する。土坑 S K 7029出土土器は奈良時代前半のものであろう。

土坑 S K 7177出土土器(第101図362~第103図446) S K 7177から出土した土器には土師器や須恵器のほか、黒色土器、緑釉陶器、無釉陶器、製塩土器などがある。

362~374は土師器である。362は高台を貼り付ける杯Bである。内面に放射暗文を確認できる。



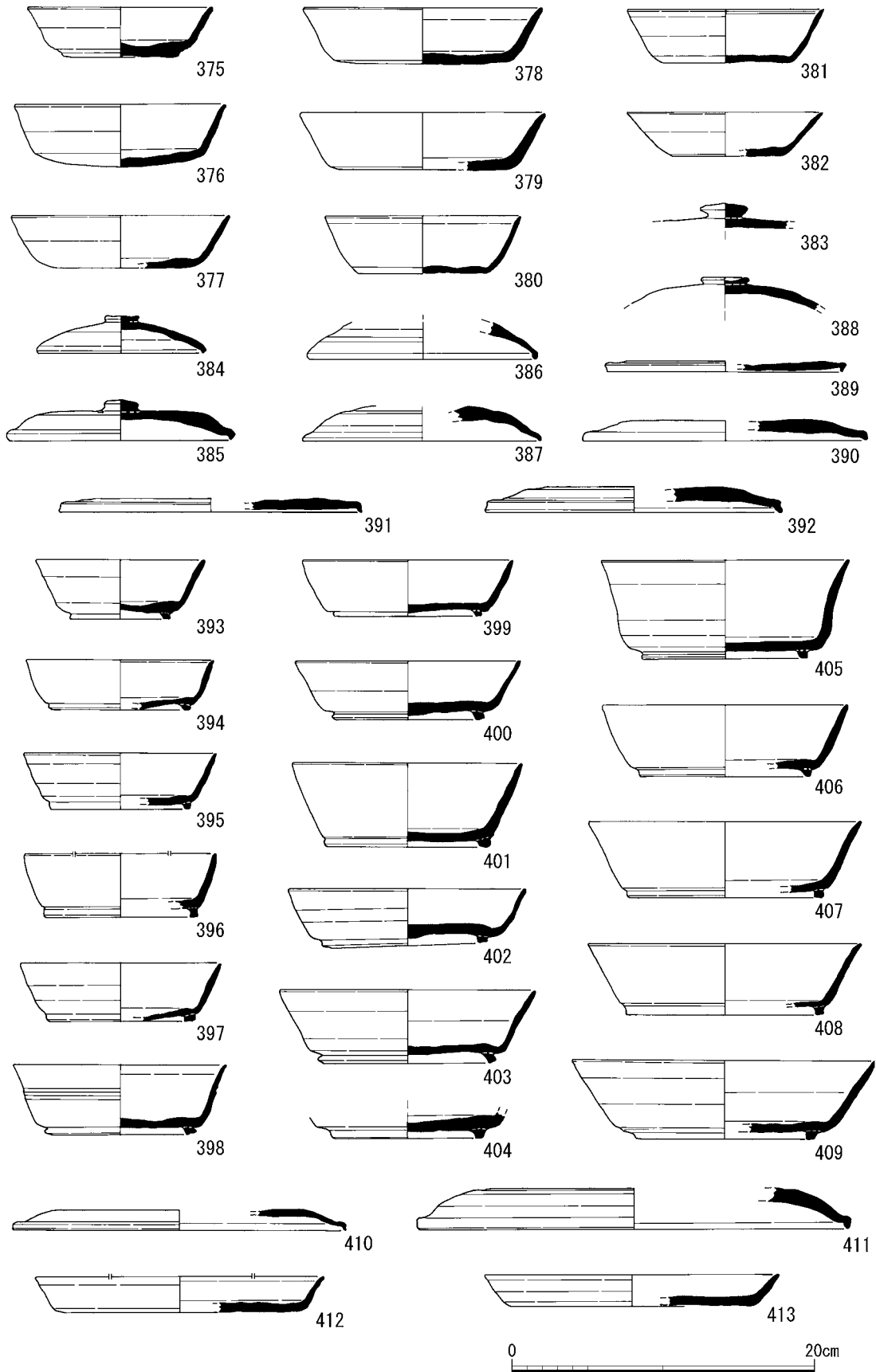
第101図 7区出土土器実測図(2)

363は口縁端部がわずかに外反する杯で、内面はやや摩滅気味ある。364は平底気味の底部からやや内湾しながら口縁部が立ち上がる杯である。365は外反して立ち上がる口縁部の端部が内方に肥厚する皿Aである。内面は摩滅が著しく、暗文の有無等は不明である。366は底部を大きく欠損するものの、短く斜め外上方に立ち上がった口縁部の端部が内傾する面をもつ皿である。367・368は高杯の杯部である。367は口縁端部をわずかだが上方につまみ上げる。杯部外面下半にはケズリを施すが、全体に摩滅気味のため単位などは不明である。368は口縁端部にヨコナデを施して断面方形に整える。杯部外面はナデで整えた後、ミガキを粗く施す。369は短脚の高杯の脚部である。10面に面取りを施す。以上の供膳具では、赤褐色や橙色を呈するものが多い。杯・皿類は同形式のものが少ないが、362や365などは都城域で多く出土する形式のものとする。

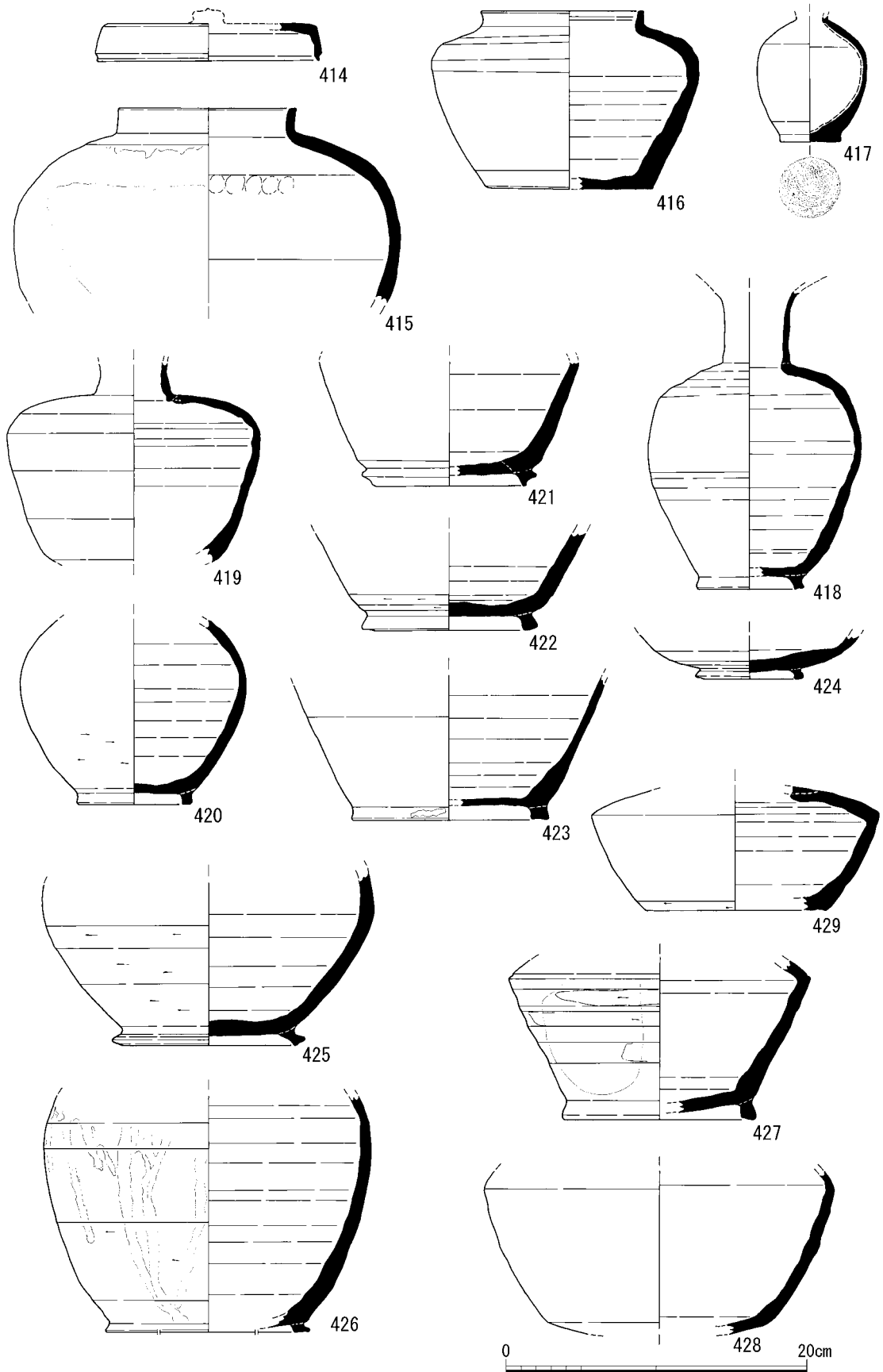
370は口縁部や体部下半を欠損するが、把手を有する甕である。把手は体部に密着しており、本来の機能を果たしていない。371～373は甕である。類似した形態の甕で、口縁端部内面が肥厚し、肩部があまり張らないものである。底部の形状は不明であるが、丸底の底部を呈すると考えられる。372は器表面に煤が付着する。374は片口鉢である。丸底気味の底部に、やや内傾気味に立ち上がる体部と口縁部からなる。

375～440は須恵器である。375～382は杯Aである。平底の底部に斜め上方に開く口縁部からなる。375は底部がやや厚めである。381は口縁端部内面に沈線状のものが1条巡る。382はほかの個体に比べ外傾度が大きい。383～392は杯Bの蓋である。383は擬宝珠状のつまみを有する破片である。384・386・387も頂部が笠形を呈する。385は頂部が比較的扁平で、口縁端部が屈曲するものである。388はつまみの中央が凹むタイプで、頂部は笠形を呈する。389は焼け歪みのためか、扁平な蓋である。391も同様の蓋である。390・392も全体に扁平であるが、本来の形状と考える。393～409は杯Bである。器形は、おおむね平底の底部に断面方形の高台を貼付け、口縁部が斜め上方に開く。口縁部が内湾気味に立ち上がるもの、口縁部がまっすぐ斜め上方に立ち上がって外反するもの、底部からの立ち上がりやや内湾し口縁部が外反するもの、などがある。高台は端面全体が接地するもののほかに、内側の端部が接地するもの(394・396・398・400・402・403)や外側の端部が接地するもの(395)などがある。また、法量からおおむね7群ほどに分けることができる。第1群は口径11cm、器高4cmのもの(393)、第2群は口径12～14cm、器高3～4cmのもの(394～397・399)、第3群は口径14cm、器高4.7cmのもの(398)、第4群は口径15～17cm、器高3.5～5cmのもの(404・402・403・406)、第5群は口径16.4cm、器高6.6cmのもの(405)、第6群は口径18cm前後、器高5cm前後のもの(407・408)、第7群が口径20.1cm、器高5.2cmのもの(409)である。これらのうち、第1・3・5・7群は各1点ずつしかないため、必ずしも群を形成していないかもしれない。特徴的な器形としては398がある。398は口縁部外面に沈線を2条施しており、金属器写しの特徴とみられる。410・411は皿Bの蓋である。どちらも口縁端部が屈曲するもので、410は摩滅が著しい。なお、皿Bの資料を図示することはできなかった。412・413は皿Cである。平底の底部に、口縁部が斜め上方に短く立ち上がるものである。

414は壺Aの蓋である。頂部中央とつまみを欠損する。口縁端部外面側の段が明瞭である。



第102図 7区出土土器実測図(3)



第103図 7区出土土器実測図(4)

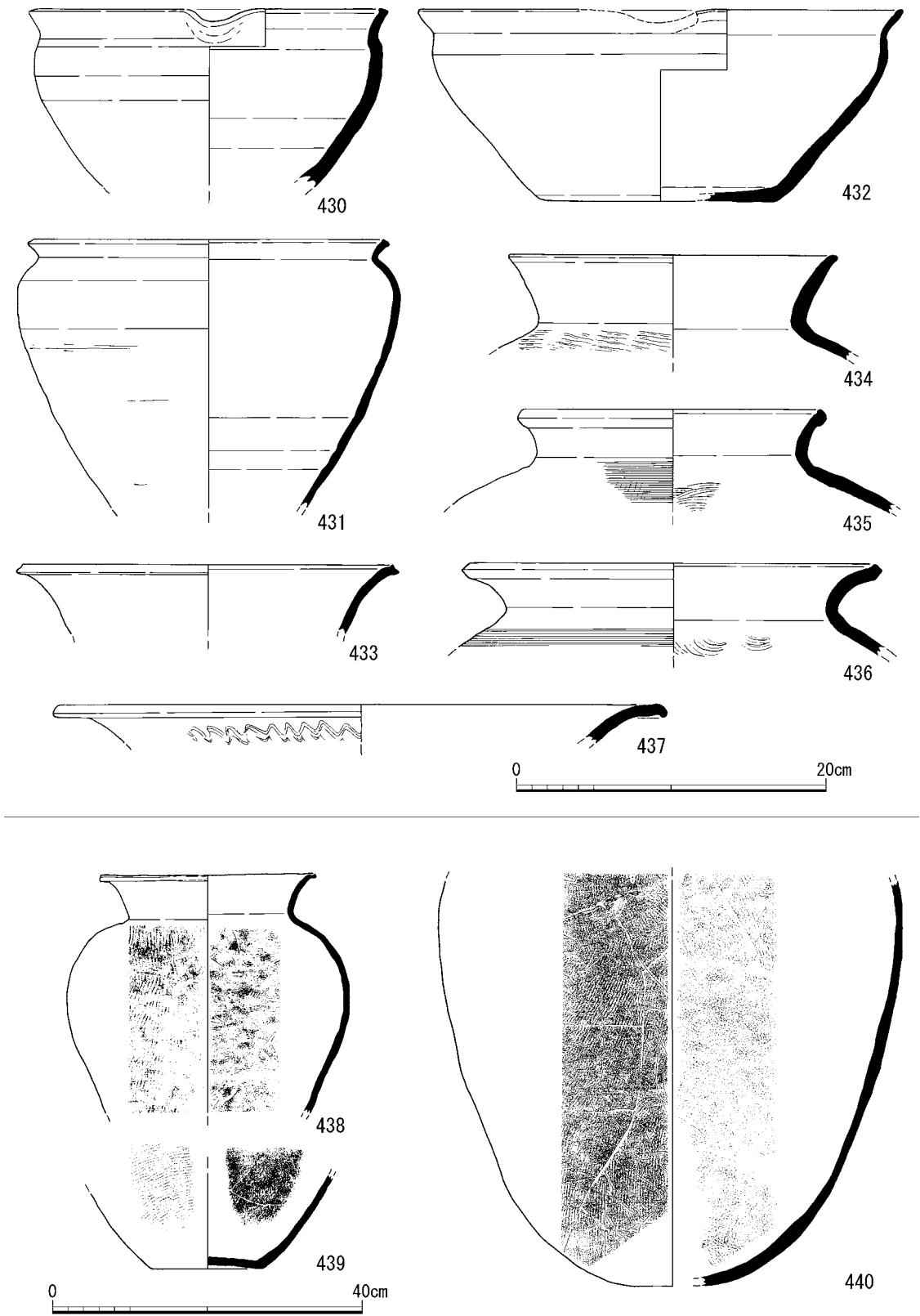
415・416は壺Aである。415は肩部が丸く収まるが、416は415にくらべ、肩部がやや張る。また、416の器壁は厚手である。417は底部に糸切り痕が残る壺Mである。水曳き成形で、口縁部を欠損する。418は口縁端部を欠損するが、壺Lである。体部内外面に回転ナデの痕跡が明瞭に残る。419は壺Kである。高台の有無は不明であるが、肩部がやや張り気味で、緩いものの稜が確認できる。口縁部も欠損する。420は口頸部から肩部にかけて欠損するものの、肩部が丸みを帯びた形状を呈する。詳細な型式は不明であるが、壺Lや水瓶などの可能性がある。421は肩部が張ると考えられる壺であるが、詳細な型式は不明である。高台は端部がややひねり出し気味で内側の端部が接地する。422・423は体部が斜め上方にまっすぐ延びる形態を呈するが、上半部を欠損するため、詳細な型式は不明である。422は体部下半に回転ヘラケズリを施す。423は口縁部を欠損するが、壺類もしくは稜椀の底部と思われる。425は高台が「ハ」字状に開き、丸みを持った体部を呈するが、上半部を欠損するため詳細な型式は不明である。体部下半には回転ヘラケズリを施す。426は短く踏ん張り気味の高台に、やや丸みを帯びる体部の壺である。肩部以上を欠損するので、詳細な型式は不明である。胎土や自然釉のあり方から猿投産と考えられる。いわゆる原始灰釉ないし灰釉陶器の最初期のものと考えられる。427も422・423と同じ特徴を有するもので、体部から肩部にかけての屈曲部が明瞭な稜をなし、最大径付近に沈線を1条施す。428も壺の体部であるが、肩部に緩い稜を持つ。高台の有無は不明である。全体に摩滅気味である。429は平瓶の体部の破片であるが、1/4程度しか残存しないため、口縁部の取り付け位置は確認できなかった。430・431は片口鉢である。430は口縁端面が外傾し、端部をつまみ上げ気味に仕上げているが、底部を欠損する。431は平底の底部を有し、口縁端部は内面が肥厚する。432は430とほぼ同一の器形を呈するが、片口であるかどうかは確認できない。外面の広い範囲に回転ヘラケズリを施す。

433～437は甕の口縁部の資料である。433は外反する口縁部の端面がわずかに凹む面を持つもので、端部はややつまみ上げ気味である。434は口縁部がわずがかに外反して延びるもので、頸部が「く」字状を呈するものである。体部外面に平行タタキを施す。435は外反した口縁部の端部外面が玉縁状に肥厚するもので、端部はやや丸みを帯びるものである。体部外面は平行タタキののちカキメを施し、内面に同心円文の当て具痕が認められる。436は外反した口縁部の端部が面をなすもので、435と同様、体部外面はタタキののちカキメを施し、内面に同心円文の当て具痕が認められる。437は口縁部のみの破片で、外面に波状文を施す。438～440は大型の甕である。438は口縁部から体部下半にかけての資料である。439は底部が平底気味の甕である。体部中位よりも上部を欠損する。440は口縁部～肩部と底部を欠損するが、438・439よりもさらに大型の甕である。

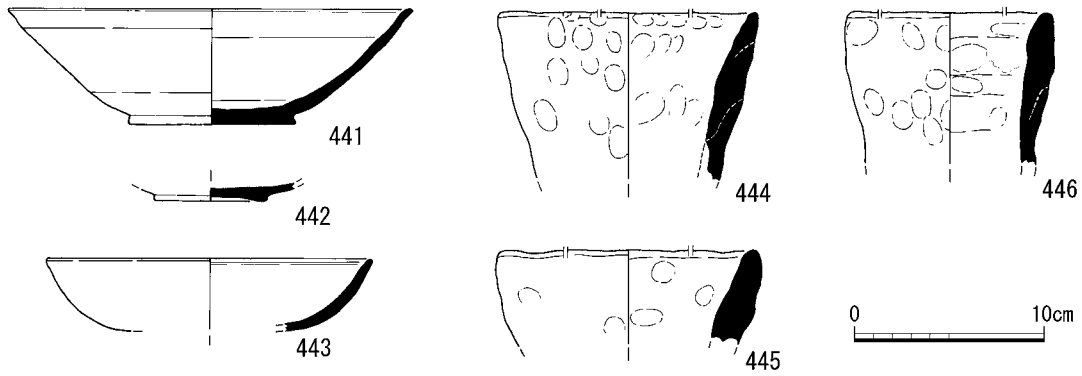
441は無釉陶器椀で、内外面にヘラミガキの痕跡がかすかに残る。平安時代前期中葉に位置づけられる。442は緑釉陶器皿の底部である。平安時代前期中葉から中葉にかけてに位置づけられる。

443は黒色土器杯である。口縁端部内面に沈線が1条巡る。

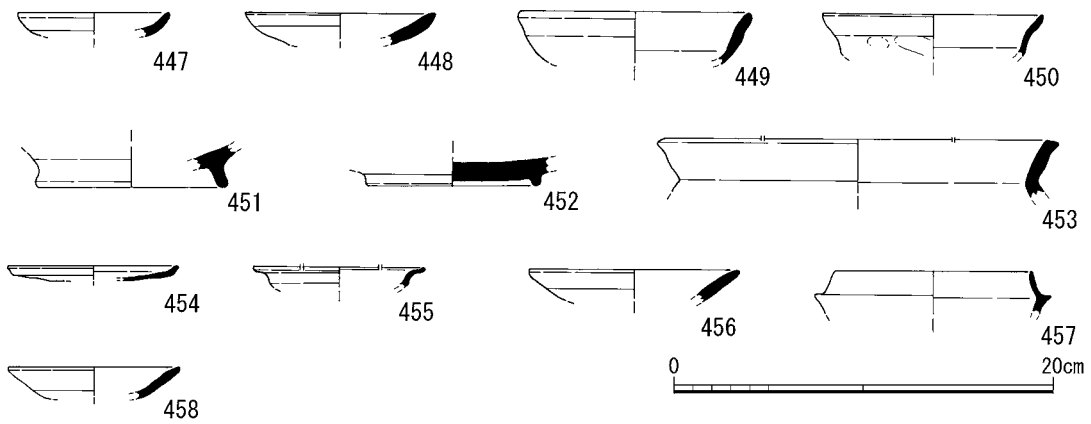
444～446は製塩土器である。いずれも厚手で、内外面にユビオサエの痕跡などが認められる。



第104図 7区出土土器実測図(5)



第105図 7区出土土器実測図(6)



第106図 8・9区出土土器実測図

これらの土器群は一部平安時代前期中葉に位置づけられるものがあるものの、おおむね平安時代前期前葉を中心とするものである。出土した緑釉陶器はわずかであるが、緑釉陶器の最初期にあたると考えられる。ほぼ同様の時期を示す土坑として5区で検出したS K5260がある。

8) 8区・9区出土土器(第106図 447~457)

447~454は、8区から出土した。447~450は、流路S D 1から出土した土師器である。447・448は土師器小皿で、447は口径8.0cm、448は口径10.0cmを測る。鎌倉時代後期の所産とみられる。449は、やや厚手で、口縁外面に一段ナデを施す。口径12.0cm。450は、口縁が著しく外反するもので、口径11.6cmを測る。鎌倉時代後期~室町時代初めと推定される。451は須恵器壺の高台である。452・453は、8区包含層中から出土した。452は、須恵器杯で、453は「く」字口縁甕である。

454は、8 A地点から出土した土師器皿である。器壁は薄く、口径8.7cmを測る。胎土は淡い灰白色を呈する。鎌倉時代中期~室町時代初めのものであろう。

455~458は、9区の出土土器である。455・456は、落ち込みS X9002から出土した。455は、「て」字口縁の土師皿である。口径9.0cmを測る。12世紀前半ごろの資料である。456は、やや厚手の土師器皿である。457は、包含層中から出土した須恵器杯身である。おおよそ陶邑T K203型式に帰属する。

9) 土器組成と施釉陶器の出土傾向

以下、主要遺構である土坑S K7177・土坑S K5260の土器組成と、各遺構から出土した施釉陶器の出土傾向について述べ、土器の全体的な出土傾向を示すことにしたい。

<土器組成> 付表1は平安時代前期中葉(平安京Ⅱ期古)の主要な遺構であるS K7177・S K5260出土土器の破片点数計測表である。各遺構で土器組成の比率は異なるが、いずれの遺構でも土師器と須恵器を合わせて約90%を占める。

S K7177出土土器は、後世の混入品や瓦類を除くと、総破片数で2,111点あり、うち土師器749点(35.5%)、須恵器1,105点(52.3%)で須恵器が多い。この割合について、平安京内の平均的な数値と比べると、土師器の割合が少なく、須恵器の割合が高い。

器形別にみると、土師器では杯・椀・皿が20.4%、甕・鍋が14.5%である。やや供膳具の割合が高い。須恵器では杯・椀・皿が37.0%と、供膳具が高率で確認でき、残りを壺・瓶と甕が占める。須恵器供膳具の割合が高いのがS K7177の特徴といえる。一方、黒色土器(0.2%)、緑釉陶器(0.1%)、灰釉陶器(0.9%)は、平安京内の平均的な数値と比べると明らかに少ない。製塩土器は231点(12.6%)である。

S K5260出土土器は、後世の混入品や瓦類を除くと、総破片数で412点あり、うち土師器222点(56.3%)、須恵器158点(38.3%)で土師器が多い。この割合については、平安京内の平均的な数値と比べると須恵器の比率は高い。器形別にみると、土師器では杯・椀・皿が26.2%、甕・鍋が

付表1 土坑S K7177・5260出土土器組成表

SK7177						SK5260					
器種	器形	破片数	比率	小計	比率	器種	器形	破片数	比率	小計	比率
土師器	杯・椀・皿	431	20.4%	749	35.5%	土師器	杯・椀・皿	108	26.2%	222	56.3%
	高杯・盤・鉢	11	0.5%				高杯・盤・鉢	2	0.5%		
	甕・釜・鍋	307	14.5%				甕・釜・鍋	122	29.6%		
	その他	0	-				その他	0	-		
	不明	0	-				不明	0	-		
須恵器	杯・椀・皿・蓋	781	37.0%	1105	52.3%	須恵器	杯・椀・皿	118	28.6%	158	38.3%
	壺・瓶	102	4.8%				壺・瓶	9	2.2%		
	鉢	26	1.2%				鉢	0	-		
	甕・大型壺	192	9.1%				甕・大型壺	30	7.3%		
	その他	1	0.1%				その他	1	0.2%		
	不明	3	0.1%				不明	0	-		
黒色土器	杯・椀・皿	5	0.2%	5	0.2%	黒色土器	杯・椀・皿	0	-	0	0.0%
	甕	0	-				甕	0	-		
	その他	0	-				その他	0	-		
	不明	0	-				不明	0	-		
緑釉陶器	杯・椀・皿	3	0.1%	3	0.1%	緑釉陶器	杯・椀・皿	0	-	1	0.2%
	壺・瓶	0	-				壺・瓶	0	-		
	その他	0	-				その他	0	-		
	不明	0	-				不明	1	0.2%		
灰釉陶器	杯・椀・皿	5	0.2%	18	0.9%	灰釉陶器	杯・椀・皿	0	-	2	0.5%
	壺・瓶	13	0.6%				壺・瓶	2	0.5%		
	その他	0	-				その他	0	-		
	不明	0	-				不明	0	-		
製塩土器	-	231	12.6%	231	10.9%	製塩土器	-	19	4.6%	19	4.6%
総数		2111	100.0%	2111	100.0%	総数		412	100.0%	412	100.0%

29.6%である。やや煮炊具の割合が高い。須恵器では杯・椀・皿が28.6%と、土師器供膳具とほぼ同率である。

一方、黒色土器(0.0%)、緑釉陶器(0.2%)、灰釉陶器(0.5%)は、いずれも平安京内の平均的な数値と比べると明らかに少ない。製塩土器は19点(4.6%)である。

以上のようにいずれの遺構においても須恵器の出土比率が同時期の平安京内に比べて高く、黒色土器や緑釉陶器、灰釉陶器の比率は低い。白色土器は出土していない。これは緑釉陶器や灰釉陶器の出土量の増加がみられる平安時代前期前葉を中心とする時期の遺構と考えられることや、平安京外に位置する本遺跡の立地環境などをふまえると、妥当な比率と考えることができよう。なお、S X7177で製塩土器がまとまって出土している点は注目される。

<緑釉陶器>

各地区の遺構・包含層から出土しているが、ほとんどが破片資料である。総破片点数は60点、地区別の出土状況を見ると5区が15点と最も多く57区で約半分の32点が出土している。遺構別の出土状況は、S B5130が6点と最も多く、次いでS H2005・S K6005の3点が多い。S H2005では9世紀中頃の猿投産の資料(74)が出土している。

緑釉陶器は、椀・皿などの供膳具がほとんどで、その他の器形はわずかである。特殊な器形として2区の包含層から出土した托(115)がある。出土点数は、口縁部11点、底部33点、その他2点で、約半数が底部片である。底部片は削り出しの平高台16点や蛇の目高台8点、輪高台10点である。輪高台のうち6点は近江・東海系のものである。胎土は軟質のものと硬質のものが拮抗する。釉調は淡緑色系のものが多く、ほとんどが全面施釉である。また、生産地については京都産が約9割を占め、猿投産を含む東海系や近江と考えられる資料は合計6点で10%程である。これ

付表2 緑釉陶器・灰釉陶器地区別出土状況

緑釉陶器

地区	点数	出土地点	椀・皿	その他	備考
2区	8	SH2005	3		猿投・9c中(Ⅱ古)2、洛北1
		包含層	4	1	托
3区	6	SB3005 P12	1		京都産・全面施釉
		包含層	5		京都産、段皿1
4区	8	SD4027	1		全面施釉
		SH4060	1		東海系深椀・全面施釉、Ⅱ新
		SP4013	1		
		SP4022	2		
		包含層	3		京都産・Ⅱ古中1
5区	15	SB5130	6		京都産4、猿投・Ⅱ新1、不明1
		SP5035	1		京都産・全面施釉
		SP5181	1		京都産
		SP5183	1		京都産・全面施釉
		包含層	5	1	京都産4、近江か東海1、不明1
6区	9	SB6060-16 掘形	1		京都産(洛北)、Ⅰ～Ⅱ
		SB6187-3 掘形	1		京都産
		SB6210 掘形内	1		京都産、Ⅱ中
		SK6005	3		京都産2、東海系(Ⅱ中新層)1
		SK6078	1		京都産・全面施釉、Ⅱ中
		SK6084	1		
7区	9	包含層	1		京都産
		SB7160 (SP7005)	2		京都産
		SP7094	1		京都産・全面施釉
		SK7177	3		京都産(Ⅰ新)1
		包含層	3		
不明	5	不明	5		京都産(洛北)
合計	60		58	2	

灰釉陶器

地区	点数	出土地点	椀・皿	その他	備考
2区	3	包含層	2		東濃(光が丘)
		SX2011	1		美濃(明和)
3区	1	SB3005 P12	1		黒笹90か
4区	4	SP4043	1		折戸53か
		SP4075 下層	1		折戸53、つけかけ
		S H 4100	1		
		包含層	1		
5区	4	SB5130	1		Ⅱ新
		SD5170	1		
		SB5130 P3	1		
6区	4	包含層	1		折戸53
		SK6169	1		折戸53、つけかけ
		SP6092	1		輪花、つけかけ
		SP6221	2		
		SP6118	1		
7区	3	SE7010	1		折戸53か
		SK7177		2	壺
不明	2	不明	2	2	
合計	24		20	4	

*点数は個体数。図化していない破片資料を含む。

らは9世紀前半から中頃を中心としており、10世紀代の資料は4点と少ない傾向にある。なお、10世紀の資料は4・5区で出土している。

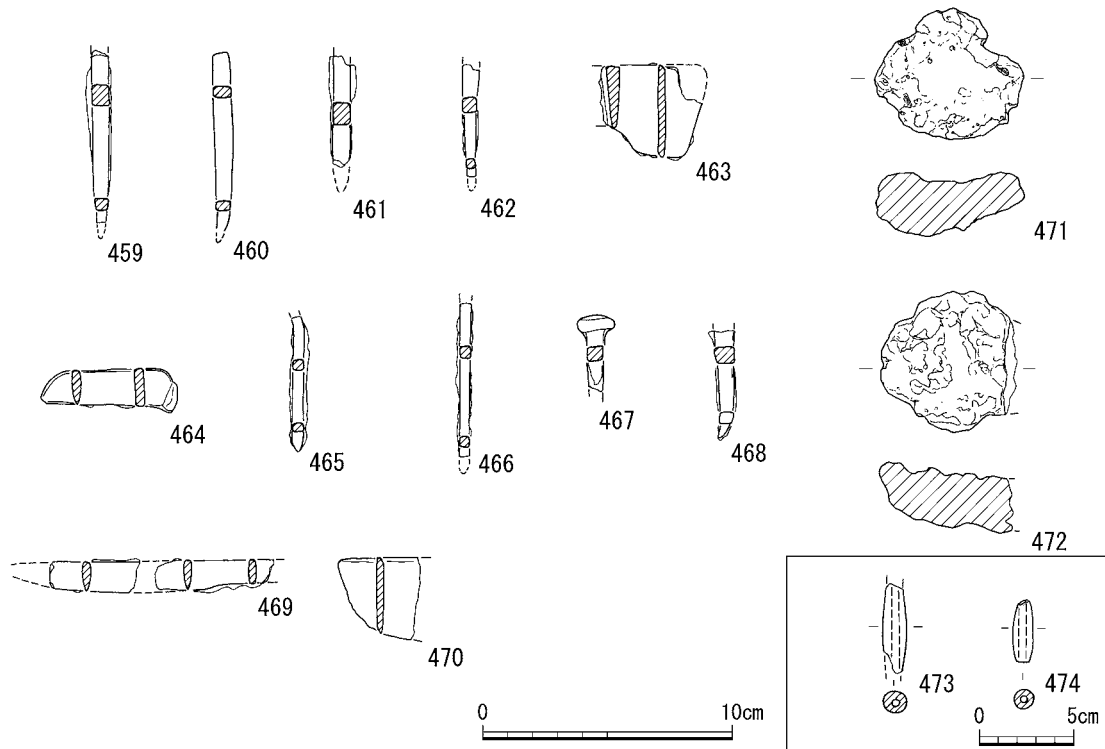
<灰釉陶器>

各地区の遺構・包含層から出土しているが、ほとんどが破片資料である。総破片点数は24点で、緑釉陶器の約半分である。地区別の出土状況は特定の地区に集中する傾向はないが、5～7区で約半分の10点が出土している。遺構別の出土状況は、S X7177の2点が多い。出土点数は、椀・皿などの供膳具が20点で、壺類は4点と少ない。10世紀前半代以降の資料が多い傾向にある。

①9世紀段階の猿投産の資料が出土している点、②9世紀代には緑釉陶器が多く、10世紀代には緑釉陶器が少なくなるのに対し、灰釉陶器が多くなる点が今回の調査地の特徴といえ、遺跡の性格を考える上で参考となろう。
(筒井崇史・松尾史子・高野陽子)

10) 鉄器・土製品 (第107図459～474)

459～468は、鉄製釘である。459は、2区柱穴S P 2064から出土した。頭部と尖端部を欠く中間部である。釘身の断面形は四角である。残存長6.8cm、釘身の長辺0.85cm・短辺0.67cmを測る。460は、4区柱穴P 4052から出土した釘である。頭部と尖端を欠く中間部で、断面形は四角形である。残存長7cm、釘身の長辺0.9cm・短辺0.46cmを測る。461は、2区土坑S H2005から出土した。釘身の中間部で、断面形は四角形。残存長4.4cm、釘身の長辺0.67cm・短辺0.91cmである。462は、5区掘立柱建物跡S B5130から出土した。釘身の中間部で、断面形は四角形である。残存長4.45cm、釘身の長辺・短辺とも0.55cmである。平安時代前期中葉の所産とみられる。465・466は5区掘立柱建物跡S B5140の柱穴P10から出土した。465の断面形は四角形で、尖端部を含



第107図 鉄器・鉄滓・土製品実測図

め、残存長5.35cm、釘身の長辺0.41cm、短辺0.4cmである。466の断面形も四角形である。残存長6.1cm、釘身の長辺・短辺とも0.45cmを測る。467は7区柱穴P7024内から出土した。四角の頭部(1.45cm角)を有する断片で、残存長3cm、釘身の長辺1.45cm・短辺0.6cmを測る。468は7区土坑SK7177最下層から出土した。断面形は四角形で、尖端部を有し、残存長4.35cm、釘身長辺1cm・短辺0.7cmである。

469は、鉄製刀子である。7区土坑SK7177から出土した。刀身部の断片2点である。接合はしないが形状・質感から同一個体とした。2点あわせた残存長8.2cm、刃の幅1.2cm、厚さ0.38cmである。

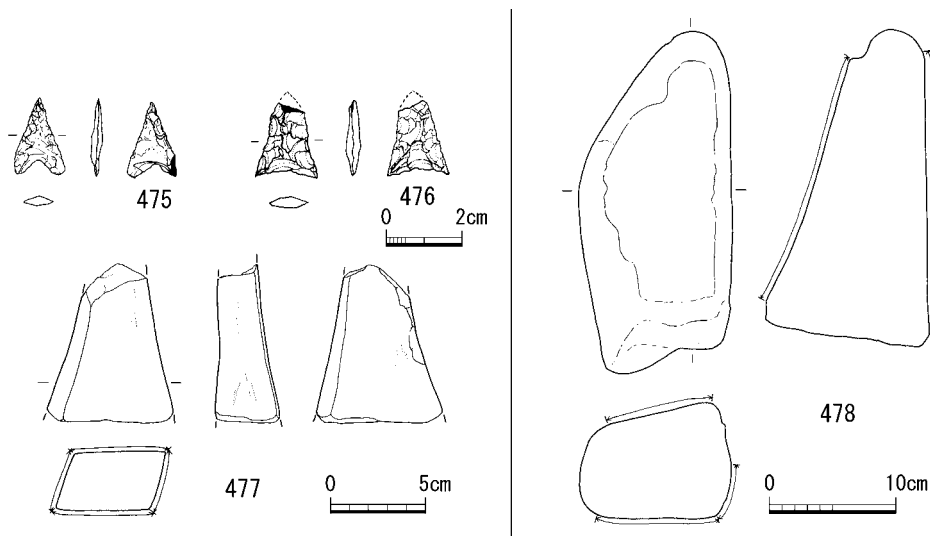
463・464・470は鉄製鎌である。5区の掘立柱建物跡SB5130の柱穴P13から出土した。柄部から刃部を少し含む断片である。柄部の短辺上半の折り返し部(図右上の破線部)は、腐食により欠損したとみられる。刃部は断面三角形である。柄部及び刃部を含め、残存長4.1cm、刃部の幅3.6cm、刃部の厚さ0.3~0.55cmを測る。464は5区土坑SK5011から出土。柄部から直線的に続く刃部が、先端近くで内湾しつつ尖る形態である。長さ5.4cm、刃の幅1.75cm・厚さ0.45cmを測る。470は7区土坑SK7177から出土した。鎌の刃部先端の断片とみられる。残存長3.1cm・幅3.1cm、刃部の厚さ0.25cmである。

471・472は、鉄滓である。471の椀形の鍛冶鉄滓は1区柱穴SP17から出土した。最大径5.8cm、厚さ2.3cm、重さ68.9gを測る。472の椀形の鍛冶鉄滓は1区土坑1017から出土した。最大径5.3cm、厚さ2.5cm、重さ81.2gを測る。

473は2区SK2011から出土した。長さ(直径)の比率が1:4以上の細長いものである。残存長5cm、中間径1.3cmを測る。土錘474は7区土坑SK7177から出土した。長さ34cm、中間径1.2cmを測る。

11) 石器(第109図)

全体に、縄文時代から弥生時代の遺構を欠くことから、石器の出土は非常に少ない。2区及び4区包含層から出土した石鏃2点(第105図475・476)、砥石2点(同図477・478)を図化し得るに



第108図 石製品実測図

すぎない。石鏃は風化の進み具合から弥生時代に、砥石は古墳時代～奈良・平安時代に属するものである。

475は、基部に明瞭な抉りをもつ凹基式鏃で、長さ2.1cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ0.5gを測る。薄い素材でおもに周囲を整形して仕上げている。裏面は未加工部を多く残している。石材はサヌカイトである。476は抉りの浅い凹基式鏃である。長さ2cm、幅1.6cm、厚さ0.85cm、重さ0.8gを測る。やや肉厚で幅広、体部中間がやや絞られている。調整加工は表裏面とも入念に施されている。石材はサヌカイトである。建物の構成柱穴ではないが、柱穴内から出土した。477は断面が四角形の砥石断片である。残存長8.4cm、幅6.7cm、厚さ3.15cm、重さ138gを測る。長軸に沿う4面ともに滑らかな研磨面が形成され、よく使用されたことがうかがえる。石材は砂岩である。478は、S H4100から出土した。断面が楕円形の大型砥石である。長さ27cm、幅12cm、厚さ9cm、重さ670gを測る。側面の3面に滑らかな研磨面をとどめる。(黒坪一樹)

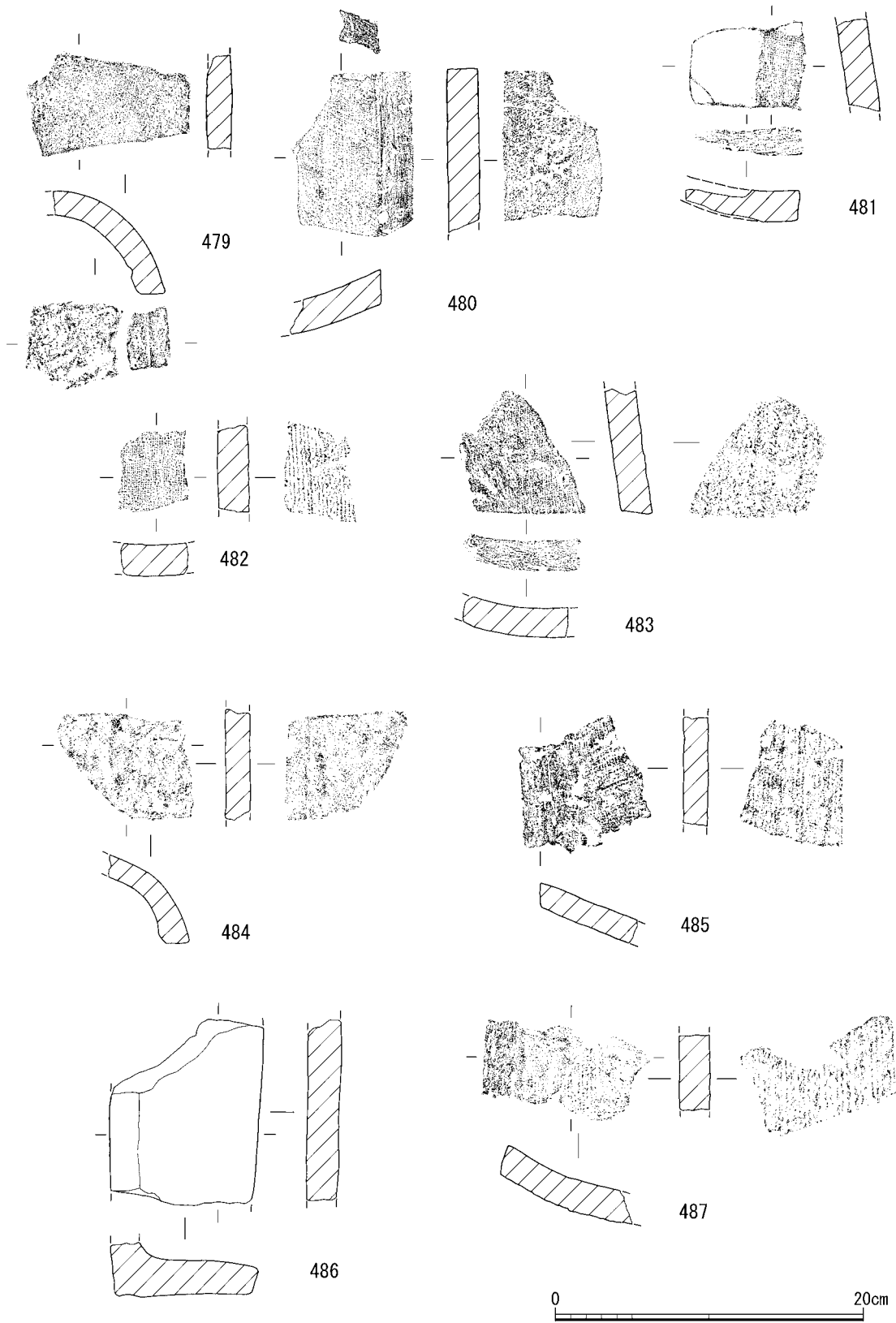
(12)瓦類・塼(第110図～第112図)

今回の調査で出土した瓦類の総量は12.5kgで、決して多くない。確認できたものとしては丸瓦・平瓦が大半で、道具瓦や塼はごくわずか、軒瓦にいたっては全く確認できなかった。また、瓦類の残存状況も細片化したものが多く、本来の形状や大きさがわかるものほとんどなかった。出土遺構は柱穴や土坑などが中心で、それも破片が1片ないし数片ずつ出土する程度であり、具体的な瓦の使用状況等を復元するのは困難である。以下では、出土した瓦類の概要について報告する。

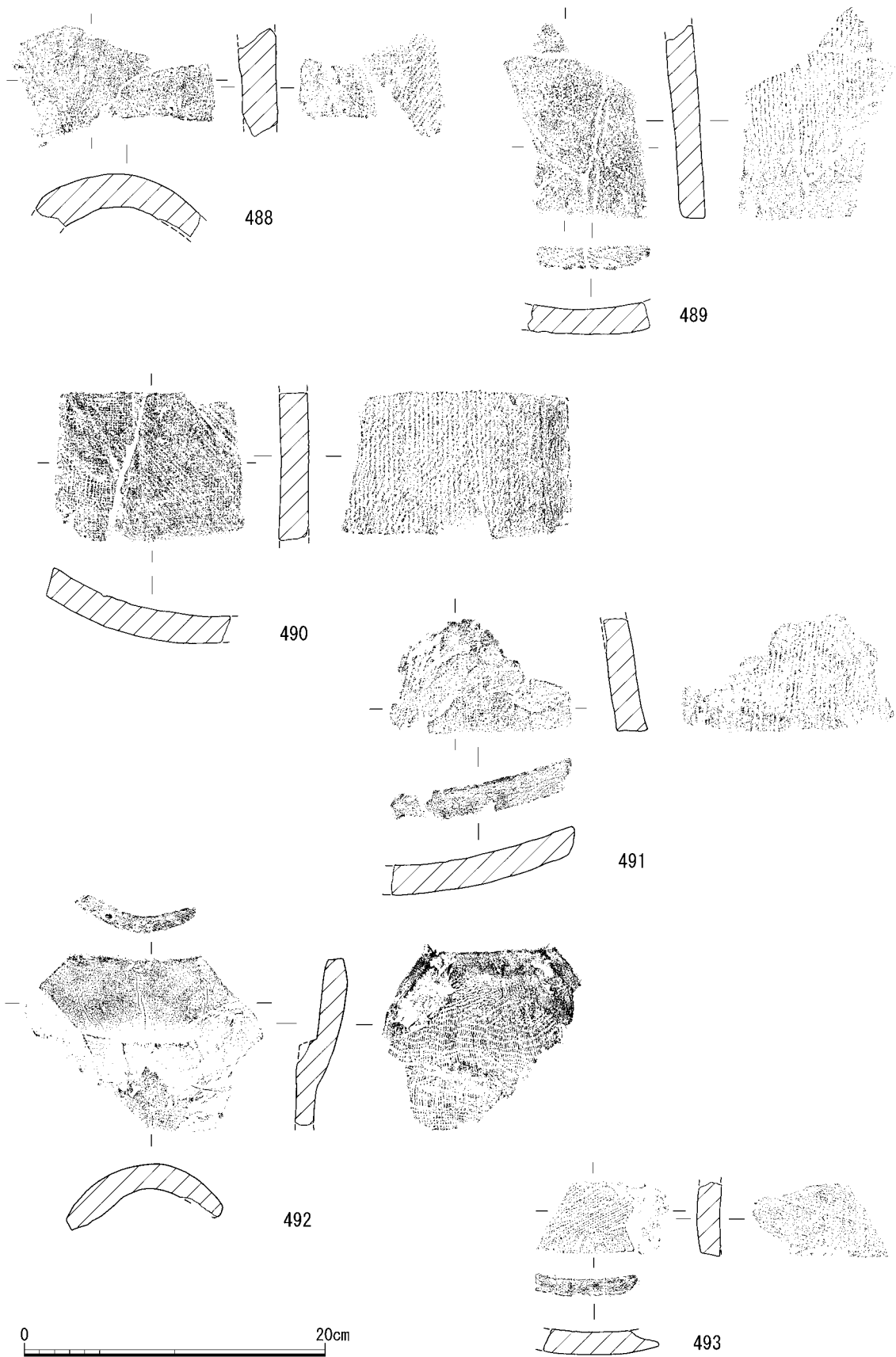
2区出土瓦類(479～483) 479は丸瓦の破片である。全体に摩滅が著しく、調整等は不明である。胎土はチャートなどの微細な砂粒を含み、焼成は良好である。柱穴S P 2338から出土した。480は平瓦の破片である。凸面は縄タタキの後にハケを施すようである。胎土は微細な砂粒を含み、焼成は良好である。柱穴S P 2024から出土した。481も平瓦の破片である。どちら側か不明であるが端面が残存する。凹面・凸面ともに器表面の剥離が著しい。胎土は微細な砂粒を含み、焼成は良好である。土坑S K 2384から出土した。482も平瓦の小破片であるが、凸面の縄タタキが良好に残存する。胎土は微細な砂粒を含み、焼成は良好である。平坦面出土である。483も平瓦の破片で、どちら側か不明であるが端面も残存する。凸面は摩滅が著しいが、縄タタキの痕跡を確認できる。攪乱14から出土した。また2区S H 2005から塼2点が出土している(図版74 a・b)。いずれも表面は著しく摩耗しており、明橙褐色を呈する。aは重さ155.9g、bは1.02kgを測る。

4区出土瓦類(487) 487は道具瓦の一部と思われるが、詳細は不明である。実測図の左側が垂直に立ち上がり、さらに延びる。調整は摩滅気味であるが、全体にナデを施している。色調は橙色を呈し、胎土は長石やチャートを含む。焼成は良好である。柱穴S P 4023から出土した。

5区出土瓦類(484～486) 484は丸瓦の破片である。全体に摩滅が著しく、調整等は不明である。胎土は微細な砂粒を含み、焼成は良好である。485・486はともに平瓦の小破片である。どちらも凹面に布目痕跡がみられ、凸面に縄タタキを施す。485は凸面に離れ砂が付着する。胎土は長石やチャートを含み、焼成は良好である。485の胎土は後述する491・494の胎土と類似する。486の胎土は微細な砂粒や大粒のチャートを含み、焼成はやや軟である。484～486はいずれも土坑S



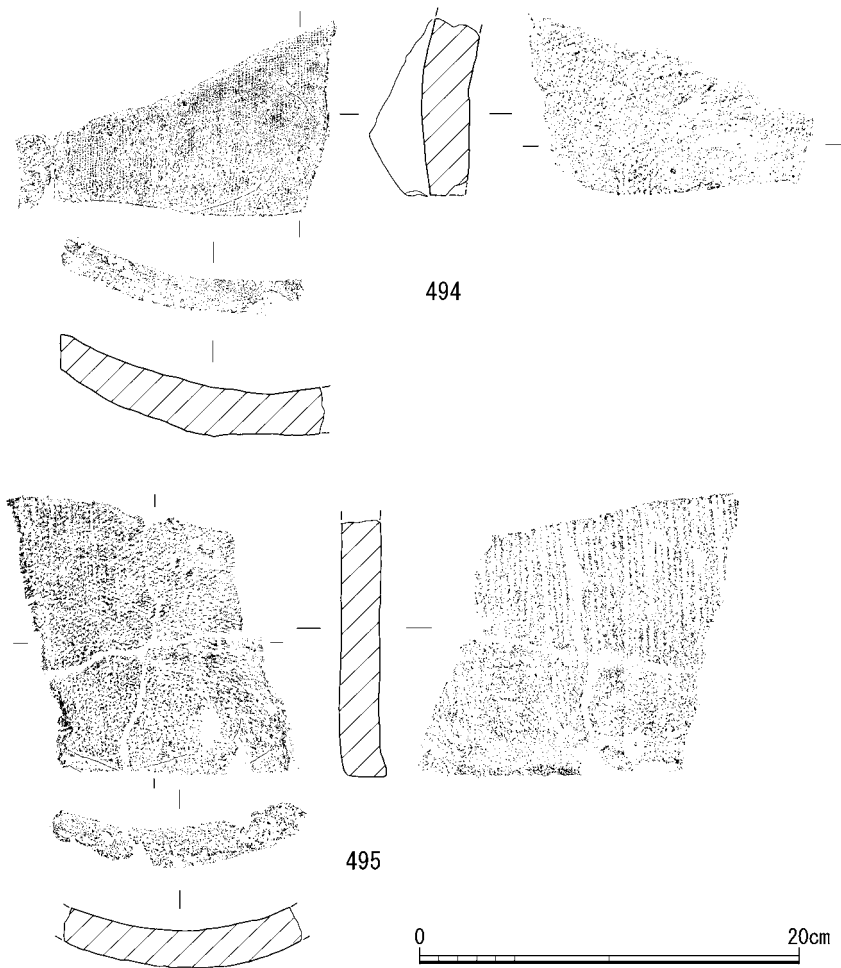
第109図 瓦実測図(1)



第110図 瓦実測図(2)

X5260から出土したが、485は上層、484・486は下層の出土である。

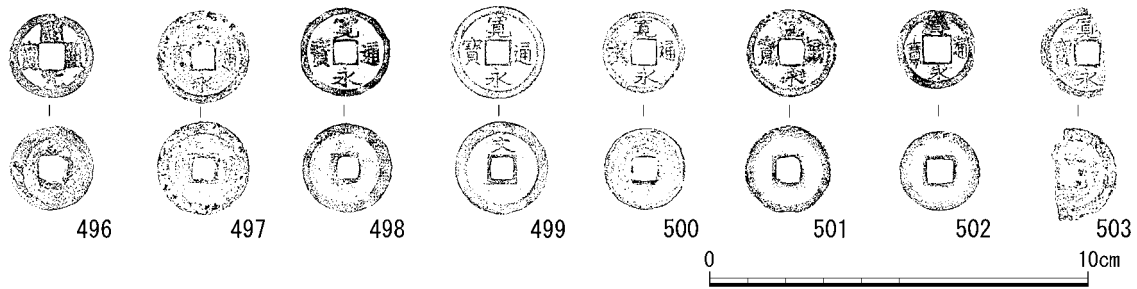
6区出土瓦類(488～491) 488は丸瓦の筒部の破片で、両側端部を欠損する。凸面にはナデを施す。胎土は長石やチャートを含み、焼成は良好である。489は平瓦の破片で、どちらの側か断定できないが、端面が残存する。凸面に縄タタキを施す。胎土は微細な砂粒を含み、焼成は良好である。488・489はともに柵 S A6270の柱穴 S P620から出土した。490は平瓦の破片



第111図 瓦実測図(3)

である。側縁の一部が残存するものの、両端面は欠損する。凹面に糸切り痕がみられる。凸面には縄タタキを施す。胎土は長石やチャートなどの砂粒を多く含み、焼成は良好である。柵 S A6270の柱穴 S P6202から出土した。491も平瓦の破片である。どちら側か不明であるが、端面と側縁の一部とが残存する。全体に摩滅気味であるが、凸面に縄タタキを施す。胎土は長石やチャートを含み、焼成は良好である。柵 S A6272の柱穴 S P6262から出土した。

7区出土瓦類(492～495) 492は丸瓦の玉縁部の破片である。玉縁の隅を切り落とす。凸面には全体的にナデを施す。凹面には布の圧痕が明瞭に残る。胎土は微細な砂粒を多く含み、焼成は良好である。493は平瓦の小破片で、端面の一部が残存する。凹面の端面側を幅1～1.5cm程度ケズリを施す。凸面はハケを施しているように見え、2区出土の480に類似した特徴である。凸面に離れ砂が付着する。胎土は長石やチャートなどを含み、焼成は堅緻である。492・493はともに掘立柱建物 S B7150の柱穴 S P7001から出土した。494・495は平瓦の破片である。494は側縁と端面の一部が残存する。焼け歪みが著しい。凸面に離れ砂が付着する。胎土は長石やチャートなどを含み、焼成は堅緻である。495は、今回報告する瓦類の破片としては最も大きい。端面の一部が残存し、凸面に縄タタキを施す。また、凸面に離れ砂が付着する。胎土は長石やチャートなど



第112図 銭貨実測図

の砂粒を含み、焼成は良好である。494・495はともに柱穴S P 7025出土である。(筒井崇史)

(13) 銭貨(第113図)

銭貨(銅銭)は、2区遺物包含層、5区遺物包含層、流路S R 5155から出土した。唐銭1枚、寛永通寶7枚が出土した。496は、唐の高祖の武徳4年(621年)初鑄の「開元通寶」である。「開元通寶」は唐の滅亡後も後鑄され、宋銭と同様に中世まで流通していた貨幣として知られる。496は、全体に鑄上がりは浅く、表面が粗造であり、後鑄銭として分類されるものである。径2.3cm、厚さ0.14cm、重さ2.5gを測る。497～503は、「寛永通寶」である。497は5区S K 5164から出土した。径2.4cm、厚さ0.125cm、重さ3.4gを測る。498～503は、5区S R 5125から出土した。498は、「寛」字の第12画と第13画の頭が接し、「寶」字がいわゆる「ス貝寶」となることから、万治2年(1659年)までに鑄造された古寛永とみられる。厚さ径2.4cm、厚さ0.14cm、重さ3.6gを測る。499～503は、いわゆる新寛永である。499は、全体に鑄上がりがよく、背に「文」の字を鑄出す。径2.5cm、厚さ0.12cm、重さ2.9gを測る。500は、径2.1cm、厚さ0.084cm、重さ1.5g、501は、径2.3cm、厚さ0.11cm、重さ2.1g、502は、径2.15cm、厚さ0.16cm、重さ2.6gを測る。503は一部を欠損するが、残径2.4cm、厚さ0.15cmを測る。(高野陽子)

5. 総括

1) 遺構の変遷

今回の調査では、古墳時代前期から江戸時代に至る各期の遺構を検出した。調査地北部の京都府立大学農学部農場内で設定した1～7区は、植物園北遺跡の南端にあり、おもな検出遺構は、古墳時代前期前葉の土坑1基や柱穴、古墳時代後期の竪穴建物1基、飛鳥時代末～奈良時代初期の土器棺2基、奈良時代前期前半の竪穴建物9基、奈良時代末期～平安時代中期の掘立柱建物39棟や土坑群・溝群、室町時代～江戸時代の掘立柱建物2棟や土坑群、江戸時代の流路1条等を検出した。また、調査地南部の大学構内に設定した8・9区は、下鴨半木町遺跡に含まれ、鎌倉時代～室町時代の落ち込み1基、室町時代の流路1条、江戸時代の流路1条等を検出した。

出土遺物は、縄文時代～江戸時代に至る各期の遺物を含むが、出土遺物の約8割を奈良時代～平安時代の建物群や土坑等から出土した土器が占める。今回の調査で検出した遺構について、出土土器や建物主軸、切り合い関係をもとに、遺構の変遷を明らかにしたい。なお、遺構変遷で示す時期区分に関しては時代別に示すが、平安時代の遺構変遷については、土器編年の基準として

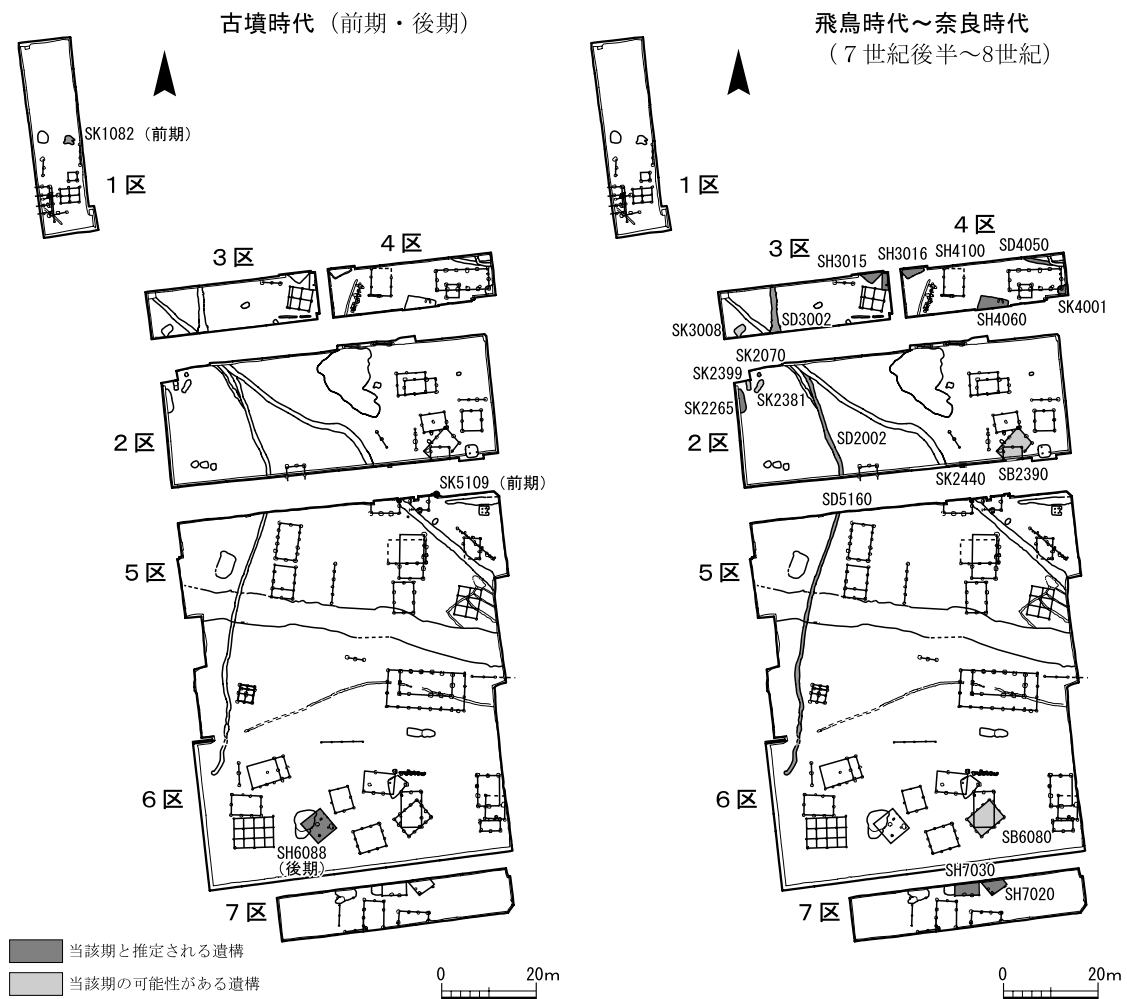
平安京域の京都編年^(注16)をもとにし、その対応関係を併記しつつ、述べることにしたい。

〔古墳時代〕(第112図左)

検出遺構 古墳時代前期と後期の遺構を検出した。前期の遺構は、1区で検出した不整形土坑SK1082と柱穴1基、5区で検出した土坑SK5109である。後期の遺構は2区で検出した柱穴1基、6区の竪穴建物SH6088があげられる。古墳時代中期の遺構は、全調査地を含め検出されなかった。

前期様相 古墳時代前期の遺構を検出した1区周辺は、調査区全体のなかでも特に賀茂川(鴨川)起源の洪水の影響が顕著にみられる地点であり、1区北半は遺構の削平が著しい。不整形の土坑であるSK1082は、中央に炉跡とみられる焼土が確認されることや本来の規模はさらに大きいことから、竪穴建物の床面の残欠である可能性が高い。過去の調査では、調査地の北に約150mの地点(第11次調査)で前期の溝(幅約4m)が検出されており、おもに遺跡北部の北山通北側に前期遺構の南限があるとみられたが、今回の調査によって前期の遺構の広がりがさらに南に拡大することが判明した。

後期様相 古墳時代後期の遺構は、北部調査地の2、6区で散在的に確認した。竪穴建物の時



第113図 遺構変遷図1 古墳・奈良時代

期は後期後葉で、単独で立地する。後期の竪穴建物は、調査地から北に200mの地点(第9次調査)でも検出されているが、検出数は少なく、その分布は極めて散在的な在り方を示している。古墳時代後期の遺物は、包含層中の資料を含めても、2区以外には下鴨半木町遺跡の範囲にある9区で確認されるだけである。後期の竪穴建物を遺跡境界に近い6区で検出したことや、調査地南方約300mには、下鴨中通(近世の鞍馬街道)西側に北山城地域の「王塚」とされている古墳時代後期の王塚古墳があったとされること^(註17)から、古墳時代後期の集落は植物園北遺跡のさらに南方に拡大する可能性がある。

〔飛鳥時代後半～奈良時代〕(第113図右)

検出遺構 おもな遺構として、竪穴建物 S H3015、3016、4100、4060、7020、7030、土器棺墓 S K2070、2440、土坑 S K2265・4001、溝 S D3002・2002・5160(同一の溝)があげられる。

様相 飛鳥時代末期の遺構として土坑や土器棺墓などがあるが、本格的な集落形成がはじまるのは奈良時代以降とみられる。奈良時代の竪穴建物群は、数基のグループを形成して北部調査地の3・4区を中心とした北部と7区を中心とした南部に展開する。竪穴建物群の西には、調査地を南北に掘削される溝 S D2002・3002・5160(同一の溝)がみられる。溝より西側には、飛鳥時代末～奈良時代前期と推定される土器棺墓 S K2070や土坑群があり、溝は集落のなかでの生活域と墓域の境界として意識されているものとみられる。この溝の北延長上には、調査地北に約80mの地点(第9次調査)で検出された南北溝 S D2(第122図)があり、全体を合わせるとやや蛇行しつつ南北約260m以上にわたって掘削された溝である可能性が高い。こうしたことから、今回の調査地と第9次調査で検出された遺構群には関連性があり、奈良時代に一帯が広く同一集団によって開発されたものである可能性が高いこと示していると言えよう。第9次調査では、南北方向の溝 S D2とともに東西方向の溝 S D1が検出されており、こうした東西の溝と条里地割との関係も今後検討されるべき課題である。

竪穴建物6棟は、いずれも奈良時代前半のもので、2～3棟が単位となって分布している。奈良時代の竪穴建物は、調査地北側(第9次調査)でも6棟が検出されているが、今回の調査では奈良時代前半を中心に住居として用いられていることが明らかとなった。建物の規模は5mを超えるものがあり、造りつけ竈をもつことなど、古墳時代の竪穴建物と構造的に変わるところはみられない。竪穴建物の主軸は、西に大きく振るものや東に振るものがあり、建物の主軸に規則性を見ることはできない。また建物構成としても、奈良時代前半には掘立柱建物はほとんどみられず、主軸を大きく東に降る掘立柱建物うちの1～2棟がその可能性があるにすぎない。山城地域や畿内周辺では、奈良時代前期には、基本的に掘立柱建物を中心とした集落構成であり、今回見つかった奈良時代前半の竪穴建物は、その使用例の下限として、山城に限らず、近畿地方でも最も新しい時期の一群として注目される。

〔平安時代前期前葉〕(第114図)

〈京都I期新、810～840年頃〉

検出遺構 主な遺構として、出土遺物と遺構の切り合い関係から、掘立柱建物 S B5010、

付表3 掘立柱建物規模一覧表

地区	遺構番号	規模		主軸方向	地区	遺構番号	規模		主軸方向	
		桁行 (m)	梁行 (m)				桁行 (m)	梁行 (m)		
1区	S B 1050	1間 (1.8) 以上	2間 (4.0)	N 6° W	5区	S B 5130	5間 (11.25)	2間 (4.8)	N 4° E	
	S B 1070	1間 (1.8) 以上	2間 (3.7)	N 5° 30' W		S B 5140	5間 (7.5 ~ 7.6)	2間 (4.5)	N 7° 30' E	
	S B 1080	東西2間 (3.8)	南北2間 (3.1)	N 4° 30' W		S B 5145	4間 (4.6)	2間 (6.9)	N 4° E	
	S B 1100	東西1間 (1.8)	南北1間 (1.8)	N 1° W		S B 5190	2間 (3.5 ~ 3.6)	2間 (3.0)	N 9° E	
2区	S B 2010	3間 (5.0)	2間 (3.8)	N 1° E		S B 5180	3間 (6.6)	2間 (4.2)	N 0°	
	S B 2040	2間 (3.7)	2間 (2.2) 以上	N 1° W		S B 5126	3間 (6.2)	2間 (4.8)	N 11° E	
	S B 2100	3間 (6.3)	2間 (4.5)	N 4° W		6区	S B 6060	4間 (8.5)	3間 (6.3)	N 1° 20' W
	S B 2250	3間 (5.2)	2間 (3.8)	N 9° W			S B 6080	4間 (6.2)	3間 (4.7)	N 43° W
	S B 2110	3間 (6.7)	2間 (3.1)	N 2° W			S B 6087	4間 (7.5)	2間 (4.3)	N 1° 20' E
	S B 2390	2間 (4.4)	3間 (6.4)	N 43° 30' E			S B 6120	東西2間 (4.3)	南北2間 (5.0)	N 2° 20' E
	S B 2370	2間 (4.2)	2間 (4.1)	N 0°	S B 6090		東西3間 (5.9)	南北3間 (5.0)	N 16° 40' W	
3区	S B 3005	2間 (4.3 ~ 4.5)	2間 (4.5)	N 10° 30' E	S B 6144		東西2間 (4.6)	南北3間 (6.6)	N 1° 20' W	
	S B 4030	5間 (10.7)	2間 (4.0)	N 1° 30' W	S B 6185		2間 (4.2)	1間 (2.4)	N 1° 20' W	
4区	S B 4010	1間 (2.7)	1間 (2.7)	N 0°	S B 6145	2間 (4.9)	2間 (4.1)	N 17° 40' W		
	S B 4090	3間 (6.0)	2間 (4.2)	N 1° W	S B 6146	3間 (6.4)	2間 (4.2)	N 1° E		
	5区	S B 5005	4間 (9.8)	2間 (5.0)	N 4° E	S B 6187	3間 (6.5)	2間 (4.0 ~ 4.6)	N 4° E	
S B 5010		4間 (8.0)	3間 (4.8)	N 1° 30' W	S B 6200	5間 (8.4)	2間 (4.7)	N 16° 40' W		
S B 5025		1間 (1.8) 以上	2間 (3.6)	N 0°	7区	S B 7150	東西3間 (6.5)	南北1間 (2.4)	N 1° 40' E	
S B 5085		3間 (6.3)	1間 (1.8) 以上	N 1° W		S B 7160	3間 (5.4)	2間 (4.2)	N 1° E	
S B 5098		3間 (4.5)	3間 (3.3)	N 3° 30' E						

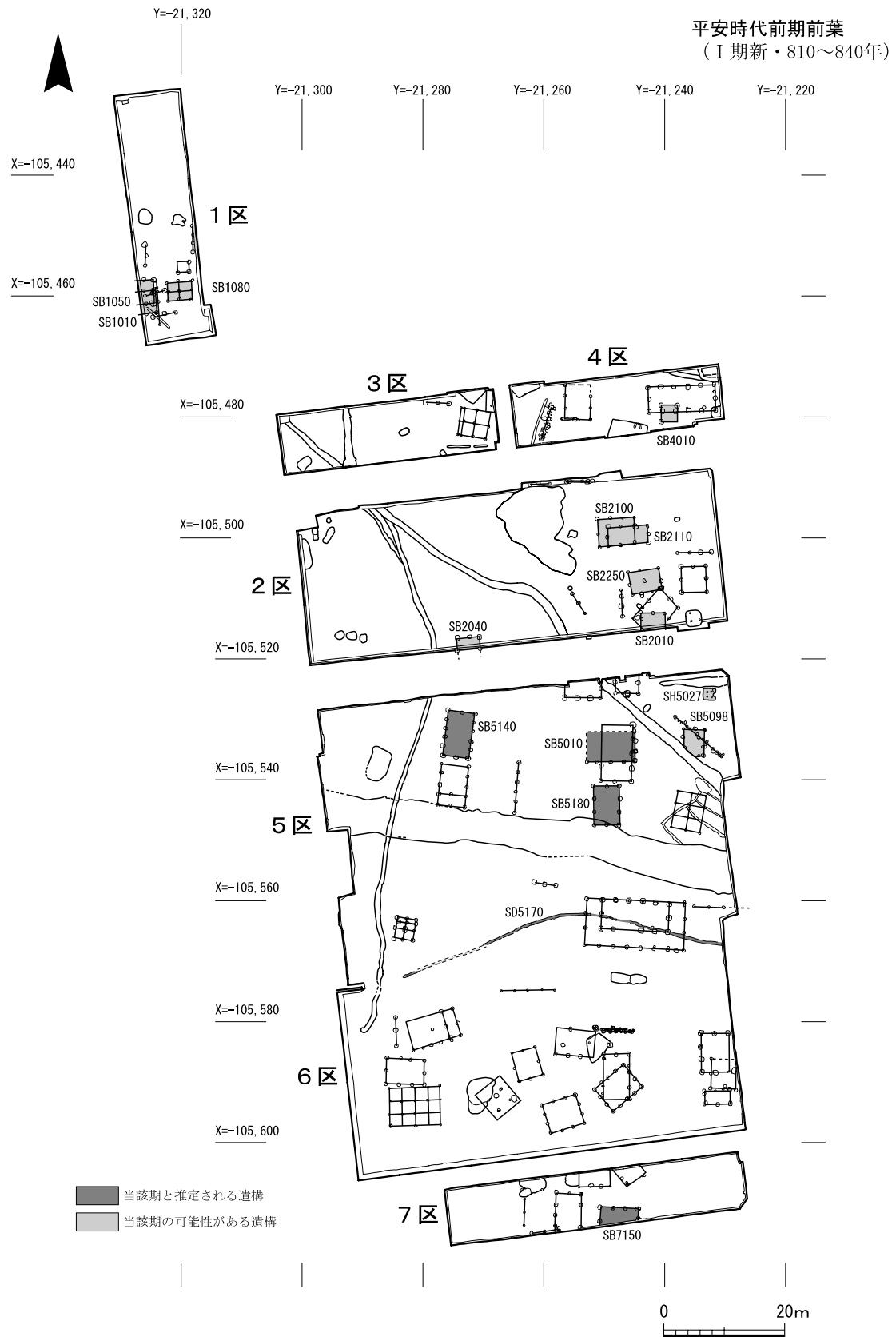
5180、5140、7150があげられる。さらに主軸と遺構の切り合い関係から、掘立柱建物S B 5098、4010、2010、溝S D 5170などを想定できる。1区のS B 1050・1070などの主軸をやや西に振る建物群もおおよそこの時期と推定される。

様相 建物群が新たに造営され、南北に主軸を揃え、建物造営プランに大きな画期がみられる時期である。出土土器や遺構の切り合い関係から、後述する三面廂建物を含む平安時代前期中葉の建物群よりも先行する建物群の一群として抽出できるものである。5・6区では、北部を中心に掘立柱建物S B 5010、5180、7150がほぼ南北主軸を揃えてほぼ直線上に造営される。調査地東の下鴨中通は、近世の鞍馬街道であるが、この道は京内から丹波、北近江、北陸へ通じる道であり、古代に遡る可能性の高い道と考えられてきた。10世紀前半頃編纂された『延喜式』（木工寮）には、栗栖野瓦屋や小野瓦屋など京都市北郊の岩倉周辺の平安時代の瓦窯から陸路で製品を京内に運んだことが記されているが、栗栖野の緑釉陶器生産は9世紀前葉に遡ることから、こうした製品を京内に運んだ道としても想定できるものである。南北に主軸を揃える掘立柱建物群は、この東に接するとみられる南北方向の古代の道に主軸を合わせた可能性がある。9世紀前葉におけるこうした建物配置にみる画期は、平安京遷都後に一帯の開発が大きく進められたことを示すものであろう。

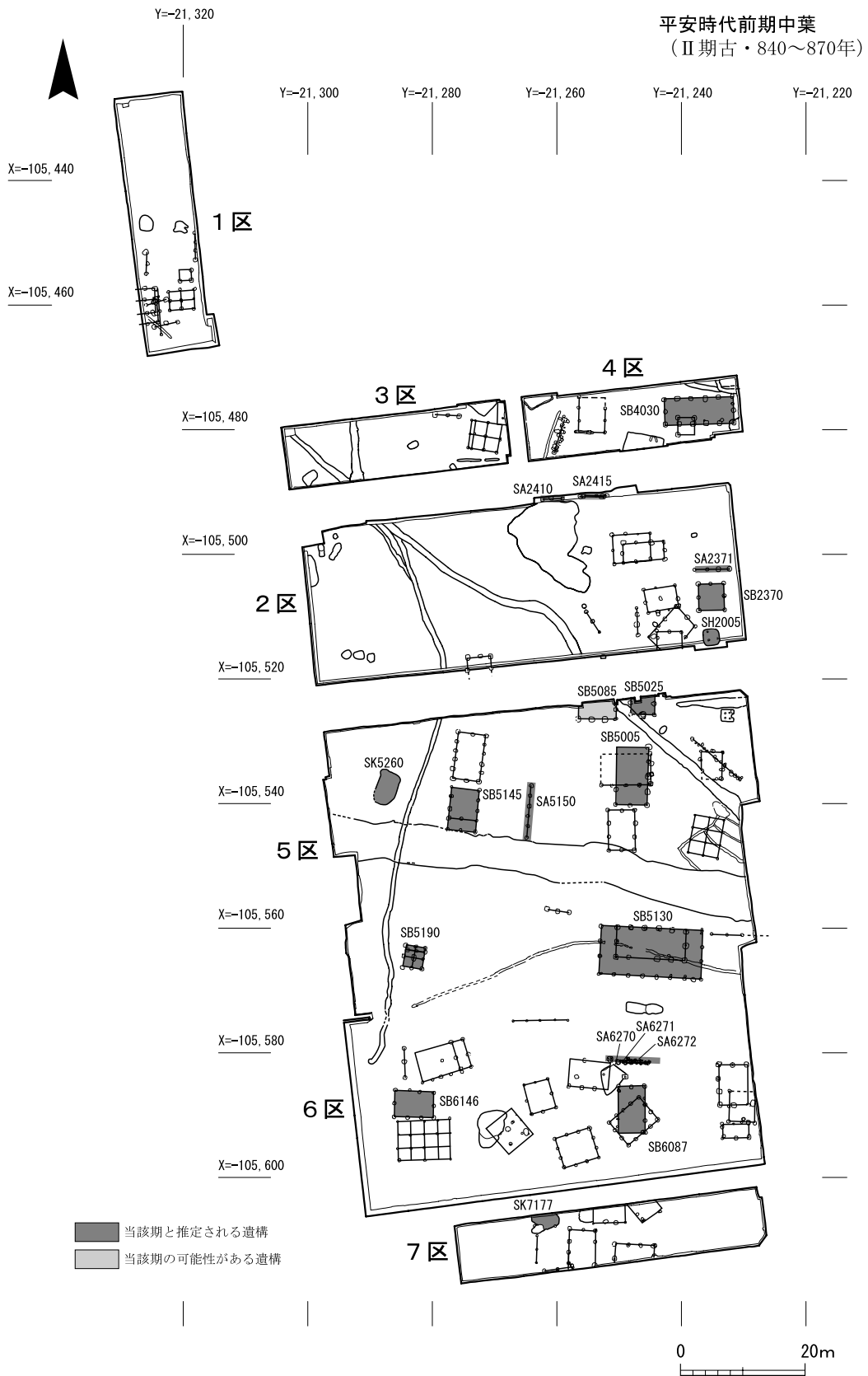
[平安時代前期中葉](第115図)

<京都Ⅱ期古(840~870年頃)>

検出遺構 多くの建物が調査区の南部に確認される段階であり、三面廂建物もこの時期に造営される。主な遺構として、S B 5130のほか4030、2370、5025、5085、5005、5145、5190、



第114図 遺構変遷図2 平安時代前期前葉



第115図 遺構変遷図3 平安時代前期中葉

6146、6087、竪穴建物 S H2005、塀 S A2371、5150、柱列 S A6270・6271・6272や可能性のあるものとして柱列 S A2410・2415を挙げることができる。

様相 三面廂建物 S B5130を中心に、南北に主屋域が形成される時期である。三面廂建物の周囲には同時期の建物は近接して造営されず、一定の空間が確保されたようである。三面廂建物の南には前庭と推定される空閑地があり、柱列があるいは柵列 S A6270を挟んで、さらにその南に掘立柱建物 S B6087が造営される。柱列6270は目隠し塀として機能していた可能性が高く、S B6087を構成する柱穴のうち2基は特に規模が大きいことから、掘立柱塀あるいは柵列に入口を設けていた可能性がある。S B5130の北側には、身舎の規模では同等の規模をもつ南北棟の掘立柱建物 S B5005があり、さらにその北に掘立柱建物 S B5025と掘立柱建物 S B5085が位置する。三面廂建物を主屋とし、南北に同時期の主要建物が主軸を揃えて配置される均整のとれた建物配置をなす。三面廂建物 S B5130の西側は、雑舎域であったとみられ、三面廂建物の西側には一定の空間を置いて、倉庫の可能性のある総柱建物 S B5190があり、北には掘立柱建物 S B5145が位置する。S B5145の西側には近接して生活残滓の廃棄土坑である大型土坑 S K5260があることから、三面廂建物の西側に意識的に雑舎や付属施設を配置したとみられる。S B5145の東に設置された掘立柱塀と推定される S A5150は、主要建物と雑舎域を区分した目隠し塀であろう。三面廂建物の東側には、前述したように、南北の古道の存在が想定されることから、東からの視覚を意識した建物配置がとられたと考えられる。

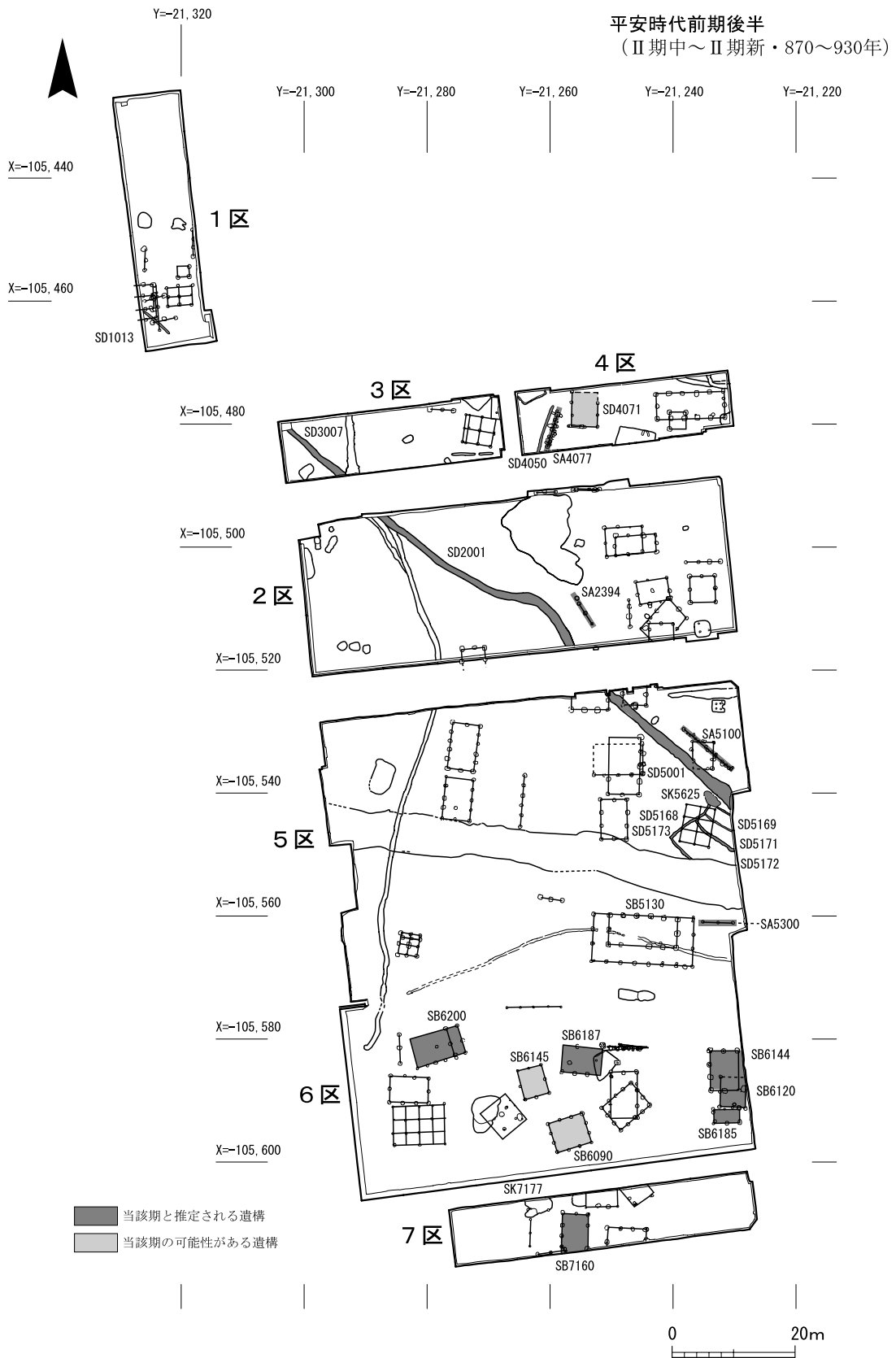
三面廂建物 S B5130及び掘立柱建物 S B5005などの主要建物の北側には、一般住居と異なり工房的性格をもつ小型の竪穴建物 S H2005や、掘立柱塀 S A2371を伴う2間四方の正方形のプランの掘立柱建物 S B2370があり、主要建物と性格を異にするとみられる建物群が位置する。こうした建物群のエリアを挟んで4区で検出した掘立柱建物 S B4030は、三面廂建物の北80mの地点にあり、主要建物と大きく離れるが、建物の身舎規模や建物主軸が近似すること、東西棟とともに南向き建物であることなど、三面廂建物と規格性を揃えた建物であり、同一の集団によって営まれた建物群と考えることができる。三面廂の南の柵列から4区の掘立柱建物 S B4030北辺までは、約1町近い105mの距離があるが、この間には大きな溝等によって主要建物を区画する状況はみられないことから、規制の緩やかな建物配置が行われていたと考えられる。一方、建物群の主軸は、北からわずかに東へ振り、正方位の中でもさらに揃うことやより東に建物配置をとることから、この時期に道の本格的な整備が行われ、一帯の開発が大きく進められた可能性がある。

[平安時代前期後半](第116図)

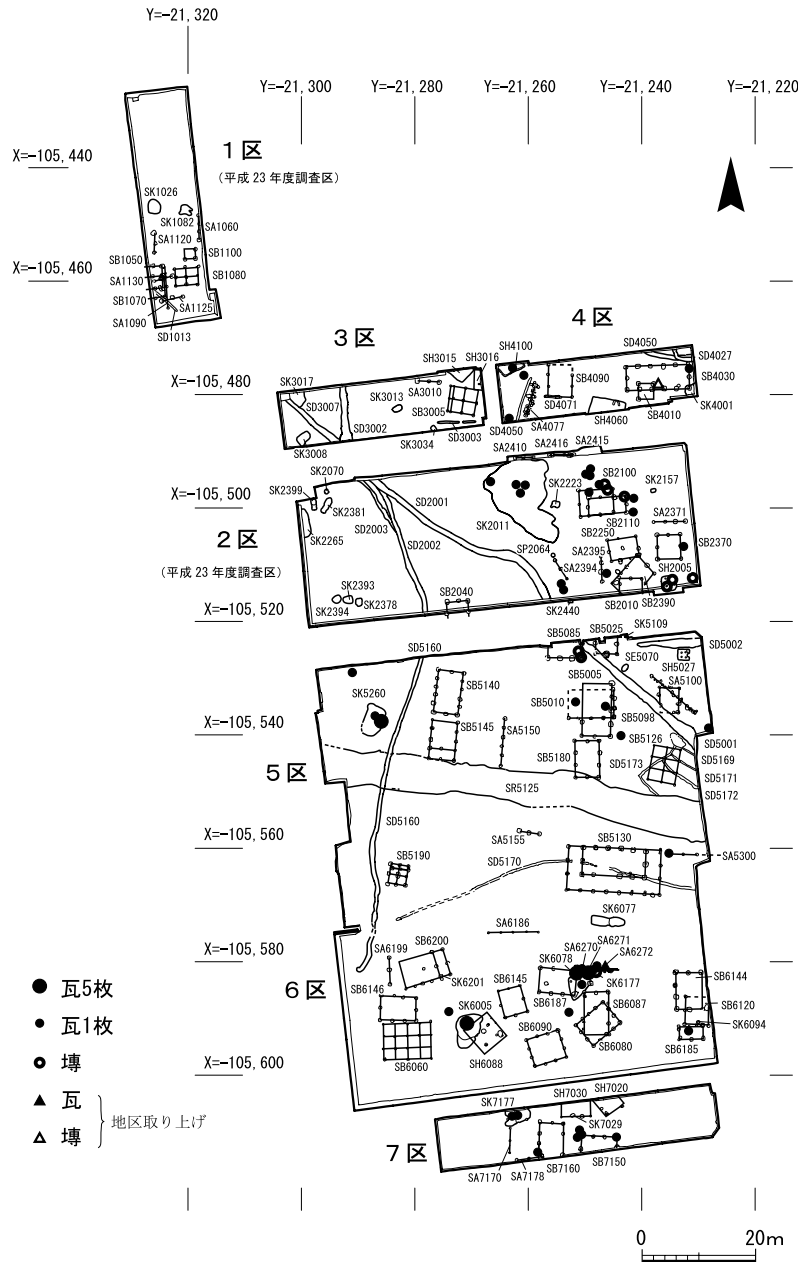
<京都Ⅱ期中～京都Ⅱ期新(870～930年頃)>

検出遺構 おもに6・7区で検出した遺構であり、掘立柱建物 S B6144、6187、6200、7166、柵列 S A5300、土坑 S K6245、溝 S D5001(S D2001、3007、1013は同一の溝)等をあげることができる。

様相 平安時代前期中葉に造営された掘立柱建物群を、北西から南西へ流れる溝 S D5001が削平しており、この溝の掘削前後で大きく周辺の景観が変わる時期である。S D5001は、北西上流



第116図 遺構変遷図4 平安時代前期後半



第117図 瓦類出土地点

と大きく変わっている。賀茂川の洪水起源の砂礫層の広がりもまた北西から南東に広がることから確認されることから、S D5001は洪水等によって自然に生じた新たな流れを掘削することにより、溝としたものと考えられる。1区・2区を中心とする北半部では、洪水性の堆積物が広く確認されることから、S D5001が掘削される直前の9世紀後葉～末の段階に、規模の大きな水害が生じたものとみることできる。

9世紀の災害については賀茂川(鴨川)が、降雨により、何度も氾濫を起こしたことが文献などから明らかにされているが、なかでも特に大きな災害として知られるのは、貞観13(871)年の大台風によるとみられる災害である。『三大実録』には、「閏八月七日・一日条 大雷雨、河水暴溢して京師の道橋流損するもの多し。民家の破壊その数を知らず」とする記録が残されており、

となる各地点で検出されたが、最も削平の少ない5区の南東隅では、幅2m、深さ0.8mを測る。この溝は、掘削時期については、出土土器から9世紀中葉とみられる掘立柱建物SB5025・5085を削平していることから、およそ9世紀後葉以降に掘削されたとみられる。また、埋土から出土した土器に9世紀後葉～末の緑釉陶器などを含み、10世紀前葉以降の遺物を含まないことから、9世紀のうちに埋没したとみられる。溝SD5001は、一部に鋤跡がみられることから人工的に掘削された溝であり、北西から南東へと流れるが、その向きは、平安時代以前の南北方向の溝SD5260

S D5001の時期とおおよそ一致するものである。寛平5年(893年)には、洪水被害をおさえるため愛宕郡錦部郷百姓らが賀茂川堤の辺に耕作することが禁じられており(『類従三代格』)、9世紀後葉～末の賀茂川東岸地域の水害は周囲に甚大な被害を及ぼしていたものと推定される。賀茂川はその後も度重なる氾濫をしており、S D5001は、埋土に賀茂川起源の砂岩をふくむ洪水性堆積がみられることから、9世紀のうちに水害の影響を受け、埋没したと推定される。

9世紀後葉の洪水被害ののち、南部の6・7区を中心に、新たに正方位の主軸をもつ建物群が造営される。S D5001の周辺やそれ以北では、この時期の確実な建物の造営は確認できず、前段階の水害の被害が大きかった北半部やS D5001の周辺は、居住域に適さず、一定期間、居住は避けられた可能性が高い。この時期には、掘立柱建物S B6200や土坑S K6245のように、建物の柱穴や建物に近接する土坑で完形の土器が出土しており、9世紀後半以降、平安京内でも増加する建物の地鎮^(注19)に関わる遺構とみられる。

三面廂建物S B5130については、平安時代前期中葉(京都Ⅱ期古、830～870年頃)の造営であり、その存続期間が問題となるが、前期後半(Ⅱ期新)に設置された上記の東西方向の柵列S A5300が三面廂建物の東柱筋に近接し、同時存在は想定できないことから、前期後半の段階にはすでに廃絶していると考えられる。以上から、三面廂建物の廃絶時期については、前述した貞観13年(871)の賀茂川(鴨川)大洪水によって風水害を受け、廃絶に至った可能性を指摘しておきたい。

今回の調査で検出した掘立柱建物39棟のうち、36棟は前述した平安時代前期の掘立柱建物と推定されるものである。出土遺物のうち、瓦は小破片が多く、出土量は全体で約50点と少ないが、出土地点は集中する傾向がある(第117図)。生活残滓の廃棄土坑である5区S K5260と7区S K7177を除けば、特に4区西部の柱穴群と6区中央の柵列とみられる柱穴群に多く分布しており、この周辺では屋根外装に瓦が用いられた可能性がある。

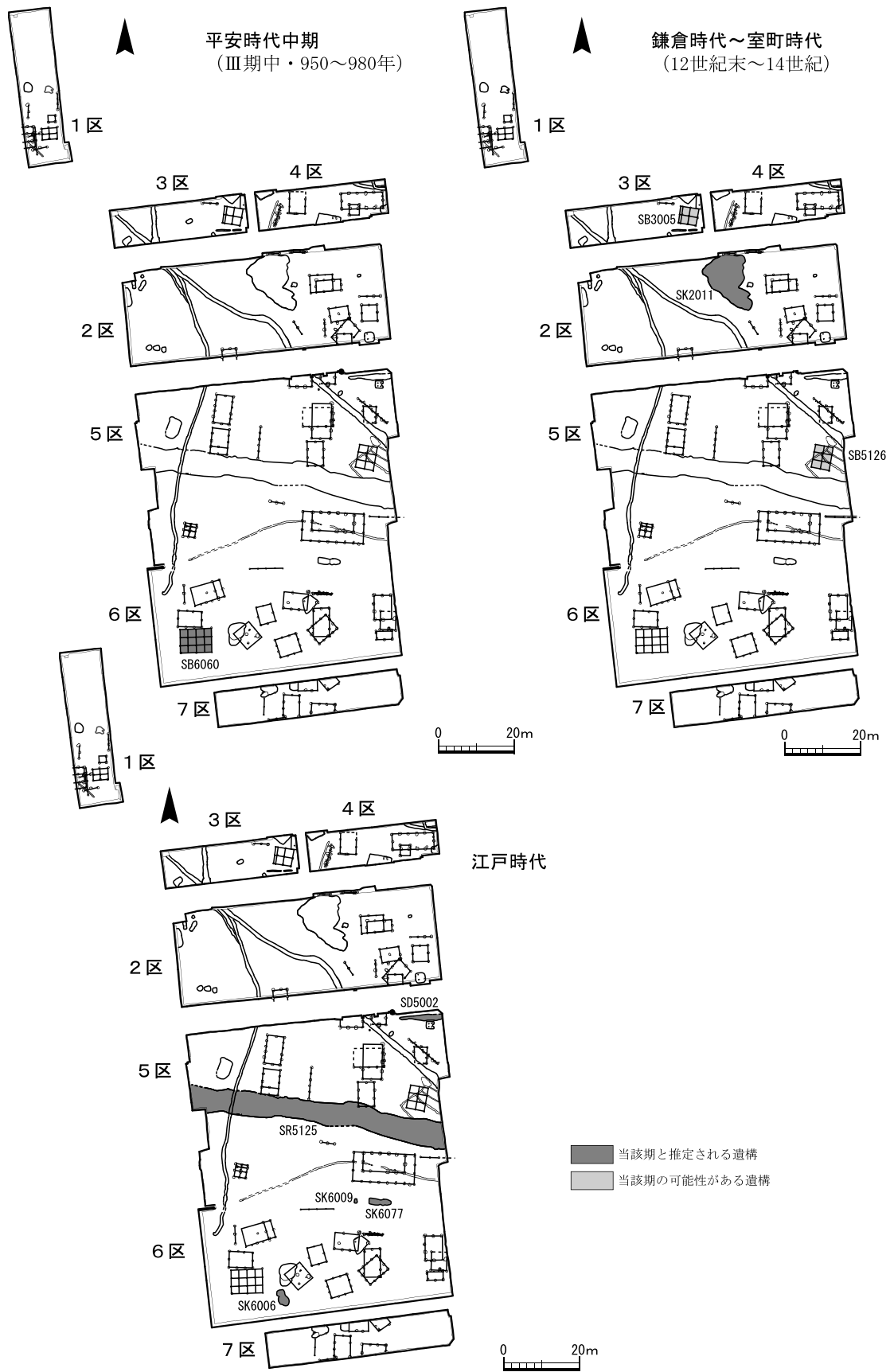
出土土器には、須恵器類、土師器類のほか、緑釉陶器や灰釉陶器、青白磁を含むが、墨書土器等はみられない。須恵器については、全体に器壁が厚く、歪がみられるものも多く用いられ、平安京内で出土する須恵器類とやや様相を異にしている。その供給が官窯など大規模な窯からではなく、地域的に小規模な単位で操業された窯から供給された可能性が高い。こうした点も、平安時代前期におけるこの地域の開発主体を考える上で重要な要素であり、地域的な基盤をもつ氏族による可能性を指摘することができる。

[平安時代中期前葉] (第118図)

<京都Ⅲ期中、950～980年>

検出遺構 平安時代中期初頭(京都Ⅲ期古、930～950年)には、新たに造営される建物遺構は確認されず、中期前葉に至り、掘立柱建物S B6060が造営される。

様相 9世紀前半以降、掘立柱建物群の変遷がみられたが、10世紀以降には新たな建物の造営は激減し、6区南西で検出した10世紀中葉のS B6060が、調査地で確認できる平安時代の最後の建物となる。S B6060は、それまでの建物と大きく様相を異にし、円形の柱穴掘形をもつ4間×3間の総柱建物である。S B6060の造営後、この建物を最後に鎌倉時代まで掘立柱建物は造営さ



第118図 遺構変遷図5 平安時代中期~江戸時代

れておらず、北部調査地における建物造営は一旦終息を迎える。この時期には、南に接する下鴨半木町遺跡で一部の調査ながら、包含層遺物が確認されることから、居住域は南に移動している可能性が高い。

【鎌倉時代～室町時代】（第118図）

<12世紀末～15世紀>

検出遺構 主な遺構として、北部で検出した大型土坑S K2011と、遺構埋土の状況などから当該期の可能性が高い遺構として掘立柱建物S B3005、5126をあげることができる。

様相 北部を中心に、鎌倉時代の遺構が確認される。大型土坑S K2011は、鎌倉時代の土取り穴とみられる土坑である。2区包含層中には、龍泉窯系の青磁椀など該期のものが含まれるが、鎌倉時代の出土遺物を伴う遺構は確認されなかった。総柱の掘立柱建物跡S B3006は建物の年代を確定できる資料が得られなかったが、柱穴埋土の色調や検出状況から、中世の建物と推定している。また5区S R5255の北側で検出した掘立柱建物S B5126も、柱穴の色調や検出状況から中世以降とみられる遺構であり、中世にもわずかながら、居住域としての土地利用があったことが推定される。

【江戸時代】（第118図下）

<16世紀～19世紀>



第119図 近世乙井川の流路復元

検出遺構 北部調査地中央で検出した流路SR5125とその北側で検出した溝SD5002があげられる。また南部の6区では、耕作に伴うとみられる近世～近代の土坑群を検出した。

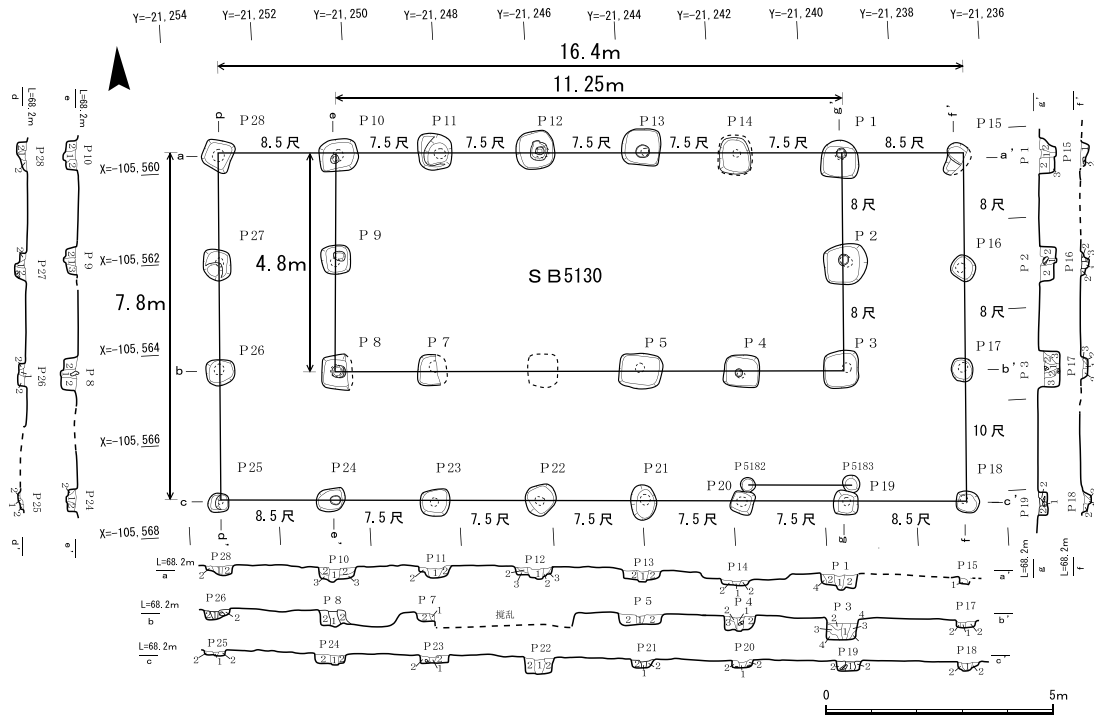
様相 調査地中央で検出したSR5125は、北西から南東へ流れる大規模な流路で、近世の愛宕郡上賀茂村と下鴨村の境界とされた乙井川の流路と推定される。SR5125からは近世後期の染付が出土しているほか、寛永通宝のなかでも、万治2(1659)年までに鑄造されたいわゆる「古寛永」が出土しているが、流通期間の長い貨幣であり、開削時期は出土土器から近世後期を下限とするにとどまる。SR5125は、その東端に集中して護岸のための杭を多数検出しており、鞍馬街道に近接する地点で護岸が重点的になされたものであろう。また、近世末期の絵図や大正11年の都市計画京都地方委員会作成の地図によると、この流路の上流は、上賀茂神社境内の御手洗川や明神川が賀茂川の分流と合流して南東に流れる流路に繋がるとみられ、府立植物園内にある上賀茂神社の場外末社である半木神社の北側を通り、やがてSR5125に至ったものと推定される(第119図)。乙井川は、近代まで継続した流路であり、2区と5区の間を東西に通る京都市用水路に整備されるが、SR5125の検出により、江戸時代には現用水路よりも約25m南を北西から南東へ流れていたことが明らかになった。

周辺の土地利用については、出土土器などから当該期に位置づけられる建物遺構は確認できず、北部調査地の南半部を中心に、各所で近世後期～近代とみられる不整形土坑(SK6002・6009等)を検出したが、これらは耕作に関わる排水や水溜め、石材などを含む廃材の処理などに利用されたものとみられる。中世後期の検地帳(「中村郷検地帳」天文19(1550)年)では、調査地周辺は全域が耕作地として利用されており、^(注20) 耕地が広がる景観が近世を通じてほとんど変わることなく近代まで維持されたようである。

2) 三面廂建物の造営とその評価

今回の調査では、古墳時代後期から近世までの各時期の遺構を検出しているが、その主要な時期はおもに奈良時代～平安時代前期であり、竪穴建物9棟、掘立柱建物39棟以上の多数の建物群を確認した。検出した建物群の構成は、奈良時代前半には竪穴建物を中心として展開するが、平安時代前期には掘立柱建物群を中心とした建物構成へと変わり、前述した3小期の変遷をみて、平安時代中期前半の総柱建物を最後に平安時代における新たな建物の造営は終息する。また、奈良時代前半の竪穴建物は、建物主軸が一定しないが、平安時代前期の掘立柱建物群は、おおそ正方位の建物主軸をとることが明らかとなった。平安京の造営が画期となり、調査地周辺の再開発が進められ、新たな掘立柱建物群が造営されたと推定される。これまでのところ奈良時代後半の建物造営が低調であることが判明しており、平安時代前期の開発との連続性は明らかではない。

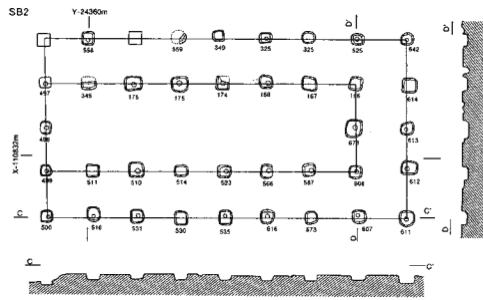
建物主要な時期は、平安時代前期中葉(京都Ⅱ期古、930～970年頃)であり、その時期に三面廂建物SB5130が造営される。SB5130は、身舎の柱間は桁行5間、梁行2間の規模をもち、南と東西の三面に廂をもつ(東西16.4m、南北7.8m)。廂付建物は、廂の数によって格式の上下を示し、そこで行われる儀礼の内容や使用する人の身分序列を反映するものとされる。三面廂建物は、極めて類例の少ない建物で、四面廂建物について格式の高い建物と考えられている。これまで都城



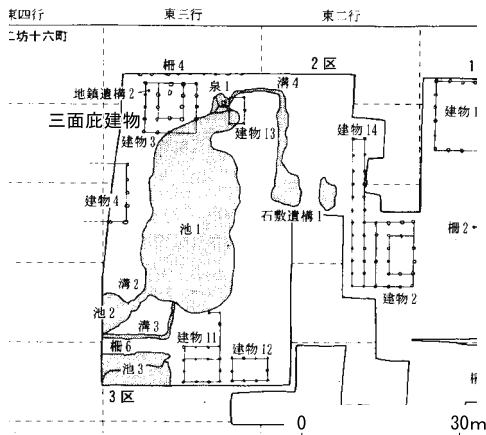
第120図 三面廂建物 S B 5130の規模と規格

付表4 平安京内における三面廂建物の類例

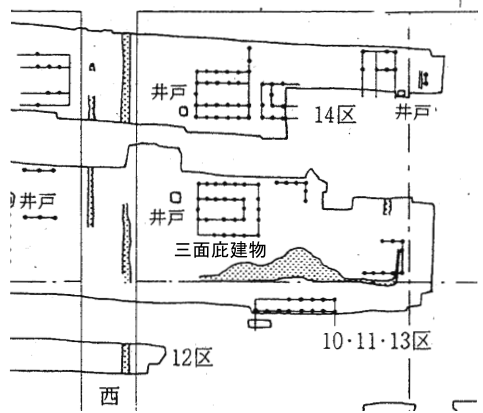
	位置	所在地	遺構名	棟方向	建物規模	時期	身舎桁行		身舎梁行		廂	床面積
							柱間	規模	柱間	規模		
1	右京四条二坊(淳和院)	右京区西院巽町・西淳和院町	SB2	東西	19.5 × 9.8 m 8間 × 4間	9世紀後半	7間	柱間 2.4 m	2間	柱間 2.4 m	南北・東 南北柱間 2.5 m (8.3尺) 東柱間 2.7 m (9尺)	191.1
											南北・西 南北柱間 2.4 m (8尺) 西柱間 2.7 m (9尺)	
2	植物園北遺跡	左京区下鴨半木町	SB 5130	東西	16.4 × 7.8 m 7間 × 3間	9世紀中～後葉	5間	11.25 m 7.5尺	2間	4.8 m 8尺	東西・南 東西 2.55 m (8.5尺) 南 3.0 m (10尺)	127.9
3	右京三条三坊十町	右京区西ノ京桑原町ほか	SB31	東西	13.8 × 7.8 m 6間 × 3間	9世紀前半	4間	※ 9.1 m	2間	※ 4.8 m	東西・南 東西 2.25 ~ 2.4 m (7.5尺) 南 3.0 m (10尺)	107.6
4	右京三条二坊十六町(斎宮邸)	中京区西ノ京東中合町	建物 3	南北	9.7 × 9.4 m 4間 × 4間	9世紀末～10世紀前葉	3間	柱間 2.25 m 7.5尺	2間	柱間 2.25 m 7.5尺	東西・南 東・南 9尺、西 8尺	91.2
											建物 2	
5	右京六条三坊四町	右京区西院溝崎町	—	東西	※ 12.4 × 7.2 m 5間 × 3間	9世紀後半	3間	柱間 2.4 m	2間	柱間 2.4 m	—	89.3
6	右京二条三坊十五町	右京区花園春日町	SB6	東西	12.8 × 6.4 m 5間 × 3間	9世紀末～10世紀中	3間	7.2 m 8尺等間	2間	4.8 m 8尺等間	東西・南 2.7 m (9尺)	81.9
7	右京二条三坊一町	中京区西ノ京中御門町	SB8	南北	9.1 m × 8.4 m	9世紀初	3間	4.2 m 14尺	2間	6.3 m 21尺	東西・南 2.4 m (8尺)	76.4
8	右京三条一坊六町(藤原良相邸)	中京区西ノ京星池町	建物 1	南北	※ 8.5 × 8.6 m 4間 × 4間	9世紀後半	2間	柱間 1.98 ~ 2.02 m	3間	柱間 1.96 ~ 2.24 m	東西・南 身舎・東廂 6.5尺、 南廂 7.5尺	73.1
9	右京六条一坊十二町	下京区中堂寺南町ほか	—	東西	6間 × 4間 (略図のみ)	平安前期	5間	—	2間	—	南北・東	—



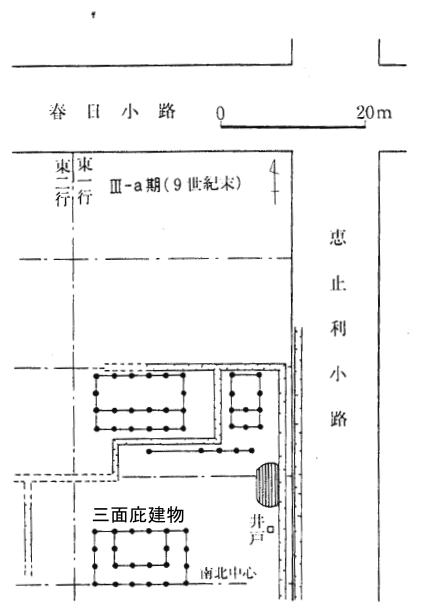
①右京四条二坊（淳和院跡） 0 7m



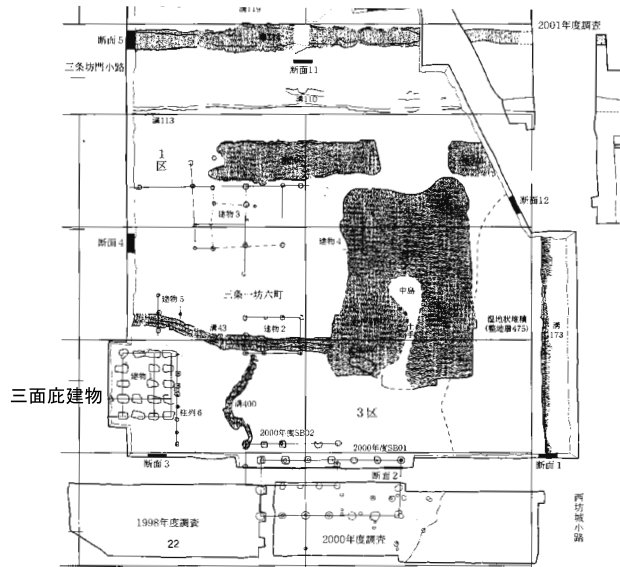
②右京三条二坊十五町・十六町（「齋宮」邸宅） 0 30m



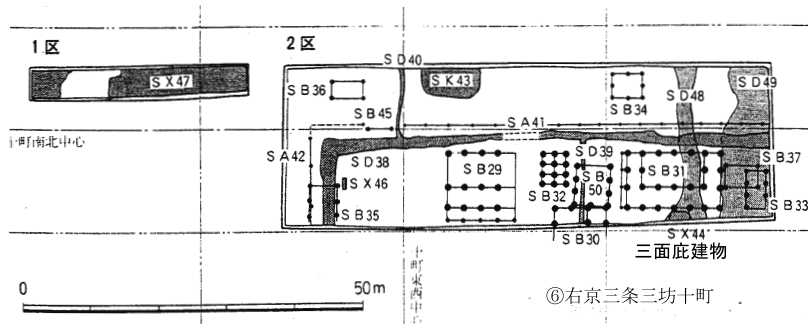
④右京六条一坊 0 50m



③右京二条三坊十五町



⑤右京三条一坊六町・七町（西三条第跡） 0 20m

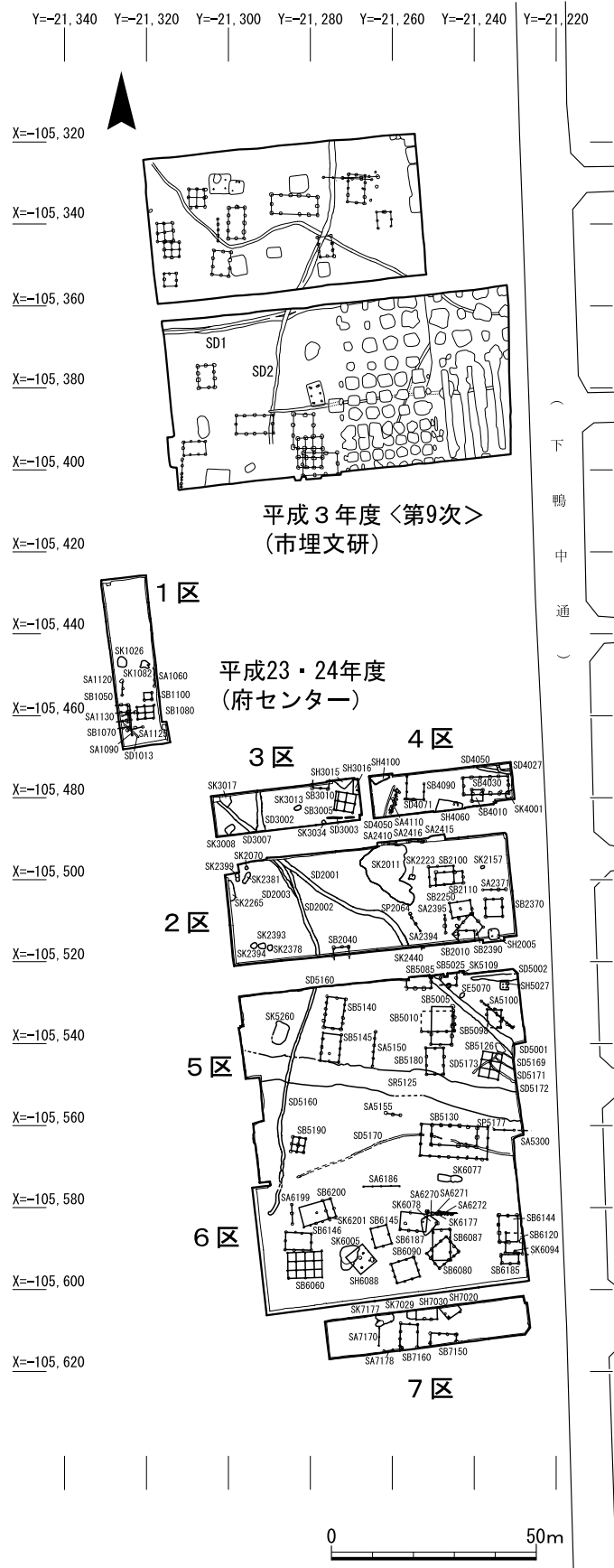


⑥右京三条三坊十町

第121図 平安京内における三面廂建物の類例

を中心に検出されているが、平城京では10例、長岡京では可能性のあるものを含め3例、平安京で約10例を数えるにすぎない。平城京では、掘立柱建物に占める三面廂建物の比率は約0.39%（全掘立柱建物2585棟のうち10棟、四面廂0.35%）と限られたものであり、約一町規模の上級貴族の宅地の主屋に用いられる例が多いとされる。^(注21)長岡京では、長岡宮北方官衙などを可能性が高いものがあるが、全体が確認された例は、一町四方の大規模宅地が確認された左京二条三坊十五町の主屋（身舎桁行5間×梁行2間）のみである。廂付建物が増加する平安京では、三面廂付建物は約10例（付表4）を数えるが、「齋宮」邸とされる右京三条二坊十五・十六町や右大臣藤原良相邸とされる西三条第（右京三条一坊六・七町）のほか、一町四方や四分の一町以上の宅地の主屋域に用いられている。

今回検出した三面廂建物 S B5130 は、平安京の京域外におけるはじめての例であり、平安京内の三面廂建物と比較しても遜色のない大規模なものである。床面積の比較では、S B5130は、表4のように127.9㎡の規模をもち、右京四条二坊の淳和院につぐ規模をもつことがわかる。^(注22) S B5130は、周辺に近接して建物群が確認されず、南には前庭となる空閑地を設けており、主屋として配置された中心的建物とみられる。S B5130



第122図 植物園北遺跡遺構位置図

の周囲には、溝等は確認されず、独立した空間として、区画されたものではない。同時期の建物は、北部に約80m離れて4区S B 4030があり、建物主軸に加え、身舎の規模や東西棟である点など関係性が深い。また、平成3年度の第9次調査でも、S B 4030と建物主軸、規模等、近似する建物が確認されており、広い範囲で主軸を揃え、同時に開発が行われたと考えられる。S B 5130が造営される平安時代前期中葉の建物群は、建物主軸を北からわずかに東に振るものが多く、より建物主軸を揃える意識が強くみられる。調査地に東には、近世の鞍馬街道であり、古代に遡る道の可能性がある下鴨中通が通じており、今後、道の整備との関係を検討する必要がある。調査地にみられる掘立柱建物群は、おおよそ9世紀前半に主軸を揃えて出現し、その後、9世紀中葉に三面廂建物を含めた多くの建物群が造営され、広く一帯が整備、開発されたと考えられる。

今回の調査では、倉庫群に対応するような掘立柱建物群、墨書土器や木簡などの官衙的性格を示す遺構や遺物はほとんど確認していない。出土遺物のなかでは、施釉陶器の出土比率は平安京内に比べて少なく、須恵器の出土比率が相対的に高い傾向を示し、製作手法に地域色が色濃くみられる。こうしたことから、調査地一帯の開発は、平安遷都以後、この地域を勢力基盤とする氏族によって大きく開発されたものであり、三面廂建物はそうした開発氏族の有力者の居館として造営された可能性を指摘できる。

この地の有力氏族に関して、奈良時代中頃にはすでに両賀茂社が続日本紀にみえ、8世紀後半には現在の調査地周辺を含む賀茂川と高野川に挟まれる地域で賀茂氏が勢力をもっていたとされる。^(注23)賀茂社の祭神は、9世紀初頭に正一位の神階を与えられ(807年、『日本紀略』)、朝廷神祇のなかで大きな役割を果たすようになり、両賀茂社の立地する調査地周辺の地域的な重要性が高まる時期である。調査を通じて、平安時代前期に多くの建物が造営され、一帯が広く整備され、開発されたことが判明したが、その時期はこの地域を基盤とした賀茂氏が朝廷内の神祇に関わり勢力を拡大する時期にあたることから、開発主体の有力な候補とみることができよう。

今回の発掘調査では、平安京の京域外において、奈良時代から平安時代前期における集落構造の変遷とその開発の在り方を具体的に知ることのできる貴重な資料を得ることができた。また、近世の絵図にみられる流路を実際に発掘調査で検出できたことも、近世の上賀茂村、下鴨村の土地活用や地割復元に資する大きな成果であり、今後、各方面で資料が大いに活用されることを願うものである。

(高野陽子)

注1 林屋辰三郎・村井康彦・森谷尅久監修 平凡社『京都市の地名』1981

京都市『京都の歴史』第1巻 1970

注2 近年の調査動向について既往の調査成果を集成したものとして、以下の資料がある。

吉本健吾「植物園北遺跡」『第241回京都市考古資料館文化財講座』(2013年1月)

注3 植物園北遺跡の過去の調査地点について、以下の文献を参考にした。

平田泰・モンペティ恭代『植物園北遺跡』(『京都市埋蔵文化財調査報告 2007-1』財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 2007

注4 小森俊寛・原山充志・長戸満男「植物園北遺跡」(『昭和61年度 京都市埋蔵文化財概要』財団法人

- 京都市埋蔵文化財研究所) 1986
- 注5 長門満男・小森俊寛「植物園北遺跡2」(『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 1989
- 注6 久世康博「植物園北遺跡」(『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 1991
- 注7 竹原一彦「植物園北遺跡第11次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第54冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注8 百瀬正恒「植物園北遺跡」(『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 1997
- 注9 田代弘「半木町遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第98冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 注10 府立大学構内において以下の調査が実施されている。
菱田哲郎・熊崎司「京都府立大学構内遺跡の試掘調査」(『洛北史学』第2号 京都府立大学)2000
構内調査や、遺跡と古道および手工業生産の関係など、菱田哲郎氏(京都府立大学)から多岐にわたるご教示をいただいた。
- 注11 中居和志「植物園北遺跡」(『京都府埋蔵文化財調査報告書』京都府教育委員会) 2011
調査回数については、現在は用いられておらず、調査年度と調査機関を併記して整理されている。
- 注12 植村善博氏(佛教大学)が現地調査区の土層断面を観察され、賀茂川の洪水にかかわる層位についてご教示をいただいた。
- 注13 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、小森俊寛「平安京の土器・陶磁器の概要」『平安京提要』角川書店1994、平尾政幸「緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」『平安京提要』(同上)。
(小森俊寛監修『京から出土する土器の編年的研究』(京都編集工房 2005)では、前記文献の「京都Ⅰ期」は「京Ⅱ期」に、「京都Ⅱ期」は「京Ⅲ期」に対応する)。
なお、本文中の平安時代の時期区分は、平安京遷都(794)から藤原氏による摂関政治がはじまる10世紀前葉までを「平安時代前期」とした。
出土土器に関しては、平尾政幸氏(京都市埋蔵文化財研究所)から編年的な位置づけや地域的特色について、また尾野善博氏(京都国立博物館)、高橋照彦氏(大阪大学)から灰釉陶器・緑釉陶器の年代観や産地について多くのご教示をいただいた。
- 注14 石田志朗氏(元京都大学)による断層状層位の現地確認調査により、8B区の層位はプレート起源の地震断層と考えられるものではなく、地震による局所的な地盤の隆起、沈降によるとされ、層位のずれから、マグニチュード6以上の地震が想定できるとのご教示をいただいた。
- 注15 文政13(1830)年7月2日の地震は、「京都大地震」とも呼ばれ、震源を亀岡市周辺とし、マグニチュード6.5クラスの直下型地震として、京都市市街地にも大きな影響を与えたとされる。多くの文献に被害状況が残され、二条城では地割れや本丸堀の陥没ができるなど、市街地の多くの建物に被害が出たことが知られる。
- 注16 前掲注13
- 注17 高橋潔「山城国愛宕郡の王塚」『研究紀要第3号』京都市埋蔵文化財研究所 1996
- 注18 高橋潔「奈良時代の竪穴住居」(杉山信三先生米寿記念論『平安京歴史研究』) 1993
- 注19 久世康博「植物園北遺跡の埋納遺構について」(杉山信三先生米寿記念論『平安京歴史研究』) 1993
- 注20 須磨千穎『賀茂別雷神社境内諸郷の復元的研究』(法政大学出版局、2001) 検地帳は、賀茂社神主や禰宜などの社司のもとに神事や所領管理などの実務にあたる氏人集団の社中で保管されてきたもので、本研究では調査地一帯を含む検地帳の記載と現在の地図との対応が示されている。こうした資料や、「乙井川」に関する近世絵図について、上杉和央氏(京都府立大学)からご教示をいただいた。
- 注21 森下恵介「平城京内宅地の建物遺構」『橿原考古学研究所論集第15』八木書店 2008
森下恵介氏(奈良市教育委員会)から、平城京内の廂付建物についてご教示をいただいた。
平安京の掘立柱建物及び廂付建物については、以下の文献を参考にした。また家原圭太氏(京都市文化観光局)には、廂付建物について、各地の検出例などのご教示をいただいた。

家原圭太「都城と周辺地域の四面庇建物」(『第15回 古代官衙・集落研究会報告書－四面庇建物を考える 報告編』独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所編) 2012

南孝雄「平安京掘立柱建物の特性～庇付き建物の展開～」(『研究紀要』第1号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

注22 淳和院は、淳和天皇の離宮・後院(平安京右京四条二坊)であり、天皇退位後の住まいであった。三面庇建物は、淳和上皇の崩御後、廃太子された皇子の居所となる9世紀後半に造営される。

注23 弘仁年間(810～924)には、都の鎮護を役目として賀茂神社に仕える斎王が選ばれる、いわゆる賀茂の斎院が成立する。この段階から、賀茂県主一族が管掌する両社の祭神が国家神的な位置づけをされるようになり、賀茂氏は朝廷神祇と結びつき、この地域を基盤に大きな勢力をもつようになると考えられている。古代愛宕郡の居住氏族や両賀茂神社については、以下の文献を参考にした。

参考文献

井上光貞「カモ県主の研究」(『日本古代国家の研究』岩波書店) 1985

岸俊男「山背国愛宕郡考」(『日本古代文物の研究』塙書房) 1988

井上満郎『京都 躍動する古代』ミネルヴァ書房 1981

中村修也『秦氏とカモ氏—平安京以前の京都—』臨川書店 1994

岡田精司『奈良時代の賀茂神社』塙書房 1997

岡田精司「賀茂別雷神社の祭祀の特色」(『祭祀研究』3 祭祀資料研究会) 2003

図版引用文献<第124図>

①右京四条二坊(淳和院跡) 『淳和院跡発掘調査報告 平安京右京四条二坊』関西文化財調査会 1997

②右京三条二坊十五町・十六町(齋宮邸宅跡) 「平安京右京三条二坊十五・十六町一「齋宮」の邸宅跡」(『京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊』財団法人京都市文化財研究所) 2002

③右京二条三坊十五町 「平安京右京二条三坊」(『平安京跡発掘調査概報』京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 1987

④右京六条一坊 「平安京右京六条一坊」(『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 1994

⑤右京三条一坊六・七町(西三条第跡) 「平安京右京三条一坊六・七町跡—西三条第(百花亭)跡」(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2011-9 財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 2013

⑥右京三条三坊十町 「平安京右京三条三坊」(『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第10冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 1990

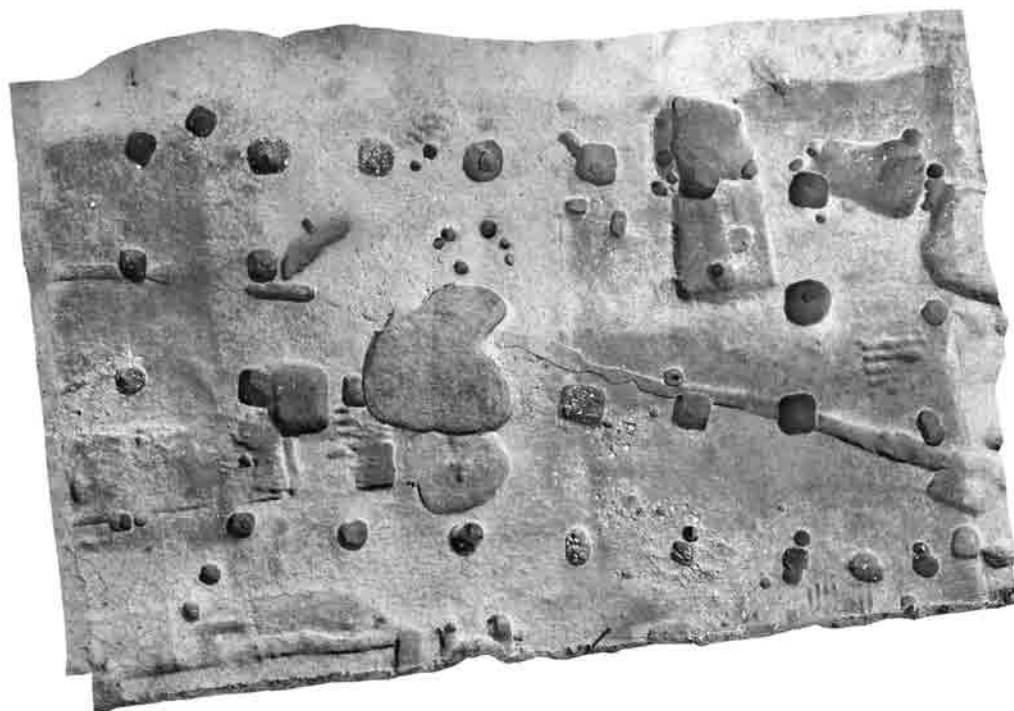
<平成25年度業務委託>

①8区土壌サンプルの放射性炭素年代測定については、株式会社パレオ・ラボに委託し、以下の結果を得た。

試料 8区拡張B区の北壁土壌サンプル [第83図2層、黒褐色(10Y)シルト質粘質土]

機器 加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)

分析結果 AMS年代が、140+15yrBP、2σ暦年代範囲(確率95.4%)が1676-1707cal AD (15.6%)、1718-1778cal AD (24.6%)、1798-1826calAD (11.7%)、1831-1886cal AD (25.7%)、1913-1942cal AD (17.7%)で、17世紀後半～20世紀前半の範囲であった。



(上が北)



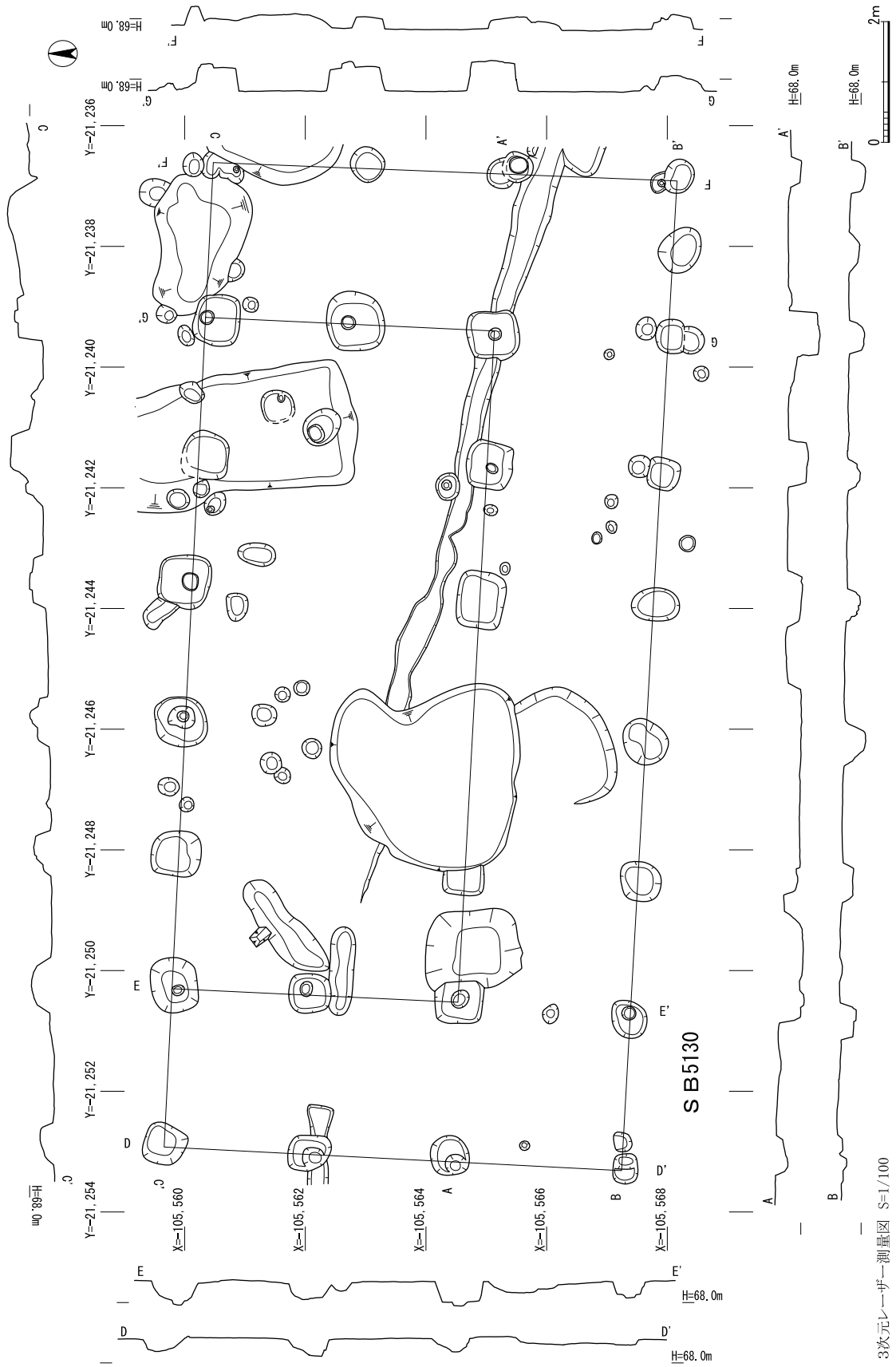
(南西から)



(南東から)

(合成画像 図版第 61・62 参照)

付図1 三面廂建物S B5130 3次元測量合成写真



付図2 三面廂建物 S B5130 3次元レーザー測量図

付表5 土器一覧表

報告番号	器種				法量		残存率	色調	技法上の特徴(調整)	備考
	種類	器種	地区名	遺構名	口径	器高				
1	土師器	甕	1区	SK1082	37.6	(2.6)	1/12以下	にぶい黄橙色(10YR6/3)	ナデ	摩滅
2	土師器	甕	1区	SP1024	(20.6)	(6.9)	1/16	にぶい黄橙色(10YR7/3)	ヨコナデ、指オサエ、ハケ	
3	土師器	甕	1区	SP1137	(16.6)	(4.1)	1/12	にぶい褐色(7.5YR6/3)	ヨコナデ、指オサエ、ハケ、ナデ	
4	須恵器	杯	1区	SB1070 P2	15.8	(3.4)	1/16	灰黄褐色(10YR5/2)	ナデ	
5	須恵器	杯B蓋	1区	SB1070 P2	18.6	(1.4)	1/8	灰白色(N7/)	回転ナデ	
6	須恵器	低脚杯	1区	SB1070 P2	[8.6]	(2.9)	-	灰白色(N7/)	回転ナデ、ケズリ	
7	土師器	甕	1区	SP1023	*18.0	(2.0)	1/14	にぶい橙色(5YR7/4)	ナデ、ヨコナデ、ハケ	
8	土師器	甕	1区	SP1023	*24.8	(2.2)	1/32	にぶい黄橙色(10YR7/4)	ヨコナデ、指オサエ	
9	須恵器	杯A	1区	SP1034	14.6	3.6	1/12	灰白色(5Y7/1)	回転ナデ	
10	土師器	甕	1区	SP1034	(8.4)	(2.3)	1/10	灰黄褐色(10YR6/2)	ナデ、ヨコナデ、指オサエ	
11	土師器	甕	1区	SP1040	24.4	(6.9)	1/5	橙色(7.5YR6/6)	ヨコナデ、ナデ、ハケ	
12	土師器	皿	1区	SP1064	[12.3]	(1.4)	1/12	明赤褐色(5YR5/8)	ケズリ	
13	須恵器	杯A	1区	SK1126	12.4	(4.2)	1/2	灰色(N6/)	回転ナデ、ケズリ	
14	須恵器	平瓶か	1区	SK1156	10.0	(3.6)	1/8	灰色(5Y6/1)	回転ナデ	
15	土師器	甕	1区	7W	27.8	(5.4)	2/3	明黄褐色(10YR7/6)	ナデ、ハケ	
16	土師器	皿A	1区	SE	(23.0)	(2.8)	1/10	にぶい橙色(7.5YR7/4)	ナデ、指オサエ	
17	土師器	杯A	1区	9W	(15.4)	(2.8)	1/16	橙色(5YR6/6)	ナデ	
18	須恵器	甕	1区	6E	(25.4)	(5.5)	1/10	黄灰色(2.5Y6/1)~灰色(N6/)	ナデ、回転ナデ、タタキ	
19	須恵器	杯A	1区	6E	15.5	4.0	-	灰色(7.5Y6/1)	回転ナデ、ナデ	
20	須恵器	杯A	1区	7E	[5.7]	(2.1)	-	灰色(5Y6/1)	回転ナデ、ヘラ切り	
21	須恵器	杯B蓋	1区	6E	(8.2)	(1.7)	-	灰白色(10Y7/1)	回転ナデ	
22	須恵器	杯B蓋	1区	5E	(13.0)	(0.8)	1/4	灰色(N6/1)	回転ケズリ、回転ナデ	
23	須恵器	杯B蓋	1区	7W	15.8	2.3	1/14	灰色(5Y6/1)	回転ナデ	
24	須恵器	杯B蓋	1区	7E	14.9	(1.1)	1/24	灰白色(より少し濃い)(N7/)	回転ナデ	
25	須恵器	杯B	1区	6E	[*9.3]	(1.5)	1/5	灰色(5Y6/1)	回転ナデ	
26	須恵器	杯B	1区	6E	[12.0]	(2.8)	1/4	灰白色(7.5Y7/1)	回転ナデ、ヘラ切り	
27	須恵器	壺A蓋	1区	6E	[*12.3]	1.9	1/8	自然釉:オリープ灰色(10Y5/2)	回転ナデ	自然釉
28	土師器	甕	2区	SP2183	15.4	(3.3)	1/10	にぶい橙色(7.5YR6/4)	ナデ、ハケ	
29	須恵器	長頸壺	2区	SP2051	<16.3>	(9.5)	-	灰色(N6/)	回転ナデ、回転ケズリ	波状文あり
30	須恵器	杯B蓋	2区	SB2110 P4	18.8	(1.2)	1/12	灰色(N5/)	回転ナデ	
31	須恵器	杯B	2区	SB2110 P8	[10.0]	(2.1)	1/6	灰色(N6/)	回転ナデ	
32	須恵器	杯B	2区	SB2110 P6	16.1	(2.9)	1/8	灰色(N5/)	回転ナデ	
33	須恵器	壺	2区	SB2110 P8	[5.1]	(2.6)	1/4	灰色(N6/)	回転ナデ、回転ケズリ	
34	須恵器	杯	2区	SB2370 P4	*17.0	(2.8)	1/20	灰色(N7/)	回転ナデ	
35	須恵器	鉢	1区	SB2370 P6	14.5	(1.7)	1/20	灰色(7.5Y6/1)	回転ナデ	
36	須恵器	壺	2区	SB2370 P6	<19.8>	(4.0)	1/12	灰色(5Y6/1)	回転ナデ、タタキ	
37	土師器	皿か	2区	SB2390 P3	24.4	(2.4)	1/10	にぶい黄橙色(10YR7/3)	ナデ	
38	須恵器	壺	2区	SB2250 P9	18.0	(2.7)	1/12	灰色(N4/)	回転ナデ	
39	須恵器	壺	2区	SA2395	<10.8>	(4.5)	1/3	灰色(N4/)	回転ナデ、回転ケズリ	
40	須恵器	椀	2区	SP2032	13.5	(3.0)	1/20	灰白色(5Y7/1)	回転ナデ	
41	無釉陶器	椀	2区	SP2032	[7.8]	(1.1)	1/12	灰白色(2.5Y8/2)	回転ナデ、糸切り痕	削り出し高台
42	土師器	羽釜	2区	SP2024	<22.0>	(5.8)	-	にぶい橙色(7.5YR6/4)	ナデ、指オサエ、ハケ	把手付き
43	土師器	甕	2区	SP2028	15.4	(4.4)	1/10	にぶい橙色(7.5YR7/4)	ヨコナデ	外面にスス付着
44	須恵器	皿	2区	SK2042	[*12.0]	(1.6)	-	灰色(7.5Y6/1)	回転ナデ、ヘラ切り	
45	須恵器	杯	2区	SP2063	13.9	(3.1)	1/18	灰色(N5/)	回転ナデ	
46	土師器	甕	2区	SP2044	23.4	(2.6)	1/20	橙色(7.5YR7/6)	ヨコナデ	
47	須恵器	杯	2区	SK2044	14.6	(4.4)	1/8	灰色(5Y6/1)	回転ナデ	
48	須恵器	杯A	2区	SP2079	10.7	3.1	1/12	灰白色(N7/)	回転ナデ、ケズリ	
49	土師器	羽釜	2区	SP2056	24.8	(7.8)	-	灰黄褐色(10YR5/2)	ハケ、ナデ	
50	須恵器	杯	2区	SP2117	15.3	(3.2)	1/20	灰色(N4/)	回転ナデ	
51	須恵器	皿	2区	SP2122	9.4	(1.8)	1/10	灰色(N5/1)	回転ナデ	
52	須恵器	鉢	2区	SP2166	23.6	(2.5)	1/12	黄灰色(2.5Y6/1)	回転ナデ	

報告番号	器種				法量		残存率	色調	技法上の特徴(調整)	備考
	種類	器種	地区名	遺構名	口径	器高				
53	須恵器	杯A	2区	SP2159	[8.0]	(1.0)	1/4	灰オリーブ (7.5Y6/3)	回転ナデ、ヘラ切り	
54	須恵器	杯A	2区	SP2164	[6.1]	(0.9)	1/3	灰色 (7.5Y6/1)	回転ナデ	
55	須恵器	壺か	2区	SP2178	[8.6]	(2.3)	1/16	灰色 (N5/1)	回転ナデ	
56	須恵器	杯	2区	SP2022	11.9	(3.0)	1/6	灰色 (5Y6/1)	回転ナデ	
57	須恵器	杯B蓋	2区	SP2183	12.5	(1.9)	1/6	灰色 (5Y6/1)	回転ナデ	
58	須恵器	甕	2区	SP2183	*5.0	(5.0)	1/20	灰色 (N6/)	回転ナデ	
59	須恵器	杯	2区	SP2221	10.0	(3.4)	1/6	灰色 (N6/)	回転ナデ	
60	須恵器	高杯	2区	SP2221	<8.3>	(7.1)	脚	灰白色 (2.5Y8/2)	回転ナデ	
61	須恵器	杯B蓋	2区	SP2219	15.6	(1.5)	1/20	灰色 (N5/)	回転ナデ、ケズリ	
62	須恵器	皿	2区	SP2224	17.8	(2.8)	1/16	灰色 (5Y6/1)	回転ナデ	
63	須恵器	杯A	2区	SP2444	12.0	(2.9)	1/3	灰色 (N6/)	回転ナデ、ヘラ切り後ナデ	
64	無釉陶器	椀	2区	SP2259	[5.5]	(1.1)	底	灰白色 (2.5Y7/1)	回転ナデ	
65	須恵器	平瓶か	2区	SP2262	-	(1.4)	体	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	回転ナデ	
66	土師器	甕	2区	SP2202	*36.0	(5.2)	1/16	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	ナデ、指オサエ、ハケ	外面スス付着
67	土師器	杯A	2区	SH2005 K3	*20.0	(3.5)	1/16	浅黄色 (10YR8/3)	摩滅が著しい	
68	須恵器	杯	2区	SH2005 K3	15.8	(2.8)	1/20	灰白色 (N7/)	回転ナデ	
69	須恵器	壺	2区	SH2005 K1	[11.0]	(1.8)	1/8	灰色 (N5/)	回転ナデ、回転ケズリ	
70	須恵器	甌	2区	SH2005	21.7	(4.1)	1/20	灰白色 (5Y7/1)	回転ナデ	
71	須恵器	鉢	2区	SH2005	16.6	(5.3)	1/9	灰白色 (5Y7/1)	回転ナデ	
72	須恵器	鉢	2区	SH2005 K5	15.6	(3.2)	1/16	灰白色 (5Y7/1)	回転ナデ	
73	無釉陶器	皿	2区	SH2005 K6	13.3	(1.8)	3/5	灰白色 (2.5Y8/2)	摩滅が著しい	削り出し高台 軟陶 京都産(洛北)
74	緑釉陶器	椀	2区	SH2005 K5	(7.4)	(3.3)	1/2	胎土：灰白色 (2.5Y7/1)	ロクロナデ、ミガキ、施釉、釉かきとり	釉：灰白色 (7.5Y7/2) 硬質 全面施釉 (高台部分かきとり) トチン痕有 東海産(猿投産) 貼り付け高台
75	製塩土器	-	2区	SH2005 K5	10.4	(2.9)	1/10	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	ナデ、指オサエ	
76	須恵器	杯B	2区	SK2043	8.0	(1.5)	1/4	灰色 (N5~4/)	回転ナデ、回転ケズリ	
77	土師器	甕	2区	SK2043	*25.2	(3.0)	1/12	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	ヨコナデ、ハケ	
78	須恵器	平瓶	2区	SK2157	10.5	(8.9)	口縁	灰色 (5Y5/1)	回転ナデ	
79	須恵器	杯B	2区	SK2223	[*14.4]	(2.4)	底	灰白色 (7.5Y7/1)	回転ナデ	
80	須恵器	皿C	2区	SK2223	21.4	2.4	1/28	灰色 (N5/)	回転ナデ	
81	土師器	高杯	2区	SK2223	*21.2	(5.2)	1/36	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	ハケ、ナデ	
82	土師器	甕	2区	SK2048	22.0	(4.3)	1/8	浅黄橙 (7.5YR8/3)	ナデ	口縁部にスス付着
83	土師器	鍋	2区	SK2070	(25.0)	(16.7)	1/3	灰白色 (10YR8/2) ~ 浅黄橙色 (10YR8/3)	ナデ、指オサエ、摩滅著しく調整不明瞭	摩滅により黒変している箇所あり
84	土師器	鍋	2区	SK2070	(23.8)	(18.0)	1/2	橙色 (7.5YR7/6) ~ 明褐灰色 (7.5YR7/2)	ナデ、ハケ、指オサエ、摩滅が著しい	
85	土師器	甕	2区	SK2070	26.6	35.4	ほぼ完形	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	底部にスス付着
86	土師器	甕	2区	SK2440	(26.2)	(25.5)	1/3	にぶい褐色 (7.5YR6/3 ~ 7/3)	ヨコナデ、ハケ、ナデ	摩滅が著しい
87	土師器	鍋	2区	SK2265	(25.6)	(7.6)	1/6	浅黄橙色 (10YR8/3)	ヨコナデ、ナデ	摩滅が著しい
88	須恵器	杯	2区	SD2001	(13.8)	(2.9)	1/36	灰色 (5Y6/1)	回転ナデ	内側鉄分付着
89	須恵器	壺	2区	SD2001	[*7.3]	(1.6)	1/4	灰色 (7.5Y6/1)	回転ナデ、回転ケズリ	
90	須恵器	平瓶	2区	SD2001	(6.4)	(4.4)	1/4	灰白色 (10YR7/1) ~ 灰色 (5Y4/1) (釉)	回転ナデ	
91	須恵器	鉢F	2区	SD2001	(8.6)	(4.5)	1/5	浅黄色 (2.5Y7/3)	回転ナデ	
92	須恵器	平瓶	2区	SD2001	<23.3>	(3.2)	-	灰色 (N5/)	回転ナデ	
93	須恵器	壺H	2区	SD2001	13.2	(2.3)	1/6	灰色 (5Y6/1)	回転ナデ	
94	土師器	壺	2区	SD2001	*6.7	(2.2)	口縁	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	不明	摩滅が著しい
95	土師器	高杯	2区	SD2001	-	(5.7)	脚	橙色 (5YR7/6)	ナデ	
96	須恵器	壺	2区	SK2011	15.0	(5.4)	1/48	灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 自然釉	回転ナデ、タタキ	
97	無釉陶器	椀	2区	SK2011	[*6.4]	(1.6)	1/3	灰白色 (7/1)	ロクロナデ、回転ケズリ	蛇の目高台(削り出し)
98	瓦質土器	羽釜	2区	SK2011	24.0	(4.4)	1/12	灰色 (N5/)	ナデ	
99	青磁	椀	2区	SK2011	10.0	(3.2)	1/10	灰オリーブ色 (7.5Y6/2)	ロクロナデ、施釉	
100	白磁	椀	2区	SK2011	14.6	(2.3)	1/12	灰白色 (10Y7/1)	施釉	
101	白磁	椀	2区	SK2011	[*5.9]	(2.1)	1/7	生地：灰白色 (7.5Y7/1)	施釉	椀 V類 釉：灰白色 (7.5Y7/2)

植物園北遺跡・下鴨半木町遺跡発掘調査報告

報告番号	器種				法量		残存率	色調	技法上の特徴(調整)	備考
	種類	器種	地区名	遺構名	口径	器高				
102	白磁	壺	2区	SK2011	<140>	(3.7)	1/19	灰白色(7.5Y7/2)	ロクロナデ	
103	灰釉陶器	椀	2区	SK2011	[7.3]	(2.4)	完形	灰白色(10YR7/1)	ロクロナデ	貼り付け高台
104	青磁	椀	2区	SK2011	11.4	(3.6)	体	釉:オリブ灰色(10Y5/2)	施釉	椀(12類か)中国産(龍泉窯)
105	土師器	高杯	2区	3・4A	-	(6.1)	1/3	浅黄橙色(10YR8/4)	ナデ	
106	土師器	杯Cか	2区	攪乱坑	19.0	(5.3)	1/16	橙色(5YR6/8)	ナデ、指オサエ、暗文	
107	須恵器	杯A	2区	攪乱坑	10.4	3.2	1/4	灰白色(5Y7/1)	回転ナデ、ケズリ	
108	須恵器	杯B	2区	包含層	(11.9)	(1.7)	1/6	灰白色(2.5Y7/1)	回転ナデ	
109	須恵器	皿	2区	1B	14.7	1.7	1/6	灰色(N5/)	回転ナデ	
110	須恵器	椀	2区	6C	17.0	(5.1)	5/12	灰色(N5/)	回転ナデ、ケズリ	
111	無釉陶器	椀	2区	2D	14.2	(4.3)	1/8	灰色(N6/)	回転ナデ、ケズリ	
112	須恵器	壺A	2区	包含層	11.6	(5.4)	1/12	灰色(N6/)	回転ナデ、タタキ、カキ目	把手付き
113	無釉陶器	椀	2区	2D	[*7.4]	(2.1)	1/4	灰色(5Y6/1)	回転ケズリ、回転ナデ	削り出し高台
114	須恵器	円面硯		包含層	<130>	(2.0)	1/8	黄灰色(2.5Y6/1)	回転ナデ	スカシ孔あり
115	緑釉陶器	托	2区	4D	2.2	(1.6)	-	黄緑	ロクロナデ、施釉	
116	緑釉陶器	椀	2区	1D	[6.8]	(1.7)	完形	浅黄橙色(10YR8/3)	ミガキ、施釉	軟陶 円盤状削り出し高台 京都産
117	緑釉陶器	椀	2区	包含層	[5.2]	(1.1)	完形	浅黄橙色(10YR8/3)	ロクロナデ、施釉	京都産
118	灰釉陶器	椀	2区	2D	[*7.8]	(2.4)	1/8	露胎:灰白色(5Y8/1)	ロクロナデ、施釉	東海産(猿投窯) 釉:灰オリブ色(5Y6/2)
119	灰釉陶器	椀	2区	包含層	[8.0]	(2.2)	1/6	灰白色(5Y7/1)	ロクロナデ、ケズリ、施釉	東海産(猿投窯)
120	青磁	椀	2区	8D	13.3	(4.0)	1/12	釉:オリブ灰色(5GY6/1)	施釉	中国産(龍泉窯)
121	青磁	皿か	2区	2D	*31.2	(3.2)	1/24	釉:オリブ灰色(10Y6/2)	施釉	中国産(龍泉窯)
122	陶器	壺	2区	2D	-	(3.5)	1/4	素地:淡黄(2.5Y8/3) 釉:灰オリブ(7.5Y6/3)	施釉	瀬戸美濃産
123	陶磁器	椀	2区	2D	[*7.3]	(2.3)	1/4	にぶい橙色(7.5YR6/4)	施釉	釉:灰白(10Y7/1) 蛇の目高台
124	陶器	天目茶碗	2区	3D	11.8	(3.0)	1/12	素地:灰白色(2.5Y8/2) 釉:黒色(7.5YR1.7/1)	施釉	瀬戸美濃産
125	磁器	椀	2区	SD2001 上層	[*2.5]	(1.0)	3/4	灰白色(N8/)	ロクロナデ、ケズリ	
126	土師器	甕	3区	SH3015 P3	14.5	13.0	1/6	灰黄褐色(10YR5/2)	ヨコナデ、ハケ	
127	土師器	甕	3区	SH3015	11.9	(6.0)	1/8	灰黄褐色(10YR5/2)	ヨコナデ、ハケ	
128	土師器	甕	3区	SH3015 P3	15.0	(4.6)	1/4	橙色(5YR6/6)	ヨコナデ、ハケ	
129	須恵器	杯B蓋	3区	SH3015	16.0	3.6	完形	灰白色(7.5Y7/1)	回転ナデ、回転ケズリ	
130	須恵器	杯B	3区	SH3015	*15.0	(3.7)	1/4	灰白色(2.5Y8/1~8/2)	回転ナデ	
131	須恵器	杯A	3区	SH3015	15.0	(4.1)	1/6	灰色(N6/)	回転ナデ	
132	須恵器	皿	3区	SH3015 K1	18.9	2.5	ほぼ完形	灰黄色(2.5Y7/2)	回転ナデ、ケズリ、ヘラ切り	
133	土師器	甕	3区	SH3015 K1	15.0	(4.8)	1/8	灰褐色(7.5YR5/2)	ヨコナデ、ハケ	
134	土師器	甕	3区	SH3015 K1	27.7	(12.0)	1/6	にぶい黄橙色(10YR7/3)	ヨコナデ、ハケ、指オサエ	
135	土師器	甕	3区	SH3015 K1	24.4	(11.0)	1/12	にぶい黄橙色(10YR7/2)	ヨコナデ、ハケ	
136	土師器	甕	3区	SH3015 K1	25.2	(13.2)	1/6	灰白色(10YR7/1)	ナデ、指オサエ、ハケ	
137	須恵器	杯A	3区	SH3015 K1	12.1	3.7	完形	灰黄色(2.5Y6/2)	回転ナデ、回転ケズリ	
138	須恵器	杯A	3区	SH3015 K1	12.3	3.8	2/3	灰白色(5Y7/1)	回転ナデ、回転ケズリ	
139	須恵器	鉢F	3区	SH3015 K1	[9.0]	(3.6)	底	灰黄色(2.5Y7/2)	回転ナデ	
140	須恵器	鉢	3区	SH3015 K1	31.9	(14.2)	1/24	にぶい黄色(2.5Y6/3)	回転ナデ、カキ目、タタキ	
141	須恵器	杯A	3区	SH3016	12.7	3.3	1/2	灰白色(5Y8/2)	回転ナデ、ヘラ切り	
142	須恵器	杯A	3区	SH3016	14.5	3.4	4/5	灰色(N5/1)よりやや緑がかっている	回転ナデ、回転ケズリ	
143	青磁	壺	3区	SH3016	-	[3.5]	-	釉:明オリブ灰色(5GY7/1)	施釉	
144	土師器	羽釜	3区	SH3016	<28.3>	(10.1)	-	にぶい黄橙色(10YR7/3)	ナデ、ハケ	
145	灰釉陶器	椀	3区	SB3005 P12	13.6	(2.6)	1/12	釉:灰黄褐色(10YR6/2)	ロクロナデ、施釉	
146	陶器	椀	3区	SB3005 P12	[6.8]	1.4	1/6	灰色(7.5Y6/1)	施釉	京都産
147	土師器	甕	3区	SD3002 1区	*16.0	(7.5)	1/16	橙色(7.5RY7/4~7/6)	ナデ、ハケ	
148	須恵器	杯H	3区	SD3002 2区	*10.0	(3.0)	1/8	灰色(N5/)	回転ナデ、ケズリ	
149	須恵器	杯G蓋	3区	SD3002 1区	10.4	(19.5)	1/8	灰色(N5/)	回転ナデ、回転ケズリ	

報告番号	器種				法量		残存率	色調	技法上の特徴(調整)	備考
	種類	器種	地区名	遺構名	口径	器高				
150	須恵器	杯G	3区	SD3002 1区	[*6.0]	(3.0)	1/2	灰色(N5/)	回転ナデ、ヘラケズリ	
151	須恵器	杯B蓋	3区	2B	17.8	(0.9)	1/4	灰色(N7/)	回転ナデ	
152	須恵器	杯A	3区	2B	9.4	3.3	2/3	灰色(5Y6/1)	回転ナデ、ケズリ	
153	緑釉陶器	椀	3区	2A	7.0	(1.4)	1/4	にぶい黄橙色(10YR 7/3)	摩滅のため不明	軟陶 円盤状高台(削り出し) 京都産
154	須恵器	杯B蓋	4区	SH4060	14.4	(2.4)	頂	灰色(7.5Y6/1)	回転ナデ	
155	須恵器	杯B蓋	4区	SH4100	*16.0	(1.5)	1/12	灰色(N6/)	回転ナデ	
156	須恵器	杯B蓋	4区	SH4100	14.0	(1.7)	1/6	灰色(N6/)	回転ナデ	
157	須恵器	杯A	4区	SH4100	[8.7]	(2.1)	1/2	灰色(N6/)	回転ナデ	
158	須恵器	杯B	4区	SH4100	17.0	(3.2)	1/8	灰色(N6/)	回転ナデ	
159	無釉陶器	椀	4区	SB4030 P3	[5.8]	(2.1)	2/3	灰色(N7/)	ロクロナデ、施釉	
160	須恵器	壺Q	4区	SP4041	(14.2)	(7.6)	1/6	灰色(5Y6/1)	回転ナデ	
161	灰釉陶器	椀	4区	SP4075	13.8	(2.3)	1/6	灰黄色(2.5Y7/2)	施釉	折戸53号窯
162	土師器	甕	4区	SP4007	23.5	(3.1)	1/16	橙色(7.5YR6/6)	ヨコナデ	
163	土師器	甕	4区	SP4007	22.3	(4.3)	1/12	にぶい黄橙色(10YR6/4)	ヨコナデ	
164	須恵器	壺	4区	SP4010	[10.0]	(2.2)	1/2	灰色(N6~5/)	回転ナデ、ヘラ切り	
165	灰釉陶器	椀	4区	包含層	*13.8	2.9	1/8	露胎:灰白色(2.5Y7/1)	ロクロナデ、施釉	釉:オリープ灰色(10Y6/2)
166	土師器	高杯	4区	包含層	<6.9>	(9.0)	脚	にぶい橙色(7.5YR7/4)	ヘラによる面取り	
167	須恵器	杯B	4区	SP4023	*11.9	(3.0)	1/12	青灰色(5PB6/1)	回転ナデ	
168	須恵器	壺	4区	SP4023	[9.0]	(4.3)	1/3	灰色(N6/)	回転ナデ	
169	不明土製品	-	4区	SP4025	11.9	(5.5)	1/4	灰白色(5Y8/1)	タタキ、摩滅著しい	
170	不明土製品	-	4区	包含層	[9.0]	(5.4)	体	灰黄色(2.5Y7/2)	タタキ、ナデ	
171	須恵器	杯B蓋	4区	SD4045	15.3	2.8	完形	灰白色(5Y7/1)	回転ナデ、回転ケズリ	
172	緑釉陶器	椀	4区	SD4027	[9.1]	(2.4)	1/6	素地:灰白色(7.5Y7/1)	施釉	釉:灰オリープより鮮やかな緑色(7.5Y5/3)
173	須恵器	杯B	4区	包含層	[10.5]	(1.3)	底	灰白色(SY7/2)	回転ナデ	
174	須恵器	杯B	4区	6B	[13.6]	(2.4)	1/6	灰白色(N7/)	回転ナデ、ヘラ切り	
175	須恵器	皿	4区	包含層	18.2	2.5	1/24	灰黄色(2.5Y7/2)~灰白色(2.5Y7/1)	回転ナデ	削り出し高台
176	緑釉陶器	椀	4区	SH4060	[*9.6]	(4.3)	1/4	濃緑色	ロクロナデ、施釉	東海産
177	緑釉陶器	椀	4区	7C	[8.0]	(1.4)	1/4	灰白色(7.5Y7/1)	ロクロナデ、施釉	削り出し高台、全面施釉・京都産 硬陶 釉:オリープ灰色(10Y6/2)
178	白磁	椀	4区	包含層	15.9	(5.6)	1/16	素地:灰白色(7.5Y8/1)	施釉	釉:灰白色(7.5Y7/1)
179	土師器	高杯	5区	SP5109	20.1	(14.3)	ほぼ完形	にぶい黄橙色(10YR6/4)~明赤褐色(2.5YR5/6)	ナデ	
180	土師器	甕	5区	SB5005 P4	17.0	(6.5)	1/12	灰黄褐色(10YR5/2)	ヨコナデ、タタキ	
181	黒色土器	甕	5区	SB5005 P4	17.0	(4.8)	1/8	黒色(2.5Y2/1)	ヨコナデ、ミガキ	
182	須恵器	杯B蓋	5区	SB5005 P3	16.0	(1.5)	1/12	灰色(N6/1)~灰色(N64/4)	回転ナデ	
183	須恵器	杯B蓋	5区	SB5005 P3	16.0	(1.5)	1/12	灰色(5Y5/1)(外のみ自然釉、暗オリープ(7.5Y4/3))	回転ナデ	
184	須恵器	杯B蓋	5区	SB5025 (SP5053)	17.6	(1.8)	1/12	灰色(7.5Y6/1)	回転ナデ	
185	土師器	甕	5区	SP5098	23.0	(4.8)	1/6	にぶい黄橙色(10YR7/4)	ヨコナデ、ハケ	
186	土師器	甕	5区	SP5098	(24.2)	(7.3)	2/12	橙色(7.5YR6)	ヨコナデ、ハケ	
187	須恵器	杯A	5区	SP5081	13.8	3.6	1/32	灰白色(10Y7/1)~灰色(10Y6/1)	回転ナデ、ケズリ、ヘラ切り	
188	須恵器	杯B蓋	5区	SP5081	17.8	(1.4)	1/16	灰白色(7.5Y7/1)	回転ナデ	
189	須恵器	壺	5区	SP5080	(10.6)	(2.3)	1/12	灰白色(7.5Y7/1)	回転ナデ	
190	須恵器	杯B蓋	5区	SP5007	17.8	(2.1)	1/10	灰白色(2.5Y7/1)	回転ナデ、回転ケズリ	
191	須恵器	皿	5区	SP5063	16.7	(2.5)	1/72	灰色(5Y6/1)	回転ナデ	
192	土師器	皿	5区	SB5130 P17	7.9	(1.3)	1/12	橙色(7.5RY7/6)	ナデ	
193	土師器	甕	5区	SB5130 P13	*20.0	(2.2)	1/16	橙色(7.5YR7/6)	ヨコナデ	
194	須恵器	杯A	5区	SB5130 P12	[*6.3]	(2.2)	1/3	灰色(N6/~5/)	回転ナデ、ヘラ切り	
195	須恵器	杯B蓋	5区	SB5130 P11	(15.3)	(1.9)	-	灰白色(N7/)	回転ナデ	
196	須恵器	杯B蓋	5区	SB5130 P28	15.9	(1.6)	1/24	灰白色(N7/)	回転ナデ	
197	須恵器	杯B蓋	5区	SB5130 P8	15.8	(1.1)	1/12	黄灰色(2.5Y6/1)	回転ナデ	
198	須恵器	杯B蓋	5区	SB5130 P8	16.8	(1.6)	1/6	灰白色(2.5Y7/1)	回転ナデ	
199	須恵器	鉢	5区	SB5130 P17	*20.0	(5.0)	1/12	灰白色(2.5Y8/2)	回転ナデ	

植物園北遺跡・下鴨半木町遺跡発掘調査報告

報告番号	器種				法量		残存率	色調	技法上の特徴(調整)	備考
	種類	器種	地区名	遺構名	口径	器高				
200	須恵器	壺	5区	SB5130 P11	[*13.05]	(19.4)	1/12	灰オリーブ色 (7.5Y5/3)	回転ナデ、回転ケズリ	灰オリーブ色(自然釉)(7.5Y5/3)
201	緑釉陶器	皿	5区	SB5130 P28	*14.0	(2.0)	1/12		ロクロナデ、施釉	東海産(猿投窯)
202	緑釉陶器	皿	5区	SB5130 P3	*13.8	(1.3)	1/32	釉:オリーブ灰色(7.5Y5/3) 生地:浅黄橙色(10YR8/3)	ロクロナデ、施釉	軟陶 京都産(洛北窯か洛西窯)
203	緑釉陶器	椀	5区	SB5130 P19	[*6.0]	(1.1)	5/12	釉:灰白(より緑)(10Y7/2) 素地:淡黄色(2.5Y8/5)	ロクロナデ、施釉	京都産 削り出し高台
204	土師器	杯	5区	SB5130 P4	*15.0	(2.5)	1/12	橙色(7.5RY7/6)	ナデ	
205	緑釉陶器	皿	5区	SB5130	12.2	(1.6)	1/24	釉:灰オリーブ色(より明るい緑)(7.5Y5/3)	ロクロナデ、施釉	
206	黒色土器	椀か	5区	SB5130 P17	15.9	(1.1)	1/16	灰黄褐色(10YR4/2)	ナデ	
207	須恵器	壺A蓋	5区	SP5182	14.3	(2.5)	1/6	灰色(5Y5/1)	回転ナデ、回転ケズリ	
208	灰釉陶器	皿	5区	SB5130	13.6	(1.7)	1/12	にぶい黄橙色(10YR7/2)	ロクロナデ	
209	須恵器	杯A	5区	SB5140 P13	13.6	3.0	1/10	灰色(5Y6/1)	回転ナデ、ヘラ切り	
210	須恵器	杯B蓋	5区	SP5136	14.7	(2.2)	1/24	灰白色(5Y7/1)	回転ナデ	
211	須恵器	杯	5区	SB5140 P4	12.9	(3.0)	1/8	灰色(5Y6/1)	回転ナデ	
212	須恵器	杯B蓋	5区	SB5140 P9	16.9	(1.9)	1/6	灰色(5Y6/1)	回転ナデ	
213	須恵器	壺	5区	SB5140 P3	22.5	(3.4)	1/8	黄灰色(2.5Y6/1)	回転ナデ	
214	須恵器	杯A	5区	SB5145 P1	14.0	3.2	1/12	黄灰色(2.5Y6/1)	回転ナデ	自然釉:オリーブ灰色(5Y5/3)
215	須恵器	杯B蓋	5区	SB5145 P1	17.8	(1.3)	1/16	灰色(N6/1)	回転ナデ	
216	須恵器	杯B	5区	SB5145 P11	[*9.9]	(1.6)	1/6	灰色(5Y6/1) 自然釉:灰オリーブ色(5Y5/3)	回転ナデ	
217	須恵器	杯	5区	SB5145 P10	18.2	(3.5)	1/8	灰色(N5/1)	回転ナデ	
218	須恵器	杯B蓋	5区	SB5180 P8	(11.0)	(1.8)	-	自然釉:灰オリーブ色(7.5Y4/2)	回転ナデ、回転ケズリ	
219	須恵器	杯B	5区	SB5180 P3	[*10.0]	(2.0)	1/6	黄灰色(2.5Y6/1)	回転ナデ	
220	須恵器	杯B	5区	SB5180 P7	[*8.9]	(1.6)	1/4	灰白色(5Y7/1)	回転ナデ、回転ケズリ	自然釉:灰オリーブ色(5Y5/2)
221	須恵器	杯B蓋	5区	SB5190	11.8	(1.8)	1/3	黄灰色(2.5Y6/1)	回転ナデ、回転ケズリ	
222	須恵器	壺	5区	SA5300 (SP5177)	9.6	5.4	-	灰色(5Y5/1)	回転ナデ	
223	須恵器	壺	5区	SA5155 (SP5174)	17.6	(2.3)	1/16	灰色(N5/)	回転ナデ	
224	須恵器	壺	5区	SA5300 (SP5177)	14.0	(2.9)	12/1	灰色(7.5Y6/1)	回転ナデ、ケズリ	
225	黒色土器	椀	5区	SA5300 (SP5177)	16.2	4.0	1/5	にぶい黄橙色(10YR 7/4)~黒色(N2/1)	ナデ、ミガキ	
226	須恵器	杯A	5区	SA5300 (SP5249)	12.8	3.7	1/12	灰色(N6/)~灰白色(7.5Y7/1)	回転ナデ、糸切り痕	
227	土師器	高杯	5区	SA5300 (SP5177)	<4.7>	(12.2)	-	にぶい黄橙色(10YR7/4)	ヘラによる面取り	
228	緑釉陶器	椀	5区	SP5035	[*6.5]	(1.6)	1/8	素地:灰白色(2.5Y8/2) 釉:オリーブ灰色(7.5Y6/3)	ロクロナデ	軟陶、全面施釉、輪高台(削り出し)、京都産
229	土師器	皿	5区	SP5176	13.8	1.8	1/4	橙色(7.5YR7/6)	指オサエ、ナデ	
230	緑釉陶器	椀か皿	5区	SP5181	[5.7]	(1.0)	底	灰白色(2.5Y8/2) 断面:灰色(N4/)	ロクロナデ、施釉	軟陶 円盤状高台(削り出し) 京都産
231	無釉陶器	椀	5区	SP5186	[4.8]	(1.2)	底	灰黄色(2.5Y7/2)	ロクロナデ、糸切り痕	貼り付け高台
232	土師器	甕	5区	SP5179	19.4	(4.7)	1/8	にぶい黄褐色(10YR5/3)	ナデ、指オサエ、ハケ	
233	須恵器	杯B蓋	5区	SP5275	17.9	2.5	1/8	灰色(5Y6/1)	回転ナデ、回転ケズリ	
234	瓦質土器	羽釜	5区	SP5257	26.2	(5.6)	1/16	オリーブ褐色(2.5Y4/3)~黒褐色(2.5Y3/1)	ナデ、ハケ	
235	土師器	壺	5区	SP5283	18.0	(2.7)	1/20	灰黄褐色(10YR6/2)	ナデ	
236	緑釉陶器	椀	5区	SP5183	[6.3]	(2.0)	1/6	釉:明オリーブ灰白色(5GY7/1) 文様部分:明緑灰色(10GY6/1)	施釉	京都産
237	須恵器	杯B	5区	SH5027	9.4	(3.6)	1/2	灰白色(2.5Y7/1)	回転ナデ	
238	須恵器	杯B	5区	SK5168	15.3	5.0	1/8	灰色(N6/)	回転ナデ	

報告番号	器種				法量		残存率	色調	技法上の特徴(調整)	備考
	種類	器種	地区名	遺構名	口径	器高				
239	須恵器	杯B	5区	SK5203	14.2	3.7	-	灰白色(2.5Y7/1)~灰黄色(2.5Y7/2)	回転ナデ	
240	土師器	杯A	5区	SK5260	16.4	2.1	3/12	橙色(2.5YR6/8)	ナデ、ケズリ、暗文	
241	土師器	甕	5区	SK5260	26.5	(5.8)	2/12	浅黄橙色(10YR8/4)	ナデ、ハケ	
242	土師器	甕	5区	SK5260	14.5	(5.6)	1/8	にぶい黄褐色(10YR5/3)	ヨコナデ、ハケ	
243	須恵器	鍋	5区	SK5260	4.9	5.4	把手	明オリープ灰色(2.5GY7/1)	ナデ、タタキ	
244	須恵器	杯A	5区	SK5260	13.8	3.0	1/12	灰白色(5Y6/1)	回転ナデ	
245	須恵器	杯A	5区	SK5260	13.8	3.7	1/20	灰白色(5Y7/1)	回転ナデ	
246	須恵器	杯A	5区	SK5260	12.6	3.9	3/12	明青灰色(5PB7/1)	回転ナデ、ヘラ切り	
247	須恵器	杯B蓋	5区	SK5260	17.5	(1.8)	1/12	灰黄色(2.5Y6/2) 自然釉:暗灰黄色(2.5Y5/2)	回転ナデ	
248	須恵器	杯B蓋	5区	SK5260	13.6	(0.6)	5/12	青灰色(5B5/1)	回転ナデ	
249	須恵器	杯B	5区	SK5260	13.6	3.9	7/12	灰色(N7/)	回転ナデ、ヘラ切り	
250	須恵器	杯B	5区	SK5260	[*10.3]	(1.5)	1/2	灰白色(5Y7/1)	回転ナデ	
251	須恵器	平瓶	5区	SK5260	10.8	(5.1)	口頸	明オリープ灰色(2.5GY7/1)	回転ナデ	
252	須恵器	壺	5区	SK5260	[*6.4]	(2.3)	3/12	灰色(N5/)	回転ナデ	
253	須恵器	壺	5区	SK5260	<18.0>	(9.3)	2/12	灰色(N7/)	回転ナデ、回転ケズリ、	
254	須恵器	壺	5区	SK5260	(23.5)	(7.8)	1/12	灰黄色(2.5Y6/2) 自然釉:灰オリープ色(7.5Y4/2) 面:灰オリープ色(7.5Y4/2)	回転ナデ	
255	須恵器	壺	5区	SK5260	[*14.3]	(17.7)	3/12	灰白色(7.5Y7/1)	回転ナデ、ヘラケズリ	
256	陶器	壺	5区	SK5260	-	(7.4)	体	オリープ褐色(2.5Y4/3)	タタキ、施釉	
257	須恵器	高杯	5区	SK5260	(8.7)	(2.2)	-	灰色(7.5Y6/1)	回転ナデ	
258	須恵器	鉢F	5区	SK5260	[*9.5]	(5.0)	1/4	黄灰色(2.5Y6/1)	回転ナデ	
259	須恵器	皿	5区	SD5001	[*6.4]	(1.6)	1/6	灰白色(7.5Y7/1)	回転ナデ、回転ケズリ	削り出し高台
260	染付磁器	椀	5区	SR5125	[4.0]	(2.6)	1/4	生地:白 釉:濃い青	施釉	
261	土師器	杯	5区	包含層	15.0	3.6	2/3	橙色(7.5YR6/6)	ナデ、指オサエ	
262	土師器	高杯	5区	包含層	[14.0]	(11.5)	1/6	橙色(ピンク系)(2.5YR7/6)	ヘラによる面取り、ナデ	
263	須恵器	稜椀	5区	1C	15.9	(4.2)	1/3	黄灰色(2.5Y6/1)	回転ナデ	
264	緑釉陶器	鉢	6区	6J	*33.0	(3.2)	1/28	素地:浅黄色(2.5Y7/3)	ロクロナデ、施釉	釉:オリープ灰色(より鮮やかな緑)(10Y4/2) 中国産
265	緑釉陶器	椀	5区	包含層	[*6.8]	(1.8)	5/12	灰白色(5Y8/1)~浅黄橙色(10YR8/3)	ロクロナデ、施釉	京都産 蛇の目高台、釉調:草緑
266	緑釉陶器	椀	5区	6J	[*5.4]	(1.6)	1/8	緑	ロクロナデ、施釉	削り出し輪高台
267	無釉陶器	皿か	5区	包含層	11.7	1.9	1/8	灰黄色(2.5Y7/2)	回転ナデ	
268	白磁	壺	5区	包含層	(6.0)	(2.7)	1/2	素地:灰白色(7.5Y8/1)	施釉	削り出し高台 釉:灰白色(7.5Y7/2)
269	須恵器	杯H蓋	6区	SK6078	13.2	3.7	3/4	灰色(10Y6/1)	回転ナデ、回転ケズリ	
270	土師器	皿	6区	SB6120	9.9	(1.0)	1/20	浅黄橙色(10YR8/3)	ナデ	
271	須恵器	杯H	6区	SB6120	[7.0]	(1.4)	底	灰白色(N7/)	回転ナデ、ヘラ切り	
272	緑釉陶器	椀	6区	SB6120	-	(2.3)	口縁	灰オリープ色(7.5Y5/3)	ロクロナデ	
273	土師器	皿	6区	SB6060 P13	9.5	2.3	1/5	にぶい黄褐色(10YR7/3)	ヨコナデ、指オサエ	
274	土師器	杯	6区	SB6060 P29	[*6.0]	(1.2)	1/5	橙色(7.5YR7/6)	ナデ、ヘラ切り	
275	土師器	甕	6区	SB6060 P16	*16.0	(1.9)	口縁	にぶい黄褐色(10YR6/3)		
276	須恵器	壺	6区	SB6060 P15	-	(4.6)	1/4	灰オリープ色(7.5Y5/2)	回転ナデ	
277	緑釉陶器	椀	6区	SB6060 P16	[*4.0]	(1.2)	1/5	灰オリープ色(SY6/3)	ロクロナデ、糸切り痕	
278	無釉陶器	椀	6区	SB6060 P13	-	(2.9)	口縁	灰白色(5Y7/1)	ロクロナデ	
279	須恵器	壺D	6区	SB6080 P6	12.4	5.8	完形	灰色(N5/)	回転ナデ、回転ケズリ	削り出し高台
280	須恵器	杯B	6区	SB6087 P11	[*11.0]	(1.9)	1/10	灰白色(N7/)	回転ナデ、ヘラ切り	
281	須恵器	壺L	6区	SB6087 P11	8.0	(1.6)	1/5	灰白色(5Y7/1)	回転ナデ	
282	土師器	甕	6区	SB6187 P3	*23.4	(3.4)	1/10	にぶい黄褐色(10YR7/3)	ヨコナデ、ハケ	
283	須恵器	椀	6区	SB6187 P3	13.4	3.4	1/4	灰白色(N7/)	回転ナデ、ヘラ切り	
284	土師器	羽釜	6区	SB6144 P2	*28.0	(2.7)	-	明黄褐色(10YR7/6)	ヨコナデ、ナデ	摂津型
285	土師器	甕	6区	SB6146 P4	14.9	(5.9)	3/12	浅黄色(2.5Y7/3)	ヨコナデ ハケ	
286	土師器	甕	6区	SB6146 P4	14.8	(8.8)	1/2	にぶい黄褐色(10YR7/3)	ヨコナデ、ハケ、指オサエ	
287	須恵器	杯A	6区	SB6146 P4	12.7	3.8	6/12	灰黄色(2.5Y7/2)	回転ナデ、ヘラ切り	

植物園北遺跡・下鴨半木町遺跡発掘調査報告

報告番号	器種				法量		残存率	色調	技法上の特徴(調整)	備考
	種類	器種	地区名	遺構名	口径	器高				
288	須恵器	皿	6区	SB6146 P1	12.3	1.7	1/20	灰色(N5/)	回転ナデ、ヘラ切り	
289	黒色土器	椀	6区	SB6146 P5	[*7.0]	(1.4)	1/5	にぶい黄橙色(10YR7/4)	ナデ、ミガキ	
290	須恵器	壺	6区	SB6146 P4	4.1	(7.5)	3/4	青灰色(5B6/1)	回転ナデ、回転ケズリ	
291	須恵器	壺	6区	SB6146	<17.2>	(7.5)	1/2	灰白色(5Y7/1)	回転ナデ	
292	須恵器	壺	6区	SP6094	[10.0]	(15.3)	5/12	灰色(N7/)	回転ナデ、回転ケズリ	
293	須恵器	壺	6区	SP6094	[10.0]	(11.9)	9/12	灰色(N6~7/)	回転ナデ、回転ケズリ	釉調:オリーブ灰色(10Y5/2)
294	灰釉陶器	椀	6区	SP6092	20.0	4.2	1/12	灰白色(2.5Y7/1)	ロクロナデ	灰釉:灰黄色(2.5Y6/2)
295	須恵器	壺	6区	SP6215	<21.7>	(7.2)	1/6	灰色(7.5Y5/1)	回転ナデ	自然釉:灰オリーブ色(7.5Y4/2)
296	須恵器	壺	6区	SP6201	[7.2]	(5.8)	底	灰白色(2.5Y7/1)	回転ナデ、糸切り	
297	土師器	皿	6区	SP6013	12.9	(1.6)	1/12	橙色(7.5YR7/6)	ヨコナデ	
298	須恵器	皿	6区	SP6269	14.0	2.9	1/12	灰白色(N7/)	回転ナデ、回転ケズリ	削り出し高台 転用硯か
299	須恵器	椀	6区	SP6212	[*7.2]	(2.7)	1/3	灰色(N5/)	回転ナデ	削り出し高台
300	須恵器	鉢	6区	SP6245	28.9	11.2	2/3	灰色(N6/)、灰黄色(2.5Y7/2)	回転ナデ	
301	土師器	羽釜	6区	SP6111	23.5	(7.6)	1/6	にぶい黄橙色(10YR6/4)	ナデ、ハケ、指オサエ	
302	灰釉陶器	椀	6区	SP6118	10.0	(2.1)	1/10	灰白色(2.5Y7/1)~にぶい黄色(2.5Y6/3)	ロクロナデ、施釉	
303	瓦器	椀	6区	SP6171	14.1	(2.9)	1/8	にぶい黄橙色(10YR7/4)	ナデ、指オサエ	
304	陶器	灯明皿	6区	SB6200 P7	8.3	3.4	1/8	灰白色(5Y7/1)、浅黄色(2.5Y7/3)	ロクロナデ、施釉	
305	無釉陶器	椀	6区	SB6200 P5	[*7.5]	(3.8)	1/2	灰黄色(2.5Y7/2) (ススのある部分:灰黄褐色(10YR5/2))	ロクロナデ、ミガキ、糸切り痕	
306	土師器	甕	6区	SK6078	14.0	(4.2)	1/12	橙色(2.5Y7/6)~にぶい橙色(5YR6/4)	ヨコナデ	
307	土師器	甕	6区	SK6078	15.9	(5.7)	1/20	灰黄褐色(10YR4/2)	ヨコナデ、タタキ	
308	土師器	甕	6区	SK6078	21.1	(6.5)	1/12	にぶい黄褐色(10YR4/3)	タタキ、ナデ	
309	須恵器	杯A	6区	SK6078	13.2	3.6	1/4	灰白色(7.5Y7/1)	回転ナデ、糸切り痕	
310	須恵器	椀	6区	SK6078	13.6	3.5	1/12	灰白色(5Y7/1)~灰色(5Y6/1)	か移転ナデ、ヘラ切り	
311	須恵器	皿	6区	SK6078	15.7	(2.7)	1/6	灰色(7.5Y6/1)	回転ナデ	
312	須恵器	椀	6区	SK6078	19.9	(5.6)	1/12	灰色(N5/1)	回転ナデ	
313	須恵器	壺	6区	SK6078	(24.2)	(4.9)	1/8	灰色(N5/1)+自然釉(オリーブ灰色(7.5Y3/2))	回転ナデ	耳状把手
314	緑釉陶器	皿	6区	SK6078	[6.8]	(1.3)	1/4	素地:淡黄色(2.5Y8/3) 釉:灰オリーブ色(より緑色)(7.5Y6/3)	施釉	削り出し高台 軟~硬・全面施釉 京都産
315	緑釉陶器	椀	6区	SK6005	[*7.7]	(1.9)	1/4	生地:浅黄橙色(10YR8/3)~褐灰色(10YR6/1)	ナデ、ヘラ切り	京都産 硬陶 全面施釉 輪高台 釉:鮮やかな薄緑色
316	緑釉陶器	椀	6区	SK6005	[*6.2]	(1.1)	1/3	黄緑	ロクロナデ、施釉	
317	緑釉陶器	椀	6区	SK6005	[*6.5]	(1.8)	1/4	灰白色(2.5Y8/2)	ロクロナデ、施釉	軟陶 円盤状高台 京都産
318	白磁	壺	6区	SK6005	-	(8.0)	体	素地:灰白色(7.5Y7/1)	施釉	片の長さ8.0×幅7.0 釉: 灰オリーブ色(7.5Y6/2)
319	青磁	椀	6区	SK6006	[*5.8]	(1.9)	1/2	素地:灰白色(5Y7/1)	施釉	釉:オリーブ灰色(10Y5/2)
320	陶器	天目茶椀	6区	SK6006	(7.8)	(2.1)	底	素地:灰黄色(2.5Y7/2)	ロクロナデ、ロクロケズリ、 施釉	瀬戸美濃産 削り出し高台 釉:黒色(N2/1)
321	陶磁器	椀	6区	SK6006	[*5.0]	(1.9)	1/4	素地:灰白色(2.5Y8/2)	施釉	削り出し高台 釉:灰黄色(2.5Y6/2)
322	青磁	皿	6区	SK6126	[*4.0]	(1.0)	1/4	素地:灰白色(7.5Y8/1)	施釉	釉:灰オリーブ色(7.5Y6/2)
323	白磁	椀	6区	SK6038	[*6.0]	(1.8)	1/6	灰白色(5Y7/1)	施釉	内側自然釉:灰オリーブ色(7.5Y6/2)
324	灰釉陶器	椀か皿	6区	SK6169	[*6.0]	(1.4)	1/4	露胎:灰白色(5Y8/1)	ロクロナデ、施釉	釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)
325	無釉陶器	皿	6区	SK6098	12.8	3.0	1/6	灰白色(N7/)	回転ナデ、ミガキ	削り出し高台
326	須恵器	壺	6区	SK6165	[*8.0]	(4.0)	1/4	灰白色(5Y8/1)	回転ナデ、回転ケズリ	削り出し高台 自然釉: 灰オリーブ色(7.5Y5/2)
327	白磁	椀	6区	SD6135	[*6.2]	(2.3)	底	明オリーブ灰色(2.5GY7/1)	施釉	削り出し高台
328	須恵器	杯	6区	包含層	13.6	(2.8)	1/4	灰色(N6/)	回転ナデ	

報告番号	器種				法量		残存率	色調	技法上の特徴(調整)	備考
	種類	器種	地区名	遺構名	口径	器高				
329	緑釉陶器	椀か皿	6区	包含層	[*5.5]	(1.1)	1/4	淡黄色(2.5Y8/3)	ロクロナデ	軟陶・京都産(洛北窯) 釉は全て剥離 削り出し高台
330	青磁	椀	6区	包含層	13.9	(3.7)	1/12	素地:灰白色(2.5GY8/1)	施釉	中国産(龍泉窯) 釉:オリープ灰色(2.5GY6/1)
331	青磁	椀	6区	包含層	[*3.9]	(2.2)	1/2	素地:灰白色(N7/)	施釉	中国産(龍泉窯) 削り出し高台 中国鎔蓮弁文 釉:オリープ灰色(10Y6/2)
332	須恵器	鉢	6区	包含層	22.7	(3.3)	1/12	灰色(N6/)	回転ナデ	
333	須恵器	鉢	6区	包含層	21.9	(5.6)	1/14	灰色(N6/) 自然釉:灰色(10Y4/1)	回転ナデ	
334	土師器	甕	7区	SH7020 埋土	16.4	(7.5)	1/6	にぶい褐色(7.5YR5/3)~灰褐色(7.5YR4/2)	ヨコナデ、ナデ、ハケ	工具痕あり
335	須恵器	甕	7区	SH7020	*40.0	(6.6)	1/12	灰色(N6/)	回転ナデ、沈線、刺突文	
336	土師器	鍋か甕	7区	SH7030	20.7	(7.6)	1/17	にぶい黄褐色(10YR6/3)	ハケ、指ナデ、ナデ	
337	須恵器	杯A	7区	SH7030	11.0	(3.1)	1/4	灰色(N6~7/)	回転ナデ、回転ケズリ	
338	須恵器	杯A	7区	SH7030 竈南裾壁の東	(11.3)	(3.7)	完形	青灰(5PB6/1)	回転ナデ、ヘラ切り	
339	須恵器	杯A	7区	SH7030	11.5~11.6	3.0	7/12	灰白色(N7/)	回転ナデ、回転ケズリ	
340	須恵器	杯A	7区	SH7030	14.8	4.0	完形	灰色(N6/)	回転ナデ、回転ケズリ	
341	須恵器	杯B蓋	7区	SH7030 K1	15.8	2.2	1/6	灰色(N5/)	回転ナデ、回転ケズリ	
342	須恵器	杯B	7区	SK7029	14.7	4.3~4.5	6/12	灰白色(N7/)	回転ナデ、ヘラ切り	
343	土師器	杯A	7区	SB7150	13.6	(2.8)	1/36	橙色:5YR6/6	ナデ	
344	須恵器	杯B	7区	SB7150	[*9.0]	(2.5)	1/3	灰色(N7/)	回転ナデ、回転ケズリ	
345	須恵器	杯B蓋	7区	SB7160	7.7	(2.1)	-	灰白色(N7/1)	回転ナデ、回転ケズリ	
346	須恵器	壺	7区	SB7160	11.2	(2.4)	1/10	灰色(5Y6/1)	回転ナデ	
347	緑釉陶器	皿	7区	SB7160	[7.0]	(1.6)	1/4	灰白色(2.5Y8/2)	ケズリ、部分的に釉が残る	削り出し高台、軟質 京都産
348	緑釉陶器	椀	7区	SB7160	20.4	(3.4)	1/10	素地:灰白色(10Y7/1)	ロクロナデ、施釉	京都産 硬陶 釉:オリープ灰色(10Y6/2)
349	緑釉陶器	皿	7区	SP7094	14.3	2.6	1/2	灰白色(10Y7/1)~明オリープ灰色(2.5GY7/1)	ロクロナデ、ミガキ、施釉	削り出し輪高台、硬陶・全面施釉 京都産
350	須恵器	杯A	7区	包含層	12.3	4.0	ほぼ完形	橙色(7.5YR7/6)~浅黄色(2.5Y7/3)	回転ナデ、回転ケズリ	内外面とも摩滅激しい
351	須恵器	杯B	7区	包含層	16.5	3.7	1/4	灰色(N5/)	回転ナデ、ヘラ切り	
352	須恵器	壺	7区	SP7092	9.0	(5.7)	1/2	灰白色(7.5Y8/1)	回転ナデ	
353	土師器	甕	7区	SB7160 (SP7133)	*28.4	(3.0)	1/14	褐灰色(7.5YR4/1)~にぶい褐色(7.5YR6/3)	ヨコナデ	
354	須恵器	杯A	7区	SP7025	13.8	4.0	1/4	淡黄色(2.5Y8/4)~黄灰色(2.5Y6/1)	摩滅が著しい	
355	須恵器	杯A	7区	SP7025	14.2	3.3	1/2	灰白色(2.5Y7/1)	回転ナデ、回転ケズリ	
356	須恵器	杯B	7区	SP7025	(13.6)	3.6	4/12	灰白色(N7/)	回転ナデ、回転ケズリ	
357	土師器	鍋	7区	SP7025	24.0	4.9	1/15	にぶい黄褐色(10YR7/4)	ナデ	
358	須恵器	壺	7区	SK7010	[11.2]	(1.8)	1/3	灰色(N6/)	回転ナデ	
359	須恵器	杯B蓋	7区	SK7029	17.2	(2.5)	1/3	灰色(5Y6/1)	回転ナデ、回転ケズリ	
360	須恵器	杯A	7区	SK7029	14.1	3.2	1/2	灰白色(5Y7/1)	回転ナデ、回転ケズリ	
361	須恵器	杯A	7区	SK7029	12.9	3.1	1/2	灰色(N5/)	回転ナデ	
362	土師器	杯B	7区	SK7177	(14.6)	(3.0)	4/12	明赤褐色(5YR5/8)	ナデ	放射暗文あり
363	土師器	杯	7区	SK7177	(不明)	3.1	破片	橙色(5YR7/6)	ナデ	内面摩滅
364	土師器	杯	7区	SK7177	(13.6)	3.7	5/12	灰白色(2.5Y8/2)	ナデ、指オサエ	内面赤色顔料付着
365	土師器	皿	7区	SK7177	22.8	2.1	5/12	橙色(5YR6/8)	ナデ ケズリ	
366	土師器	皿	7区	SK7177	(17.8)	(2.6)	1/12	橙色(7.5YR6/8)	ナデ、指オサエ	全体に摩滅気味
367	土師器	高杯	7区	SK7177	(25.3)	(2.9)	2/12	橙色(2.5YR6/8)	ナデ、ケズリ	内外面とも摩滅著しい
368	土師器	高杯	7区	SK7177	30.0	2.5	1/3	明赤褐色(5YR5/8)	ナデ、ミガキ	
369	土師器	高杯	7区	SK7177	-	(8.0)	脚	明赤褐色(5YR5/8)	ケズリ、ハケ	10面に面取り
370	土師器	甕	7区	SK7177	13.4	(7.0)	体	明赤褐色(5YR5/8)		把手付き
371	土師器	甕	7区	SK7177	18.8	6.1	1/2	にぶい橙色(7.5YR6/4)	ナデ	粘土紐接合痕 剥離痕
372	土師器	甕	7区	SK7177	16.8	(7.5)	1/2	灰褐色(7.5YR4/2)	ナデ、ハケ	
373	土師器	甕	7区	SK7177	17.6	(3.7)	1/4	にぶい橙色(5YR6/4)	ナデ、ハケ	
374	土師器	片口鉢	7区	SK7177	(18.5)	(10.9)	4/12	にぶい橙色(5YR6/3)	タタキ、ハケ、指オサエ	

植物園北遺跡・下鴨半木町遺跡発掘調査報告

報告番号	器 種				法量		残存率	色調	技法上の特徴（調整）	備 考
	種類	器種	地区名	遺構名	口径	器高				
375	須恵器	杯 A	7 区	SK7177	(12.1)	(3.4)	2/12	灰白色 (N7/)	回転ナデ、ヘラ切り	
376	須恵器	杯 A	7 区	SK7177	23.9	4.2	1/12	灰白色 (N7/)	回転ナデ、ヘラ切り	
377	須恵器	杯 A	7 区	SK7177	14.3	3.5	1/2	灰白色 (2.5Y7/1)	回転ナデ、ヘラ切り	
378	須恵器	杯 A	7 区	SK7177	(15.6)	3.8	2/12	灰白色 (N7/)	回転ナデ、ヘラ切り	
379	須恵器	杯 A	7 区	SK7177	16.0	(3.8)	1/24	灰白色 (5Y7/1)	回転ナデ	内面研磨 転用硯
380	須恵器	杯 A	7 区	SK7177	(12.8)	3.9	3/12	灰白色 (N7/)	回転ナデ、ヘラ切り	
381	須恵器	杯 A	7 区	SK7177	12.9	3.6	3/12	灰白色 (2.5Y7/1)	回転ナデ、ヘラ切り	
382	須恵器	杯 A	7 区	SK7177	12.8	2.9	-	灰色 (N6/)	回転ナデ、ヘラ切り	
383	須恵器	杯 B 蓋	7 区	SK7177	-	(1.7)	つまみ	灰色 (7.5Y6/1)	回転ナデ	
384	須恵器	杯 B 蓋	7 区	SK7177	10.7	2.5	1/8	灰オリーブ (自然釉か) (5Y)	回転ナデ	外面全体に灰が付着
385	須恵器	杯 B 蓋	7 区	SK7177	14.6	2.7	1/4	灰色 (N6/1)	回転ナデ、ヘラ切り	
386	須恵器	杯 B 蓋	7 区	SK7177	14.9	2.5	1/6	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	回転ナデ	
387	須恵器	杯 B 蓋	7 区	SK7177	15.6	(2.3)	1/12	灰白色 (5Y7/1)	回転ナデ、ヘラ切り	
388	須恵器	杯 B 蓋	7 区	SK7177		(2.1)	1/5	灰白色 (2.5Y8/2)	回転ナデ、摩滅激しい	
389	須恵器	杯 B 蓋	7 区	SK7177	(15.5)	0.7	3/12	灰白色 (N7/)	回転ナデ、ヘラ切り	
390	須恵器	杯 B 蓋	7 区	SK7177	18.7	(1.4)	1/10	灰色 (5Y5/1)	回転ナデ	
391	須恵器	杯 B 蓋	7 区	SK7177	(19.9)	(0.9)	3/12	灰白色 (N7/)	回転ナデ、ヘラ切り	
392	須恵器	杯 B 蓋	7 区	SK7177	(19.5)	(1.7)	4/12	灰白色 (N7/)	回転ナデ、回転ケズリ	
393	須恵器	杯 B	7 区	SK7177	11.0	4.0	3/5	灰色 (N6/)	回転ナデ、ヘラ切り	
394	須恵器	杯 B	7 区	SK7177	12.2	3.3	1/2	灰色 (N6/)	回転ナデ	
395	須恵器	杯 B	7 区	SK7177	12.6	3.8	1/8	灰白色 (N8 ~ 7)	回転ナデ、ヘラ切り	
396	須恵器	杯 B	7 区	SK7177	*12.5	4.3	1/8	灰色 (N6/)	回転ナデ	
397	須恵器	杯 B	7 区	SK7177	13.1	9.4	1/4	灰白色 (N7/)	回転ナデ	
398	須恵器	杯 B	7 区	SK7177	14.0	4.7	1/2	灰白色 (N7/)	回転ナデ、ヘラ切り	
399	須恵器	杯 B	7 区	SK7177	13.8	3.8	1/18	黄灰色 (2.5Y6/1)	回転ナデ	
400	須恵器	杯 B	7 区	SK7177	14.8	3.9	1/8	灰色 (N6/)	回転ナデ、ヘラ切り後ナデ	
401	須恵器	杯 B	7 区	SK7177	15.0	5.6	完形	灰白色 (5Y7/1)	回転ナデ	
402	須恵器	杯 B	7 区	SK7177	15.5	3.8	5/6	灰白色 (N7/) ~ 灰色 (N6/)	回転ナデ、ヘラ切り	
403	須恵器	杯 B	7 区	SK7177	16.7	4.9	完形	灰色 (N5/1)	回転ナデ、ヘラ切り	
404	須恵器	杯 B	7 区	SK7177	[9.7]	1.7	1/2	灰色 (5Y6/1)	回転ナデ、ヘラ切り	
405	須恵器	杯 B	7 区	SK7177	16.4	6.6	1/2	にふい赤褐色 (5YR4/3)		底面：灰黄色 (2.5Y7/2)
406	須恵器	杯 B	7 区	SK7177	16.0	4.8	1/4	灰色 (5Y4/1) ~ 灰白色 (N7/)	回転ナデ	
407	須恵器	杯 B	7 区	SK7177	17.8	5.1	1/12	灰色 (N5/)	回転ナデ	褐色：(10YR4/4)
408	須恵器	杯 B	7 区	SK7177	17.8	4.8	1/12	灰色 (N4/1)	回転ナデ	
409	須恵器	杯 B	7 区	SK7177	20.1	5.2	1/2	灰色 (6/1) 自然釉：(7.5Y5/1)	回転ナデ、ヘラ切り	一部に灰が付着
410	須恵器	皿 B 蓋	7 区	SK7177	22.0	(1.3)	1/8	灰白色 (5Y8/1)	回転ナデ、ヘラ切り	
411	須恵器	皿 B 蓋	7 区	SK7177	(28.3)	(2.7)	2/12	灰白色 (N7/)	回転ナデ、ヘラ切り	
412	須恵器	皿 C	7 区	SK7177	*18.9	2.4	1/12	明オリーブ灰色 (2.5GY7)	回転ナデ、ヘラ切り後ナデ	
413	須恵器	皿 C	7 区	SK7177	19.2	2.1	1/12	灰白色 (2.5Y7/1)	回転ナデ、ヘラ切り	
414	須恵器	壺 A 蓋	7 区	SK7177	(14.6)	2.5	1/12	灰白色 (2.5Y7/1)	回転ナデ	
415	須恵器	壺 A	7 区	SK7177	11.7	13.0	2/3	灰色 (5Y6/1) 一部自然釉：オリーブ灰色 (10Y4/2)	回転ナデ (重ね焼痕跡あり)	外面に所々灰が付着する (一部自然釉)
416	須恵器	壺	7 区	SK7177	10.7	11.8	完形	灰白色 (N7/) ~ 淡黄色 (2.5 8/3)	回転ナデ、ヘラ切り	
417	須恵器	壺	7 区	SK7177	[4.0]	8.4	2/3	灰色 (N6/1 ~ 5/1)	ロクロナデ、糸切り痕	
418	須恵器	壺	7 区	SK7177	7.2	19.8	1/2	灰色 (5Y7/1)	ロクロナデ、ヘラ切り	
419	須恵器	壺	7 区	SK7177	5.0	(13.3)	体	灰白色 (N7/)	回転ナデ	
420	須恵器	壺	7 区	SK7177	[7.8]	(12.3)	2/3	灰色 (N6/1)	回転ナデ	
421	須恵器	壺	7 区	SK7177	[9.7]	8.3	1/3	黄灰色 (2.5Y5/1)	回転ナデ、回転ケズリ	
422	須恵器	壺	7 区	SK7177	[10.0]	6.6	底	灰色 (N5/)	回転ナデ、回転ケズリ	
423	須恵器	壺	7 区	SK7177	[12.8]	(9.7)	1/2	灰色 (N5/)	回転ナデ、ヘラ切り、ナデ	内面に灰付着
424	須恵器	壺か稜椀	7 区	SK7177	[7.1]	(2.9)	底	灰色 (N6/)	回転ナデ、回転ケズリ	内面研磨 転用硯か

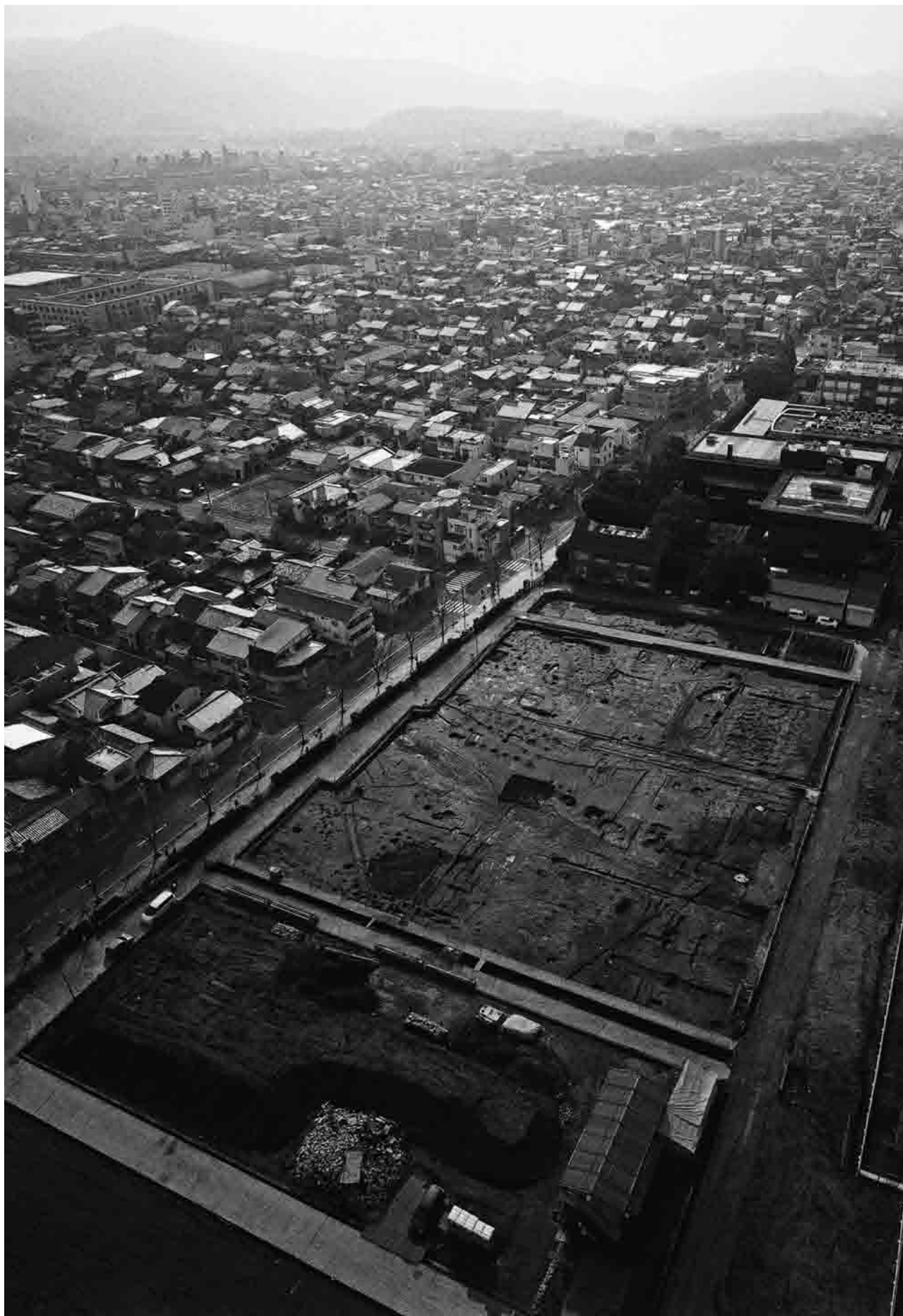
報告番号	器種				法量		残存率	色調	技法上の特徴(調整)	備考
	種類	器種	地区名	遺構名	口径	器高				
425	須恵器	壺	7区	SK7177	(11.5)	(11.7)	1/2	灰色(5Y6/1)	回転ナデ、回転ケズリ、指オサエ	
426	初期灰釉陶器	壺	7区	SK7177	21.7	15.8	1/4	黒褐色(10YR3/2) 断面:灰白色(2.5Y7/1) 釉調:オリーブ灰色(10Y4/2~10Y5/2)	回転ナデ、回転ケズリ	東海産(猿投窯)初期灰釉か
427	須恵器	壺	7区	SK7177	(20.1)	(10.6)	5/12	灰白色(N7/)	回転ナデ	
428	須恵器	壺	7区	SK7177	(23.2)	(10.4)	体	灰白色(5Y8/1)	回転ナデ	摩滅著しい
429	須恵器	平瓶	7区	SK7177	[*12.0]	(7.8)	1/4	灰白色(7.5Y7/1)	回転ナデ	
430	須恵器	片口鉢	7区	SK7177	23.0	(11.3)	1/2	灰白色(5Y7/1)	回転ナデ	
431	須恵器	鉢	7区	SK7177	23.1	17.5	1/4	灰色(N6/)~にぶい褐色(7.5YR6/3)	回転ナデ、回転ケズリ	
432	須恵器	片口鉢	7区	SK7177	30.9	12.4	1/3	外面~内面口縁部:灰白色(N7/) 内面口縁部以外:灰白色(N8)	回転ナデ、回転ケズリ、ヘラ切り	
433	須恵器	甕	7区	SK7177	(23.8)	(4.7)	-	灰色(N5/) 断面:明褐色(7.5YR7/1)	回転ナデ	
434	須恵器	甕	7区	SK7177	20.8	(6.2)	1/4	灰色(N5/1)	回転ナデ、タタキ	
435	須恵器	甕	7区	SK7177	(19.2)	(6.7)	3/12	灰白色(N7/)	回転ナデ、タタキ、カキ目	
436	須恵器	甕	7区	SK7177	25.8	(5.9)	1/12	灰白色(2.5Y7/1)	回転ナデ、タタキ、カキ目(灰が付着)	
437	須恵器	甕	7区	SK7177	38.5	(2.6)	1/8	灰色(5Y6/1)	回転ナデ、波状文	
438	須恵器	甕	7区	SK7177	27.5	(31.0)	12/12	灰色(N5/1)	回転ナデ、タタキ	
439	須恵器	甕	7区	SK7177	(14~14.7)	(12.3)	11/12	灰色(5Y6)	回転ナデ、平行タタキ、ケズリ	
440	須恵器	甕	7区	SK7177	60.3	(53.1)	-	黄灰色(2.5Y6/1)	タタキ、ナデ	
441	無釉陶器	椀	7区	SK7177	(21.1)	6.1	3/12	灰白色(N7/)	回転ナデ、ナデ	削り出し高台
442	緑釉陶器	皿	7区	SK7177	(6.0)	(1.0)	2/3	オリーブ色(5Y6/6)	ロクロナデ、施釉	削り出し高台、全体に釉付着(黄緑色) 軟陶・全面施釉・京都産(洛北窯)トチン痕あり
443	黒色土器	椀	7区	SK7177	17.0	3.8	1/5	明褐色(7.5YR5/6)	ナデ	
444	製塩土器	-	7区	SK7177	*13.2	(8.8)	2/12	橙色(5YR6/8)	内外面指オサエ	
445	製塩土器	-	7区	SK7177	不明	(3.9)	1/12		内外面指オサエ	
446	製塩土器	-	7区	SK7177	不明	(8.0)	2/12	明赤褐色(5YR5/8)	内外面指オサエ	
447	土師器	皿	8区	SR8001	8.0	(1.3)	1/16	にぶい黄橙色(10YR7/3)	ナデ	
448	土師器	皿	8区	SR8001	10.0	(1.7)	1/8	にぶい黄橙色(10YR7/3)	ナデ	
449	土師器	皿	8区	SR8001	12.0	(2.8)	1/12	にぶい橙色(7.5YR7/4)	ナデ	
450	土師器	皿	8区	SR8001	11.6	(2.3)	1/8	にぶい黄橙色(10YR7/4)	ナデ	
451	須恵器	皿	8区	SR8001	[*10.0]	(2.2)	1/4	にぶい黄橙色(10YR6/4)	回転ナデ	
452	須恵器	皿	8区	包含層	[*9.0]	(1.6)	1/4	灰黄色(2.5Y7/2)	回転ナデ	
453	須恵器	甕	8区	包含層	*19.9	(3.0)	1/20	にぶい灰色(N6/1)	回転ナデ	
454	土師器	皿	8区	SR8001	8.7	(0.8)	1/8	灰白色(2.5Y8/2)	ナデ、指オサエ	
455	土師器	皿	9区	SX9002	9.0	(1.1)	1/20	にぶい黄橙色(10YR6/4)	ナデ	
456	土師器	皿	9区	SX9002	11.0	(1.7)	1/8	にぶい橙色(7.5YR7/4)	ナデ	
457	須恵器	杯身	9区	包含層	10.2	(2.3)	1/8	灰黄色(2.5Y6/2)	回転ナデ	
458	土師器	皿	9区	包含層	9.0	(1.7)	1/8	にぶい黄橙色(10YR7/3)	ナデ	

※技法上の特徴は、おもに外面調整を対象とする
口径欄の記号 * : 推定復元径、() : 復元径、[] : 底部
< > : 体部最大径、その他

※器高欄の記号 () : 残存高、[] : 破片の長さ

※小数点第2位を四捨五入、第1位で表示
※ / : 計測不能、- : 該当部位なし

圖 版



調査地全景(空中写真 北西から)



(1) 調査地遠景(空中写真 北西から)



(2) 1・2区全景(空中写真 南から)



(1) 2区全景(空中写真 北から)



(2) 6・7区全景(空中写真 南から)



(1) 3～7区全景(空中写真 上が西)



(2) 5～7区全景(空中写真 南西から)



(1) 5～7区全景(空中写真 北西から)



(2) 5～7区全景(空中写真 西から)



(1) 5～7区全景(空中写真 北から)



(2) 5・6・8区全景(空中写真 南から)



(1) 1区(右上)全景(空中写真 上が西)



(2) 2区全景(空中写真 上が北)



(1) 1区全景(空中写真 上が西)



(2) 1区遺構群(南から)



(1) 1区調査前状況(南西から)



(2) 1区南側・南壁(北から)



(3) 1区南半部遺構群(北から)



(1) 1区南部建物跡群(南から)



(2) 1区掘立柱建物 S B 1050・
1070(東から)



(3) 1区掘立柱建物 S B 1050
柱穴 P 3・S B 1070柱穴 P 2
(東から)



(1) 2区全景(空中写真 上が南)



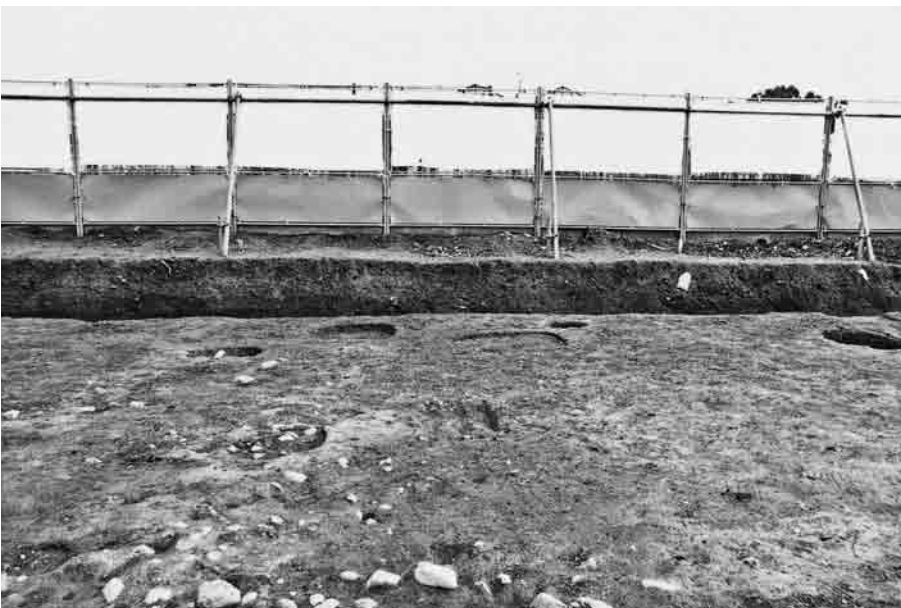
(2) 2区遺構群(空中写真 上が南)



(1) 2区調査前状況(南西から)



(2) 2区南西部砂礫面(北東から)



(3) 2区南壁(北から)



(1) 2区遺構群(西から)



(2) 2区遺構群(東から)



(3) 2区東半部遺構群(西から)



(1) 2区竪穴建物 S H2005(北から)



(2) 2区竪穴建物 S H2005柱穴 P 1
(南から)



(3) 2区竪穴建物 S H2005柱穴 P 8
(南から)



(1) 2区東半部遺構群(東から)



(2) 2区掘立柱建物 S B 2100・2110
(東から)



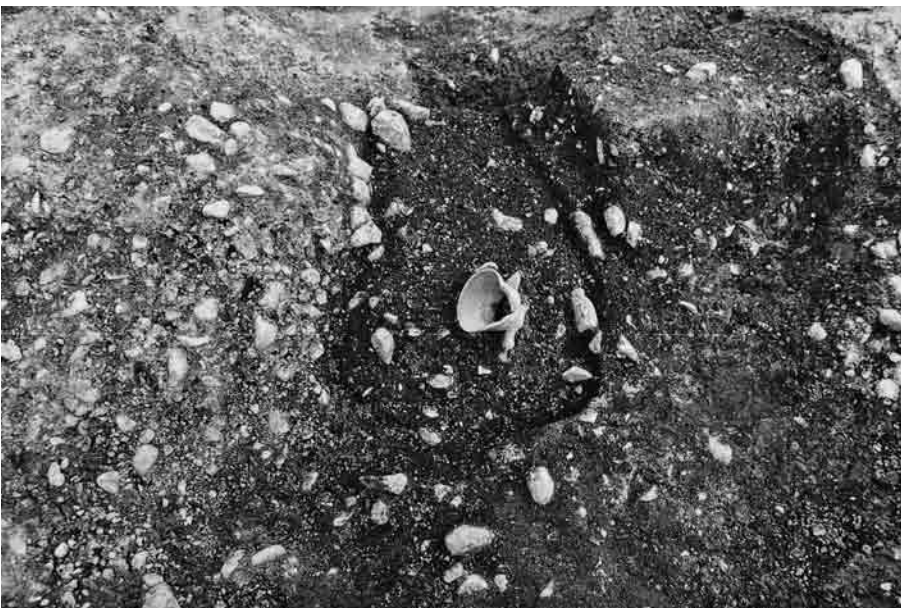
(3) 2区掘立柱建物 S B 2100
柱穴 P 2 (北から)



(1) 2区土坑S K2070上層(北から)



(2) 2区土坑S K2070(南から)



(3) 2区土坑S K2157(西から)



(1) 2区溝 S D 2001・2002・2003
(北西から)



(2) 2区溝 S D 2001断面(南東から)



(3) 2区土坑 S K 2011(南東から)



(1) 3区全景(空中写真 上が北)



(2) 4区全景(空中写真 上が北)



(1) 3区遺構群(西から)



(2) 3区溝 S D3007・3002
(西から)



(3) 3区溝 S D3007(南東から)



(1) 3区掘立柱建物 S B3010
(南から)



(2) 3区竪穴建物 S H3015
掘削状況(北西から)



(3) 3区竪穴建物 S H3015
(北西から)

(1) 3区竪穴建物 S H3015 竈
(北西から)



(2) 3区竪穴建物 S H3015 竈
完掘状況(西から)

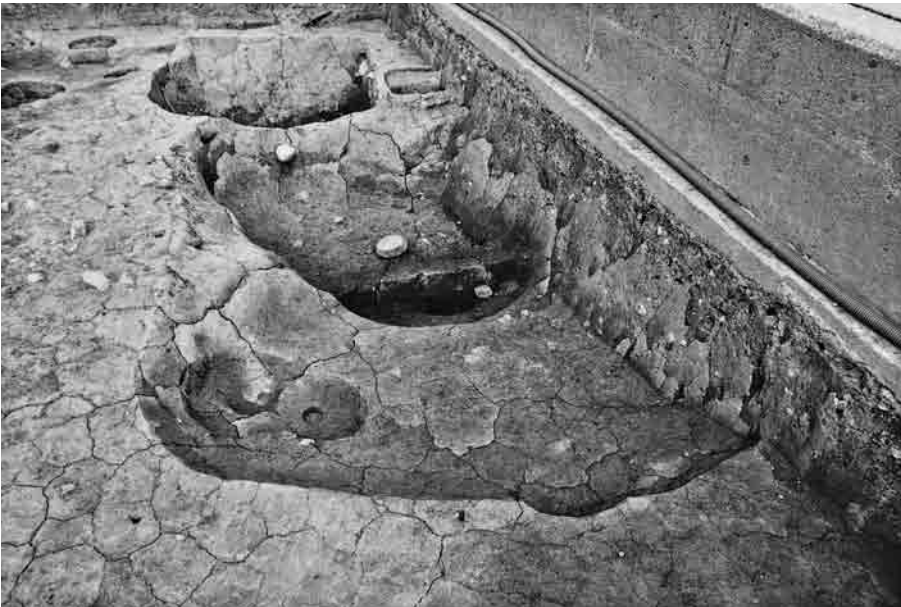


(3) 3区竪穴建物 S H3015 柱穴 P 3
(南から)





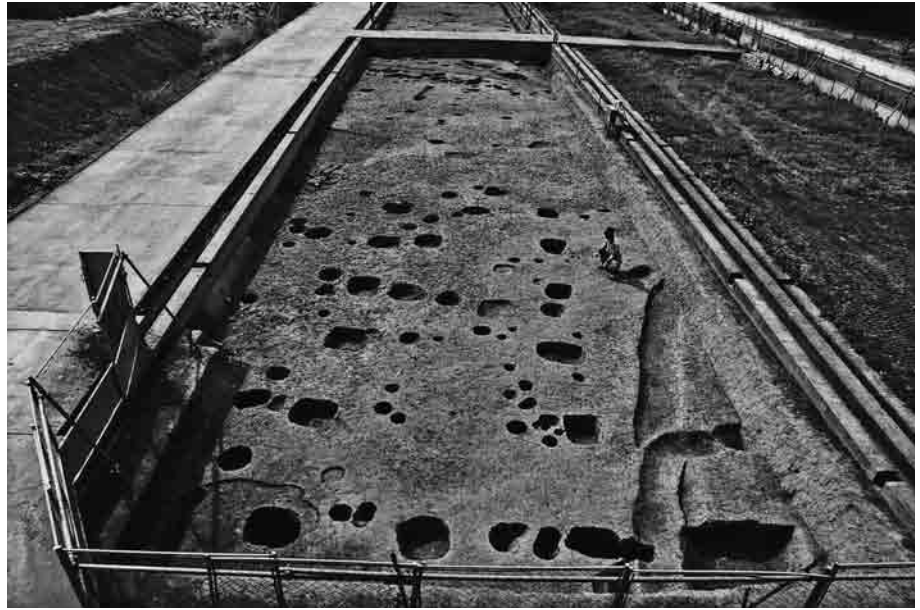
(1) 3区竪穴建物 S H3015
焼土坑 K 1 (北西から)



(2) 3区竪穴建物 S H3016(南から)



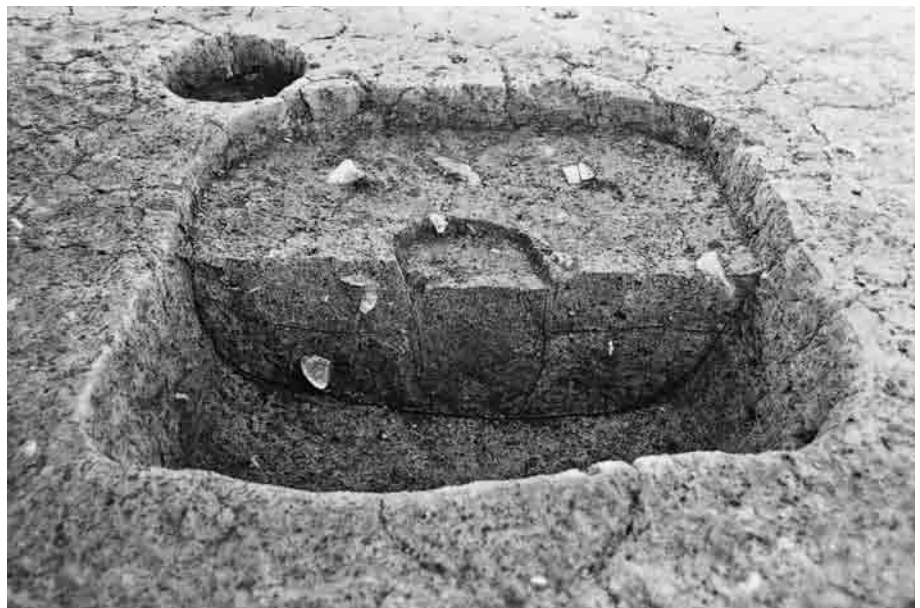
(3) 3区竪穴建物 S H3016
下層出土土器141(南から)



(1) 4区全景(東から)



(2) 4区掘立柱建物 S B 4030・
4010・溝 S D 4045(北から)



(3) 4区掘立柱建物 S B 4030
柱穴 P 5(東から)



(1) 4区掘立柱建物 S B4010
柱穴 P 2 (南から)



(2) 4区竪穴建物 S H4060
(南西から)



(3) 4区竪穴建物 S H4060 竈
(南西から)



(1) 4区竪穴建物 S H4100
(南東から)



(2) 4区溝 S D4045・4027(南から)



(3) 4区溝 S D4045出土土器
(南東から)



(1) 4区西部遺構検出状況(東から)



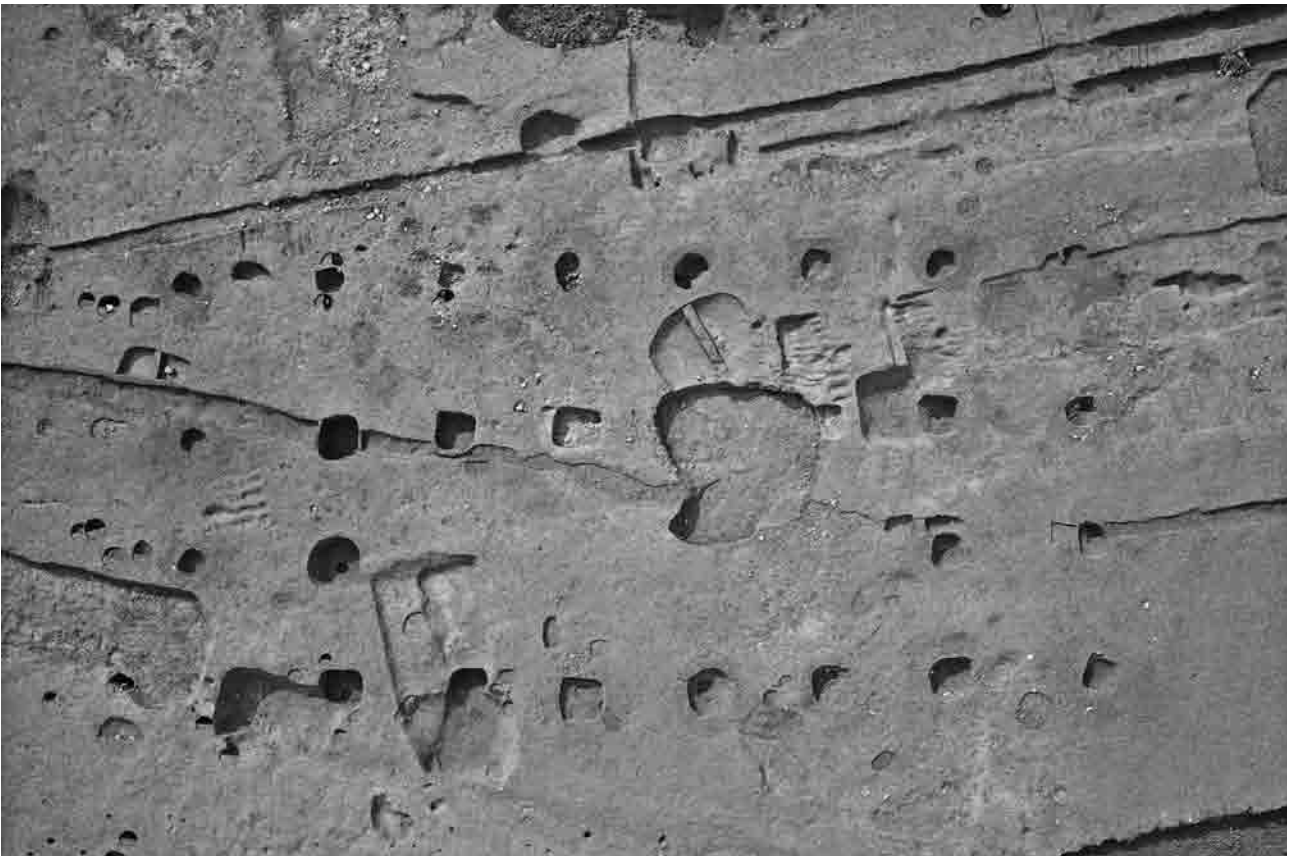
(2) 4区掘立柱建物 S B 4090・
溝 S D 4071(東から)



(3) 4区土坑 S K 4001(南から)



(1) 5・6区(空中写真 上が南)



(2) 5区掘立柱建物 S B 5130(空中写真 上が南)



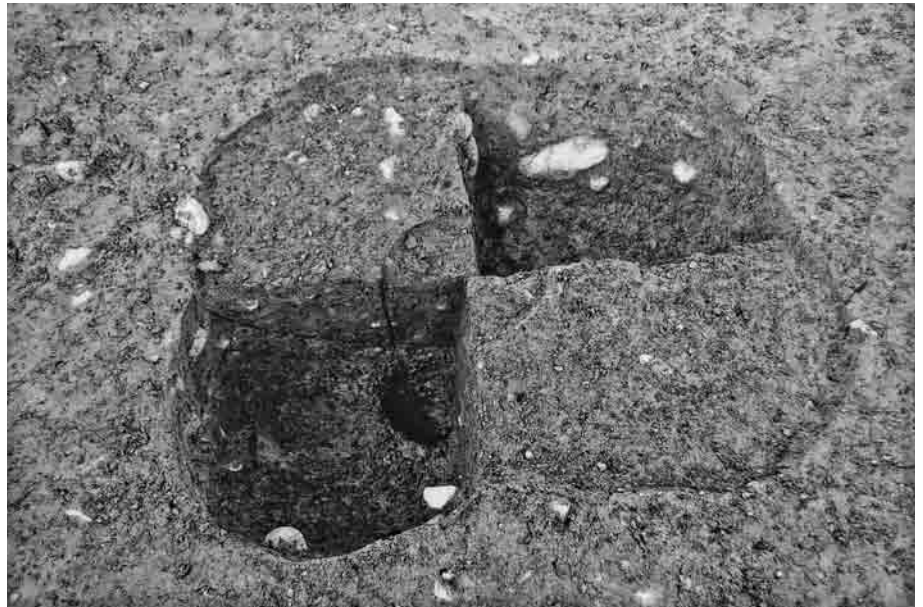
(1) 5区東半部掘立柱建物 S B5130周辺(南から)



(2) 5区掘立柱建物 S B5130人物配置(南から)



(1) 5区掘立柱建物 S B 5130
柱穴 P 1



(2) 5区掘立柱建物 S B 5130
柱穴 P 10



(3) 5区掘立柱建物 S B 5130
柱穴 P 11



(1) 5区掘立柱建物 S B5130
柱穴 P22



(2) 5区掘立柱建物 S B5130
柱穴 P20



(3) 5区掘立柱建物 S B5130
柱穴 P19



(1) 5区掘立柱建物 S B 5140・5145
(南から)



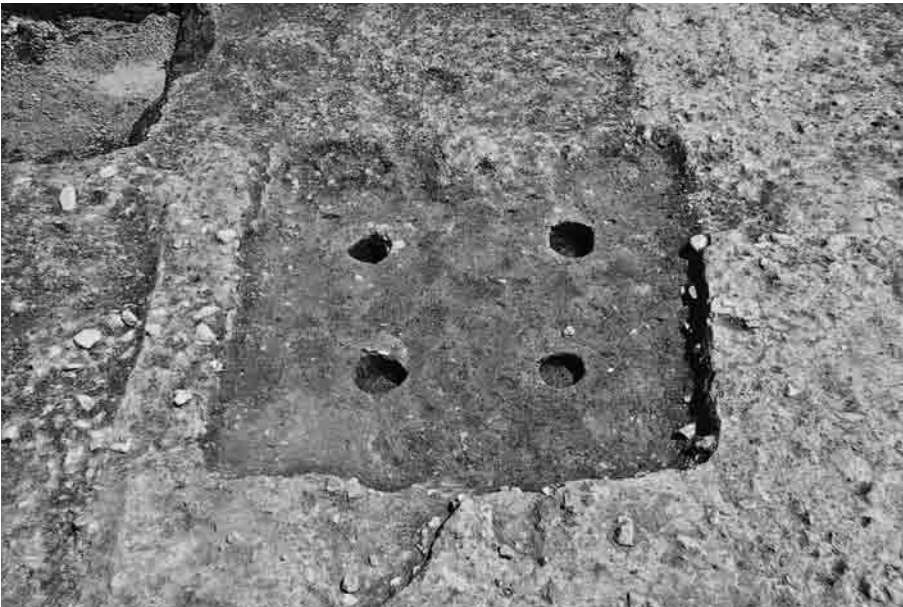
(2) 5区掘立柱建物 S B 5140・5145
(北から)



(3) 5区掘立柱建物 S B 5190
(南から)



(1) 5区北東部竪穴建物 S H5027・
溝 S D5001 など(東から)



(2) 5区竪穴建物 S H5027(西から)



(3) 5区柱穴 S P5109(南から)



(1) 5区流路S R5125(西から)



(2) 5区流路S R5125(東から)



(3) 5区流路S R5125東壁土層断面
(南西から)



(1) 6・7区全景(空中写真 北から)



(2) 6・7区(空中写真 上が南)



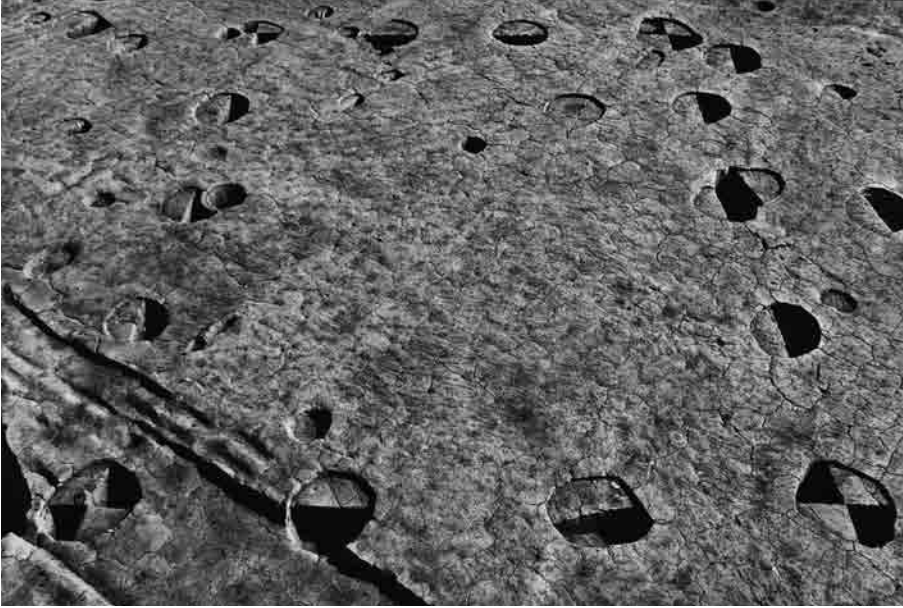
(1) 6区竪穴建物 S H6088
(北東から)



(2) 6区竪穴建物 S H6088柱穴 P 2
(北から)



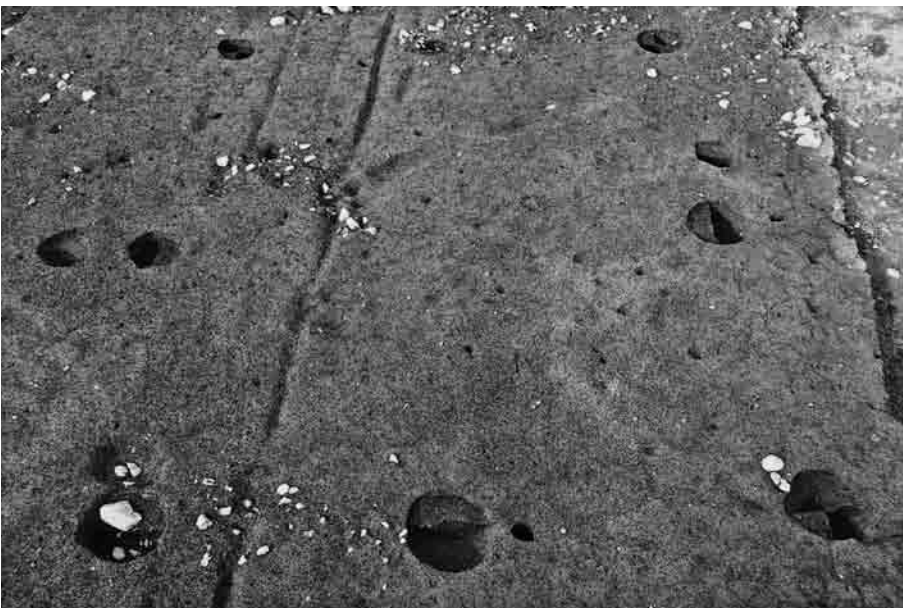
(3) 6区掘立柱建物 S B 6090
(南西から)



(1) 6区掘立柱建物 S B 6080
(南西から)



(2) 6区掘立柱建物 S B 6080
柱穴 P 6 (西から)



(3) 6区掘立柱建物 S B 6145
(南から)

(1) 6区掘立柱建物 S B 6146
(南から)

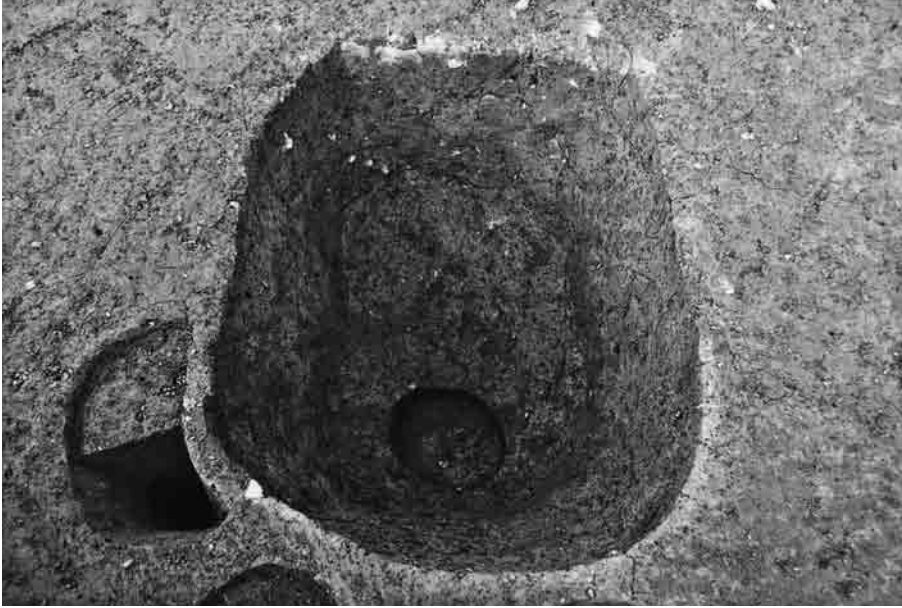


(2) 6区掘立柱建物 S B 6146柱穴
P 4 (北東から)



(3) 6区掘立柱建物 S B 6144
(東から)





(1) 6区掘立柱建物 S B6144柱穴
P 6 (南から)



(2) 6区掘立柱建物 S B6144・6185
(南から)



(3) 6区土坑 S K6094(南から)



(1) 6区土坑 S K6245(北から)



(2) 6区土坑 S K6245断面(北から)



(3) 6区掘立柱建物 S B 6060
(南東から)



(1) 6区柱列 S A 6270・6271・柵列6272(南から)



(2) 6区柱列 S A 6270大型柱穴(西から)



(1) 6区土坑S K6005(北東から)



(2) 6区西壁断面北端(南東から)



(3) 6区北壁断面西端(南から)



(1) 7区遺構群(東から)



(2) 7区掘立柱建物 S B 7160
(北から)



(3) 7区掘立柱建物 S B 7160 柱穴
P 1 (東から)



(1) 7区掘立柱建物 S B 7150
(北から)



(2) 7区掘立柱建物 S B 7150柱穴
P 4 (北から)



(3) 7区土坑 S K 7026 (北西から)



(1) 7区竪穴建物 S H7030(北から)



(2) 7区竪穴建物 S H7030竈
(西から)



(3) 7区竪穴建物 S H7030
焼土坑 K 1 (南から)



(1) 7区竪穴建物 S H7020(北から)



(2) 7区竪穴建物 S H7020
(南西から)



(3) 7区竪穴建物 S H7020出土土器
(南西から)



(1) 7区土坑 S K 7029(北から)



(2) 7区土坑 S K 7029断面(東から)



(3) 7区柱穴 S P 7094(東から)



(1) 7区土坑S K7177検出状況
(西から)



(2) 7区土坑S K7177上層(西から)



(3) 7区土坑S K7177上層(東から)



(1) 7区土坑S K7177上層
出土土器群(北から)



(2) 7区土坑S K7177出土土師皿
(北西から)



(3) 7区土坑S K7177上層完掘状況
(西から)



(1) 7区土坑S K7177北壁断面
(南から)



(2) 7区土坑S K7177下層礫面
(北から)



(3) 7区土坑S K7177下層土器
出土状況(南から)



(1) 7区南壁東端断面(北から)



(2) 7区南壁中間断面(北から)



(3) 7区西壁断面(北東から)



(1) 8区全景(空中写真 南から)



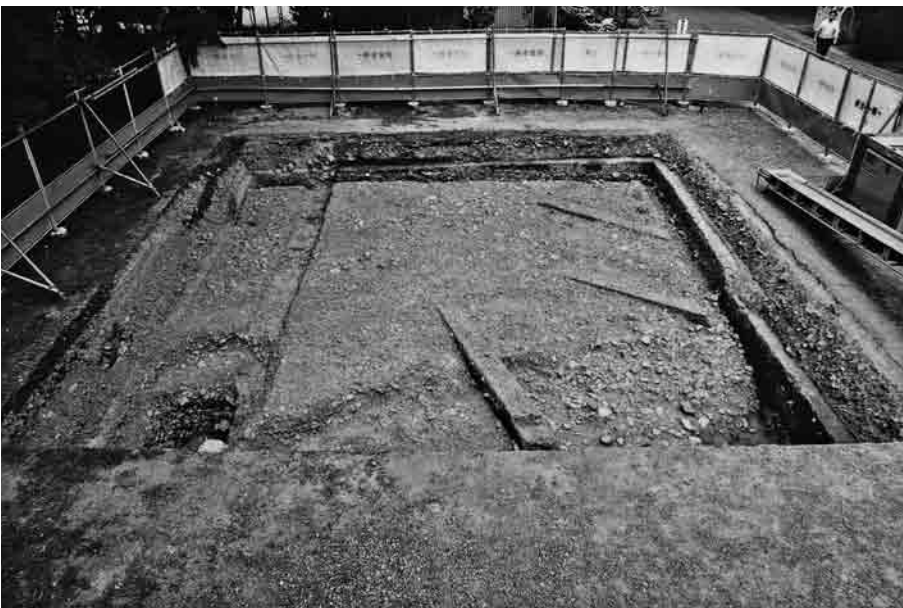
(2) 8区流路跡(空中写真 上が北)



(1) 8区調査前状況(南東から)



(2) 8区全景(拡張前 上層)



(3) 8区流路跡
(拡張前 東から)



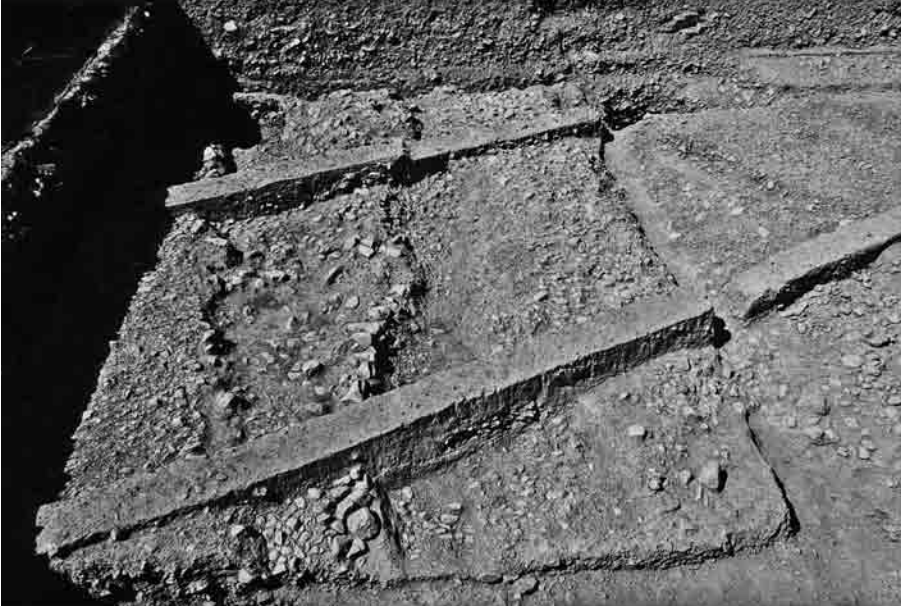
(1) 8区流路跡・南壁(北から)



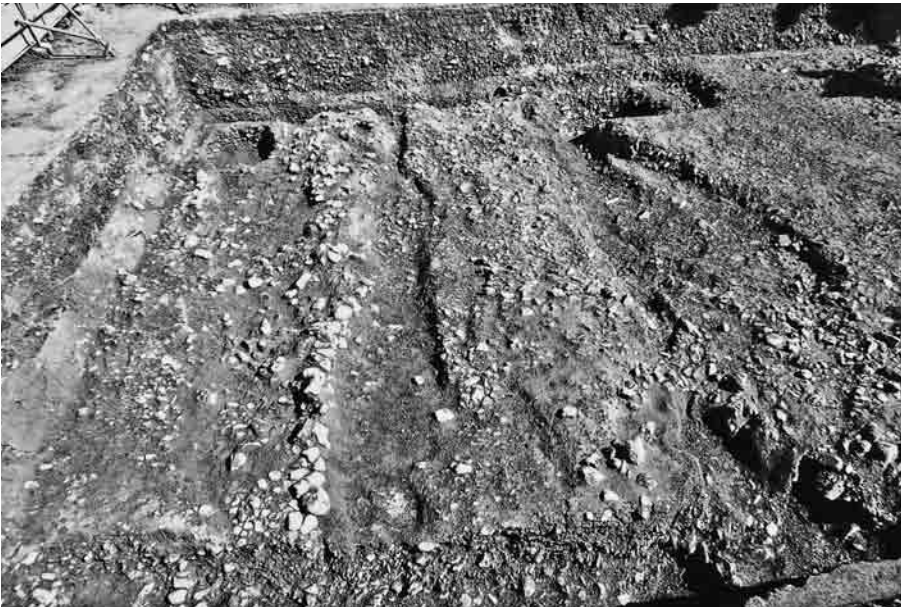
(2) 8区南壁(拡張前 北から)



(3) 8区西部流路跡
(拡張後 東から)



(1) 8区西部流路跡検出状況
(拡張後 南から)



(2) 8区流路跡(南から)



(3) 8区8B地点(東から)

(1) 8区8B地点
(南西部拡張 北から)



(2) 8区8B地点 北壁
(拡張前 西から)



(3) 8区8B地点 北壁断面
(南から)

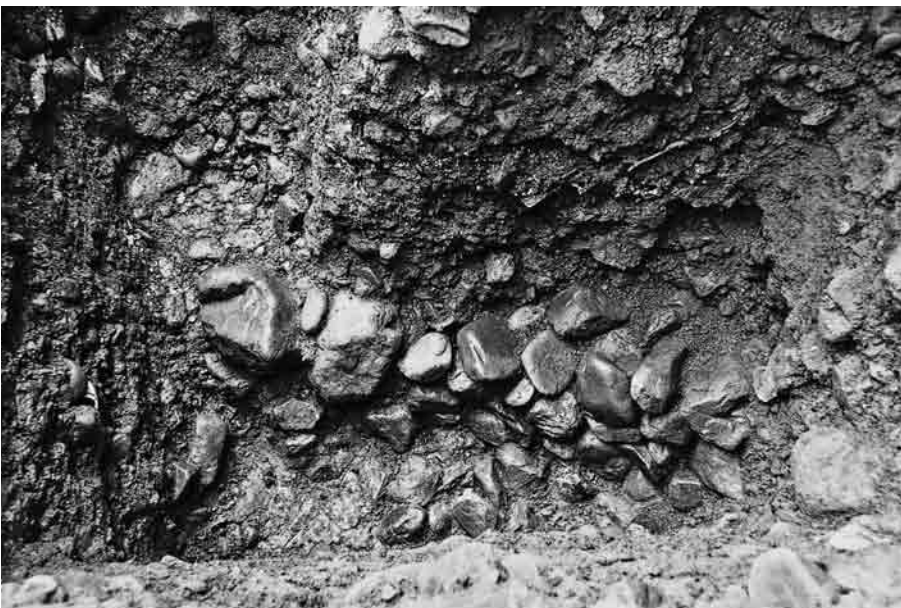




(1) 8区8A地点(南から)



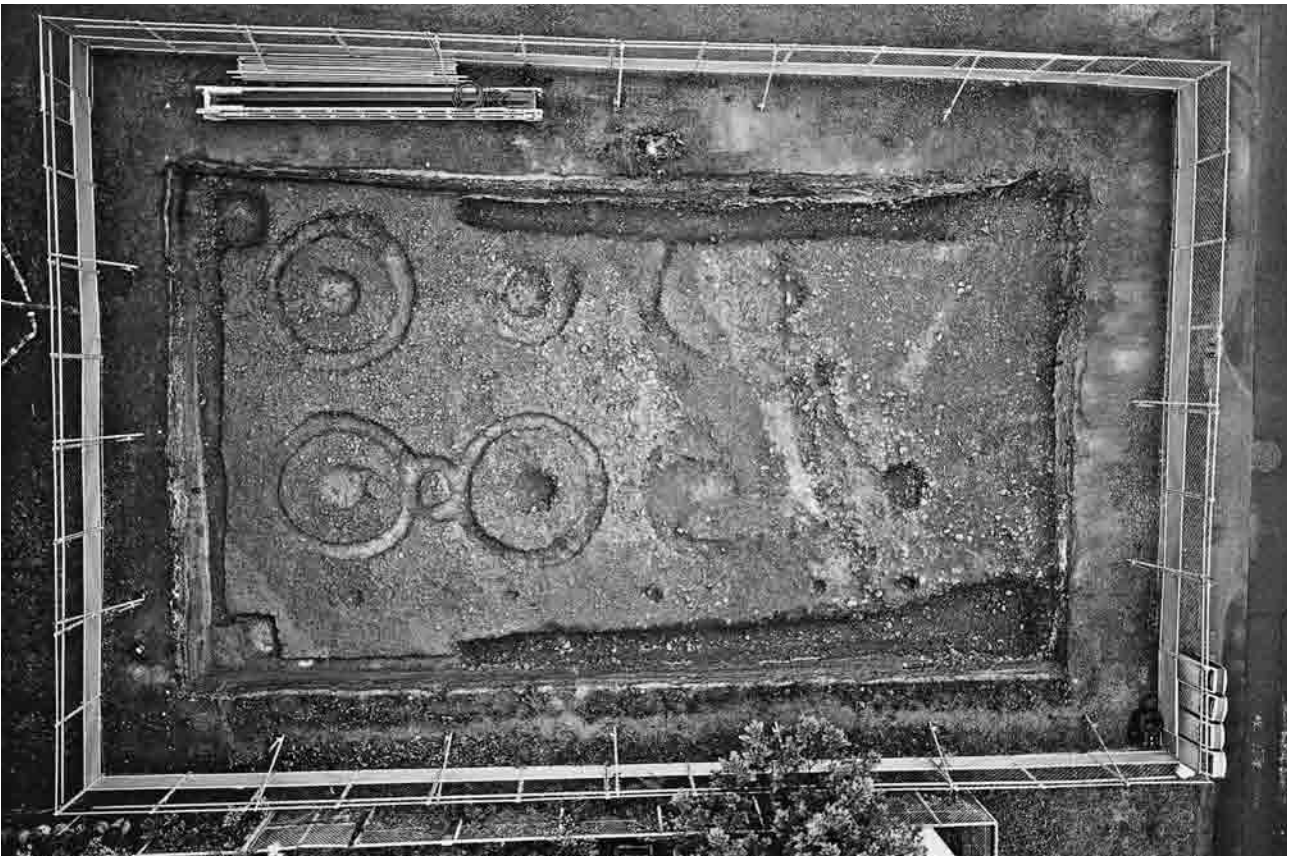
(2) 8区8A地点北壁断面(南から)



(3) 8区8A地点石積み
(東から)



(1) 9区遠景(空中写真 南西から)



(2) 9区全景(空中写真 上が北)



(1) 9区調査前状況(東から)



(2) 9区上層(東から)



(3) 9区下層(西から)

(1) 9区下層流路S R9001
(北西から)



(2) 9区南壁断面(北東から)



(3) 9区北壁断面(南東から)





(1) 西部A・B地点(南東から)



(2) 西部A地点(北から)



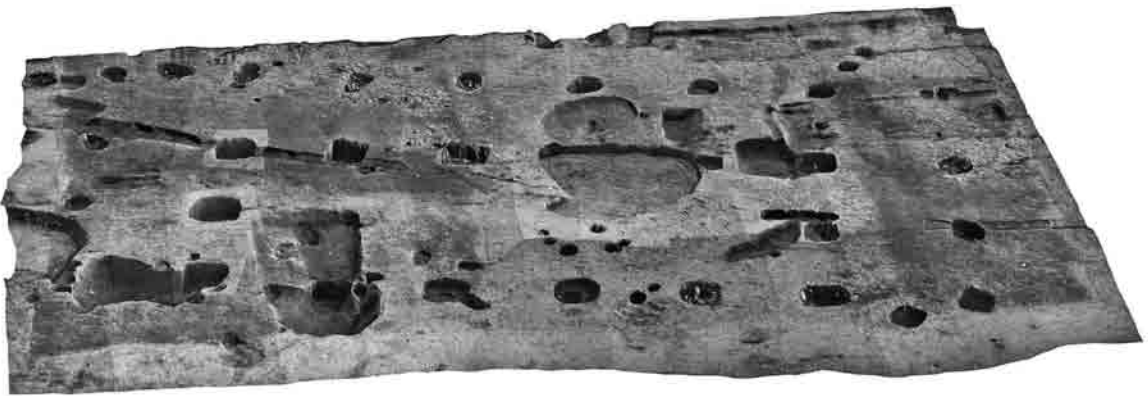
(3) 西部B地点(北東から)



三面廂建物 S B 5130 (上か北 3 次元測量合成写真)



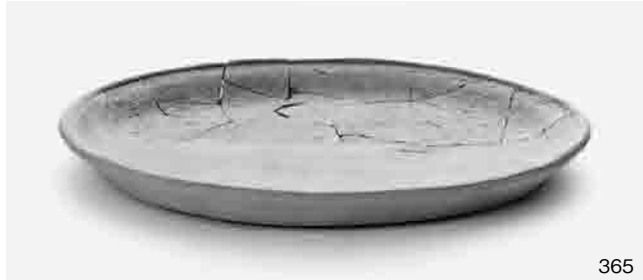
(1) 三面廂建物 S B 5130(南から 3次元測量合成写真)



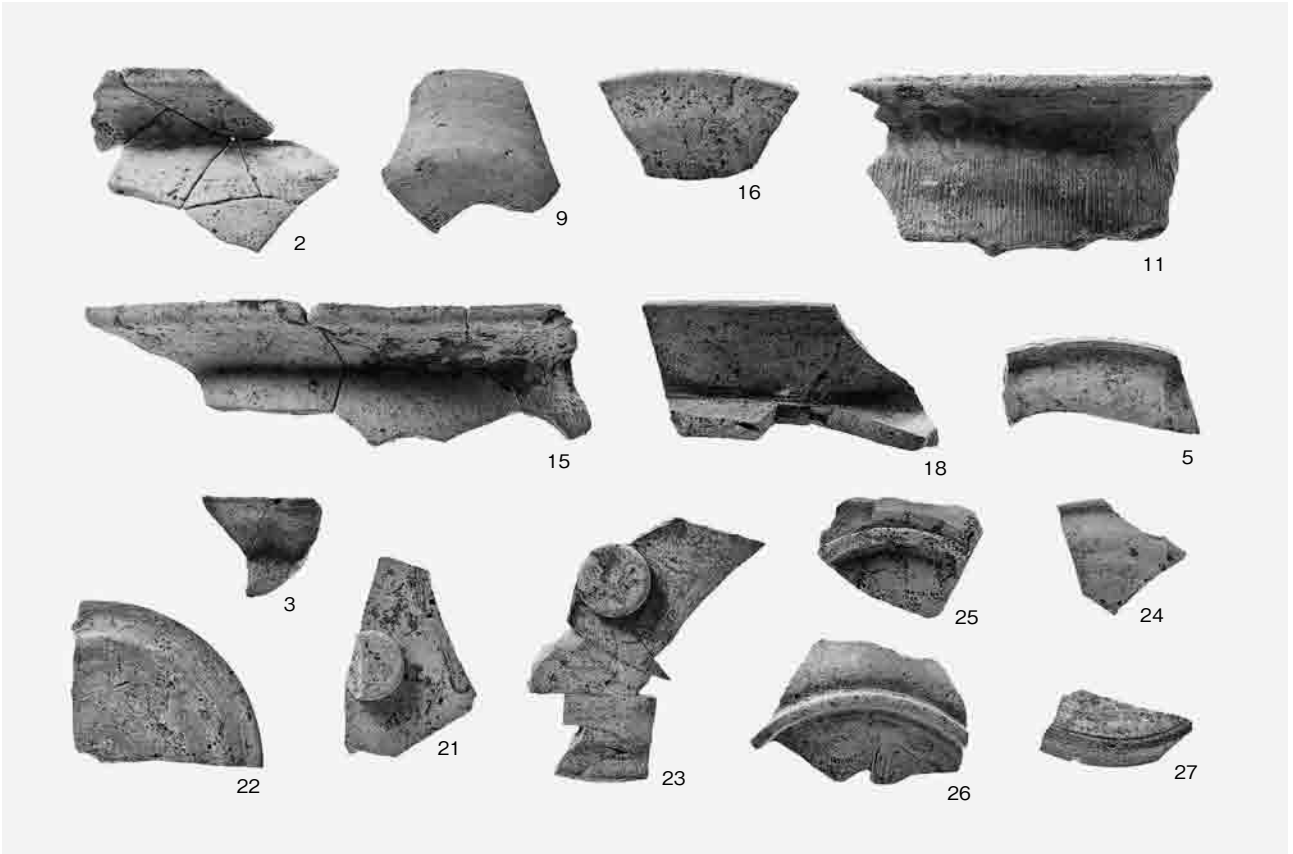
(2) 三面廂建物 S B 5130(北から 3次元測量合成写真)



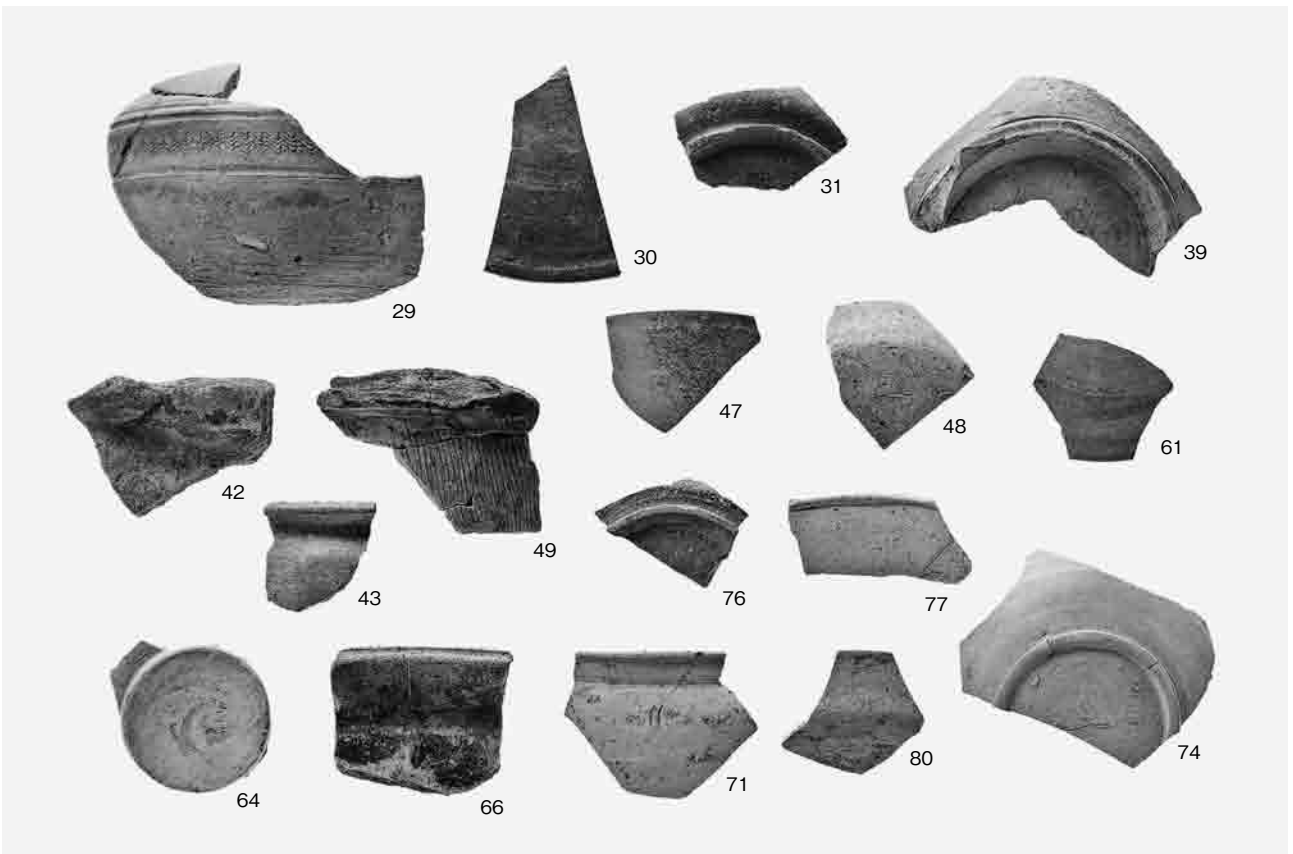




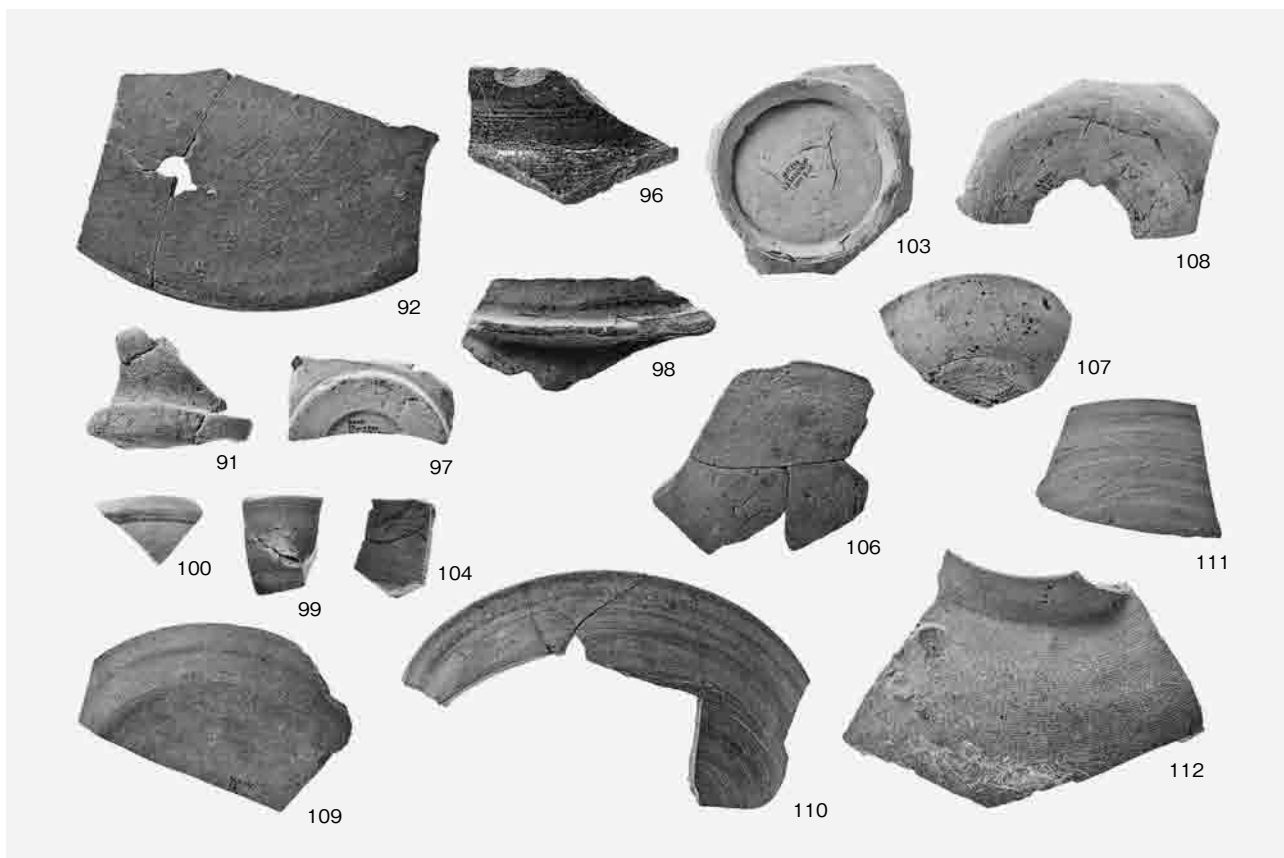




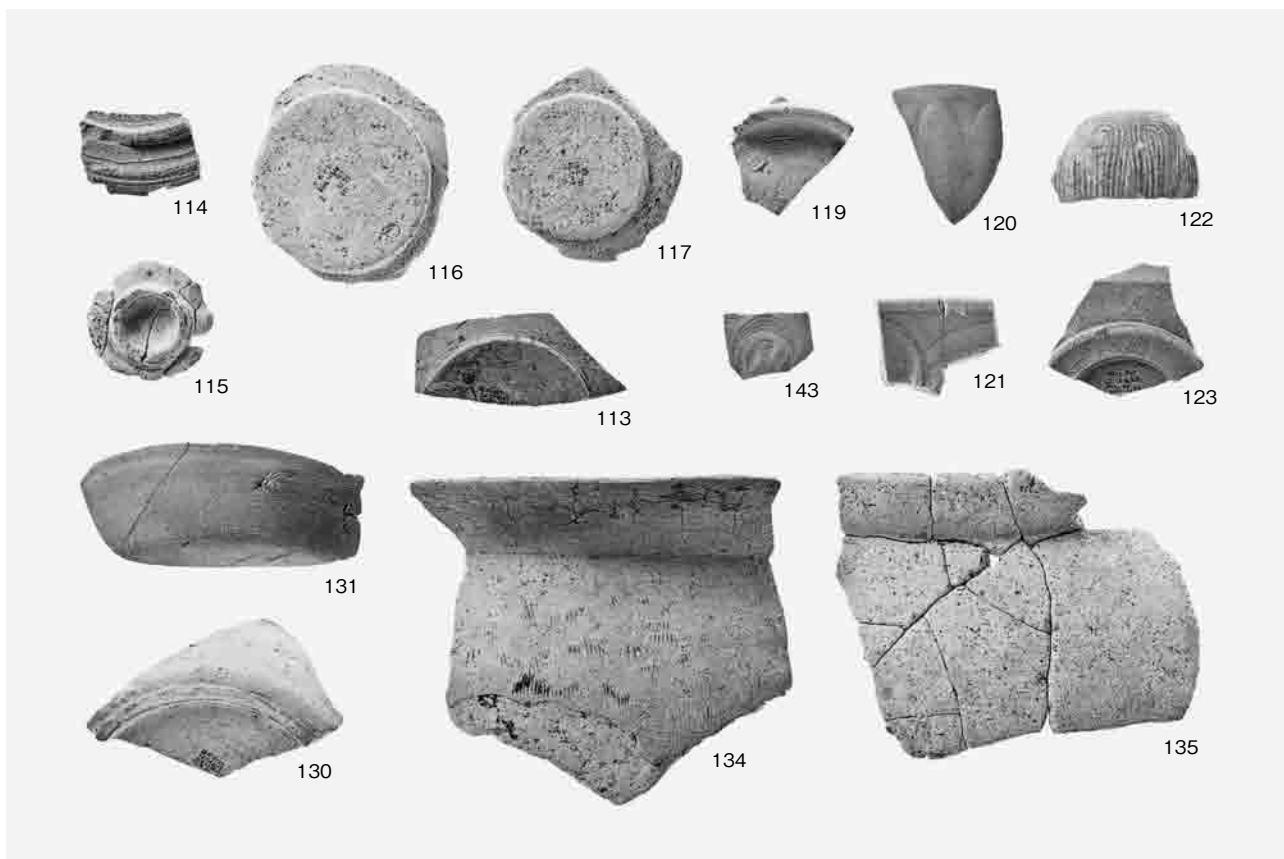
(1)出土土器 5



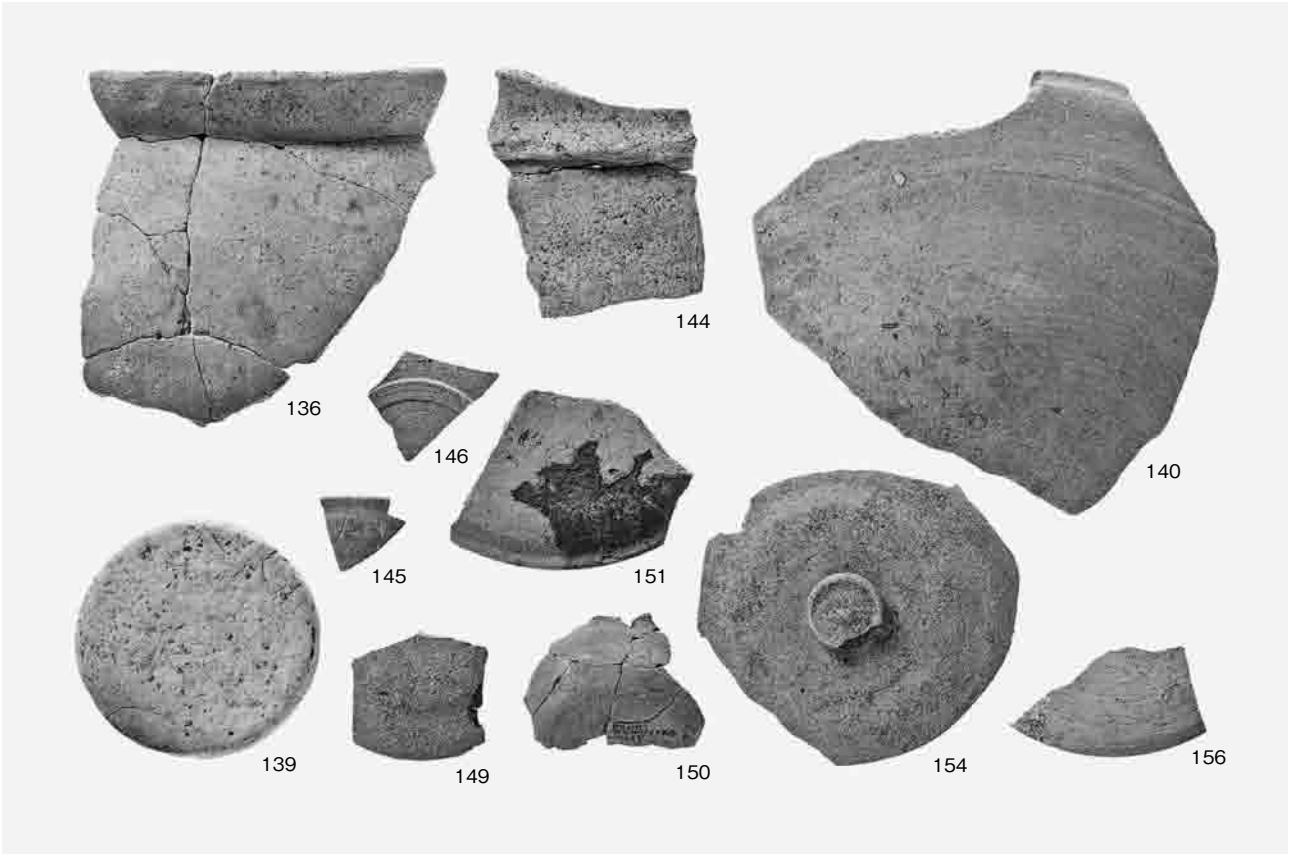
(2)出土土器 6



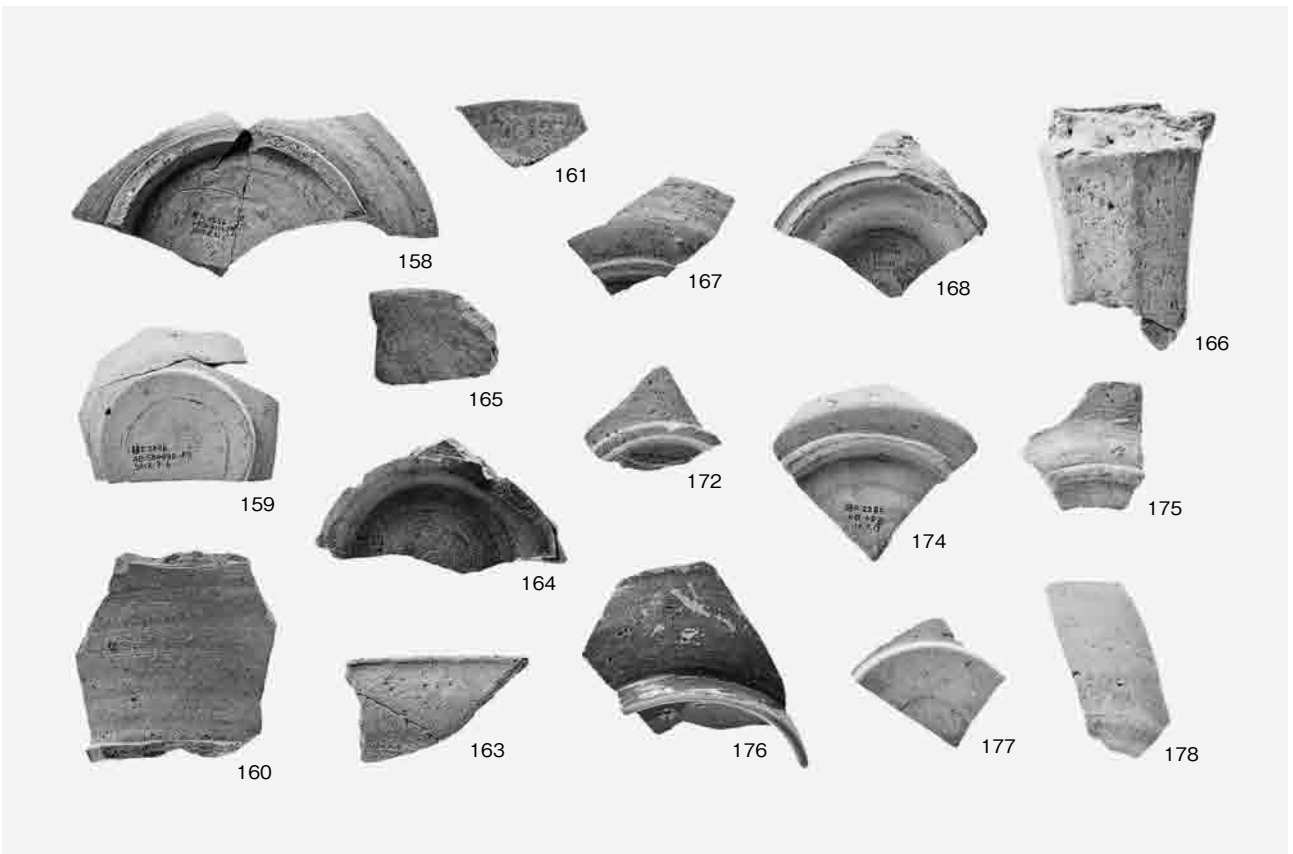
(1)出土土器 7



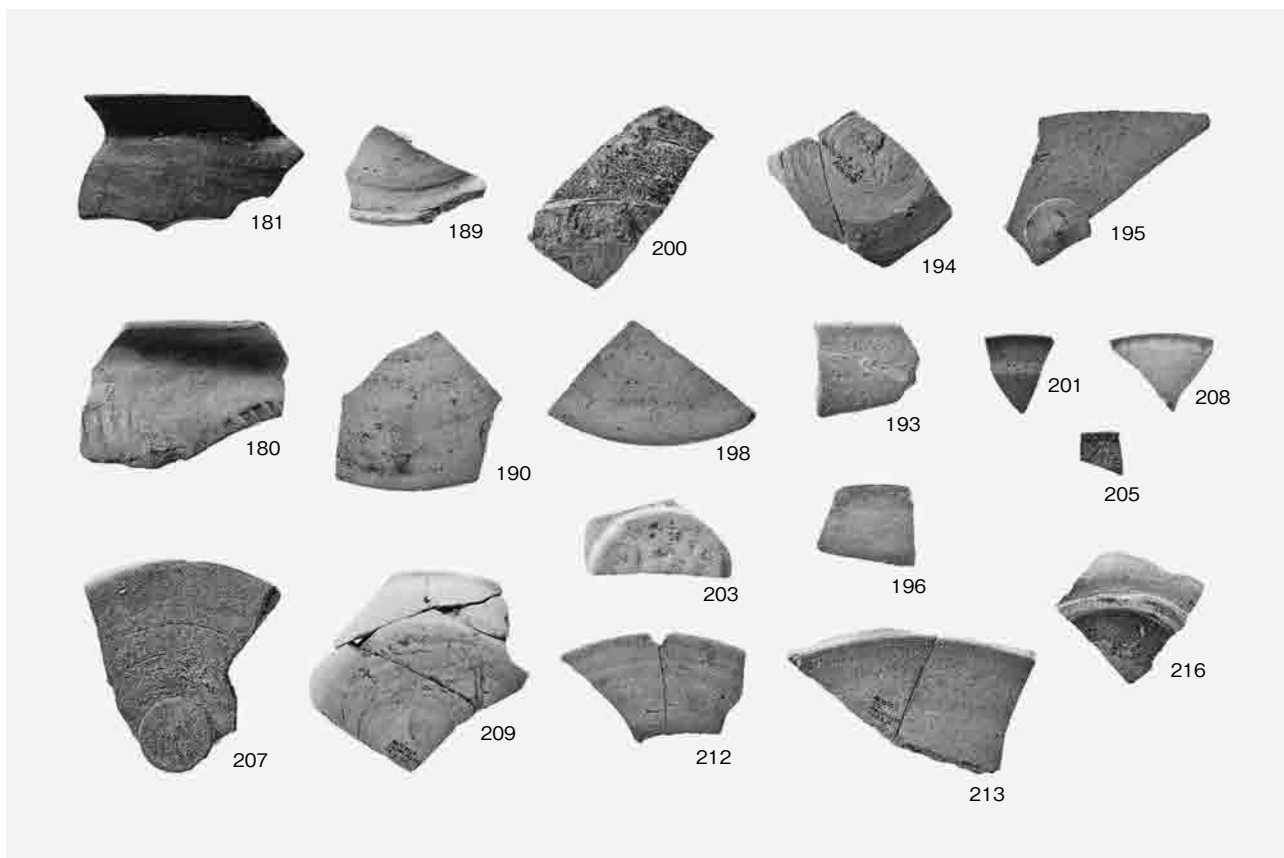
(2)出土土器 8



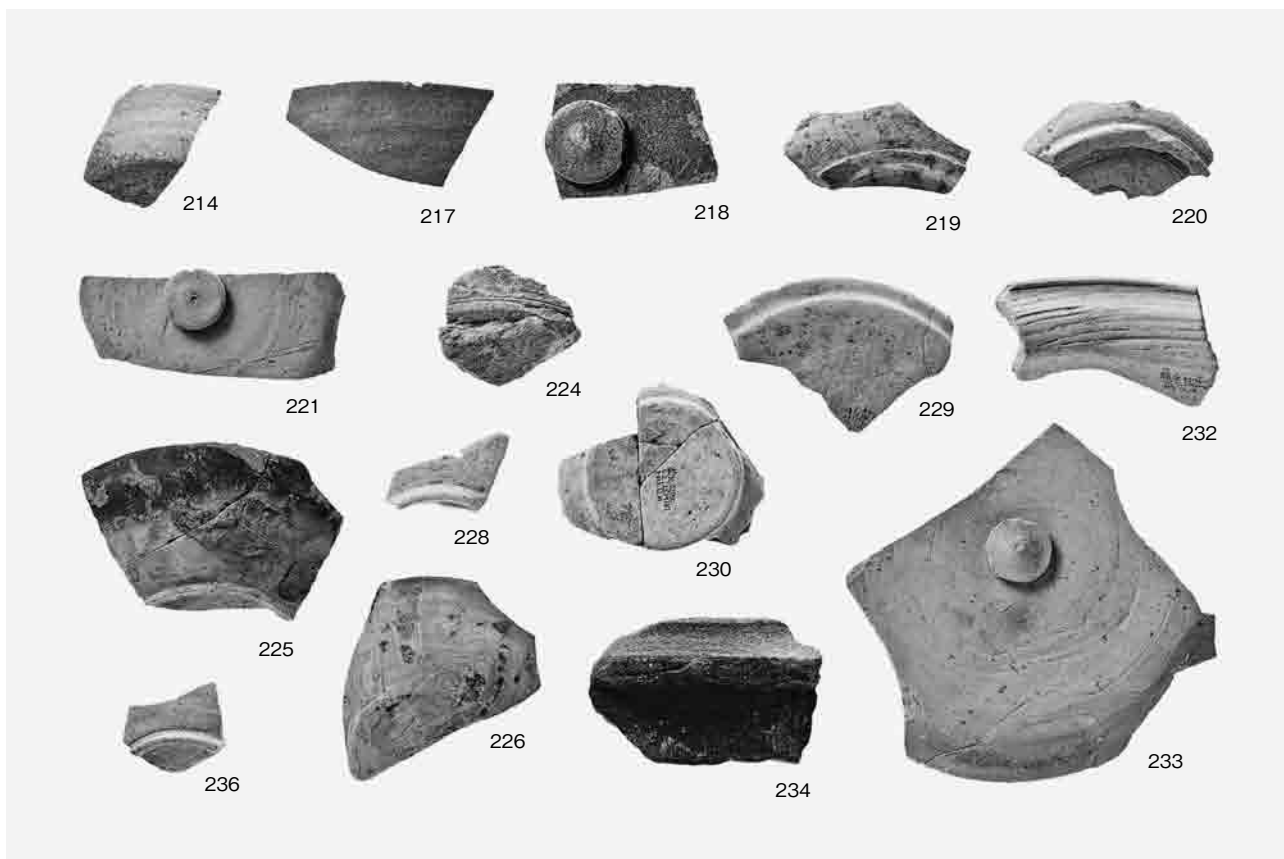
(1)出土土器9



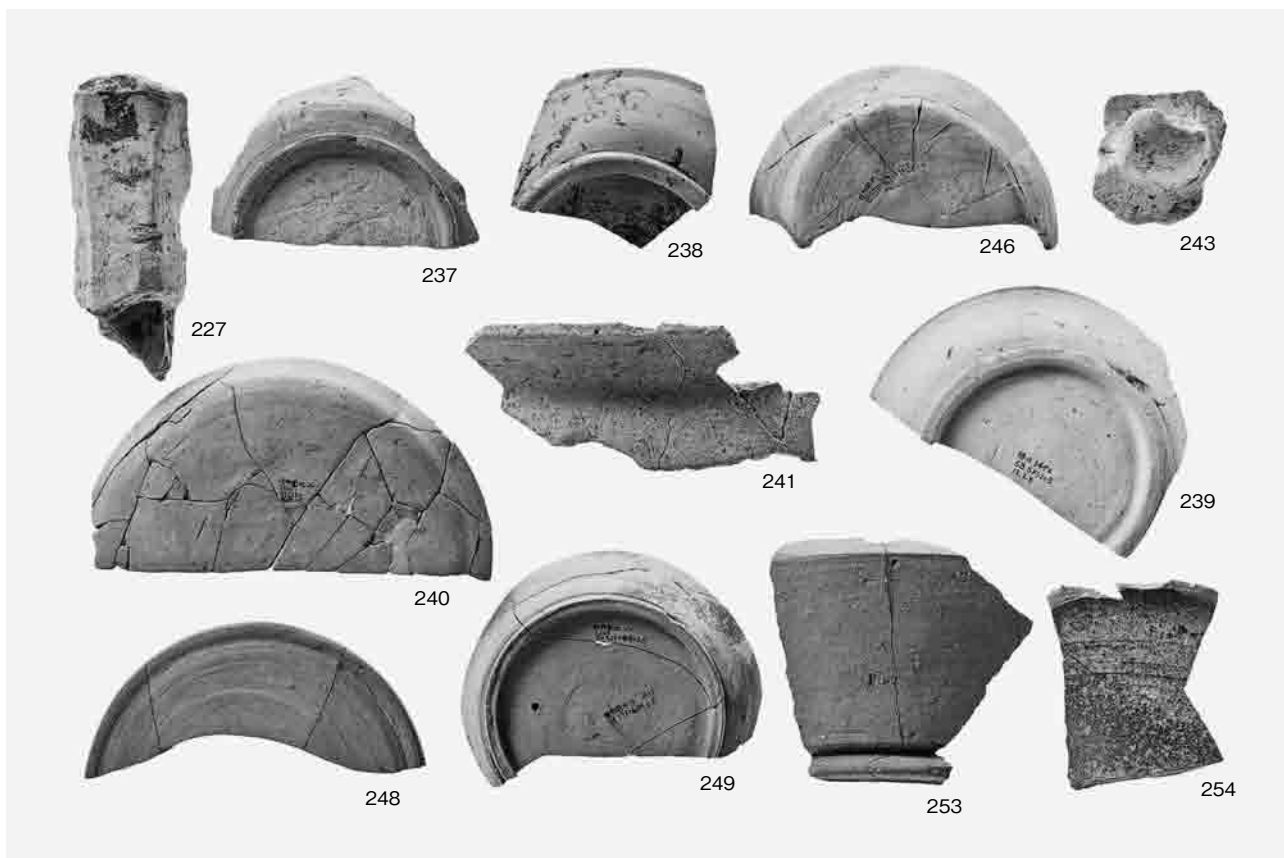
(2)出土土器10



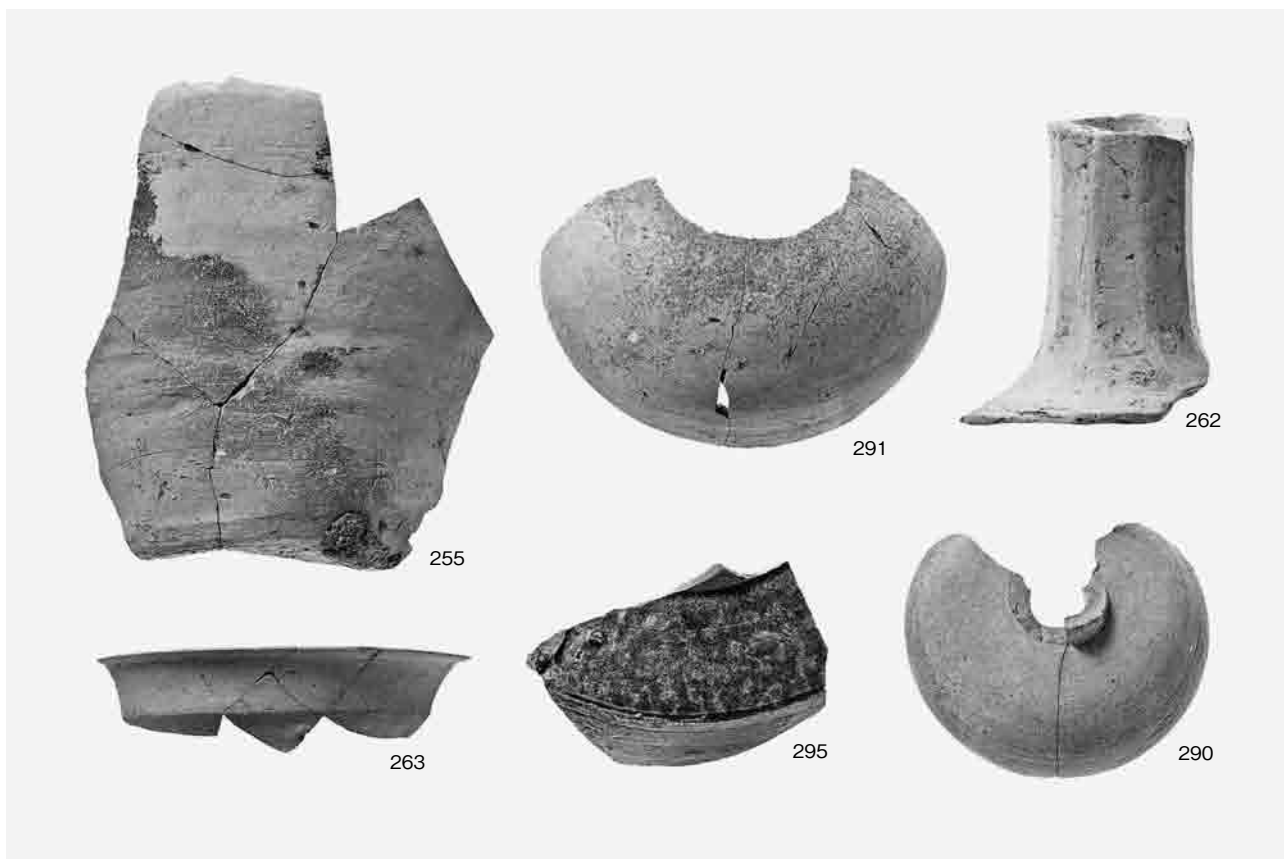
(1)出土土器11



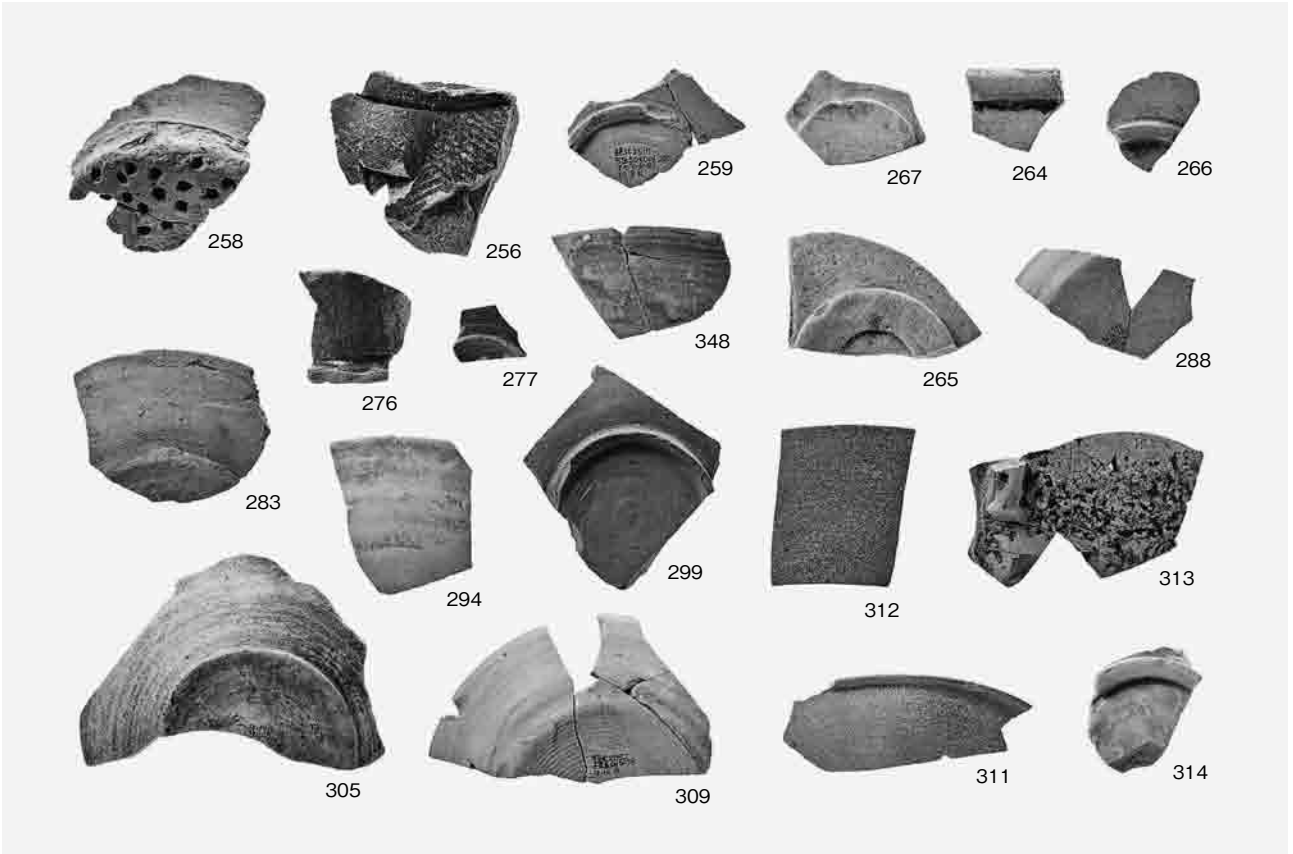
(2)出土土器12



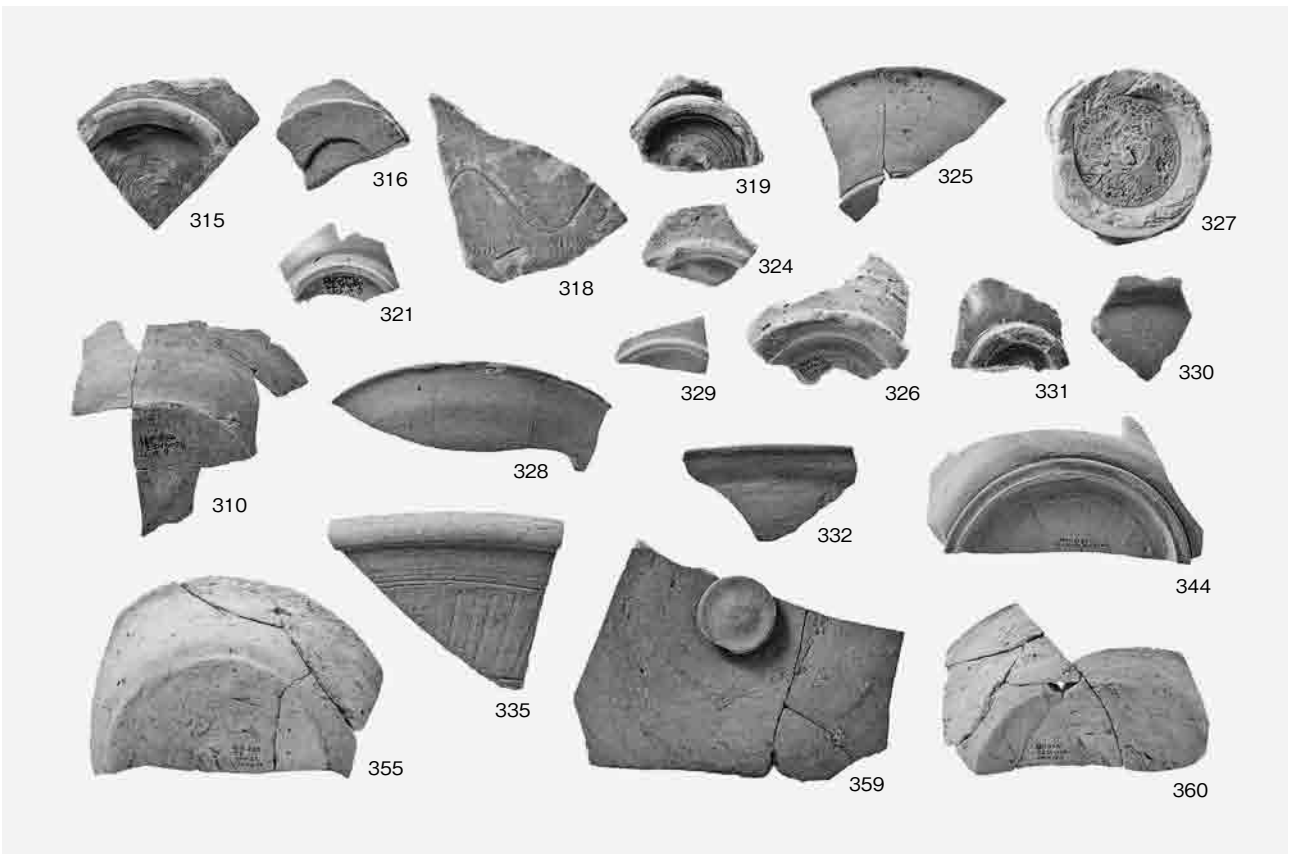
(1) 出土土器13



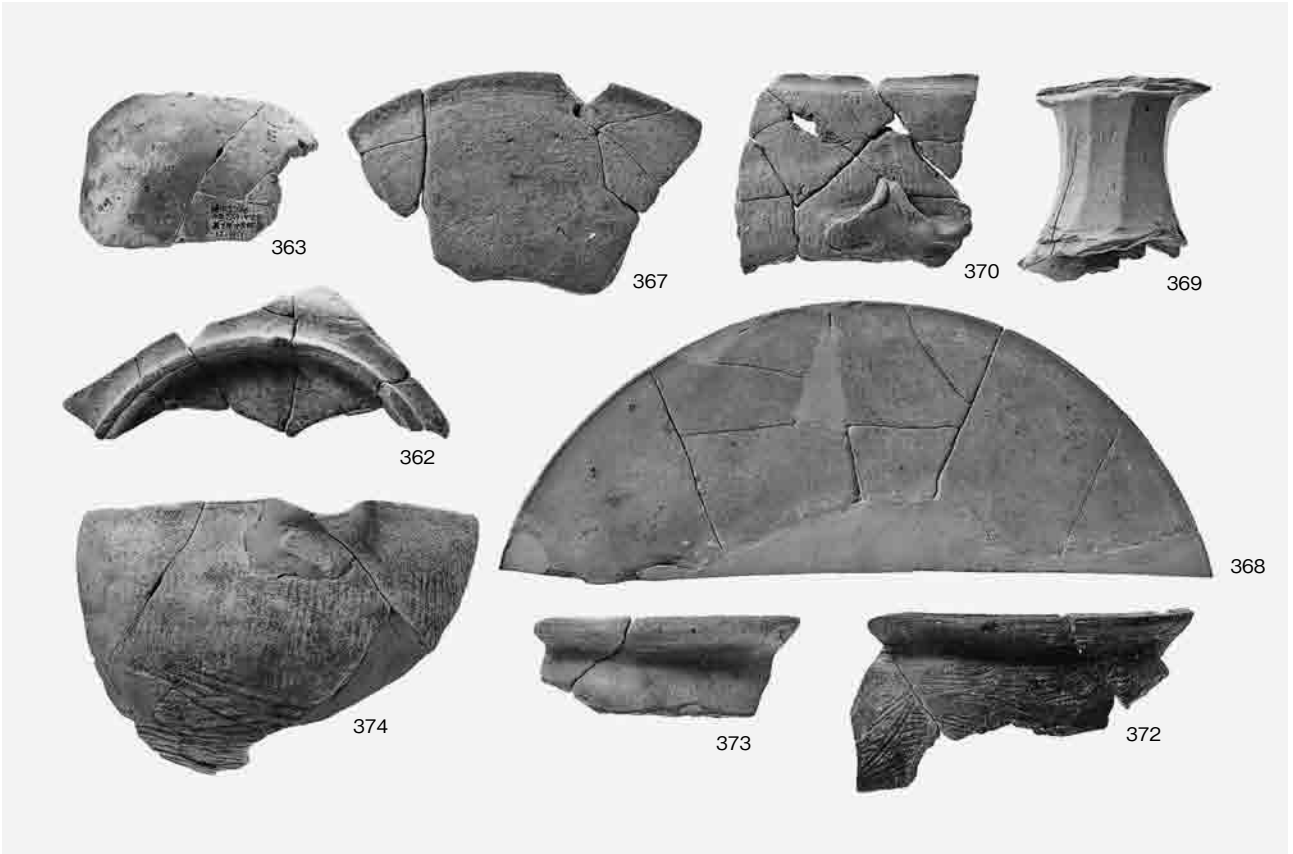
(2) 出土土器14



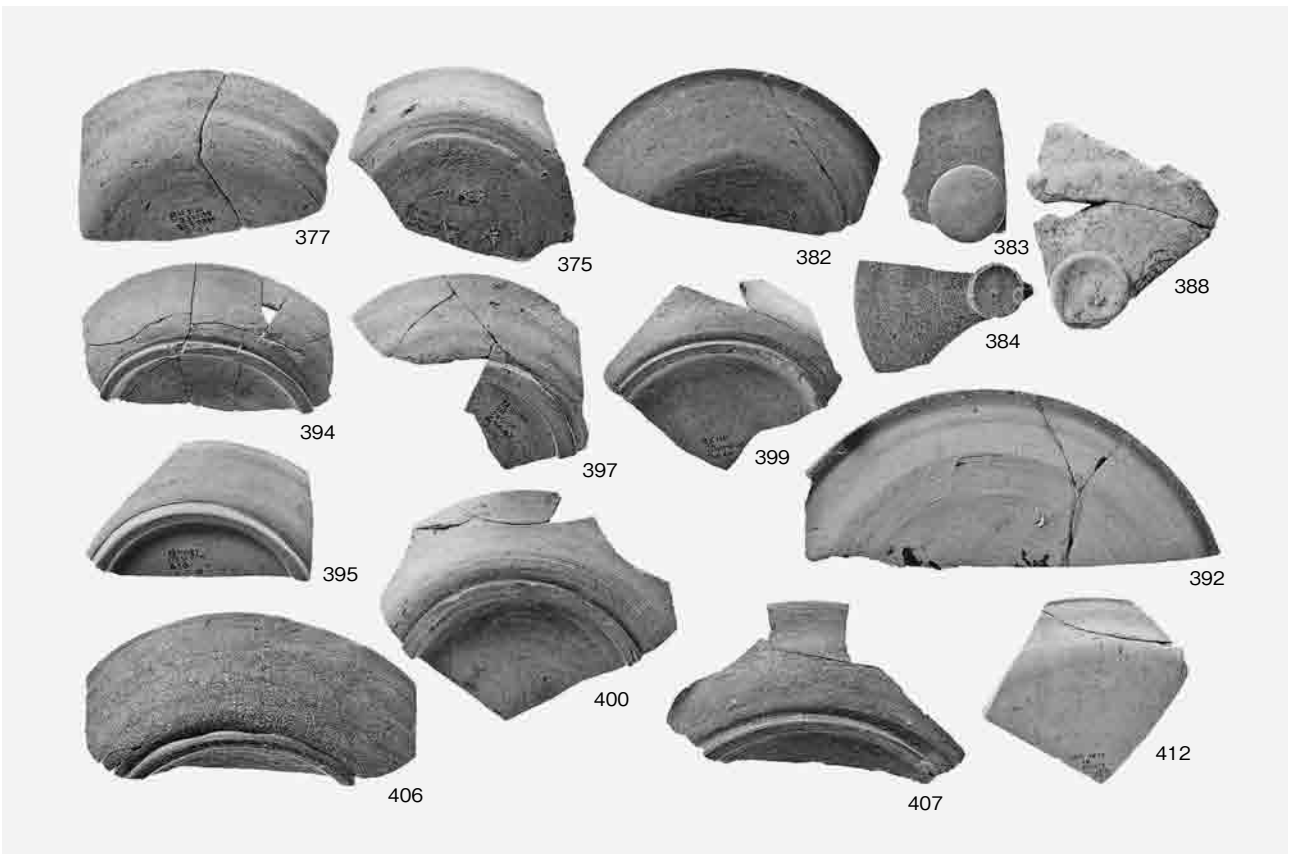
(1) 出土土器15



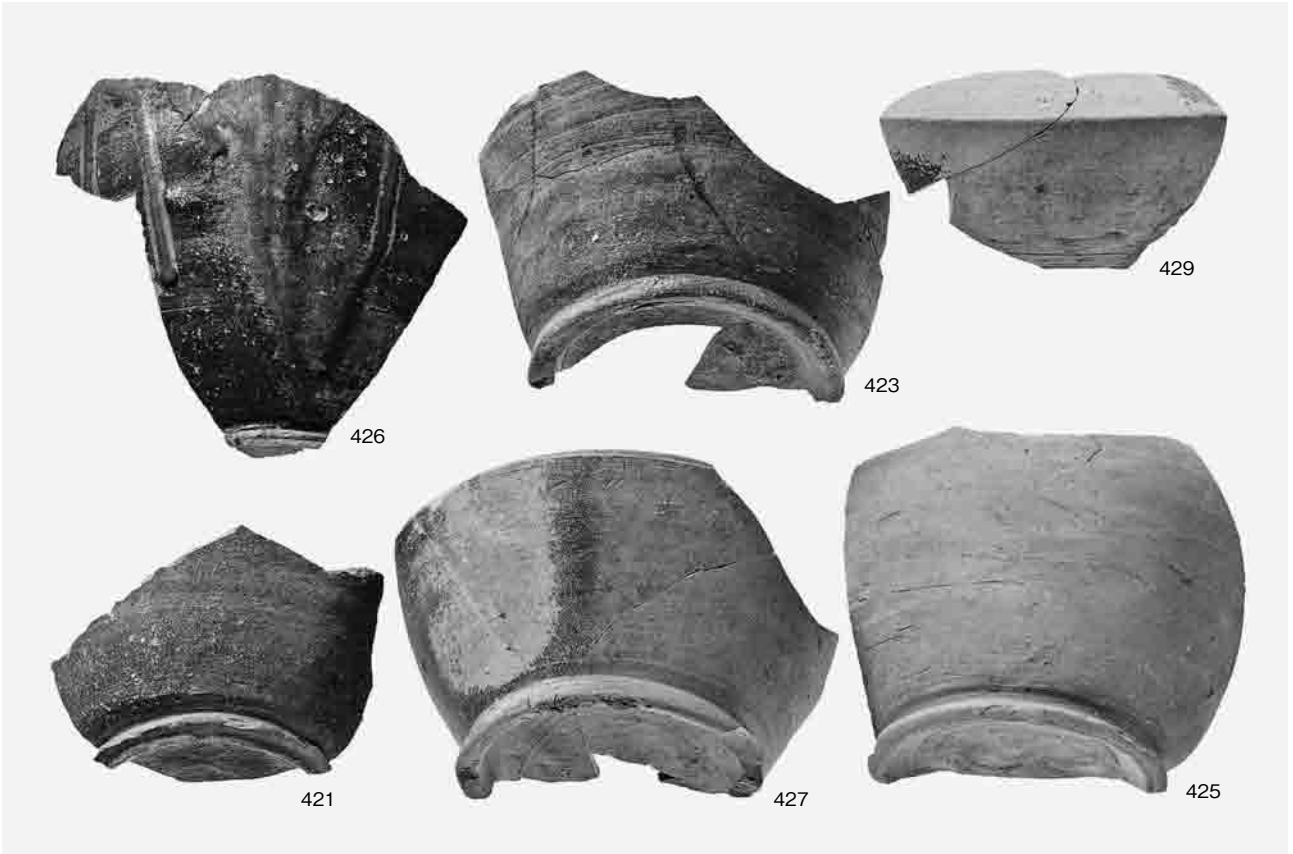
(2) 出土土器16



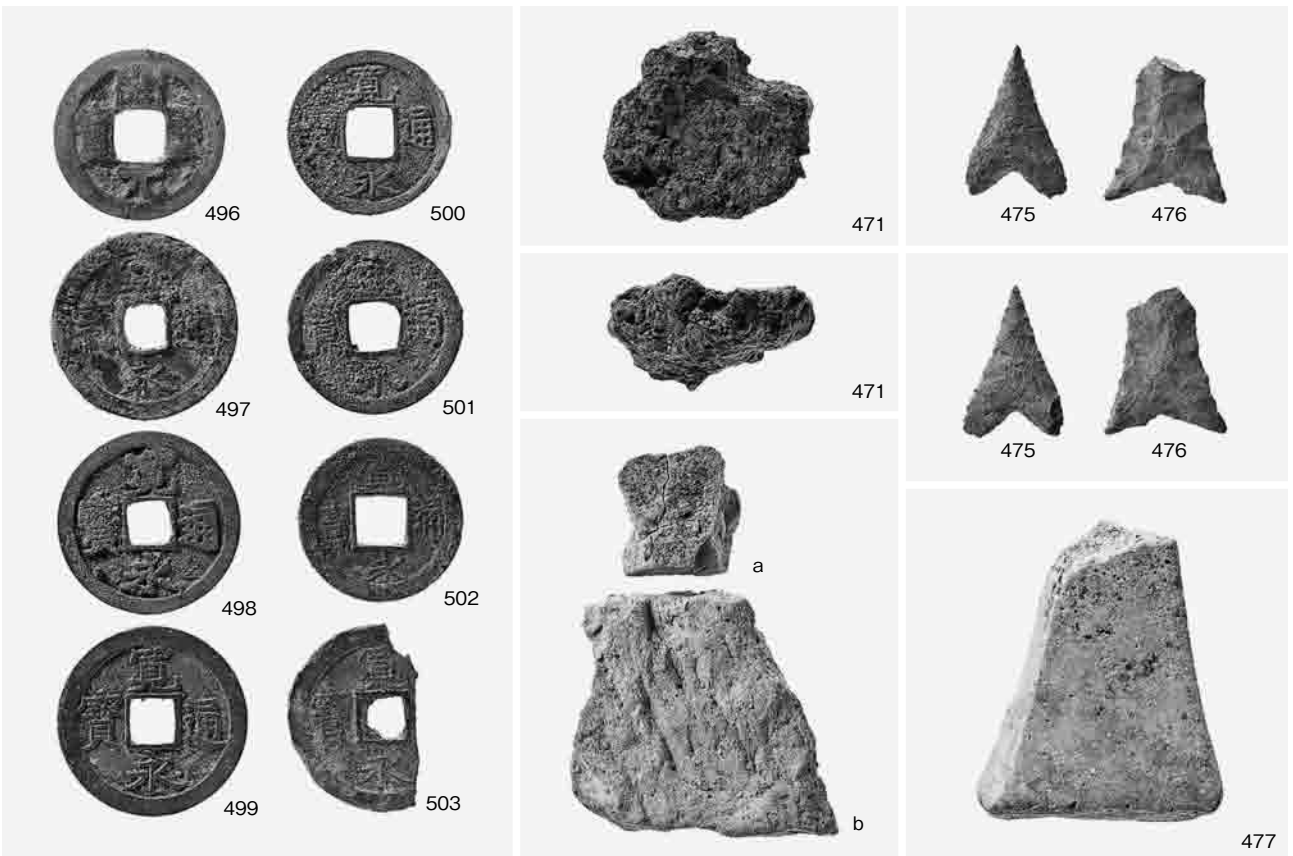
(1) 出土土器17



(2) 出土土器18



(1) 出土土器19



(2) 石製品・鉄製品・博・銭貨

報告書抄録

ふりがな	
書名	
副書名	
巻次	
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第159冊
編著者名	
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番の3 Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2014年3月27日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
しよくぶつえんきたいせき・しもがもなからぎちよういせき	きょうとしさきやうくしもがもはんぎちよう					20111125 ～ 20120305	2,200	建物建設
植物園北遺跡・下鴨半木町遺跡	京都市左京区下鴨半木町	26103	146	35° 02' 55"	135° 46' 01"	20120406 ～ 20130308	6,000	

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
植物園北遺跡・下鴨半木町遺跡	集落跡	古墳～近世	竪穴建物・掘立柱建物・柵列・柱列・柱穴・溝・土坑・流路	弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・黒色土器・瓦質土器・陶磁器・瓦・線・石製品・鉄製品	三面廂建物

所収遺跡名	要 約
植物園北遺跡・下鴨半木町遺跡	<p>今回の調査では、おもに奈良～平安時代の遺構群を確認し、同時期の竪穴建物9基、掘立柱建物39棟を確認した。過去の調査で、遺跡の北部から東部では、古墳時代前期を中心とした集落が展開することがわかっていたが、遺跡の南部では、奈良～平安時代を中心とした集落が大きく広がることが判明した。</p> <p>確認された遺構のなかで特に注目されるのは、三面廂をもつ平安時代前期の掘立柱建物S B5130である。奈良時代後期の建物群は方位を大きく西に振るものがみられるが、この建物を含む平安時代前期の建物は、おおよそ真北に向けて揃えられており、集落が平安時代前期に規格性をもって整備されたことがわかった。</p> <p>調査地は、平安京の北東の京域外にあたるが、山城国一宮として崇敬された上賀茂神社や下鴨神社が所在する地域であり、奈良時代後期から平安時代前期に大きく開発されたことがわかった。また、三面廂の大型掘立柱建物が見つかったことから、一帯は有力な集団の居住域であった可能性がある。今回の調査によって、平安京遷都(794年)前後の京域周辺における集落の構造と変遷を知る貴重な資料を得ることができた。</p>

京都府遺跡調査報告集 第159冊

平成26年3月27日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141